

仮面ライダー鎧武 新章 ～幻獣の樹海～

ダイタイ丸（改）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新たなライダー戦極時代が今、始まる。

メガヘクスとの地球での決戦から1年……。紘太は舞とともに自らの惑星で静かに暮らしていた。だがある日森で見つけた毒々しい果実が彼を再び戦いへといざなう……。

紘太達とメガヘクスの戦いから1年後……。沢芽市はダンサーを志す若者のフロンティアとなり以前のようにつもものチームがお互いに腕を競っていた。そんな中、ダンスチーム『ドラゴンロンド』のリーダーである龍崎十馬はある日謎の果実を発見する。それは彼の背負う運命の物語の幕開けだった……。

鎧武新章・・・ここに開幕!!

というわけではじめまして、ダイタイ丸（改）と申します。

現役高校生でライダー大好きな私が色々考え、比較的ガチに書いてるこの話。

流れとしてはメガヘクスから一年後のお話。

オリキャラ、ロックシード、ライダーと盛りだくさんで書いていきます！

お口にあうなら幸いです。

目次

プロローグ

失楽園くパラダイス・ロストく | 1

本編

第1話 変身！ダークホースはマツボックリ!! | 7

第2話 新たな侵略、そして再会 | 20

第3話 公爵へデュークの名を継ぐ者 | 37

第4話 襲来！謎の冥界ライダー！ | 51

第5話 繋がりと新たな決意 | 70

第6話 飛来！世界チャンプは反抗期!! | 87

第7話 昇来！新ライダーは超新星！ | 101

第8話 グリドン、友に捧げる新アームズ！ | 117

第9話 ナツクル、受け継ぐBARONの意志！ | 133

第10話 アメミトVSデュークII！ 魂の交差！ | 152

第11話 出現！ 巨大クラック | 171

第12話 明かされる過去 | 183

第13話 奪還！ 十馬VSシユバリヤ！ | 197

番外編 変わりゆく日常 | 217

番外編 変わるもの、変わらないもの | 239

第14話 悩める竜希、龍の導き | 268

第15話 誕生！ その名はバハムート！ | 282

第16話 それぞれの絆 | 307

第17話 龍の力！ ドラゴンエナジーアームズ！ | 325

第18話 巨龍を討て！ ライダー全員出動！ | 368

第19話 美鈴の想いとサプライズ | 403

プロローグ 失樂園くパラダイス・ロストく

あたり一面にひろがる緑にたくさんの鳥や動物の鳴き声がかどまする。

紘太と舞がヘルヘイムと共に移り住んだ未知の惑星は、今や命に満ちあふれた樂園となっていた。

「もうあの戦いから一年も経つのか…」

生命の満ちる森を歩きながら、今やこの世界の長となった『始まりの男』である葛葉紘汰は呟いた。

「そうだね。私たちもミッチたちもそれぞれが新しい道を歩んでる…守れてよかったね。私たちの故郷をあのメガヘクスって奴らから」

隣を歩くのは紘汰と同じく人の身を捨て、『始まりの女』になった高司舞である。

彼らは約一年前、故郷の地球で金属生命体メガヘクスと戦った時の事を思い出していたのだ。

「あの時は大変だったよな。いきなりこの惑星に来たと思ったら舞がさらわれてさ」

「うん、正直ダメかもって思った。でも紘汰やミッチ、他にもいろんな人が助けてくれたから…」

「確かにな。地球にはアーマードライダーの皆やトップギアな刑事さんもいることだし、しばらくは大丈夫さ。どんな奴が相手でもきつと俺の代わりにがんばってくれるよ」

遙か彼方の故郷にいる頼もしい仲間たちの事を想いながら二人は歩みを進めていく。

そうしてしばらく行くとなにやら妙な物を舞が見つけた。

拾い上げてよく観察してみると、それはヘルヘイムの果実に似ていた。

だがヘルヘイムの果実が赤紫と紺の二色なのに対してその謎の果実は血のような赤と鮮やかな青がまだらになった毒々しい色合いを

していた。

「これヘルヘイムの実？でも色が違う…」

「変種かもしれない。念には念だ。持ち帰って調べよう」

そうして絃汰はその果実に触れた……否、触れてしまった。

「何っ!？」

絃汰が触れたその瞬間、果実から猛烈な勢いで植物が飛び出し果実を中心として爆発的な勢いで森を覆いつくしていく。

「な、なんだってんだ？」

「わかんないけど大変！このままじゃこの星が覆い尽くされちゃうよ！」

狼狽えている間にも植物の侵略は止まらない。

全てを呑み込み、侵し、塗り替えていく。

正にそれは地球で見たヘルヘイムの侵略と同じだった。

「させるかあ！」

絃汰は森の植物を操り謎の植物の侵攻を抑えようとした。

しかし

「な、何っ！」

謎の植物の侵食スピードはとても速く、ヘルヘイム植物よりも遥かに強力だった。

迎撃に出た植物も皆、謎の植物に飲み込まれ同化していく。

「何なんだ！一体どうしてこんなことに！」

「絃汰！それよりアレ！」

舞が指差したその先、そこには植物が集まり次元の裂け目のようなものが出現していた。

とはいえクラックのようにスムーズなものではない。

まるでこじ開けるかのように植物が蠢き、その間に別の空間が出現しているのだ。

「何だよ…一体何が来るっていうんだ!？」

そしてその空間から黒い何かが飛び出した。

“それ”はインベスのように見えた。

だが違う。

あれはインベスなどではない。

インベスが、本能のみで生きる動物が、ここまで冷たく理性的な殺意を向けるはずがない。

「何のためにこんなことをする！答えろっ！」

言葉が通じるかは分からないが絃汰は叫ばずにはいらなかった。

自分はいい。

自身を犠牲にする覚悟はとうの昔に決めている。

新たな一步を踏み出して間もないヘルヘイムが、この星が、何よりも舞が。

何故こう何度も理不尽な目に合わなくてはならないのか。

絃汰の問いに“それ”は反応した。

ゆっくりとこちらを向き、言葉を紡ぐ。

「何故かだと……？決まっている。待っていたからだ。」

永かったぞ……この日をどれほど待ちわびたと思う？なあ、始まりの男」

「何だっ……！」

絃汰は驚きを隠せずにいた。

相手は地球の言葉を話せる上に自分のことまで知っていたのだ。

「お前、何故俺のことを……いや！そもそもなぜ言葉を話せる？お前もオーバーロードなのか!？」

「答える必要は無い……何故ならお前はここで死ぬからだ！」

そう言っただけはいつの間にか手にしていた巨大な鎌で俺に斬り掛かってきた。

「そつちがその気なら！」

その攻撃を間一髪かわすとベルトを出現させ、極ロックシードを力チドキロックシードの鍵穴に差す。

「変身っ！」

奴はベルトから極とカチドキ、二つのロックシードをむしり取った。

身体を急激な脱力感が襲う。

ぽっかりと穴が開き、そこから自分を構成するモノが流れ出すような感覚。

次の瞬間、変身が解けて崩れ落ちたのは『始まりの男』ではなく『人間』の葛葉紘汰だった。

一方、勝者となった黒のオーバーロードは手にした二つのロックシードを感慨深そうに眺める。

「やつとか……本当に永かったな……」

その足に、縫りつく手があった。

もはや何の力もないどころか、急激な身体の変化により瀕死であるはずの紘汰だ。

それはもはや狂気にも似た執念だ。

失うのは自分だけでいい。

だが、この怪物はこれからもっと多くのモノを奪い続けるだろう。

今手にした、紘汰の力を使つて。

そんなことは許さない。

それを許してしまったら、信じて送り出してくれた地球の仲間たちに申し訳が立たない。

なにより「あいつ」に顔向けできない。

その思いが、紘汰に最後の力を与えていた。

だがそれをあざ笑うように、あるいは敬意を表すように。

黒のオーバーロードは全力でその身体を蹴りつけた。

「ぐふっ!?!」

紘汰は枯葉のように吹き飛ばされ、近くの大木に叩きつけられた。

「紘汰!!」

「に、逃げる舞……お前だけでも……」

駆け寄ってくる舞に言うが彼女は聞こうとしない。

絃汰に自分の持つ黄金の果実の力を分け与えようとしているのだが、その背後から黒い影がゆっくりと迫ってくる。

「始まりの男、その執念と意志には敬意を示そう。だが、もう終わりだ」

舞のすぐ後ろに立ち、奴は鎌を振り上げる。

そして高らかに宣言した。

「俺の名はシュバリヤ！幾星霜の時を生き、青き惑星に新たな始まりをもたらす龍の王だ！」

その言葉を聞いて、絃汰と舞は戦慄する。

「そんな！地球まで侵略するつもりなのか？」

三度、母なる星に災厄が及ぼうとしている。

仲間たちの平穏が、また侵されようとしている。

「そんな……そんな事させない！」

舞が力強く叫ぶと彼女の瞳が赤い輝きを放った。

すると彼女の声に呼応したように周囲のヘルヘイム植物がシュバリヤにからみつき、その動きを止めた。

「チッ！無駄な抵抗を！」

シュバリヤは振りほどこうとするが間髪入れずに絡みつく植物に苦戦する。

「絃汰！今のうちに！」

舞に促されるまま絃汰はクラックを開き、舞と共に飛び込んだ。

行先は地球だ。

早く仲間たちに、この新たな脅威を伝えなければならない。

「頼む……間に合ってくれよ」

こうして葛葉絃汰は再び地球へと舞い戻ることとなった。

本編

第1話 変身！ダークホースはマツボツクリ!!

キンコンカンコンといつものように授業の終わりを告げる鐘の音が騒がしく響く。

教師が教室から出ていくのを確認して、龍崎十馬は解放感に満ちた万歳三唱をした。

「よーし、授業終わりっ！帰るぞー！」

しかし隣の席の銀髪の少女にその腕を掴まれ、たしなめられる。

「だめですよ。十馬。ちゃんと帰りのホームルームも受けて、それからチームに顔出しましょう」

「わかってるってイリス。それに今日はステージの日だしな」

「サボりでもしたら皆にボコボコにされちゃいますもんね。あ、そうそう今日は差し入れを持っていくんです！」

なにやらキラキラした目でイリスがバッグを漁り始める。

そのまなざしに悪寒を感じた。

「ほー差し入れね……ちよいと聞きますがイリスさん」

「何ですか？」

「その差し入れってのは売り物だよな？スーパーとかで買ってきたんだよな？」

「いいえ、まさか！ちゃんと手作りですよ」

そう言っつて、背景に花が咲きそうなくらい屈託の無い笑顔をみせる少女。

だがそれとは逆に十馬の顔は引きつりまくっていた。

そう、十馬は知っている。

この顔よし、スタイルよし、性格よしのブリティッシュ留学生、イリス・班目・リアーノ嬢が持つ最大の欠点を。

この少女、壊滅的に料理全般が苦手なのである。

メシマズとか舌バカとかそういうレベルじゃない。

その上おつちよちよいで調理器具をすぐに壊すのだ。

以前家庭科の時間に大惨事を招き、ついたあだ名は『地獄の釜番イリスさん』である。

そんな彼女が自信満々で主張する手作り。
嫌な予感しかない。

「マジすか……」

「え？なんですかその嫌そうな表情」

「いやだつてさ、お前の作る料理で一度でもうまかったこと……ある？」

「バツ、バカにしないでください！今日だつてちゃんとおいしいスパゲッティをつくってきたんですから！」

「いやー差し入れがスパゲッティてなんだよ！食べと!? 水も無いのに食べと!?!」

「みつ、水くらい自販機で買えばいいじゃないですか！それにちゃんとレシビ通りにカルボナーラになってます！」

「まさかのカルボナーラ！」

ギャンギャン騒いでいると扉から我らが担任、木村悟郎先生が登場した。

ちなみにあだ名は半分こSMAPである。

「はあ……途中のコンビニで何か買っていくか？」

そんなこんなでホームルームを終え、十馬は帰路についた。

無数の建物が並び建ち、その中心部には半壊した旧ユグドラシルタワー。

ここが十馬たちの住む新興都市、沢芽市だ。

今、この街は活気に満ち、あちこちでダンスのステップと音楽が聞こえる。

だがかつて、この街は二度にわたつてとんでもない危機に瀕した。

最初は今から三年前だ。

謎の次元の裂け目から現れるインベスという名の怪物。

そしてこの世界を侵食せんとする謎の植物。

ノストラダムスの大予言か、はたまたマヤ暦の終焉か。

そんなことを議論している間もなく、本当に世界は滅亡しそうになった。

けれどそれらはある時を境にパツタリといなくなってしまった。

まるで元々この世界にいなかったかのよう。

その後世界中で推測がされ、あの出来事は環境汚染による生物の突然変異として片が付けられた。

また、急になくなったのはウイルス説、環境についていくことが出来なかった説などが挙げられ、今も学会を賑わせている。

でも、俺は知っている。

あの植物と怪物はけっして突然変異なんかではないと。

そして奴らがいなくなったのはこの街にいたアーマードライダー達のおかげだと。

だって俺はあのとき見たから。

植物に覆われたユグドラシルタワーから人々を、そして俺を助けてくれた。

あの鎧武者のようなアーマードライダーを。

二度目は去年。こっちは確か宇宙からきた機械生命体だったと思う。

そしてそのときもあの鎧武者のようなライダーを俺は見た。

けれど俺はあの時、自分で自分を許せなかった。

結局、俺は変わっていない。

あの日、〃あいつ〃を助けられなかったときの俺から何も……

「十馬？大丈夫ですか？」

心配そうなイリスの声で十馬の意識は現実に戻された。

どうやら何度も声をかけてくれていたようだ。

「ああ、悪い。ボーっとしてたわ」

「全く、人が質問してるのに意識飛ばさないてくださいよ」

「ごめんごめん。で、何だっけ？」

「去年の宇宙人騒動の話です。私たまたま帰省してたから詳細知らないんですよ。UFOとか見ましたか？」

「見たは見ただけどノーコメントで」

「何ですかあ!？」

そう、十馬は去年の事件を目撃している。

だが話せない。

いや、話すことを許されていない。

あの後、変な黒服の男たちが来て、「見たものは全て忘れろ。そして誰にも話すな」

と一方的に言ったのだ。

普通なら怪しきMAXなのだが、ただならぬ雰囲気を感じ十馬はそれに従っているのである。

けれど、話さないことでメリットもあった。

「うっかりするとあの事も言っちゃまいそうだからな…それに二回目だし」

「ん？今なんて言いました？」

「いや、なんでもない。それよりほら、着いたぜ」

話題をそらすように目の前の古い工場を指差す。

ここが十馬のチーム、『ドラゴンロンド』の本拠地だ。

「ヤー！リーダー！まっつたよ♪」

「こんにちは！十馬さん！イリスちゃん！今日も元気?!」

入るなりチームメンバーの中でも気さくな二人があいさつしてくる。

「よつす。ジョーもリンも緊張とかなさそうだよなあ」

「そのバカ二人にそんな細やかな神経はありません。それと少しばかり遅いですわよ十馬」

リンの隣に座るロングスカートがよく似合う上品な雰囲気な少女、レイナは相変わらずの毒舌っぷりである。

「わりい。でもまあセーフだろ」

「ハイハイ、ステージまではまだ時間あるんだからさ。レイナちゃんもそう怒らないであげてよ」

十馬達のフォローに回ってくれているのはサブリーダーの稲本淳吾だ。

知能指数が低めの本チームのまとめ役でもある。

「つーかさ。竜希が来てないけどどうしたの？一緒に来ると思ったけど」

「そういえばあいつ、今日は教室まで迎えに来なかったな」

「なにか、あったんでしようか？」

そう皆で話していると、一人の少年が工場内に見事なヘッドスライディングで入ってくる。

「お、遅れましたあ!!」

彼は緑川竜希。

ドラゴンランド、最年少メンバーで皆の弟分のような存在である。

「お♪やっとおでまし遊ばせましたね〜」

「ジョー、敬語なんだかよく分かんないぞソレ」

「大丈夫ですか?!思いつきり顔からダイブしましたけど」

意外と面倒見のいいイリスが竜希に駆け寄る。

「いてて…だ、大丈夫です。そ、それより遅れてすいませんでした!」

立ち上がったそのままの勢いで見事なジャンピング土下座を決める竜希。

本人はかなり申し訳なさそうだがチームの皆は怒った風もない。

これがドラゴンランドの平常運転である。

「いいって。俺もイリスもちよつと遅れたし」

「そうですよ!誰も竜希くんを責めたりしません!」

「セメタリー(墓場)?」

「おめえは黙ってる、耳年増のジョー」

いつも通りジョーが茶化して場が少し和んだ。

「おーい。そろそろ行かない?」

「そうだな。よし!行くか!」

そう言ってブレザーを脱ぎ、鞆の中にあつたチームのパーカーを取り出す。

紫の地に背中にはチームシンボルである円を描く龍。

チーム名である龍の輪舞《ドラゴンロンド》にピッタリなパーカーである。

ちなみにレイナが提供してくれたものだ。

「よし！いざステージだ！」

「いえーい！」

「頑張りましょうね！皆さん！」

「ああ、俺とリンのコンビで観客を虜にしてやるよ！」

「うん！がんばろーね！淳吾くん！」

「れっつぱーりい！」

「もう少しマシな言葉は無いんですの？」

それぞれが声を上げ、ステージに向かうべく倉庫を後にした。

薄暗い部屋に三つのシルエットがあつた。

光を放つディスプレイを見ながらシルエットの内の一つが言う。

「ふむ…やはり次元の揺らぎの波長が今までに無いほど大きくなっているなあ…」

「ということやはり…？」

今度は先とは違う、凜とした男の声が響く。

「うん。その可能性もある。念のため出ておいた方がいいよ」

「わかった。行くぞ…」

「はい。兄さん」

そう言つて、二つのシルエットは部屋を後にした。

残された影…椅子に座った人物はディスプレイのグラフを見つめる。

「いよいよか…やれやれ、疲れるのは嫌なんだけど」

言葉とは裏腹に、光に照らされたその顔には不敵な笑みが浮かんで

いた。

「イエーイー！」

音楽が終わり、メンバーがお辞儀をして去っていく。
ドラゴンロンドのステージは大盛況だった。

「よっし！今日はこんなところだろ！」

「大盛り上がりでしたもんね！」

「今日披露した新技、どうだったよ？」

「わたしと淳吾くんはやっぱり最強コンビだね！」

「ちよつと？皆のジョーくんは？」

「あなたは後ろで好きに踊ってただけでしょうに……」

「そんなこと無いですよ？ジョーさんも僕より全然うまいです！」

「おー！いい子だねえ竜希は。さすがはThe弟分だけあるよ〜」

「やめなさいジョー。あなたのバカが竜希に伝染ります」

ステージの興奮冷めやらぬ中、雑談をしながら皆で片付けをする。

一つでもゴミや用品を残すと嚴重注意をされかねない。

一度は世間から敵視されたビートライダーズは今でも、こうしてルールや社会規範に則って活動している。

それが人に見られる事を前提とした、ダンサーとしてのあるべき姿なのだ。

自分の荷物を纏め、帰ろうとするとステージの裏手に回っていたジョーが声を上げた。

「おーい皆ーちよつと来てくれー！」

皆で見に行ってみると、そこにはあるものが転がっていた。

“それ”は果実に見えた。

だが十馬の知る地球上のどの果物とも違った。

しかし、知っている。

よく似たものを、十馬は知っている……！

「おい皆、すぐにここから離れろ」

急に静かな声音で、果実から距離を取りながら十馬が言う。

「え？どうかし…」

「いいからすぐに離れろっ!!」

聞き返すイリスに恐怖と危機感を滲ませる声で叫ぶ。

同時、それが合図だったかのようにその果実から爆発的に植物が延び、街を襲い始めた！

「「うわああ!!」」

と周りにいた人たちが悲鳴をあげて逃げていく。

「くっ！やっぱりか！」

「やっぱり？十馬！それはどういう…」

焦りを露にする十馬にイリスが言いかける。

しかし彼女はそれを最後まで言うことができなかつた。

目の前に次元の裂け目が生じ、そこから鬼のような異形の怪物が出てきたからだ。

「キヤー!!」

「ムォーン!!」

怪物は悲鳴を上げるイリスを掴むと次元の裂け目に帰ろうとした。

そう、あたかも彼女を連れ去るかのよう。

「やめろ！このバケモンが！」

そう叫び、十馬はステージにあつたマイクスタンドでその怪物を殴りつける。

「ムォーン!!」

だが怪物は強く、十馬は容易く腕でなぎ払われた。

「グッ！畜生…」

「十馬！とうまあー！」

イリスが名を呼ぶ。

だが壁に叩き付けられた痛みでまともに動くことができない。

そうしている間に怪物は再びイリスを捕まえようとしている。

「やめろお!!」

通じないのを承知で、それでも怪物に向かって叫んだ。

その時

どこからともなく飛んできた光の矢が怪物に当たり、怪物は吹き飛ばされた。

「な、何だ?」

俺がその矢の飛んできた方向を見るとそこには

鎧に身を包んだ、白のアーモードライダーがいた。

「大丈夫か?」

そのライダーが問うてくる。

「あ、ああ。俺は大丈夫だけど…」

「ならよかった。だが他人のために自らの危険を顧みずインベスに立ち向かうとは…お前のような奴もまだいるのだな」

なぜだろうか。そのライダーが笑った気がした。

「さて、いくぞ光実」

白のライダーが言うと同時に、十馬の後ろから銃弾が飛来し、怪物に直撃する。

驚いて振り返るとそこには紫のアーモアに身を包んだもう一人のアーモードライダーが立っていた。

「あ、あれはアーモードライダー龍玄?」

そう離れたところにいた竜希が言う。

「龍玄って確かチーム鎧武の…」

それを聞いて思い出したのか淳吾もそのライダーの名を呼ぶ。

「ええ、その通りです。さあ、早く逃げて!」

そう目の前の紫のライダー、龍玄が言うなり銃弾を怪物に打ち込む。

そして白のライダー&龍玄のタッグと次々と現れる怪物、インベスとの戦いが始まった。

インベスは裂け目から次々現れるがそれを二人のアーモードライダーは怯まない。

白いライダーが斬りつけ、龍玄がそれを援護射撃と息ピッタリのチームワークだ。

その光景に、十馬の心が奮い立つ。

「これじゃ、まるであの三年前の時みたいじゃないか…」

そして思い出す。

あのとときの弱い自分を。

「俺はいつまでもこのままじゃいけない…!」

そう言っただけ自分の鞆の中をあさり、目当てのものを取り出して掲げる。

「俺はずっとこの時待っていたのかもしれない…あのととき守れなかったものを、今度こそ守るために!」

そして掲げていたもの…ナイフのような意匠のブレードが付いたバックルを腰に装着する。

その名は戦極ドライバー。

かつてこの街を守り抜いた、英雄たちの証。

「な!あれは黒影トルーパーの!」

「まだ持っている人がいたなんて!」

二人のライダーも驚きを露にしていた。

そして持っていたマツボックリロックシードを解錠。

万感の思いを込めて、その文言を口にする。

止まっていた自分を、進めるための言葉。

変わるための、決意の言葉を。

「変身!」

『マツボックリ!』

『ROCK ON!』

『マツボックリアームズ!一撃!インザシャドウ!』

次の瞬間、十馬は鎧を纏った足軽のようなアーマードライダー、黒影トルーパーに変身していた。

「いくぜー！」

手に持った槍、影松を振るい次々とインベスをなぎ払う。

初めての戦いではあるが迷いはない。

目の前にいるのは敵だけだ。

それを倒すだけなら、動物にだってできる！

「すごい…！」

「量産型ベルトであれだけの力を発揮するとは…一体彼は…！」

驚愕したまま二人のライダーが眩く。

だがそれを気にしている余裕はない。

「一気に決めるぜー！」

インベスたちが弱ってきたのを確認して、ベルトのブレードを二回倒すと電子音声で雄たけびを上げる。

『マツボックリオーレ！』

そして影松にエネルギーを集め、周りのインベスに向かって放つ！

「ハァー!!」

インベスが全て爆散しその爆発の余波で残りも次々消えていく。

それと同時にロックシードがスパークし、強制的に変身が解除された。

「……やったぞ。俺は…変わった」

「十馬！」

呆然としていたイリスがハツとして駆け寄ってくる。

「大丈夫か?!…っとうおっ!?!」

急に抱き着かれ、狼狽する十馬。

「お、おい…！」

さすがに気まずく、引きはがそうとしたができなかった。

「…っ、うっ……うええ……」

彼女が泣いていたから。

「悪い、怖かったよな。もう大丈夫だ」

そう言つて優しく頭を撫でてやると抱き着く彼女の腕が少し緩んだ気がした。

「うん……十馬」

「何だ？」

「……ありがとう」

しばらくそうしていると若干気まずそうににさっきのライダー達が近づいてきた。

「水を差すようで悪いが、少しいいか？」

白いライダーが真剣な声音で言う。

「ああ、ほらイリスお礼言えよ」

「さ、さっきはありがとうございました！」

促され、イリスが涙を拭いて頭を下げる。

「フツ、気にするな。弱い者を守るのが私の使命だからな」

そう言つて白のライダーが笑う。

その声音は威厳に満ちて、それでいて優しくかった。

「それより君と少し話したい。龍崎十馬」

「えっ？なんで俺の名前を？」

いきなり知り合いでもない人に名前を呼ばれビツクリする。

顔は分からないが少なくとも、自分にこんな知人はいないと思う。

「君は意外と有名ですよ。破天荒な実力派チームのリーダーとして」

するともう一方の龍玄というライダーが言う。

「この格好のままじゃ話づらいですよね？」

そう言つて龍玄が変身を解き、少年の姿になった。

外に向かつて跳ねたくせ毛が印象的だ。

恐らく十馬達と同年代かそれ以上だろうが、童顔のせいで幼い印象を受ける。

そして彼の顔に、十馬は見覚えがあつた。

「僕は呉島光実。僕も昔、ビートライダーズでダンスをやっていたん

です」

そう少年…光実が笑う。

「そうなのか！じゃあ先輩ってことになるのかな？」

「そんなところですね。今は私用が忙しいですけど、一応チームには所属してますよ」

人懐っこい笑みを浮かべる彼のおかげで少し緊張が解けた。

「ほら、兄さんも」

「確かにこのままだと少しやりにくいかな」

光実に促され、白のライダーも変身を解く。

すると鎧が消え、スーツを着た青年が現れた。

切れ長の鋭い瞳は虎のそれを思わせる力強さがある。

だが、それでいてどこか高貴な雰囲気は彼にはあった。

「私は呉島貴虎。光実の兄だ」

そう名乗り、真剣な目で彼は十馬を正面から見据えた。

「色々聞きたいこともあると思うが、今はただ私の言葉を聞いてほしい」

「私達に、力を貸してくれ」

第2話 新たな侵略、そして再会

前回までのあらすじ

謎の惑星で平和に暮らす絃太たちの前に自らを『龍の王』と呼ぶ新たなオーバーロード、シュバリヤが現れる。

絃太はこの星を、ひいては地球をも侵略しようとするシュバリヤと戦うも極とカチドキ、二つのロックシードを奪われ、始まりの男としての力を失ってしまふ。

隙について舞が開けたクラックにより絃太は三たび、地球に戻るこ
ととなる……。

メガヘクスとの戦いから一年、沢芽市はプロのダンサーを目指す若者のフロンティアとなりいくつものチームがダンスの腕を競っていた。そんな中チーム『ドラゴンランド』のリーダー、龍崎十馬は見覚えのある果実を発見する。そして始まった新たな植物による侵略。斬月と龍玄が現れた無数のインベスと戦う中、十馬は今度こそ自分の力で仲間を、そしてあのときの“彼女”を守ることを決意する。そして量産型の戦極ドライバーとマツボックリロックシードを使った十馬は黒影トルーパーに変身し、インベスの群れを一掃。仲間を守るこ
とができた。そんな十馬に斬月、龍玄の正体だった呉島貴虎、光実の二人が現れ、貴虎が言う。

「私達に力を貸してくれ。」

—————

「俺の……力を？」

と俺……十馬が言う。

「そう、君の力だ。」

と目の前の青年、貴虎が言う。

「あ、ああ、このベルトとロックシードか。だったら悪いけど渡せないよ。」

と俺が言うと

「いや、そうではない。君が必要なんだ。龍崎十馬。」

と貴虎が返す。

「お、俺?! いやでも俺別にそんなたいした奴じゃねえぞ?! さっきのもこのベルトの力だし……。」

と俺が慌てて言う

「いや、本来そのベルトなら使用者がよほど鍛錬を積んでいない限りあんな性能は発揮できない。そもそもランクCのマツボックリではあそこまでのエネルギーを出せないはずだ。」

と貴虎が説明してくる。

「じゃあ、何でさっきはあんなに戦えたんだよ?! つかそもそもアンタ等何者だ?!」

と俺が疑問をぶつける。

すると

「私達の事か……話してもいいが、それならついてきてもらいたい。」
と貴虎が言う。

「どこへ?!」

と俺が聞くと

「私達の本部へだ。」

と貴虎が平然と言う。

「ほんぶう?!」

と驚いて俺が言う。

「ああ、どうだろう。君は詳しい話を聞けるし私達も君とゆっくり話したい。悪い提案ではないと思うが。」

と貴虎が詰め寄る。

すると

「だめだよ兄さん。ちよつと強引すぎない?」

と今まで黙っていた少年……光実が言う。

「む……そうだな。すまない少々強引だったようだ。だが私達には君が必要だ。新たな侵略からこの世界を守るために。」

と貴虎が言う。

「アンタ等、あの植物が何か知ってるのか?」

と俺。

「ああ。少なくとも現時点では世界のどの組織よりもな。」
と貴虎。

俺は迷った。

この二人は俺を実験台か何かにしようとしているんじゃないか？
貴虎は俺が先ほどの戦いで発揮した力をありえないと言っていた。
だから俺を調べたいんじゃないか？
そんなことを考える。

「十馬？」

イリスが心配そうにこちらを見てくる。
そんな彼女を見て俺はあることを思い出した。
そして決断した。

「わかった。俺はあの植物についてもつと知る必要がある。だからア
ンタ等と話したい。その本部とやらに連れて行ってもらうか。」
と貴虎の目を正面から見据えて俺は答えた。

「……！いいのか？」

と貴虎が意外そうに言う。

「と、十馬?!」

とイリスが驚いたように言う。

「ああ、アンタ等についてはまだまだ怪しいし何かに巻き込まれる可
能性もある。けど俺はアンタ等を信じたい。」
と俺は続ける。

「何故、信じてくれるんですか？」

と光実が言う。

その問いに対して

「少なくともアンタ等はさつき、打算抜きで俺の仲間を……イリスを
助けてくれた。そんな人たちを疑いたくはねえよ。」

と俺は答えた。

「……！そ、そうでしたね。」

とイリス。

「てなわけだ。案内してくれるな？」
と俺が聞く。

「わかった・・・その前に一つ言わせてくれ。」
と貴虎が言う。

「何だ？」

と俺が尋ねると

「我々を信じてくれて・・・ありがとう。」

と笑いながら貴虎が言う。

「へッ、いいって。お互い様さ。」

と俺も笑い返す。

「フツ、そうだな。よし行こうか。」

と貴虎が案内しようとする。

すると

「あ、あのー！」

とイリスが言う。

「何だよ？イリス？」

と俺。

「あの・・・私も連れて行ってもらえませんか？」

と彼女が言う。

だが

「すまない。ベルトを所持している彼ならまだしもただの一般人を巻き込むわけにはいかないんだ。」

と貴虎が言う。

「そ、そうですね・・・すみません。わがまま言って。」

とイリスがすこし残念そうに言う。

「俺なら大丈夫だ。お前はチームの皆を頼む。」

と俺が言う。

「そうですね・・・わかりました！チームはまかせてください！」

とイリスが言う。

「おう！あと俺の分のカルボナーラ残しとけよ！」

と俺が笑顔で言う。

「はい！じゃあ後で！」

とイリスが走り去っていく。

「いい仲間だな。」

と貴虎。

「おう！それより早いとこ案内してくれ。日が暮れちまう。」
と少し照れくさくなつて俺はせかすように言う。

「ああ、ついてこい。」

と貴虎が歩き出す。

俺と呉島兄弟はそつとその場を立ち去つた。

—————

そのころ・・・

湾岸の倉庫が立ち並ぶ場所に二つの人影があつた。

「はあ、はあ・・・大丈夫か舞？」

と青年・・・葛葉紘太が言う。

「うん。紘太こそ大丈夫？」

と紘太の横に座る少女・・・高司舞が言う。

「ああ。あの時は急激に力を奪われたせいで体が慣れなかつただけだ。」

と紘太。

「でも奴は地球も侵略すると言つていた・・・早いとこ貴虎やミツチと会わなきゃな。」

「うん。とりあえず行こう？」

と二人は歩き始めた。

—————

そんな二人を上から見ている者がいた。

「ふむ。始まりの男というから期待したが今はたいしたことなさそうだな。」

とその何者かが言う。

「なら俺が出るまでもないか。」

と言うと同時、謎の人物の横に次元の裂け目、クラックが出現し、中から鬼のような角を生やしたオニインベスが出てきた。

「グルル・・・」

「これをやる・・・きつさと片付けろ。」

と謎の人物が毒々しい果実をオニインベスに与える。

「グツ、グオーン！」

とその果実を食べたオニインベスが叫び、強化態であるシユテンインベスになった。

「フッフ、さあてどうする？元始まりの男さんよ。」

その人物はそう言うと言姿を消した・・・

—————

そのころ

「なーなんじやこりやああ!!」

と俺、十馬はジーパン刑事並の絶叫をあげた。

なぜなら、目の前に巨大なディスプレイ。

そして横には色んな訳分からん(けど見た目はどことなくカツコイイ)装置が目白押しという

まるでアニメの秘密組織みたいなどころだったからだ。

「えー何！本部ってこんなカツケえの?!早く言ってくれよ！これ知ってたら迷わず来たわ！」

と俺が興奮気味に言う。

「落ち着け。頼むから落ち着いてくれ！」

と貴虎。

「落ち着けるかあ！こんな男のロマンじゃん！夢じゃん！なんでもっと早く来なかつたんだよ俺！」

と、まだ収まる気配の無い俺。

すると

「てりやっ！」

「おごっ！」

後ろから飛んできた本が俺の頭にクリーンヒットし俺は頭を抱えた。

「いつてええ!!何しやがんだあ!・・・って、あれ?誰?」

目の前にいたのは少年だった。

髪は寝癖だらけで目も眠そうな垂れ目、そして手には追撃用と思われる分厚い技術書を持っていた。

「やっと落ち着いたかい?じゃ、とりま座って。」

と少年が椅子を勧める。

「お、おう・・・。」

と俺は勧められた椅子に座る。

「それじゃ自己紹介からかな?初めまして、龍崎十馬。僕はこの対ニヴルヘイム組織『ヨルムンガルド』の科学者、水池葵だ。葵って呼んでくれてかまわないよ。」

と少年・・・葵が言う。

『ヨルムンガルド』?なんだそれ?」

と疑問をそのまま口にする俺。

「それはこれを見てから説明するよ。」

と葵が手元のコンソールを操作する。

するとディスプレイいっぱいには先ほどの植物の画像とデータが表示されその横には不思議な森のような写真があった。

「こ、これは・・・!」

「そう。これが君の見た植物、ニヴルヘイムの果実とそれのなる『ニヴルヘイムの樹海』だ。」

と葵が説明する。

『ニヴルヘイムの樹海』・・・!」

と俺が呟く。

「君は三年前にも同じような事があつたのを覚えているかい?」

「ああ。忘れたくても忘れられねえよ。」

「あれはヘルヘイムの森という異次元の世界からの侵略だった。今回のこれも同じような物さ。ただし・・・。」

「ただし?」

と俺が続きを促す。

「このニヴルヘイムの植物はヘルヘイムのものより遥かに速いスピードで増殖する。とはいえそれ以外は何も分かっていないけどね。だからこの事態に対抗するため作られたのが……」

「ヨルムンガルドってことか。」

と得心がいった俺が言う。

「正解。その二人もヘルヘイムの事件の関係者だから集められたんだ。それじゃあ大体の説明も終わったし次は君についての話をしよう。」

と葵が話題を変えてくる。

「俺の？」

と目をパチパチさせる俺。

「そう、君の持つ『適性能力』についてだ。」

と葵が続けるも

「てきせーのーりよく？」

といまいち理解できない俺は首をかしげる。

「うん。君は黒影トルーパーに変身しインベスと戦った。だがその際の戦闘能力が基準値を大幅に上回っていたんだ。」

と葵が説明する。

「ああ、それならさつきも貴虎に言われたぜ。」

と俺が答える。

「おそらく君にはロックシードの力を120%以上引き出す能力がある。まあそれがロックシードに限った話なのかはまだ分からないけどね。というわけでちよつと君のベルトと錠前を見せてくれるかい？ 仮説の参考にしたんだ。」

と葵が俺に尋ねる。

「ああ、いいけど。ちゃんと返してくれよ。ほれ。」

とベルトとロックシードを渡すと葵はそれをスキャナー(さつきのかっちよいい装置の一つ)の上に置き、スキャンをし始めた。

「一つ聞くんだけれどこれはいつ手に入れたんだい？」

と作業しながら葵が聞いてくる。

「ああ、これは去年の宇宙人の時に落ちてたのを拾ったんだ。ロックシールドは三年前な。落ちてたのを拾った。」

と俺は正直に答える。

「ふーん……内部構造は変わらない、と。ロックシールドは……ん？これは……」

とブツブツ言つて俺の方にロックシールドを向けてきた。

「この傷、戦闘時に付いたものかい？」

見ると真ん中に大きな傷ができ内部機関も露出していた。

「あれ？いつの間に。戦つてた時はこんなのなかったぜ？」

と俺が答える。

「ふむ、となるとまさかのオーバーヒート？もしそうだとすれば……」
と言うなり俺に向き合う。

「ナ、ナンデスカ？」

「単刀直入に聞く。君はこの先も僕らと協力してニヴルヘイムに対抗する気はあるかい？」

と真剣この上ない顔で俺に問う。

「へ……？」

とキョトンとする俺に

「質問に答えてくれ。どうなんだい？」

と葵がさらに聞いてくる。

「俺の答えはきまつてる。……協力するよ、アンタ等に。俺も守りた
いものがあるからな。」

と俺は葵の目を見据えて答えた。

「そうか……なら、"デューク"を彼に……」

と葵がデスクから何かを取り出そうとした時

「待て。葵。」

と貴虎が葵を止めた。

「何故？」

と葵が尋ねる

「まだ彼に"アレ"を預けるのは危険だ。もしものことがあつたらどうする。」

と貴虎が言う。

「いや、でも・・・」

と葵も食い下がるが

「今日は彼と話をするだけのはずだ。彼の意味は嬉しいが、少なくともまだ、リスクを冒させる訳にはいくまい。」

と貴虎が言う。

「そうだね・・・じゃ、今日はここまでだ。帰ってかまわない。」
と少し残念そうに葵が言う。

「お、おう・・・じゃあまた明日来るよ。続きはその時にな。」

そう言って俺は貴虎と共に本部をあとにした。

廊下を歩きながら貴虎が俺に話しかける。

「すまなかつたな。君に決断を迫ってしまった。」

「いいって。もう腹は決まってたし。」

と俺が答える。

「そうか・・・ああそうだ。あとこれを。」

そういって貴虎が一台のスマホを渡してくる。

「これは？」

「我々との連絡用だ。基地局が壊れても衛星を使えるようになってい
る。何かあればこの端末に連絡する。」

「おう。あんがとな。じゃ、また。」

と出口まで来た所で貴虎に言う。

「ああ、彼女にもよろしくな。」

そう言って俺達は別れた。

一方、本部では

「はあ、彼にこれを使って貰いたかったけどなあ。」

と葵が残念そうに言う。

彼のデスクの上には一台のベルト、ゲネシスドライバーとレモンエ
ナジーロックシールドが置かれていた。

「戦極凌馬の最高傑作か・・・。」

と呟く葵に

「彼ならきつと使えますよ。」

と光実が言う。

「そうだね。でも、まあ貴虎の気持ちも分かるけどね……。」
と葵が呟く。

すると

急にブザーが鳴り、ディスプレイにある場所の位置情報が映される。

「これは！」

「ああ、その通り。クラックの反応だ。場所は……湾岸の倉庫エリア！」

「わかりました！兄さんと龍崎さんにもこのことを！」

そういつて光実はデスクの上のベルトとロックシードを掴んだ。

—————

「はあ。疲れた。」

そう呟きながら俺はアパートに帰る道を歩く。

するとポケットのスマホが震えだした。

「ん？何だ……ってこれは！」

そこにはクラック出現の旨と場所が送られてきていた。

「湾岸の倉庫エリアか……クソっ！結構遠いな！」

車等があればまだしも走ってでは時間がかかるしインベスとの戦闘にも備えて体力も残さなければならぬ。

「クッ！どうしたら！」

そこに重厚なエンジン音が響く。

「ん？」

不思議に思い、音のした場所に行くくと、

「うおおーなんだコレ！」

そこには白の大型バイクが止まっていた。

しかも流線型でなんか未来っぽい。

「おお！カッケえ！ん？」

シートにメモが貼付けられていた。

『君への贈り物。好きに使って。』

「おお！ラッキー！よし行くぜ！」

俺はヘルメットをし、グローブをはめてから全速力でバイクを走らせた。

—————

そんな彼を見ている者がいた。

「気に入ってくれたかな？頑張ってね。龍の力を受け継ぐ者。」

そう言ってその人物は姿を消した。

—————

そのころ倉庫エリアでは・・・

「まずは街の方に行こう。舞。」

そう紘太が言う。

「うん。」

と舞。

すると

「グウオオーン!!」

という叫びと共に巨大な鉄棍が紘太達の前に突き刺さった！

「うわあ！何だ!?!」

「こっ、紘太！」

舞が指差した所には筋骨隆々の角を生やした怪物・・・シュテンインベスがいた。

「グウオオーン！」

そう叫ぶと紘太達に向かって突進してくる。

「くっ！」

間一髪かわすも再びシュテンインベスが襲ってくる。

「あいつの追っ手か！うわっ！」

俺は弾き飛ばされフェンスにぶつかる。

「グハアッ！」

「絃太！」

舞が叫ぶ。

シユテンインベスは後ろを向くと舞に掴み掛かる。

そう、それはまるで舞を捕まえるかのように・・・

「やめろお!!」

次の瞬間!

「どおりやあー!!」

と右からやってきた大型バイクがシユテンインベスにぶつかり、奴を弾き飛ばした!

「グオオーン！」

とシユテンインベスが吹き飛ばされる。

「き、君は？」

とバイクに乗っていた少年に聞く。

「ああ、俺は・・・って自己紹介してる場合じゃねえや!早く逃げて！」

とバイクの少年が言う。

「君はどうするんだ?！」

と俺が聞くと

「ああ、俺にはこいつがあるからな！」

と言って少年がバックから取り出す。

・・・大きめの筆箱を。

「へ？」

思わず声をあげる。

「ん?・・・やっべえ!ドライバー忘れてた！」

と十馬は焦っていた。

どうやら本部に置き忘れていたようだ。

「しようがねえ!いくぞー！」

「グオーン!!」

俺はインベスに殴り掛かるが腕でもってなぎ払われてしまう。

「ぐはっ!やっぱ生身じゃキツイか?」

それでも今自分が引く訳にはいかない。

「貴虎たちが来るまで持ちこたえねえと！」

「うおおー！」

と再び奴に向かっていく。

目の前で何度倒されても立ち向かっていく少年。

その少年を前に紘太は言う。

「あいつ・・・俺たちを逃がすために・・・こんなところであんないい奴を死なせる訳にはいかない！」

そう叫ぶと同時、紘太は手に異様な感覚を覚えた。

「っ！戦極ドライバ―にロックシード！・・・やってやる！変身！」

『オレンジ！』

『ROCK ON！』

『オレンジアームズ！花道、オンステージ！』

次の瞬間、紘太の姿は橙色の鎧を纏った武者、アーマードライダー鎧武へと変わっていた。

「ここからは俺のステージだあ！」

そう言ってインベスに鎧武が突っ込む。

「あのアーマードライダーは！」

俺は驚いた。

かつて見た、あの鎧武者のライダーが現れインベスと戦い始めたからだ。

「こんな時につ・・・俺は何もできないのか？あのライダーにまた助けられるだけなのか？」

心が悔しさとやるせなさで一杯になる。

「龍崎さん！」

と今、俺が来た道から光実が走ってくる。

「光実！ちようどいい！この人を頼む！向こうでアーマードライダーが戦ってるんだ！」

と光実に倒れている少女を預けながら言う。

「えっ！舞さん!?!どうしたんです!?!紘太さんは!?!」

どうやら二人は知り合いらしい。

「ミツチ・・・私は大丈夫だから、紘太を・・・痛っ！」

「舞さん！怪我してるじゃないですか！」

「でもお願い！紘太は今、力をほとんど無くしてるの。このままじゃ！」

と少女、舞が懇願する。

「・・・分かりました。龍崎さん、舞さんを頼みます。」

と光実が向かおうとする。

が

「キシヤア！」

「何っ！」

いつの間に現れたのか三体ほどのインベスが俺たちに襲いかかってきた！

「くっ！このままじゃ紘太さんも舞さんも・・・！そうだ！」

と何かを思いついたらしい光実は持っていたバックからベルトと錠前を取り出した。

そして

「龍崎さん！これを使ってください！」

とそれを投げる。

「これは?!」

それは戦極ドライバーと違い、赤を基調としたベルトと綺麗な半透明のパーツの目立つロックシードだった。

「それを使って紘太さんを助けてください！この場は僕に任せて！」

と光実が言う。

「紘太っていうのか・・・あのライダーに変身してる人は・・・分かった！任せろ！」

そう言っって鎧武とインベスの入っていった倉庫に入る。

十馬が倉庫に入っていくのを見届けると光実は目の前のインベス達に向き直った。

そして言う。

「舞さん、見ててください。強くなった僕を！今度こそあなたを守ります！変身！」

『ブドウ!』

『ROCK ON!』

『ブドウアームズ!龍・砲!ハツハツハツ!』

そう言っただけで光実が変身したアーマードライダー龍玄とインベスの戦いが始まった。

倉庫の中ではシュテインインベスと鎧武の攻防が繰り広げられていた。

「グウオオオーン!!」

「ぐはあ?!」

変身できたとはいえ鎧武は劣勢だった。

「くっ!せめてもう少し力があれば・・・!」

と紘太が重い体をどうにか操り言う。

が

「グオーン!!」

シュテインインベスの放った一撃に鎧武は変身解除してしまう。

「くっ・・・!もうだめなのか?!」

そのとき

「おらああ!」

突然先ほどの少年が走ってきてそのまま見事な飛び蹴りをくらわせる。

「グオ?!」

不意を突かれたのか奴が姿勢を崩す。

「君は・・・何故?!そこまでするんだ?!」

紘太は問う。

「何故かって・・・?きまつてんだろ!俺は三年前あんに助けてもらった!今度は・・・俺の番だ!」

そう言っただけで俺は先ほどのベルトを腰に巻く。

そして叫ぶ。

「変身!!」

『レモンエナジー!』

『ROCK ON!』

『レモンエナジーアームズ！ファイトパワー！ファイトパワー！ファイトパワー！ファイトパワー！ファイトパワー！』

次の瞬間、アーマーを装着した俺の姿はマントを付けたアーマードライダーに変わっていた。

そしてロックシールドが光ったかと思うと全身に赤と黒のラインが入っていく！

「あれは・・・たしか戦極凌馬の！」

と絃太が言う。

「その戦極さんが先代か。そういや葵も言ってたな・・・なら！」

そう言って新たな琥珀の聖騎士は自らの名を名乗る。

「俺はアーマードライダー、デュークⅡだ！」

続く

第3話 公爵へデュークの名を継ぐ者

前回までのあらすじ

対ニヴルヘイム組織『ヨルムンガルド』の本部にやってきた十馬はそこで科学者、水池葵から世界に迫る新たな脅威について聞かされ、『ヨルムンガルド』に入って『ニヴルヘイムの樹海』と戦うことを決意する。

一方地球に帰ってきた紘太と舞は謎の少年が放ったシユテンインベスによつて追いつめられてしまう。ところがそこにクラツクの出現を察知した十馬が乱入し、彼を助けるため鎧武に変身するも力を思うように出せず、シユテンインベスの猛攻に変身解除してしまう。しかしそこに光実からゲネシスドライバーとレモンエナジーロックシードを託された十馬が現れ、かつて戦極凌馬の変身したアーマードライダーに変身した。

そして言う。

「今、名付けよう。俺はアーマードライダーデュークⅡだ！」

—————

「デュークⅡだって!？」

と青年・・・紘太が言う。

「おお!力がみなぎって来る!これなら!」

と俺・・・十馬が言うと同時に

「グオオオオン!」

と先ほど蹴り飛ばしたインベスが拳を放って来る。

が

「よっ!」

と俺が片手で受け止める。

「グウ!?ググオオオン!」

奴は引きはがそうとするも俺の握力は強く、抜け出せない。

「とりやっ!」

とお返ししに拳を連続して叩き込む。

「グギャアッ！」

とインベスが後方に吹き飛ばされる。

「ハアッ!!」

と俺はすかさず持っていた武器、ソニックアローを構え光の矢を放ち追撃する。

「ググウ・・・！」

と奴が苦しみながらも立ち上がる。

「へえ！以外としぶてえな。」

「なら一気に決めるぜ！」

とベルトのレバーを二回、押し込む。

『レモンエナジースパークキング!』

「ハッ！」

と奴の周り三カ所に矢を打ち込む。

するとその矢から光の結界のようなものが放たれ奴を押しさえつける！

「グウ!？」

「せいやあー！」

と俺がその結界の真ん中にいる奴に向かって回し蹴り『エキスペリメントエンド』をくらわせる。

するとその三つの結界が一つに合わさりレモンの断面のようになる。

「グギャアアア!!」

それと同時に奴が断末魔の叫びを上げ爆発する。

「す、すげえ・・・」

と見ていた紘太さんが息をのむ。

「確かにスゲえな・・・この力があれば・・・」

と俺は呟いて変身を解いた。

「何故君がそのベルトを？もしかして君、貴虎の知り合いか!？」

「ああ、俺は龍崎十馬っていうんだ。このベルトと錠前は光実が・・・」

「ミッチとも知り合いなのか!?君は一体・・・?」

と紘太さんが言う。

「つていうか俺まだ貴方の下の名前くらいしか知らないんすけど・・・。」

と俺。

「ああ、すまない。自己紹介がまだだったな。俺は葛葉紘太。アーマードライダー鎧武に変身できて、今は宇宙の神様みたいなもんだ。まあ力は大半取られたけどな・・・。」

「ええ！神様だったの!?と、とりあえず拝めばいいのか？南無阿弥陀仏？それともアーメン？」

と俺たちが話していると、

「紘太さん！」

とインバスを倒したらしい光実がさっきの少女・・・舞を連れて倉庫に入って来る。

「っ！ミッチー！」

「一年ぶりですね、紘太さん。」

と光実が今まで見せた事の無い嬉しそうな笑みを浮かべる。

「ああ。つてそういうや貴虎は!?つていうかなんで彼に戦極のベルトを!?」

「それは後で話します。それより今は僕らの組織の本部に行きましょう。舞さんが怪我してるので。」

「普通の病院だと舞さんが人間じゃないと分かれると色々面倒ですし。」

「お前達の組織？それつてなんだ!?俺がいなくなつて一年の間にいったい何があつたんだよ!?」

と紘太が質問攻めにする。

「いいから・・・落ち着け！」

「いつてえー！」

とそれを見かねた俺の放ったモンゴリアンチョップにより、ひとまず紘太さんが質問攻めをやめる。

「わ、わりい。ちよつと混乱してた。」

「落ち着きましたか？それじゃ行きましょう。」

と皆で倉庫を後にする。

――

そんな彼らを物陰から見ている者がいた。

「ほお。まさか始まりの男じゃなかったただの人間に俺のお手製インベスがやられるとは。」

「始まりの男も気になるけどアイツも興味あるなあ。」

「なんかこう、匂いが違うというか・・・混ざってるっつーか。」

「ま、面白くなってきたからいいけどね。」

とその人物は姿を消した。

――

一方、十馬たちは医務室に舞を運んだあと本部にやってきていた。

「っ！光実！龍崎！それに・・・葛葉!? 一体何があった!?!」

と貴虎が驚いて言う。

「貴虎！実はな・・・」

と俺がことの顛末を話す。

「そうか・・・君をあまり巻き込みたくはなかったが。」

「いいって。あのとき光実の行動がなかったら俺も絃太さんもやられてたぜ?」

「それでも私には責任がある。約束しよう。君とその仲間は私達が守る。」

「ああ。ありがとう。あと俺からも約束を一つする。」

「何だ?」

「俺は必ずお前等の役に立ってみせる。だからお前等も安心して俺に背中を預けてくれ。」

「ああ、分かった。これからも頼むぞ、龍崎。」

と貴虎が手を差し出してくる。

「ああ。こっちこそ。それと俺の呼び方は十馬でいいぜ。光実もな。」

と笑いながら貴虎と握手する。

「はい！十馬君。」

と光実が嬉しそうに笑う。

「フツ。分かったよ、十馬。」

と貴虎も笑みを返す。

「よし。それでは次はお前の話を聞こう。何故戻ってきたんだ葛葉。」

「ああ。聞いてくれ。貴虎、ミツチ、十馬……」

と絃太さんが自分の惑星に突如現れた謎の植物とオーバード、シュバリヤに力の大半を奪われた事、奴の隙をつき地球に逃げてきたことなどを詳細に話す。

ちなみにここにくる途中に絃太さんにはヨルムンガルドのことや謎の植物がニヴルヘイムの樹海という場所からやってきていること、既にこちらの世界にも侵攻しつつあることを俺から説明してある。

「ふむ。つまり今回のニヴルヘイムによる一連の出来事は全てそのシュバリヤというオーバードの仕業か。」

と貴虎が言う。

「自らを龍の王と名乗ったということは、ニヴルヘイムのオーバード達のリーダーなのかもしれませんね。」

と光実も言う。

「詳しいことはわかんねえけど、そいつが親玉で絃太さんの力を奪ったってことか。」

と俺も俺で考えてみる。

「とにかく今言えるのは、葛葉は力の大半を取られ以前の自由に戦えない。そしてこれからの我々の敵はそのオーバード達の王だということだ。」

と貴虎がわかりやすくまとめろ。

「ならこれからもつとクラックの出現頻度が高まるかもしれないな。もう少し人数がいればどうにかなりそうだけど……。」

と俺が言う。

「それならいい考えがありますよ。」

と光実。

「いい考え？何だそれ？」

「集めるんです。三年前のアーマードライダー達を。もう一度！」

「え？でもドライバーとロックシードは？」

と紘太が言う。

「ドライバーに関しては用意してある。十馬が拾った量産型を含めて三つ。ロックシードについてはこいつが起きないことには何ともな。」

と貴虎が珍しく苦い顔をして奥に転がっている毛布の固まりを指さす。

「な、何だあれ？」

「うちの誇る天才科学者、水池葵だ。とはいえあのよう一度寝るとなかなか面倒な奴でな。」

「え？あれ寝てんの？」

「てつきり備蓄用の寝袋かなんかだと思ってたぜ。」

と俺と紘太さんが口々に突っ込む。

「まあ用は起こせばいいんだろ。ちよつとどいてな。」

と俺。

そして葵に聞こえるように言う。

「あー！よかった！葵が寝てて！戦極って奴が付けてたベルトで変身できたからてつきりまーた面倒な質問攻めにあうかと・・・」

「何だって!!」

と葵が飛び起きる。

「何っ！目覚まし時計百個同時攻撃でも起きなかったあの葵が!?こんな簡単に!?!」

と貴虎が目を剥いて驚く。

「戦極凌馬のベルトで変身!?やはり君にあったアンダースーツが装着されたのかい!?それともまさか本来のスーツを!?だとすれば君の能力はドライバーにも作用するということかい!?ああ！実に興味深い！やはり君を選んだのは正解だったよ!!」

と葵が襟首をつかんで揺さぶって来る。

「わわわわ分かったから！おおお落ち着け！ののの脳が揺れる！」

とたまらず悲鳴をあげる俺。

「これが落ち着いてられるかい？ いやできない！ 反語！」

とやめる気配の無い葵。

「いいから落ち着け！」

と再び俺の頭がフルフルシエイカー状態になったところで貴虎が葵に組み付きやめさせる。

「はあはあ、死ぬかと思った……。」

と俺。

「もー！ 話の途中だったのに！ 何をしてく……って葛葉紘太!? 何で!? 地球に!? ただの旅行って訳じゃないよね？」

と今度は紘太に興味が向いたようだ。

「あ、ああ実は……。」

とさきほど俺たちにしたのと同じ説明を葵にする。

「へえ！ オーバーロードの王！ ニヴルヘイムがヘルヘイムと似たようなものだからもしかしてとは思ったけど……というか始まりの男である君を力を奪ったとはいえ倒すとは。かなり強いね。」

と葵。

「ああ、だから今後に備えて元アーマードライダーの皆に声をかけようと話していたんだ。」

と貴虎。

「ああ！ だから僕を起こしたのか！ よし！ 分かった！ ちよつとまってー！」

と葵が横の貯蔵庫のようなものから何かを取り出す。

それはガラスケースに入ったニヴルヘイムの果実だった。

「うおー！ ちよつ！ お前！ そんなの持ち込んでいいのかよ?!」

と俺が問う。

「ああ。この容器の中の液体で少なくとも表面的な活動は抑えてあるから大丈夫だよ。」

と葵。

「これをこうして……よし！ あとは待つだけ！」

と横にある大きな機械にケースごと果実をセットする。

「この機械は？」

と俺。

「これは通称クリエイター。ニヴルヘイムの果実をロックシードにするための機械だよ。ニヴルヘイムの果実はヘルヘイムのものより毒素がとても強くて、ドライバーで変換するだけじゃ危険なんだ。だからこの機械で毒素を取ってロックシードにするんだ。」

と葵が説明してくれる。

と、その間に作業が終わったのかその機械・・・クリエイターからロックシードが出てくる。

「今回できたのは・・・ナンバー12、ドリアンロックシードだね。前につくったクルミとドングリもあるからこれでいいだろう？」

と大きめのアタツシユケースにベルトとロックシードをしまいなから葵が言う。

「ああ。それでは早速行こうか。」

と貴虎が言う。

そのとき！

ブザーが鳴り響き、ディスプレイに座標が映される。

「クラックか!？」

「ああ、場所は・・・シャルモン二号店だ！」

「今は午後で客も多いはずだ！急ぐぞ！」

と皆で向かう。

「ああーそうだ！こいつもー！」

とデスクの上にあつた三つのドライバーとロックシードが入ったアタツシユを持って俺もあとに続く。

――――

地下にある本部から地上・・・旧グドラシルタワーの前に出ると目の前に見覚えのあるバイクが停まっていた。

「あつーこれさっきの！何でここに・・・」

「何だこれは？お前のバイクなのか？」

「ああ・・・ってお前等がくれたんじゃないのか!？」

「いや、こんなバイクを送った覚えはない。横に何か書いてあるぞ。」

「えーつとなになに『ANV―FENRIR』? フェンラーってなんだ?」

「それ、フェンリルって読むんですよ。大地を揺らす者って意味で北欧神話にでてくる大狼の名前です。」

「ほえー! カツケえな! よし! いくぜー!」

とバイク・・・フェンリルにまたがりシャルモン二号店へと向かう。

「私達も行くぞー!」

と思いきいのロックビークルを取り出し、十馬に続く。

――

その数分前、シャルモン二号店では・・・

「いやー! 今日も大盛況だぜー!」

と眼鏡をかけた若者、城乃内秀保が椅子にふんぞりかえっていた。すると

「バツカモオン!!」

「ヒイ!」

「あなたね、お客様が立って並んでらっしゃるといふのに自分だけ座っているなんて何様のつもり! お客様は神様よ! しっかりそれを理解しなさい!」

とガツシリとした体躯とそれに似合わぬオネエ口調の男性、凰蓮・ピエール・アルフォンゾ（本名凰蓮厳之介）が城乃内の首根っこを掴み無理矢理立たせる。

「す、すいません!」

「フン! やっぱりまだまだ坊やね。今度もう一度鍛え直してあげるわ!」

「ええ!? もうインベスもヘルヘイムも無いのに!？」

と二人が話していたその時!

床に次元の裂け目、クラックが現れ、中から大量の初級インベスと

両腕に刃のついたカマイタチインベスが現れる！

「な！なんでインベスが!?!」

「分からないわ！とにかく今はお客様の安全が第一よ！」

と凰蓮と城乃内の二人はインベスの群れに向かって走る。

が

「うわあ!?!」

「クッ！意外とやるわね！」

とすぐに弾き飛ばされてしまう。

「城乃内！オッサン！」

と横から現れたツートンカラーの服を纏った若者、ザックが凰蓮たちを駆け寄って来る。

「ノワの坊や！気をつけなさい！こいつ等結構強いわ！」

「ああ！とりあえず貴虎かミツチに連絡を・・・うわあ！」

と連絡しようとするもカマイタチインベスに吹き飛ばされてしま
う。

「くっ！このままじゃ！」

そのとき！

どこからともなくバイクの音が聞こえた。

「くらえ！」

と横からきた二台のバイクがインベスの群れに突っ込みそのまま
奴らを弾き飛ばす！

「な！お前等は!?!」

「よお！ザック！それに城乃内にオッサン！」

「こ、絃太!?!」

「水瓶座の坊や！どうして帰ってきたの!?!」

「ああ、それは後で説明する！今は俺と一緒に戦ってくれ！」

「でも戦おうにもドライバーもロックシールドも無いし・・・」

「ほい！それならあるぜ！」

ともう一台のバイクに乗っていた少年が大きなアタッシュケース
を投げってくる。

それを開けると中には三つのドライバーとロックシールドが入って

いた。

「これなら！いくぜ！オツサン！城乃内！」

「お、おう！」

「いくわよお〜！」

と三人がそれぞれドライバーを巻く。

すると凰蓮と城乃内のベルトにフェイスプレートが認証される。

どうやらザックが手にしたベルトが十馬の拾った量産型だったようだ。

「変身！」

『クルミ！』『ドリアン！』『ドングリ！』

『『ROCK ON！』』

『クルミアームズ！ミスターナツクルマン！』

『ドリアンアームズ！ミスターデンジヤラス！』

『ドングリアームズ！ネバーギブアップ！』

次の瞬間、アーマーを装着した三人はそれぞれアーマードライダーナツクル、ブラーボ、グリドンに変わっていた。

「あの人たちもライダーだったのか!? すごいや三年前も見た気が！」

と少年が驚いたように言う。

「よし！いくぜ！二人とも！」

「おう！」

「さあて！久しぶりに暴れるわよお〜！」

と三人がインベスの群れと戦い始める。

と、危険を感じたのか群れのリーダーと思われるカマイタチインベスが逃げていく。

「あつ！待て！つてうおっ！」

三人が取りこぼしたらしいインベスがこちらに向かって来る。

だが直前で飛んできた矢と銃弾により弾き飛ばされる。

「ここは私達にまかせろ！お前達はあのインベスを追え！」

と貴虎が変身した斬月・真と光実の変身した龍玄がインベスを足止めする。

「わかった！行こう！十馬！」

「ああ！了解だ！絃太さん！」

と俺たちはカマイタチインベスを追う。

「さて、さっさと片付けるぞ！」

「はい！兄さん！皆さんも行きますよ！」

「おう！やってやるぜ！」

「もちろんよ！メロンの君がやるのなら！」

「お、俺も！」

と再びアーマードライダー達とインベス達の戦いが始まる。

—————

「あっ！いた！」

俺たちは広場のようなところにカマイタチインベスを追ってきた。

「シャアア・・・」

観念したのかカマイタチインベスが臨戦態勢になる。

「よし！いくぜ！」

「ああ！」

「変身！」

『オレンジ！』

『レモンエナジー！』

『『ROCK ON！』』

『オレンジアームズ！花道、オンステージ！』

『レモンエナジーアームズ！ファイトパワー！ファイトパワー！ファイア

ファイファイファイファイファイファイファイ！』

次の瞬間、そこには二人のアーマードライダー、鎧武とデュークⅡが並び立っていた。

「ここからは俺たちのステージだあ！」

と俺と絃太さんが叫ぶ。

「シャアア！！」

と奴が襲いかかって来る！

「俺が矢で援護するんで絃太さんは奴を！」

「ああ！頼む！」

と俺と紘太さんはコンビで奴を追いつめる。

紘太さんも倉庫のときよりは力が回復しているらしく見事な太刀捌きで奴にダメージを与えていく。

「そろそろ決めるぜー!」

「はい!」

と二人でベルトを操作する。

『オレンジスカッシュ!』

『レモンエナジースパーキング!』

「ハッ!」

と俺が矢で結界を作り奴の動きを止める。

そしてそこに紘太さんと俺、二人のキックが炸裂する!

「せいはい!」

「せいやあ!」

「シャアア!!」

奴は俺たちの合体技、『無頼エンド』をくらい爆発四散した。

「よし!こんなもんだろ!」

「ああ!やったな!十馬!」

「紘太さん!十馬くん!」

とインベスを倒したらしい光実や貴虎と先ほどの三人もやってくる。

「皆!」

と紘太さんが嬉しそうに言う。

「うおっ!戦極凌馬!いや、もしかしてさっきの!」

「ああ、そうだけど…ってビートルライダーズのリーダーのザックじやん!?それにシャルモンの風蓮何とかに眼鏡!」

「ちよっと!?何とかって何よ!」

「眼鏡!?俺それだけ!」

と皆でさっきの戦いが嘘のように再会を、あるいは新しい仲間が登場を喜ぶ。

そのとき

「あくあ!アーマードライダー増えるとか聞いてないんですけど!」

「まあいいや。いたぶる鼠は多いほうが楽しいもんな！」

といつの間に広場の真ん中にいた謎の少年が声を上げる。

「な、なんだ？あいつ、いつの間に!？」

「お前何者だ!？」

と俺と紘太さんが言う。

「俺？俺の名前は冥也。オーバーロードとしての名はダハーカ!そして……」

とその少年……ダハーカが取り出す。

戦極ドライバーとロックシードを。

「な!なぜお前がそれを!?!しかもそのロックシードは!？」

と貴虎が叫ぶ。

だがダハーカは意に介さず続ける。

「お前達を……地獄に送る者だ!？」

「変・身。」

『ヨモツヘグリ!』

『ROCK ON!』

『ヨモツヘグリアームズ!冥・界、黄泉・黄泉・黄泉!』

次の瞬間、奴の姿はアーマードライダーに変わっていた。

「俺はアーマードライダーアメリト!さあ!裁きの時だ!」

続く

第4話 襲来! 謎の冥界ライダー!

前回までのあらすじ

新世代ライダー、デュークIIへの変身を遂げた十馬は改めて貴虎に光実、そして紘太と共にニヴルヘイムに立ち向かうことを決意する。そんな中シャルモン二号店にクラックが出現。現場に駆けつけた十馬達からベルトを託されたザック、凰蓮、城乃内は再びアーマードライダーナツクル、ブラーボ、グリドンとして戦う。そして紘太と十馬の連携によりクラックから現れたインベスは全て倒された。

だが勝利と再会を喜ぶ彼らの前にオーバーロードだと名乗る少年、冥也ことダハーカが現れ、新たなライダーに変身した。

「俺はアーマードライダーアメリト!」

「さあ! 裁きの時だ!」

—————

「アーマードライダー・・・アメリトだ?!」

と俺が言う。

「そうだ! 存分にいたぶってやるよ!」

とアメリトがいつの間にも手にしていた武器、ブドウ龍砲を俺たちに向かって撃ってくる!

「くっ! 皆! いくぜ!」

と紘太さんが言うと同時に皆、各々のライダーに変身し奴に向かっていく。

が

「オラア!」

と奴が円刃のような武器、キウイ逆鱗を振るい、周りに衝撃派を放つ!

「うわああ!」

「グア! くっ! こいつ・・・強え。」

「坊や! 大丈夫!? こいつ、メロンの君並みに強いわね!」

と衝撃波に切り裂かれ、城乃内、ザック、凰蓮が変身解除してしま

う。

「僕もヨモツヘグリは使った事はあるけど……これほど力を引き出せるなんて！」

と光実が驚愕する。

「ミツチ！皆！大丈夫か!？」

と紘太さんが言う。

「クッ！何だこいつ……力の底が全然見えねえ……」

と俺も言う。

「皆、落ち着け！ひとまず距離をとるぞ！」

と貴虎の指示で一度距離をとり、皆で離れた所から銃や矢で攻撃する。

しかし

「これをくらいな！」

『ヨモツヘグリスパークキング!』

と奴がベルトのブレードを三回倒し、銃にエネルギーをためると射撃技『デッドシューティング』を放つ。

「貴虎！ミツチ！危ない！」

と紘太さんが二人を突き飛ばし、まともに奴の攻撃を浴びてしまう。

「うわあ！」

「紘太さん！ッ！グアア！」

と攻撃を受けた紘太さんが倒れ、その余波で光実も変身解除してしまふ。

「光実！葛葉！」

「てめえ！よくも皆を！」

と俺がソニックアローを振るい、奴に向かっていく。

「待て！落ち着くんだ十馬！」

と貴虎が言うも俺の耳には届かない。

「ハァーおりゃー！せいやつ！」

と連続して斬撃を浴びせるも奴にはまるで効かない。

「この程度か！」

「っ！ならコレをくらえ！」

とベルトのレバーを二回押し込む。

『レモンエナジースパーキング！』

「はっ！」

と矢を打ち込み結界を出現させると同時、奴にキック・・・『エクス
ペリメントエンド』を放つ！

が

「邪魔だあ！」

「何っ!?ぐああ！」

と奴がオーラを放ち、結界ごと俺を吹き飛ばす！

「くっ！」

「お前は弱いな。ベルトの力を使いこなすだけの力が無い。」

「もういい、消えろ！」

と奴が腕に巨大なワニの顎のような武器を出現させ、俺に向かって
振るう。

「ぐっ！ぐはあ！」

とライドウエアが切り裂かれ、腕に切り傷ができる。

そのまま変身解除した俺は傷を抑えてうめく。

「うう・・・」

「十馬！貴様あ！」

と貴虎が奴に斬り掛かる！

「ほお！お前は少しはやりそうだな！」

とアメミトと斬月の対決が始まる。

お互い、一歩も譲らず五分五分の戦いが繰り広げられる。

「そこだ！」

「グッ!？」

と、一瞬の隙をついて斬月の一撃が奴に決まる！

「ハハハ・・・こうでなくっちゃ！」

と初めてダメージらしいダメージを受けた奴が楽しげに笑う。

だが、その時

「なにいい！グハッ！」

と奴のロックシードが妖しく輝くと同時、奴が力をとられたように膝をつく。

「あれは、ヨモツヘグリの副作用か!？」
と貴虎が言う。

「なるほど・・・命を吸うってのは伊達じゃないみたいだな。・・・興ざめだ。今日はここまでにしてやる。」

と奴が隣に開いたクラックから森へ帰っていく。

「助かったか・・・大丈夫か!?十馬!」

と変身を解いた貴虎が駆け寄る。

「あ、ああ。・・・っ!グッ!グアアア!」

と俺が叫ぶと同時、傷口から植物が生え、体にまとわりつく!

「っ!ヘルヘム症と同じか!傷口に植物の種が!クッ!とりあえず本部に・・・っ?何!？」

と貴虎が驚く。

無理も無い。先ほどまで俺にからみつき、苦しめていた植物が急に枯れ、ボロボロと自壊し始めたからだ。

さらに、

「っ!・・・え?傷が・・・塞がってる?」

そう、植物の自壊と同時、腕の傷口が緑に光り、傷が塞がったのだ。

「・・・何で?」

「っ!十馬!大丈夫なのか?」

と貴虎が心配そうに言う。

「あ、ああ・・・でも、何で?」

「わからんがとりあえず本部の医務室で検査しよう。まだ種が残っているかも知れない。皆も手当を受けるんだ。今はしっかり休め。」

「さすがね!メロンの君!惚れ直したわ〜!」

「おい、オッサン!今は本部に行くのが先だろ!」

と風蓮が貴虎にからみ、紘太さんがそれを止める。

「まあ、それだけ騒げるなら大丈夫か・・・ん?十馬、どうかしたか?」
「・・・いや。何でも無い・・・」

「?そうか。なら行こう。一応、一番の重傷をおったのは君だからな。」

「・・・ああ。」

と俺はそれに答え・・・無言で拳を握りしめた。

—————

その後、俺は医師の診察をはじめ、CTスキャンなども使って体を調べたがどこも異常はなかった。

「どうなってんだ・・・あの時、俺は間違いなく傷をおった・・・それにあの植物も体に入り込んでいたはずだ。なのに何で?」

と廊下の椅子に座りながら呟く。

「それに・・・」

と奴、アメミトの圧倒的な強さと奴が言い残した言葉が甦る。

「俺はベルトをまだ完全に使いこなしていない・・・もっと・・・強くならなきゃ・・・じゃなきゃ、”あいつ”を・・・クソッ!」

と憤りと怒りを込めて壁を殴りつけた。

—————

そのころ、本部の司令室では・・・

「十馬のDNA検査の結果はどうなった?」

と貴虎が葵に尋ねる。

「99%、人間のものだよ。ニヴル Heim 植物も、検出されなかったし。」

と葵が言う。

「99%?残りの1%は?」

「いや、1%くらいなら誤差の範囲内だ。少なくとも彼が実はオーバロードでドライバーと錠前を盗み奴、ダハーカに渡したということとはありえないよ。」

と葵が貴虎に言う。

「!・・・すまない。別に彼が信用ならない訳ではないのだが・・・」

と貴虎が少し、気まずそうに言う。

「いいよ。君はこのチームのリーダーだ。あらゆる可能性を考えなければならぬからね。仕方ないさ。」

と葵が少し慰めるように貴虎に言う。

「ああ。だが、だとすれば一体何故・・・？」

と貴虎は再び尋ねる。

「これはあくまで仮説だけど・・・彼の体内にはニヴルヘイムの毒素に対する抗体のようなものがあるのかもしれない。それが先天的なものか、あるいは誰かに与えられたのかは分からないけど。」

と葵が言う。

「ロックシードの力を引き出す適性能力にニヴルヘイムの抗体・・・彼は一体何者なんだ？」

と貴虎が言う。

「分からないけど、彼の過去については調べておいたほうがいいかもね。」

と貴虎に葵が提案する。

「ああ。少し、彼とも話してみることにする。」

そう言って貴虎は司令室を後にした。

「まったく。君は馬鹿がつくほどまじめだなあ。まあ、そんな上司に付いていつてる僕も僕か・・・」

と貴虎の去った司令室で葵が呟いた。

—————

一方、司令室を去った貴虎は医務室に向かっていた。

すると、医務室の前の椅子に座る十馬を見つける。

「十馬。大丈夫か？」

と貴虎が尋ねる。

「・・・ああ。」

と十馬が弱々しく返事をする。

「何か、あったか？」

と少し十馬を気遣いながら貴虎が聞く。

「・・・なあ、貴虎。」

とうなだれながら十馬が言う。

「何だ？」

と貴虎が答える。

「あんだ・・・何でそんなに強いんだ？」

と十馬が聞いてくる。

「私は強くなど無い。」

と貴虎が言う。

「でも、あんたはアメリトと互角にやりあえたじゃないか。」

と十馬が言う。

そんな十馬に貴虎は続ける。

「確かに直接的な強さは必要だ。だが、それ以上に必要なものもある。

私はそれを葛葉から教わった。」

と教え諭すように貴虎が言う。

「・・・それって？」

と十馬が聞く。

貴虎はそれに真剣な表情で答える。

「決して諦めない心だ。私はヘルヘイムの侵略の際、何度も葛葉を倒しユグドラシルに楯突くのは無謀だと知らしめた。私はヘルヘイムの脅威から全ての人を守るのには不可能だと諦めていた。たとえ人類の七分の六を見捨てるとしても、それしか方法は無いと無理矢理自分に言い聞かせてきた。・・・だが、葛葉は違った。あいつは決して諦めず、何度倒されても自分の信念を貫いた。たとえ・・・自分自身を犠牲にしても今ある世界を救うという信念を。」

と貴虎がかつての自分に言うように続ける。

「・・・」

十馬は黙ってそれを聞く。

「だからお前も諦めるな。何度でも奴に挑んで、勝つまで諦めるな。その思いこそ、強さの理由になる。」

と十馬に言い聞かせる。

「決して・・・諦めない・・・そうだ。俺は、こんな所で止まってる場

合じゃない！」

と十馬が立ち上がる。

その目に決意を宿らせて。

「ありがとう。貴虎。・・・それと俺、二、三日留守にするわ。じゃ、そういうことだから。悪いけどその間は頼む。」

と十馬が歩き出す。

「わかった。こっちは任せろ。」

と貴虎はその背を静かに見送った。

「結局、抗体については聞きそびれたか・・・」

「まあ、いい。あいつの過去については葵にでも調べてもらおう。」
と貴虎は一人きりの廊下で呟いた。

—————

それから三日の間、十馬は姿を見せなかった。

そして、

「今日で三日か。彼がいなくなってから。」

と葵がため息をつく。

あれから三日の間、クラックの出現頻度は変わる事はなかった。

だが幸いなことに奴、アメミトが現れることはなかった。

「まあ、奴が現ればベルトの反応がでるからすぐ見つけられるけどね。」

と葵が言う。

「だが、仮に見つけたとしても現時点で奴を倒せる者はいない。私でも攻撃を当てるのが精一杯だった。」

と貴虎が言う。

「ああ、それについてだけど奴を倒す策を考えてみた。」

と葵が少し得意げに言う。

「何だ？その策とは？」

「それを言う前に一つ、これは十馬君でなければできない。そして今の彼では力不足だ。」

と葵が告げる。

「どういう事だ?」

と問う貴虎に葵が続ける。

「君は覚えているかい? 十馬君が奴に必殺技を放った時の事を。」

「ああ、結果としてはあらかじめ張っていた結界ごと弾き飛ばされたのだったか。」

とその時を思い出して貴虎が言う。

「うん。この事から奴には最高クラスのエナジーロックシードのパワーも効かないと分かる。」

と葵が言う。

「なら、どうするんだ?」

と貴虎が尋ねる。

「答えは簡単さ。ロックシードのエネルギーを直接、奴の装甲の一番弱い場所に叩き込むんだ。十馬君の斬撃に耐えたということは奴は何重にもなった装甲を持っていると思われる。まさにワニの鱗さ。最初の鱗が切り裂かれてもその下にある何枚もの鱗が攻撃を無効化する。なら、その鱗が薄い位置をデュークの解析能力で見つけ出し、そこにエネルギーを集中させるって訳。」

と葵が説明する。

「なら、十馬が力不足だというのは?」

と貴虎がさらに尋ねる。

「この方法を行うには奴に接近戦でひけをとらない力が必要だ。だが、彼にはそういった駆け引きの経験が圧倒的に足りない。だから力不足だということだ。」

と葵が説明を終える。

「そうか・・・」

と貴虎が言う。

「ああ、それと管理していたロックシードが五、六個無くなってたんだけど君が持ち出したのかい?」

と今度は逆に葵が貴虎に尋ねる

「いや。私では無いな。・・・まさかアメミトが!」

と貴虎が慌てたように言う。

「いや、それは無い。奴は自力でクラックを開けられるからね。」
とそれに冷静に葵が答える。

「となると・・・一体誰が？」

と貴虎がいぶかしむ。

「さあ？それより彼が帰ってきたら君が鍛えるなりしてあげなよ？」

と葵が言う。

「ああ。分かった。」

と葵に返事を返す。

そのとき

部屋にブザーが鳴り響き、ディスプレイに座標と反応が表示される。

「これは奴の反応か!？」

と貴虎が葵に聞く。

「ああ、そうだ。場所は・・・西D区の倉庫内！」

と葵が座標を伝える。

「っ！確かそこはドラゴンロンドの本拠地だったはずだ！」

と貴虎が戦慄して言う。

「急いでくれ！彼らに被害が及ぶ！」

と葵が指示する。

それに従い貴虎は急いで倉庫に向かった。

—————

その数分前、倉庫では・・・

ドラゴンロンドの面々が皆、一様に暗い表情をしていた。

「十馬・・・どこに行っちゃったんでしょう・・・」

と銀髪の少女、イリスが呟く。

「もう四日も学校にも来てないですからね・・・」

と隣に座る少年、竜希が返す。

「何か、あったのかねえ・・・」

といつも明るいジョーも暗い様子で言う。

「もうこのまま会えないんじゃないや……」
とリンが言う。

「……！そんな事ありません！十馬は絶対に帰ってきます！」
とイリスが泣きそうになりながら言う。

「そ、そうだね……」

「まあ、リーダーのことだし大丈夫だとは思うけど……」
と皆、どこか不安そうに言う。

「十馬……」

とイリスが呟く。

とはいえ皆がここまで十馬を心配するのは、単にチームのリーダーだからという理由だけでない。

このチームのメンバーは皆、一度は十馬に助けられた人間なのだ。イリスもかつて、いじめに合っていたとき十馬に助けられたのだった。

—————

あのとき、自分は転校してきたばかりで右も左も分からなかった。自分の容姿を妬んだ女子がいやがらせをしてきた事もあった。

そんなある日、通りかかった男子上級生に校舎裏に連れて行かれた。

そして、自分に迫ってきた。

イリスは嫌だと言ったが男子生徒たちは無理矢理しようとしてきた。

そのとき、一人の少年の声が聞こえた。

「何やってんすか？先輩方。」

「転校生に無理矢理してそんな楽しいっすか？なら、俺と遊びましょうよ！」

そう言うなりイリスを抑えていた男子生徒の顔面に拳を叩き込んだ。

それからわずか十分足らず。

五人はいた上級生を彼は一人で倒してしまった。

そして

「大丈夫か？班目さん。」

「あ、あの・・・ありがとう、ございました。何で私の名前を？」

「あ、やっぱ覚えられてない？一応君のクラスメートだけど。」

「・・・あ。」

そうだ、思い出した。最初の日、挨拶を皆にした時に優しい目で拍手をしてくれた人だ。

「あ、あの・・・その、ごめんなさい。私のせいで・・・。」

「何で謝るのさ。だって女の子が襲われてたら助けるっしょ。フツー。」

「で、でも上級生相手に・・・。」

「どうせ、相手も学校には言えないでしょ。・・・ああ、そうだコレ。」
と彼がヘアピンを差し出してくる。

「・・・！こ、これ！」

「落ちてたぜ。君のだろ？」

それは日本に行く際、母がくれた大切なものだった。

「ありがとうございます・・・何から何まで。・・・あの、お礼に何かできることありますか？」

「ん？そうだな、じゃあ・・・俺の友達になってくれるか？友達、あんましいなくてさ。」

と彼が手を差し出してくる。

「俺、龍崎十馬。十馬って呼んでくれていいぜ。」

「はい。私のこともイリスって呼んでくれますか・・・？」

「ああ。よろしく、イリス。」

「こちらこそです・・・十馬。」

こうしてイリスは十馬と、自分のヒーローと出会った。

—————

それからイリスは十馬を特別な存在だと意識するようになった。

十馬の気持ちがどうかは別として。

だからあの時も彼に寄り添っていたくて無理を承知で自分も連れ

て行ってくれと頼んだのだ。

「十馬・・・早く帰ってきてください・・・。」

と膝を抱えて呟いた。

そのとき

倉庫の真ん中に突如、次元の裂け目のようなものが出現し、中から
アーマードライダーが出てきた。

「さて・・・今回の獲物は何だあ？」

と中から出て来た謎のライダーが言う。

「な！なんだよお前！」

とジョーが腰を抜かす。

「ああ？うるせえよ！黙りな！」

とライダーが衝撃波を放ち、皆が吹き飛ばされる。

「きやあ！」

「うわあ!？」

「くっ!？」

と皆が壁に叩き付けられ悲鳴をあげる。

「さて・・・」

とアメミトが首を鳴らしながらイリスに近づいてくる。

「あ、ああ・・・」

恐怖でうまく言葉が出せない。

でも、前にもこんな事があった。

あのときは・・・どうしたんだっけ？

たしか、怪物に連れて行かれそうになって・・・

その後は・・・

「俺の仲間・・・手を出すなあ！」

と倉庫の壁を突き破り、一台のバイクが奴に突進する。

「なに！グア！」

と不意をつかれたのか奴が弾き飛ばされる。

そしてバイクに乗っていた少年がメットをとる。

「皆！大丈夫か？」

イリスのヒーロー、十馬の帰還だった。

「十馬!」

「十馬さん!」

「リーダー!」

「十馬!?何してたのさ?」

と皆、思い思いに十馬を呼ぶ。

「ああ。皆わりい。遅くなった。俺が変身したらすぐ逃げろ。守りながら勝てる相手じゃねえ……。」

と珍しく十馬が弱気な口ぶりで言う。

「わかりました……十馬!無茶だけはしないでください!」

「よお……こないだはどうもな。」

と十馬がアメミトと対峙する。

「お前じゃつまらん。あの白い奴はどこだ?」

とアメミトが言う。

「お前に教えてやるよ……人は絶えず進化するもんだってな!」

と叫びベルトを装着する。

「いいぜ……前菜くらいにやなるだろ。」

とあくまでアメミトは余裕を崩さない。

「なめんなよ……行くぜ!」

「変身!」

『レモンエナジー!』

『ROCK ON!』

『レモンエナジーアームズ!ファイトパワー!ファイトパワー!ファイファイファイファイファイファイファイファイファイ!』

と俺はアーマードライダーデュークⅡになり、奴に向かっていく。

「おりゃあ!」

「フン!」

とすぐに打ち合いになるが俺の劣勢は変わらない。

「どうした!さっきの自信はあ!」

「ぐああ!」

と吹き飛ばされる。

そのとき

「十馬！」

と貴虎が駆け込んでくる。

「十馬。いいなよく聞け。奴の装甲の薄い所をお前のベルトの力で探せ！」

そしてそこにエネルギーを集中させるんだ！」

と貴虎が奴の攻略法を教えてくれる。

「ああ！わかった。それと貴虎！お前のロックシードを貸してくれ！考えがある！」

と貴虎に頼む。

「考え？・・・分かった。お前に任せる。」

とメロンエナジーロックシードを十馬に渡す。

「行くぜ！・・・まずは解析！」

と言うと額のゲネティックシグナルが光り、奴の全身をスキャンする。

すると、以前斬月に斬られた脇腹の装甲が薄いことが分かる。

「そこか・・・よし！いくぜ！」

『レモンエナジースカッシュ！』

とソニックアローの刀身にエネルギーを集中させる。

「あとは正確に攻撃するだけだが・・・」

と貴虎がどこか不安そうに言う。

「ハッ！その程度のエネルギーで俺に勝てると思ったか!？」

とアメリトが嘲る。

「いいや、思っちゃいないさ・・・だからコレを借りたんだ！」

そう言ってさきほど貴虎から譲り受けたメロンエナジーロックシードをソニックアローに装填する。

『ROCK ON！』

「・・・よせ、十馬！エナジーロックシードを二つ使ったの必殺技は危険だ！お前の体が耐えられない！」

と貴虎が戦慄して言う。

「やってみなきゃ・・・分からないぜ！」

と俺は二つのロックシードのエネルギーをソニックアローに集中

させる。

「・・・ククク。ツハハハ！お前もなかなかやるじゃないか！なら礼儀をつくさねえとなあ！」

『ヨモツヘグリオーレ！』

と奴も持っていた武器、アメミトバイトにエネルギーを集中させる。

「いくぜ！」

「かかってこいよ！」

とお互い相手に向けて走り出す。

そして二人の姿が交差し、エネルギーが爆発した！

「うわあああ!？」

「くっ！これほどとは！」

「きやつ！」

と爆発の余波が皆にも降り掛かる。

そしてエネルギーが収まり・・・二つの人影が見えるようになる。

「クッ！ツハハ・・・やっぱりお前は詰めが甘いな・・・」

と脇腹をおさえるアメミト。

そして

「くっ！くあ・・・」

と変身解除し、膝から崩れ落ちる十馬。

「・・・！十馬！」

「どうま・・・？っ十馬！」

とイリスと貴虎が駆け寄ろうとするが、思いとどまる。

無理にエネルギーを集めた俺はダメージが大きく立ち上がる事すらできないでいた。

そんな俺にアメミトが語りかける。

「お前・・・この数日の間に何があった。」

「何・・・？」

「お前はまだまだ弱い。・・・だがこの間より格段に動きが良くなった。俺に相打ちとはいえ一撃当てたのがその何よりの証拠だ。」

「・・・別に、特別な事は・・・しちやあいねえさ・・・お前に勝つには・・・経験が足りない・・・だから無理矢理補おうとただけさ・・・。」
そう、俺はこの三日の間、足りない実践経験を補おうとしていたのだ。

「ロックシードでインベスを召喚して片っ端から倒す・・・それしか思いつかなかったんでな・・・。」

「そうか！葵が言っていたロックシードはお前が・・・！」
と貴虎が言う。

「それでも、俺にはまだ及ばないか・・・。」
とアメミトが言う。

「くそっ・・・。」

いつ、とどめを刺されてもおかしくない状況の中でも十馬は決意していた。

「まだ・・・あきらめねえぞ・・・。」

決して諦めない、貴虎から教わった言葉の通りに十馬は諦めるつもりは無かった。

「・・・ツククク・・・ハツハツハツ！それでいい・・・お前はまだまだ強くなりそうだあ・・・。」

と言ってアメミトがクラックを出現させる。

「今日は生かしといてやる・・・次に会うときはもっと強くなつてろ・・・。」

と言い残しアメミトがクラックへと消えていく。

アメミトが消え、クラックが閉じるのを確認してから貴虎は十馬に駆け寄った。

「十馬！大丈夫か!?しっかりしろ！」

「・・・ああ。わりいな貴虎・・・ロックシード返すぜ・・・。」

「今はそれどころじゃ無い！」

と十馬に肩を貸してやる。

「十馬！」

「リーダー！」

「十馬さん！」

とチームの面々も駆け寄ってくる。

「皆・・・わりいな・・・黙ってて・・・」

「このバカ十馬！今はそんな事いいのに・・・！」

とイリスが目を潤ませながら言う。

「本当ですよ！十馬さんは一人で抱え込み過ぎです！僕たちも少しは信用してください！」

と竜希も珍しく怒っている。

「ほんつと、バカなリーダーだよ・・・！」

とジョーは少し安堵した様子で言う。

「もう！心配したんだかね！」

とリンがプンプンと怒る。

「全くだよ、このバーカ！」

と淳吾は怒りながらもどこか安心した様子だ。

「本当に自分勝手な人ですわね・・・少しは私達の事も考えて行動しなさい！」

とレイナがキツク言う。

そんな皆に俺は思わず笑ってしまっていた。

自分の事をここまで心配してくれる皆が愛おしく思えたからだ。

そして言う。

「ああ、わりい・・・それより皆・・・」

「「何？」」

「・・・ありがとう、そしてただいま・・・」

と皆に笑顔を見せる。

「全く・・・おかえりなさい、十馬。」

とイリスが言う。

外からの夕焼けが俺たちの影をいつまでも優しく照らしていた。

—————

そのころ・・・ニヴルヘイムの樹海の奥にある遺跡のような場所に複数の影があった。

その中にはアメミト・・・ダハーカの人間態、冥也の姿もあった。

そんな冥也にその場にいた一人の男が話しかける。

「ダハーカ・・・どういうつもりですか？あの人間を生かすとは。分かっているでしょう？彼の持つ『因子』は私達の障害となる可能性がある。ならば早めに叩き潰すべきです。」

と知性を感じさせる口ぶりですその男が言う。

「うるせえよ・・・ファフニール。俺はお前の駒じゃねえ。協力者だ・・・立場を考えな。」

と冥也が言う。

「しかし、ですよ・・・」

となおもファフニールと呼ばれた男が咎めようとしたとき、

「好きなようにさせてやれ、ファフニール。俺たちは仲間だ・・・喧嘩はよそう。」

と一つの声が妨げる。

「申し訳ない。シュバリヤ、しかし彼はやはり危険です。」

とファフニールが声を発した張本人に向かって言う。

「そのときはオレが自ら奴を倒すさ・・・それまでは好きにしろ。ダハーカ。」

とシュバリヤ・・・正面の玉座に座る青年が冥也に言う。

「ああ・・・そうさせてもらうぜ・・・」

そう言うとき冥也はその場を立ち去った。

「いいんですか？」

とファフニールが言う。

「いいさ・・・それに、奴の力も手に入れられればオレはますます強くなれる。」

とシュバリヤと呼ばれる青年が答える。

「龍崎十馬・・・お前の力も奪ってやる・・・あの日のようにな・・・」

続く

第5話 繋がりと新たな決意

前回までのあらすじ

十馬達の前に現れたオーバードダハーカを名乗る少年、冥也。葵が保管していたはずのヨモツヘグリロックシードと戦極ドライブでアーマードライダーアメリトに変身した彼はその圧倒的な力で十馬達を打ちのめした。

その際、ニヴルヘイムの植物に体を侵食されそうになった十馬だが何故か持っていた抗体により事なきを得た。

だがアメリトとの力の差、己の経験の無さを実感した十馬は貴虎に教わった言葉を胸に修行を行う。

そしてそんな折、アメリトがドラゴンロンドの本拠地に現れイリス達を襲う。

アメリト出現を察知した十馬は仲間たちを助けるため貴虎から借り受けたメロンエナジーロックシードを使い、決死の覚悟でアメリトにパワーをぶつけるも再び敗れてしまう。

だがアメリトは十馬を見逃し、十馬は仲間達と再び和解することができた。

そして、貴虎から休息するように言われた十馬だったが・・・

ーーーーー

「あー！ー！暇だあー！」

とアパートの天井を眺めながら俺・・・十馬は叫んだ。

三日前、アメリトと死闘を繰り広げた俺は無理が祟って全身筋肉痛。

でも貴虎は「あれだけの力を使っておいてそれだけで済んだのは単にラッキーだったただけだ。」と言い、俺に数日間の休息命令を出したのだ。

しかも念には念を入れてベルトと錠前も没収。

俺に無茶させたくない気持ちちは分かるけど・・・

「暇そうにしてる場合じゃ無いんだけどな・・・」

そう、自分はまだまだ強くならなくてはいけない。

目的を果たすためにも……

「あーもう！とりあえず本部にいくか！変身して戦わなきゃいいんだから！」

と手っ取り早く着替えを済ませて本部に向かう。

—————

その途中、

「十馬！おはようございます！」

とクラスメートであり俺の仲間、イリスが声をかけてくる。

「よお、イリス。あれ？私服だけど学校は？」

「今日は開校記念日でお休みですよ。だから今から新しいバイト先に行くんです！」

「あ！そっか！……てかイリスさん、バイト先って食品を扱う所じゃないよな？大丈夫だよな？」

「ひどい!? どれだけ信用ないんですか!? って、あ！そうそう、十馬！……ん？」

「昨日十馬の家の郵便受けにカルボナーラを入れておいたんですが……もう食べました？」

「え？あのダークマターは人間の食べ物だったの？」

「だっダークマターって！そこまで言わなくてもいいじゃないですか！」

「いやだって変色してたし……お前、あれに何入れたんだ？」

「え？スイカとキクラゲとリンゴとマヨネーズとカレールーと醤油とウスターソースです！」

「カルボナーラの要素ゼロ!? どうやってたらそうなるんだ!? レシピ見たんだろ!？」

「はい！ググレパッドっていうサイトで！」

「ググレパッド？ちよつと待て、調べるから……っておい！このサイトの一番下の文章読んだか!? このサイトに載っているレシピは全て

デタラメで適当です本当のレシピが知りたいならググレカスって書いてあるぞ!」

「いいえ?だって普通そこまで読みませんもん!」

「いや、レシピを見て気づけえ!!」

としばらく話しながら(もしくは叫びながら)歩く。

「あ!そうです十馬!今日の午後、チームの皆でドルーパーズに集合!って淳吾君が言ってました。」

とイリスが言う。

「へえ。淳吾が。何かあるのか?」

「分かりませんがとにかく十馬に伝えてくれって言われたんです。」

「ふーん。そか、あんがと。じゃあ午後にドルーパーズでな。」

「はい。気をつけて。」

とイリスと別れる。

そして目的地である旧ユグドラシルタワーに着く。

「よし!まずは・・・」

とタワーの前にあるモニュメントのある部分に手を当てる。

するとモニュメントの後ろが開き、地下へ続く階段が現れる。

「確かにアメミトに侵入されたからってこんなに嚴重にしなくても・・・」

といくつも設置された監視カメラに向かって言う。

そして幾つものゲートを抜け、本部の司令室・・・ディスプレイのある部屋に着く。

「ん?十馬か。何か用か?・・・言っておくがベルトと錠前はまだ返さんぞ。」

とその場にいた貴虎が言う。

「いや。なんか暇でさ。」

「なら丁度いい。二つ、お前に話があつたんだ。」

「話?」

「ああ、まず一つ目だがこの間一緒に戦った三人を覚えているか?」

「ああ、ザックに凰蓮に眼鏡内だろ。」

「城乃内だ・・・その三人に話をしてきて欲しい。」

「話・・・？何を話すんだ？」

「我々の仲間として戦ってくれるかをだ。私としてはヘルヘイムの際に巻き込んでしまった彼らをまた巻き込みたくは無い・・・だがこれからの状況には彼らの力が必要なんだ。」

「だからあいつ等に会ってどうするか聞いてこい・・・と。」

「そうだ。そして二つ目はお前についてだ。」

「俺の事？」

「ああ、お前は適正能力だけでなくニヴルヘイムへの抗体も持っていた。・・・だがそれについては今は聞かない。」

「え？・・・何で？」

「お前を信じているからだ。同じ目的を持つ、同志として。」

「・・・そうか。わかりい、抗体のことについては俺もよく分かってないんだ。・・・でも、お前達に黙ってる事もある。・・・でも今は話せない。理由があるんだ。」

「そうか・・・それでもいい。その内話してくれたら嬉しいが。」

「それは置いておいて話とは、十馬、お前は強くなりたいか？」

「え？・・・ああ、もっと強くなりたい・・・大切なものを全て守れるように。」

「そうか・・・なら明日から早朝と夜に分けて特訓をするぞ。」

「え？貴虎が？俺に？」

「ああ、私がお前に戦闘技術のイロハを教えてやる。」

「まじで！やったサンキュー！助かるよ！」

「ああ、代わりに覚悟しろよ？私はそう甘くは無いぞ？」

「分かってるって。じゃ、さっそくあの三人に話をしてくるよ。」

「ああ。気をつけてな。」

そう言つて俺は本部を後にした。

—————

十馬が去った本部にて

「貴虎？どうかしたのか？」

と今入ってきた様子の紘太が言う。

「十馬と少し話をしていただけだ・・・それよりも葛葉。」

「何だ？」

「お前・・・晶さんやビートルライダーズの皆には会わないのか？」

「・・・」

「特に晶さんだ。彼女は気丈に振る舞ってはいるが、ときどき寂しうにしているぞ。」

「・・・姉ちゃんと会ったのか？」

「ああ、お前の決断は尊重しているが・・・それでも私には大人として、お前に全てを背負わせてしまった負い目がある・・・だからせめて、彼女には会ってやってはくれないか？」

「・・・悪い。俺が姉ちゃんや皆に会わないのは理由があるんだ。・・・やっぱりき、皆とまた会って色々話したり、過ごしたりすると戻りたくなっちゃう気がするんだ・・・自分で望んだ事なのに。」

「なるほどな・・・だが、私はそれでも会うべきだと思うぞ。」

「何で？」

「お前は彼女や皆にまだちゃんと別れを告げていないだろう。」

「・・・あ。」

「それに変わらないものなど有りはしない。いつかは皆、それぞれの道へ進んでいくだろう・・・だからこそ、限りある今を大事にしなければならぬんだ。」

「・・・そうか。ありがとな、貴虎。」

「フツ。ようやくお前に大人らしい事を言えた気がするよ・・・いや、お前ももう立派な大人か。」

「いや、まだまだアンタみたいな人に教わらなきゃいけないことが沢山あるよ。」

と二人で笑いあう。

「ちようど今日、ビートルライダーズのステージが午後にある。午前中に晶さんの所へ行って、午後は仲間達と過ごすといい。」

「ああ、サンキュー貴虎。んじゃ行ってくるぜ。」

と紘太が本部を後にする。

「全く……どいつもこいつも世話が焼けるな。」
と一人だけの司令室で貴虎は呟いた。

—————

その頃、十馬は風蓮たちと話をしにシャルモンに訪れていた。

「こんちわー。」

「いらっしやいませ……ってお前はこの間の!？」

と眼鏡をかけた青年、城乃内が言う。

「あ、めが……じゃなくて城乃内。」

「おい!今眼鏡って言おうとしただろ!?!しかも呼び捨てだし!」

と城乃内がたまらず叫ぶ。

「坊や!?声が大きいわよ!お客様もいるというのに……ってあなた!
この間のシトロンの坊やじゃない!何か私に用かしら?」

と店の奥から風蓮も出てくる。

「ああ、風蓮さんも。ちょうどいいや。二人に話があるんだけど。」

「話?」

「何かしら?」

その後、俺は貴虎に言われた事を二人に伝えた。

また巻き込んでしまった事を詫びる気持ちや改めて共に戦って欲しいことを。

「……って感じなんだけど。」

「全く。メロンの君も人がいいんだから。もちろん一緒に戦うわよ。
ね?坊や?」

「お、おう!当たり前だろ!俺だって……人を守ることくらいはできる!」

「アンタ等……ありがとう!先輩として何かあったらジャンジャン
言ってくれ。」

「それ普通、俺等が言うんじゃないの?」

としばし談笑する。

すると

ドンガラガツシャアン!

と店の奥の厨房からド派手な破壊音が聞こえた。

「な、何だ!? 敵襲!」

「ちよっ! またやったの貴方はああ! ちよつと待ってなさい!」

と凰蓮が厨房に向かう。

気になった俺も後に続く、すると

「・・・うきゆうう。」

と大量の割れた皿や鍋などに埋もれて妙な声をあげるイリスがいた。

「お前何やってんだああ! 食品に関連するバイトは禁止だったろ!」

「ええ・・・? でも皿洗いとかでしたし・・・」

「その結果割ってんなら意味ねえだろお!」

と絶叫する俺を置いてさっさと皿達の監獄から脱出するイリス。

「それよりごめんなさい! 店長さん!・・・また割っちゃいました・・・」

「全くよ! これは何回目!」

「回数13の割った皿の数、合計58枚です!」

「そこだけハキハキするなあ! アンタもうクビよクビ! クビ! クビク

ビ! クビクビクビクビクビクビイ!

「凰蓮さん落ち着いてください! 途中からクビがゲシユタルト崩壊しそうになつてますよ!」

と怒る凰蓮を城乃内が慌てて止める。

「ハアハア・・・とにかく! これ以上店の皿を割らせる訳にはいかない

わ! 今日でクビよ!」

「・・・はい。すいませんでした・・・」

とシヨボンとしながら店を出て行くイリス。

「あの・・・何かすみません・・・」

「あの子、あなたの知り合いなの?」

「まあ、仲間つつーかクラスメートつつーか。」

「そう。なら今回の件は水に流してあげるわ。」

「え?」

「だって、あなたは私達を一度助けているでしょう? 借りは返すわよ。」

「・・・ありがとう。鳳蓮さん。あんた、良い奴だな。そんじや、俺ももう行くよ。これからもよろしくな。」

「ええ。今度は友達皆でいらっしやい。」

「また来いよ。」

と俺はシャルモンを後にした。

――

そのころ

貴虎に姉、晶に会うよう言われた紘太は姉と住んでいたマンションを訪れていた。

「・・・何か緊張するな。」

と扉の前で呟く。

「・・・よし！とにかくインターホン押してみるか。」

とインターホンを押す。

が返事が無い。

「・・・あれ？いないのかな？仕方ない。貴虎にでも連絡先を聞いて・・・」

と携帯を取り出そうとした。

そのとき

「・・・紘太？」

「・・・！姉ちゃん!？」

と今帰ってきたらしい晶が声をかけてきた。

「紘太・・・本当に紘太なのよね!？」

「ああ、そうだよ姉ちゃん。」

「なんで帰ってきたの!？舞ちゃんも一緒なの!？呉島さんにはもう会ったの!？」

「ねねね姉ちゃん落ち着いて！ちゃんと全部話すから!」

と揺さぶってくる姉を止める。

「そうよね。色々あるだろうけど今は、紘太。」

「何？姉ちゃん。」

「・・・おかえり。」

「・・・ああ。ただいま、姉ちゃん。」

と少し涙ぐみながら姉弟の再会を分かち合う。

「立ち話もなんだし中に入りなさい。」

と晶が部屋に入るように言う。

「ただいま・・・って言うのもなんか違うか。」

「良いのよそれで。ここはあんたの家なんだから。」

と話していると

ーワンワンー！ー

と奥から声が聞こえたと同時に、茶色のフカフカした物体が絼太にぶつかってきた。

「うおっ！何だ!?・・・って子犬!?!」

「ワンワン！」

そう、絼太にぶつかってきたのは柴犬の子犬だったのだ。

「この犬どうしたんだよ!?このマンションってペット禁止じゃなかったっけ?」

「そうだけど大家さんや周りの住人の皆さんと相談して特別に許可してもらったの。ちなみに名前はジローよ。」

「ジローって・・・てゆうか何でまた犬なんか?」

と晶に問う。

「だって、姉泣かせの弟が別れも告げずに勝手にどっかに行っちゃうんだもの。寂しくもなるわよ。」

と少し目を伏せて晶が言う。

「・・・そっか。ごめんな姉ちゃん。俺、自分の事で精一杯で姉ちゃんのこと何も考えてなかった。」

「いいのよ。こうしてまた帰って来てくれたんだから。」

と謝る弟に姉が笑い返す。

「それより、今からお昼ご飯作るけど食べる?」

「え・・・でも、俺の体はもう・・・」

「一緒に食卓を囲むだけでいいの。また昔みたいに取り留めの無い話でもしてや。」

「・・・うん。わかった。じゃあ久々にごちそうになろうかな、姉ちゃ

んの手料理。」

「すぐできるから、ジローと遊んでてあげて。」

こうして三年ぶりに姉弟は同じ食卓を囲んだ。

「ごちそうさまでした。」

「つてもほとんど食べてないけど・・・」

「いいのよ。しょうがないじゃない。」

結局、幾つか食べてはみたものの味が分からずあまり食べる事ができなかつたのだ。

「ごめんな、姉ちゃん。せつかく作ってくれたのに・・・」

「あんたが気にしても仕方ないでしょ。それより午後はどうするの？私はまだ一回会社に戻るけど。」

「ああ、午後はビートルライダーズの皆の所に顔を出そうと思ってるんだ。」

「そう、なら気をつけてね。」

「うん。じゃあ行ってきます。ジローもまたな。」

「いつてらっしゃい。」

「クウーン。」

と紘太は家を出た。

「クウーン？」

とジローが晶を不思議そうに見つめてくる。

「全く、いつの間になくなっちゃって・・・色々あると思うけど頑張れ、紘太。」

と弟が出て行った扉に向かって晶は呟いた。

—————

そのころ

「よし！じゃあそろそろステージを見に行くか。」

と紘太は西のステージ・・・今日、ビートルライダーズのダンスが行われる場所に向かった。

「おお。こりやすげえな。」

到着すると既に大勢の人が詰めかけているのが分かる。

すると

「紘太！」

と本部にいたはずの舞が駆け寄ってくる。

「舞!?!怪我はもう大丈夫なのか?」

「うん!もう平気。それより凄い人だね!」

「ああ、そろそろ始まると思うけど・・・あ!皆が来たぞ!」

ステージに若者達が現れ、音楽と共に踊りだす。

「皆、やっぱり凄いな。」

「うん。前より上手になってるね。」

と、しばしステージに見惚れる。

音楽が終わり大盛況の中、彼らのステージは終わった。

すると

「紘太!舞!」

と自分たちに気がついたのかステージで踊っていたツートンカラーの服を着た青年、ザックが駆け寄ってくる。

「よう!ザック。皆も久しぶり!」

とステージの上の皆に笑いかける。

「紘太さん!」

「うっそ!?!マジで!?!」

「舞も!お帰り!」

とかつてのチーム鎧武のメンバー、ラット、チャッキー、リカが駆け寄ってくる。

「どうしたんですか!?!」

「ああ、まあ色々あってな。」

と皆と久しぶりに談笑する。

「皆、話もいいけどそろそろ移動しないか?」

とザックが呼びかける。

「え?移動って何処に?」

「今日はドルーパーズで他のチームと交流会をするんだよ!」

と紘太の質問にペコが答える。

「俺も行って良いのか?」

「俺も行って良いのか?」

「ああ、もちろんだ。久しぶりに坂東さんにも顔見せてやろうぜ。」
とザックが言う。

「よし！じゃあいくか！」
と皆でその場を後にした。

—————

そのころ、ドルーパーズでは……

「……はあ。」

とイリスがため息をついていた。

「おいおいイリス、そんなんじや折角の交流会を楽しめないぜ。」

と今回の交流会の立案者である淳吾が言う。

「そうだぞ。淳吾の言う通りだ。ほれ、俺のおごりだ、食って元気だせ。」

と店長の坂東清治郎がパフェを差し出す。

「ありがとうございます……モグモグ。」

とパフェを頬張る。

すると

「ごんちわー。」

と十馬がやって来る。

「……！十馬！さっきはごめんなさい！」

とイリスが十馬に頭を下げる。

「いいって。風蓮さんも許してくれたし。それより久しぶり、坂東さん。」

「おお！十馬。久しぶりだな。最近なんかあったか？」

と坂東さんが聞く。

「ま、それなりに色々ね。それより淳吾、何でまた皆で集合なんて？」

と淳吾に問う。

すると淳吾は笑みを浮かべて、

「ああ、それならそろそろ来るよ。」

と答える

「来るって何が？」

と話していると

「こんにちはー！」

と若者の声があると同時、大勢の若者がドルーパーズに入店してきた。

人数が人数だけにちよつとコミケみたいになっている。

「おおー来たなお前等……つて紘太!? お前どうしたんだよ、久しぶりだな。」

「ああ、久しぶり坂東さん。」

と若者達の中に何故かいた紘太さんが坂東さんと挨拶する。

「おおー十馬もいたのか。これがお前のチーム？」

「ああ。ドラゴン Rond っていうんだ。」

とチームの格メンバーを紹介する。

「そっか……ま、折角の交流会だし楽しもうぜ！」

と紘太さんが言う。

「交流会……? 淳吾、もしかしてお前が俺を呼んだのは……。」

と淳吾に問う。

すると淳吾は少し照れくさそうに視線をそらして

「そう、このためにリーダーを呼んだんだ。最近疲れてるみたいだしちよつとでもリラックスできればと思つて。」

と言つた。

「そっか、ありがとな淳吾。」

と淳吾の思いやりに感謝しつつ笑いかける。

「よし！今日は楽しむぞー！」

「「おー!!」」

それからしばらくして、俺は外にいたザツクに声をかけた。

「よう、ザツク。ちよつと話があるんだけど。」

「話? 何だ?」

と首をかしげるザツクに俺は貴虎から言われたことを伝える。

「そうか……やっぱりあの人マジメだな。」

「……で、どうなんだ?」

「……もちろん一緒に戦うよ。俺にも目標があるんでな。」
とザックが言う。

「目標？何だそれ？」
と俺が問う。

「俺には追いつくべき男が一人いる。そいつは誰より強くあろうとする不器用な男だった。そしてその生き様が故に命を散らす事となつたんだ。俺は今でもアイツの背中を追いかけてる。アイツの目指した高みに立ちたいんだ。」

と遠い目をしてザックが言う。

「……その人って？」

「……駆紋戒斗。俺の昔のチーム、バロンのリーダーだった男だ。」

「駆紋、戒斗……。」

と今聞いた名を反芻してみる。

その後ザックは駆紋戒斗について色々な事を教えてくれた。

そして最後にこう言った。

「お前はアイツに少し似てる所があるよ。自分の目的のために力を得ようとするその姿勢がな。」

と俺に姿を重ねながらザックが言う。

「……そっか。ありがとなザック。これからもよろしく。」

と俺は手を差し出す。

「ああ、こっちもよろしく頼むぜ。」

と堅い握手をかわす。

すると

「十馬く！ザックさんもこっちに来て皆でおしゃべりしましょうよ！」
とイリスの呼ぶ声が聞こえる。

「ああ、今行く。」

と俺たちは再び店内に戻った。

そして交流会は終わり、それぞれが家へ帰っていった。

……十馬を除いては。

—————

「ここか……。」

と呟く。

俺は今、街外れにある墓地に来ていた。

ザツクに別れ際に聞いた場所だ。

そしてある墓石の前で立ち止まる。

その墓石には『駆紋家』と刻まれていた。

「……あんたは強さを求めた。俺も同じだ。でも違いがあるとすれば……俺は自分じゃない誰かを救うために力を使う。たとえ自分がどうなろうと、世界がそれを否定してもだ。」

と言い、百合の花束を供える。
すると

「君もお墓参りに来たの?」

と後ろから声をかけられた。

「うおっ!びつくりしたあ。……あんたもこの墓に?」

「うん。君もなんだね。」

と後ろの人物が一步前に入る。

歳は20代はいつていると思うが少し幼い雰囲気のある青年だ。髪は茶髪で少し跳ね上がっている。

「じゃあ、俺はこれで。」

「うん。ごめんね、邪魔しちゃって。」

「いいって。じゃ、失礼するよ。」

と俺は墓地を去った。

その後、十馬が去った墓地にて

「少し、戒斗に似てたな。さっきの人。」

と青年、シャプールは呟いた。

「戒斗。僕今、お父様の子供と一緒に財団を運営してるんだ。君があのとき言ってくれた、戦う相手と戦ってね。」

と墓石に向かって続ける。

「君も、きつとそうして、死んじやっただね……お礼が直接言いたかったのに……!」

とシャプールの頬に涙が伝う。

それを拭い、続ける。

「でも、決めたんだ。戒斗の分まで生きてもつと世界のために働こうって！・・・だから見守ってて、僕も君の仲間も。」

そう言つてシャプールは墓地を後にした。

――

そのころ

墓地を後にした十馬は家に帰る道を歩いていた。」

「皆、それぞれ思いを抱えてそれでも戦うのか。・・・俺も負けてられないな！」

と歩きながら言う。

「俺はもつと強くなる！・・・皆を、”あいつ”を守るために！」
と決意する。

そんな彼の上には北極星が道しるべのように輝いていた。

――

そのころ・・・

貴虎はある場所に訪れていた。

どこかの書齋のようなその部屋で貴虎はある人物と相対していた。

「・・・そうか。適性能力とニヴルヘイムの抗体をもつ少年に人類に敵意を示すオーバードか。」

とデスクに座った初老の男性が言う。

「はい。かつてのアーマードライダーを集めてはいますが戦力不足というのが現在の状況でして・・・。」

と貴虎がその男性に言う。

「それについては追加戦力を用意してある。君は今まで通り、任務に励みたまえ。」

「はい。分かりました。・・・それでは失礼します。」

と貴虎はその部屋を後にした。

その後、貴虎の去った書齋にて

「戦力は〃アイツ〃を呼んであるから大丈夫だろうが・・・不確定因子はやはり龍崎十馬か。」

と初老の男が言う。

「まあいい。今はまだ雛でもいずれ羽ばたく巨鳥になるか。・・・さあ龍崎十馬。君はどんな可能性を見せる？」

と男、星崎慧は一人きりの部屋で呟いた。

続く

第6話 飛来！世界チャンプは反抗期!?

前回までのあらすじ

アメミトに再び敗北し、無理をした罰としてベルトとロックシードを取り上げられた十馬だったが貴虎の提案で戦闘訓練を受ける事になる。さらにザック、城乃内、凰蓮の三人に戦うかどうか聞いてくることを依頼された十馬はそれぞれの下に向かう。

一方の紘太は貴虎に促され二年ぶりに姉、晶と再会する。久々の姉弟水入らずの時間を過ごした後、紘太はかつてのチームの仲間達に会うためにビートライダーズのステージを舞と共に見る。その後、元チーム鎧武のメンバーであるラット、リカ、チャッキーと再会した紘太達はドルーパーズで開かれるチームの交流会にて十馬のチーム、ドラゴンランドと交流し親睦を深めた。

そしてザックからかつて紘太と神の座を争った男、駆紋戒斗のことを聞いた十馬は彼の眠る墓地に出向き、決意を新たにしていたのだった。

ーーーーー

ビートライダーズとの交流会の翌日、とある森の中で二人の人影が対峙していた。

片方はジャケットを脱いだYシャツ姿で片手に竹刀を持った貴虎。そしてもう片方はあちこちになぜか泥のついた服装をし、竹刀を携えた十馬である。

「いくぜー！」

と貴虎に向かって十馬が駆ける。

そして竹刀を横なぎに振る。

だが

「甘いな。」

と貴虎が横から迫る竹刀を上弾く。

「フッ！」

そしてがら空きになった胴に竹刀を打ち据える。

「ぐあっ！」

と十馬が堪らず膝をつく。

「そろそろ休憩するか？」

と十馬に貴虎が聞く。

「……いや、まだいける。……もう一度頼む。」

と明らかに痛みをこらえながらも十馬が言う。

「だがもうかれこれ2時間やりっぱなしだぞ。あまり無理をするな。」
と貴虎が諭す。

そう、貴虎の提案で始まったこの特訓だが朝の4時半から今まで休憩を一度もせずに十馬は貴虎と組み手をしてきたのだ。

……まあその度に貴虎にやられ、泥だらけになっているのだが。

「……いや、でも。」

と言い返そうとする十馬。

やはり一度も勝てないのが悔しいのだろう。

それを見かねた貴虎が

「お前が早く強くなりたいのは分かっている。だが単にがむしやらにやればいいというものではないぞ。第一その証拠にさきほどから攻撃がワンパターンになっている。これでは特訓にならない。」

と淡々と述べる。

「……そうだな。じゃあ最後にもう一度だけ頼む。それが終わったら今朝の分は終わりにしよう。」

と十馬が渋々といった様子で提案する。

「分かった。もう一度だけだぞ……。」

と貴虎が竹刀を構え直す。

「やっぱり強いな……。」

と俺、十馬は呟く。

いざ、こうして対峙してみると貴虎から発せられる闘気のようなものが肌で感じられる。

「けどそれにビビってるようじゃダメだよな。」

と集中して竹刀を構える。

貴虎の方を油断なく見ながら頭の中で戦略を組み立てる。

(今までの様子から見て貴虎は俺の攻撃を受け流して隙を作るといつ

た戦法をとることが多い。なら受け流す隙を与えなければいい！)

「よしーいくぞー！」

と貴虎に向かっっていく。

そしてまずは竹刀を上段に構え、走る。

当然それを見た貴虎はすぐさま攻撃に対応できるように竹刀を横に持つ。

(それが狙いだ！)

とそのまま竹刀同士をわざとぶつけ、反動を利用して構えを瞬時に変える。

そしてそのまま相手の胴を目掛けて竹刀を振る。

(これでどうだ！)

と俺が心の中で叫ぶ。
が

「フッー！」

と貴虎が気合いと共に横向きの竹刀を片方の手で弾き瞬時に縦に構え俺の竹刀を受け止める。

「何っ!？」

と俺が驚愕する。

「ハッー！」

そして竹刀を持たない方の手で俺の腹に拳を見舞う。

「ぐはっ!?!ゲホッゲホッ！」

と俺はたまらず腹部を押しさえうずくまる。

「全く、竹刀だけを使えと誰が言った。臨機応変な対応こそ相手の隙をつく重要なものだ。」

と貴虎が言ってくる。

「だからと言ってグーはねえだろグーは……。」

とうずくまったまま恨めしそうに貴虎を見上げる俺。

「甘えた事を言うな。もし相手がオーバーロードなら爪で引き裂かれていたかもしれんぞ。」

と平然と言う貴虎。

「……ふう。じゃ、今朝はここまでだな。」

とようやく回復した俺が言う。

「ああ、それとコレを返そう。」

と貴虎がベルトとロックシードを放ってくる。

「……よつとーサンキューー！じゃあまたなー！」

とそれ等を受け取った俺は急いでアパートに向かう。

十馬が去った森の中で貴虎は一人、物思いにふけていた。

「まだまだムラが多いな……が、素質は本物か……。」

と僅かに痛む左手を見る。

あの時、竹刀の向きを変えるためかなり強く手で叩いたのが失敗だったようだ。

その事が表すのはつまり、最後の一撃は貴虎も予想外だったということだ。

「だからこそ……今度は正しく導いてやらねばな。」

とかつての弟と十馬を重ねながら貴虎は呟いた。

—————

その後、アパートに戻って即座に着替えを済ませた俺は久方ぶりの通学路を歩く。

「はあ、しばらく行ってねえから何かかかったりいなあ。」

と愚痴りながら道を歩く。
すると

「十馬！おはようございます！」

と後ろからイリスがやってきて満面の笑みで十馬に挨拶をする。

「よお……お前は毎日、楽しそうで良いよなあ……。」

と既に疲れた様子で答える俺。

「え？そ、そうですか？えへへ、照れますよ。」

「いや、今のはビタイチ褒めてねえから。」

といつも通り（久しぶりだけ）に登校する俺達。

空は見事に晴れ渡り、何か良い事でもありそうな朝だった。

その後、久しぶりの学校で大量の宿題と補習を言い渡された十馬は

リアルに泣きそうになった。

「……」

そして放課後、チームの倉庫にまで宿題を持ち込んだ十馬はようやく全ての宿題を終わらせた。

「もう、文字は見たくねえ……」

と精魂尽き果てた様子で十馬が言う。

「大丈夫さ。いまさらどうあがいてもリーダーの成績は小揺るぎもしないよ。」

と淳吾が軽く、そのくせ容赦のない口調で言う。

「まあオールウェイズ赤点カイザーだもんね。」

とジョーも茶化して言う。

「うっせえ！竜希！お前は俺の味方だよな!?こないだの中間テスト何点だ!?!」

と自暴自棄で竜希に食って掛かる俺。

「……ごめんなさい。」

と気まずそうに視線をそらす竜希。

「竜希君は確か全教科でトップ10に入っていましたよね?」

とイリスがとどめの一言。

「なあ〜にい〜!?!」

と若干クールポコが混ざる俺。

「やっぱり頭良い人は良いんだね……」

「そうですね……」

とすでに諦観ムードのリンとレイナが呟く。

「リン！レイナ！お前等は分かってくれるかあ!」

「分かるよ〜!やっぱり神様は不公平だあ〜!」

「努力しても報われない……だから努力をやめるのですわ。」

と意気投合する三人を見て淳吾が

「これがドラゴンロンドのトリプル馬鹿、通称バカトライアングルさ……」

と誰かに説明するように言う。

「ああ！ちゅーかりーダー！今日ステージの日でしょ!?!」

とジョーが叫ぶ。

「忘れてたああああ!?皆急ぐぞ!」

と急いで荷物を持つ十馬。

そのまま皆も十馬の後を追う。

今日も今日とてドラゴンロンドは平常運転だった。

—————

そのころ、沢芽市にある沢芽国際空港に一人の青年が降り立っていた。

「全く、久々に連絡してきたと思ったら今すぐ帰ってこい」だもんなあ・・・まあ時間までまだあるし何か面白い事ないかな?」

と青年がスマホを操作し沢芽市の情報を調べていると、

「ん?ダンスチームの日替わりステージ?へえ、面白そうじゃん。」

とサイトの地図が示す場所に行くべくタクシーを停めた。

—————

そのころ、西のフリーステージではドラゴンロンドによるステージが行われていた。

音楽にあわせ時には全体で、時には個人技で観客を魅了する。

そして音楽が終わり「皆さん今日はありがとうございます!」と

最後に十馬が挨拶をしていつものように幕を閉じるはずだった。

だがその時、

はい注目、と言う声と共にピピー!と笛の音が鳴る。

「ん?何だ?」

と十馬がいぶかしんでいると笛を吹いたとおぼしき人物が人々をよけてステージに上がってきた。

「うんうん!とつてもグレイトなステージだね!」

それは先ほど空港にいた青年だった。

ダンスステージに興味を持ち、ここまでやってきたのだ。

「あ、ありがとう・・・っていうかアンタは?」

と辟易しながら十馬が問う。

そんな十馬の反応に青年はわざわざ注目を集めるかのようにステージの真ん中に立つと

「ん〜。まあいいじゃん。・・・それよりさ、僕と勝負しないかい？」
突然提案してきた。

「は？・・・しよ、勝負？一体何の？」

と十馬がとまどいながら聞く。

「決まってるだろ、ダンスでさ。一対一で、より観衆を沸かせた方が勝ちってことで。」

と十馬の問いにルール説明もふまえて青年が答える。

「あー、悪いけど次のチームもそろそろ来るしそういうのはちよつと・・・。」

と断ろうとする十馬。

が

「リーダー。ちよつと待って。」

と珍しく淳吾が止める。

「何だよ、淳吾？」

と普段はチームのまとめ役でルールもキツチリ守る淳吾の行動に俺は驚いていた。

「この勝負、俺にやらせてくれ。・・・あの人、何か引つかかるんだ。」
といつになく真剣に淳吾が言う。

その眼差しを見て、

「・・・分かった。ただし、やるからには勝てよ？」

「ああ、サンキューリーダー。」

と十馬が承諾し淳吾が一步前が出る。

「おおーいいね、やる気だね!!よくしそれじゃあスタート!!」

と青年の合図と共に音楽が流れ出し勝負が始まる。

「いくぞー」

と淳吾が踊り出す。

本気でプロを目指しているだけあって時に躍動感に満ちた大技を、時に繊細なステップを繰り出し観客を魅了する。

そして音楽が変わり青年の番になる。

「わおーやるね！僕も本気でいくぞ〜！」
と青年が踊りだす。

それを見て俺達は哑然とした。
青年のダンスがあまりにも、人を惹き付ける魅力に満ちたものだったからだ。

けっして人間離れた大技があるわけではない。

それでも青年の一挙一動から一つの思いが伝わってくるのだ。

・・・踊るのが、楽しいと。

気づけば自然に手拍子をしていた。

他のメンバーや群衆も一緒だ。

勝負をしている淳吾でさえ、青年の踊りに見入っているようだった。
た。

そして曲が終わり青年がパフォーマンスを終える。

「つとー！こんなんでどうよ〜？」

とキザったらしく言う。

結果は誰の目にも明らかだった。

すると淳吾が青年に歩み寄り

「今ので確信した。あなたは世界的プロダンサーの星崎昴さんですね。顔を見たとき気づくべきでした。」

と言った。

「二・・・え？ええ!？」

と皆の驚愕の叫びがこだました。

「星崎ってあの子!？」

「今やその道で知らぬものはいないと言われるあの星崎昴さん!？」

「世界ツアーを毎年やっているあの!？」

と皆で言う。

「そのとーり！ってそんなに驚く事かなあ？」

と青年・・・昴があっけらかんと言う。

「どうりでダンスがうまい訳だ。」

と淳吾が苦笑する。

「でも君の腕前もたいした物だよ。相手が僕じゃなきや勝ててたぜ。」

「いや、そんなことは無いですよ。」

と早くも打ち解けた様子の二人。

「へえ！プロのダンサーか。そうだ！メルアドとか教えてくれませんか!？」

と俺。

「ああ、いいよ別に。じゃケータイ出して。赤外線使える？」

と瞬く間に俺だけでなくメンバー全員の携帯にメルアド登録する世界的プロダンサー。

「君たち、見所あるしね。これからもよろしく♪」

と朗らかに笑う昴。

とその時、

十馬の携帯からブザーが鳴ったと思いきやどこからともなくインベス達が現れ、人々を襲いはじめた！

「っ！こんな時にインベスカよ！皆、お客さん達を誘導しろ！道は俺が作る！」

そう指示すると同時、ベルトを巻きロックシードを解錠する。

「変身！」

『レモンエナジーアームズ！』

と次の瞬間、俺はアーマードライダー、デュークⅡとなりインベスの群れに飛び込んだ！

「まずは皆を避難させないとな！」

とロックシードをベルトから携えた武器、ソニックアローに装填し弓を引く。

『ROCK ON！』

『レモンエナジー！』

とソニックアローから放たれた光の奔流がインベスの群れの一角を消滅させる。

「皆！こっちだ！」

「急いで！荷物とかはいいいから！」

とチームの皆が誘導しにかかる。

(よし、あつちは大丈夫そうだな。)

と再びインベスに向き合う俺。

(せめてもう一人アーマードライダーがいれば……って泣き言は言つてらんないか。)

とソニックアローを振るい次々にインベスを倒していく。見る者が見れば気づいただろう。

十馬がインベスの急所に攻撃し、ほぼ一撃で倒していることに。確かにデュークに搭載されたスキャン機能なら弱点を探る事も可能だ。

だが、今十馬はその機能を使っていない。だが分かるのだ。相手が無意識に庇っている箇所が、手に取るように。

相手の動きを注意深く観察する能力、それは貴虎との特訓で十馬が会得したものの一つだった。

「一気に決めるぜー！」

とベルトのレバーを一回押し込む。

『レモンエナジースカッシュュ！』

とソニックアローの刀身にエネルギーを込め、周りのインベスに向かって放つ。

「そりゃあー！」

とインベスの群れが爆散し、俺は変身を解除する。

「いっちょあがりってな。……にしてもやっぱりダメか。」

とあたりを見ながら、複雑な表情をした後、少し焦燥に駆られるように呟く。

そんな十馬を物陰で観察する者がいた。昂だ。

「何だよアレ……もしかして父さんが言ってたのって……。」

と呟くと同時、携帯から着信を知らせる軽快なメロディーが響く。

「っ!?誰だっ!」

と十馬がこちらに気づいたようだ。

「ゴメンゴメン、覗き見するつもりは無かったんだけど……。」

と仕方なく柱の影から姿を見せる。

「星崎さん?びっくりしたあ、何で逃げないんすか!?危ないでしょ!」

「・・・ゴメンゴメン。」

と反省していない様子の昴。

「つと、電話だ・・・もしもし・・・え？へえ!?・・・分かった。じゃあ後で。」

と誰かと話した後こちらを見てくる。

「な、何か？」

「ちよつと君に案内してもらいたいんだ。『ヨルムンガルド』の本部まで。」

と真剣な眼差しで言う。

「な、何でヨルムンガルドのことを・・・今の電話、一体誰からだ!?・・・あんだ、何者なんだ？」

と警戒しながら言う。

「僕は星崎昴。しがないダンサーさ。・・・あと一つ聞きたいんだけど、ヨルムンガルドって何？」

「・・・は？」

「いやだからさ。ヨルムンガルドって何よ。蛇？」

と本当に知らない様子で昴が聞いてくる。

「えくと・・・。」

と話そうかどうか迷う。
すると

「十馬！無事だったか？」

と貴虎がようやくやってくる。

「いつも思うけどアンタ遅すぎ。・・・つとそれより貴虎、この人・・・星崎昴さんのこと、何か知らない？」

と貴虎に聞く。

「ん？・・・ああ、話には聞いていたが君が・・・よし、なら移動するぞ。お前も来い、十馬。」

「え？ちよ、移動つてどこへ!?つか何で俺も!？」

「ついてくれば分かる。君もそれでいいな？」

と昴に貴虎が聞く。

「ああ、僕はいいけど・・・。」

と戸惑いつつも返事をする昴。

「よし、なら行くぞ。あまり待たせるのも忍びないしな。」

と歩き始める貴虎の後を俺達が追う。

「……………」

そして貴虎に連れられるまま向かった先は巨大なビルの立ち並ぶビジネス街のような場所だった。

「おおーなんだこれデツケエ！つか首イテえ！」

と俺が目の中の超高層ビルを見上げながら言う。

「これはキサナドエンタープライスの本社ビルだ。そしてその隣のビルが目当ての場所だ。」

と貴虎が隣のビルを指して言う。

「キサナドって確か桃源郷って意味だっけ？でユグドラシルやスマー
トブレインなんかと並んで称される日本有数の大企業だよな。やつ
ば金かけてる感じあるなあ。」

と感心する俺。

「ほら、いつまでも観光気分はやめろ。行くぞ。」

と貴虎が隣のビルへと入っていく。

だがその前にさきほどから黙っている昴に

「なあ、さつきから口数少ないけど大丈夫か？気分悪いとか？」

と少し心配しながら聞く。

「……………いや、大丈夫さ……………多分ね。」

と昴が目を合わせないまま少し投げやりに言う。

「……………そっか、じゃ行くこうぜ。貴虎にどやされる前にな。」

「ああ、行くこうか……………」

と再び貴虎の後を追う。

そしてビルに入り、エレベーターの隠されていたボタン（全ての階のボタンを押してパスワードを入力することでようやく出てきた）を押し、そのさきの幾つものゲートを抜けてある部屋の前についた。

「博士、呉島貴虎です。龍崎十馬と星崎昴君を連れてきました。」

とドアをノックして貴虎が言う。

すると入りたまえ、と言う声と共にドアが開く。

「ようこそ、貴虎様。博士はあちらに。」

と内側からドアを開けたらしい青年が貴虎に言う。

そして青年が指した方には書齋のような空間が広がっていた。

年期の入ったデスクにその上に置かれた専門書の類い、そしてそれらの向こうには椅子に腰掛けた初老の男性が座っていた。

「やあ、待っていたよ。呉島君に昴、そして龍崎十馬君。」

とその男性が椅子を回してこちらに顔を向ける。

「私は星崎慧。『ヨルムンガルド』の創設者だ。……ついでに昴の父親さ。」

と男性、星崎が笑う。

「君に会えて嬉しいよ。さて、少し話をしよう。……この戦いの始まりの話をね。」

—————

そのころ、ニヴルヘイムの樹海の遺跡に二つの人影があった。

「ダハーカはしばらくは向こうの世界を攻めるつもりはないようです。いかがなさいますか、シュバリヤ様。」

と人影の一つ、凜とした印象の女性が王座に腰掛ける青年、シュバリヤに問いかける。

「あいつはそういう奴だ。しばらくは好きにさせておけ……お前は何か考えはないのかワイバーン。」

とシュバリヤが逆に女性、ワイバーンに問う。

「……そうですね、ファフニールは『例のキカイ』に付きつきりですしオロチは行方知らず。コアトルはまだ戦わせるのは早いかと、あとはゲオルとギウスの二人ですね。ただゲオルにやる気を出させるのはそう容易では……。」

とワイバーンが丁寧に答えていく。

すると

「おいおい、俺様を忘れちゃいないか？ワイバーンよ！」

と声が響くと同時、大柄な体躯の男性が姿を見せる。

「ダメですテーバイ。貴方は殺し過ぎます。今はまだその段階ではありません。」

とワイバーンが反論するが

「・・・いいだろう。そのかわり、龍崎十馬と戦ってこい。」

とシュバリヤが言う。

「ハハッ！いいのかシュバリヤ？俺に任せたら殺しちまうかもしれないぜ？」

と男性、テーバイが聞き

「・・・それで死ぬようなら奴もそれまでという事だ。」

とシュバリヤが答える。

「わかった、久しぶりに暴れてくらあ！楽しみだぜ・・・。」

とテーバイは残忍な笑みを浮かべた・・・

続く

第7話 昇来！新ライダーは超新星！

前回までのあらすじ

貴虎と特訓を始めた十馬だったが、貴虎との実力の差を改めて認識することになった。

そして久々にチームの皆で行ったステージにおいて世界的プロダンサー、星崎昂と出会う。

だが、突如出現したインベスの群れを一掃した十馬に昂はヨルムンガルドについて聞かれる。

そして、その場に到着した貴虎と三人で大きなビジネス街にあるビルに向かいそこで昂の父、星崎慧と会う。

とまどう十馬に星崎は言う。

「さて、少し話をしよう・・・この戦いの始まりの話をね。」

—————

「始まり・・・？一体何を・・・ってかアンタ、ヨルムンガルドの創設者って言ったか!?つか、昂さんの父親!？」

「始まりとは、君も聞いているであろうヘルヘイム事象とそれにおける対応についてだ。」

と驚く俺・・・十馬を尻目に目の前の初老の男性・・・星崎が続ける。

「おっと、その前に改めて自己紹介をしよう。私は星崎慧、物理学者で平行世界の研究をしている。そしてそこにいる青年が私の秘書を勤めている鷹村宗光君だ。」

「はじめまして龍崎十馬くん、昂さん。私は鷹村宗光と言います。よろしくどうぞ。」

と入り口の近くで待機していた青年・・・宗光が挨拶する。

そして話を戻そう、と星崎が言い

「ヘルヘイムの森・・・それはこの世界とは違う次元の世界からの侵略、というより侵食だった。パラレルワールドという言葉聞いた事が

あるだろうか？ヘルヘイム事象は本来なら重ならない世界同士が重なった結果だったという訳だ。」

と説明する。

「パラレルワールド・・・平行世界からの侵食だったのか。」

と改めて納得する俺。

「ああ、そしてその折に呉島天樹氏がバックアップを受け調査を開始、その後戦極凌馬にロックシードや戦極ドライバーを作らせ、それを利用した人類削減計画、プロジェクトアークを進めたんだ。とはいえ戦極ドライバーによる計画に至るまでには幾つかの代案もあつたらしい。身体に手術を施し、人をヘルヘイムに適応させる案など・・・まあ、コストの面で不採用になったりしたものが大半と聞くが。」

と星崎が話す。

「そんな事があつたんだな・・・」

と言う俺。

「それより私は君に興味があるんだ、龍崎君。君の持つ適性能力とニヴルヘイムの毒素への抗体についてね。」

「またそれか・・・言つとくけど、両方心当たりないぜ。俺も正直驚いてるしな。」

と星崎の質問にぶっきらぼうに答える俺。

「まあ、それならいい。今度、検査を受けてもらえばいいからな。」

「・・・なあ、父さん。」

と今まで黙っていた昴が唐突に切り出す。

「・・・何だ？そういうえば久しぶりだな、昴。体の方は大丈夫か？」

「ごまかすなよ。何で僕を呼んだんだ？」

と気遣う星崎に苛立ちを隠さず昴が聞く。

「お前を呼んだのは、この戦いに参加して欲しいからだ。お前の身体能力はかなりの物だから、経験を積みめばすぐに・・・」

「ふざけんなっ!!」

と昴が叫ぶ。

「ふざけんなよ・・・今まで放つといたくせして、こういうときだけ父親ツラすんなよ！だいたいあんな化け物と戦うなんて出来るわけな

いだろ!!僕にだってもう仕事があるんだ……いまさらどの面下げて言っただよ!

とまくしたてる昴に

「……そうだな。それでも、お前の力が必要なんだ。……協力してくれ、頼む。」

と懇願する星崎。

「たしかに、私は父親失格だ……優子の時もそうだった……許してくれとは言わない。ただ、世界のために力を貸してくれ。」

と一言ずつ、絞り出すように星崎が言う。
が

「ああ……あんたを僕は一生許さない……そして僕はあんたの道具じゃない……もう話すことなんかないよ。」

と言って昴が部屋を出て行く。

「昴さん!……失礼します、博士。彼は私が。」

とその後を宗光が追う。

「すまない、見苦しい所を見せてしまったな……。」

と星崎が言う。

「あの……大丈夫なんすか?」

「今、私が何を言っても聞かないだろうしな。……こうなる事は予想していたがね。」

と少し寂しげに星崎が返す。

「龍崎君、あとで昴にこれを渡してくれないか?……突き返されるかも知れないが。」

とデスクの引き出しから戦極ドライバーとロックシードを取り出す。

「水池君が新しく開発したスターフルーツロックシードと戦極ドライバーだ……頼んでもいいかな?」

とアタッシュケースにベルトとロックシードを入れて俺に差し出す。

「ああ、いいけど……。」

とそれを受け取る俺。

そのとき

俺と貴虎のスマホからブザーが鳴る。

「っ!!クラックか!」

「ああ、オーバードロードが確認されたそうだ!博士、我々はこれで失礼します。行くぞ、十馬!」

と一礼し部屋を飛び出す。

そのころ・・・

部屋を飛び出した昴はビルの廊下を足早に歩いていた。

「昴さん!!」

と声をかけられ、歩みを止めて振り返る。

するとそこにはさきほどの青年・・・宗光の姿があった。

自分で来ず別の人間をよこすとはあの男らしい、と思いつつながら「何?」と不機嫌を隠さず言う。

「・・・僕、忙しいんだけど。何かあいつに言われた?悪いけど帰って、あいつにはもう二度と会わない。」

「いえ、私は博士に言われて来たものではありません。」

と昴の視線を正面から受け止め、宗光が言う。

「・・・私は、お二人のぎくしゃくした関係の事もある程度知っています・・・けれど、先ほどの言いすぎでしょう。」

「へえ?じゃあ、あんたはもし自分が同じ立場だったらどうする?」
母親を見捨てて自分の意向を押し付ける父親“がいたらさ?”

と切り込むように言う。

「それは・・・」

「ほら、答えられないっしょ。どうせあんたもそんななんだよ・・・自分の意志を人に押し付け、自分が正しいと信じて疑わない。どうせあんたもそういう人種なんだよ・・・ほっといてくれ。」

と言い捨てて踵を返そうとしたその時、

宗光のポケットからブザーが鳴り響いた。

「っ!昴さん!沢芽市にクラックが出現しました!」

と何かを期待するようにこちらを見る宗光。

「別に、僕にはもう関係ないし・・・十馬くんがいるから大丈夫でしょ。」

とその視線から逃れるように顔を背ける。
が

「今回は違います！オーバーロードという上位個体が出現しているようです！一人でも多く戦力が必要です！」

と必死に宗光が叫ぶ。

「僕は戦力になんかならない。頼むから放つといて……」

「罪も無い命が失われるのを、黙って見てるつもりですか!?ふざけているのはあなただ！昂さん！」

と逃げようとする昂に宗光が言う。

「あなたは父親から逃げているだけだ！あなたの気持ちも分からなくはない、けれどそれに甘えてはいつまでも子供のままです！」

と糾弾するように言う。

昂は……言い返す事ができない。

「さあ、選びなさい。現実から逃げて負けたままにいるか、一人で立ち向かうか！」

と最後に言い残し去っていく、そんな宗光の背中を見ながら

「逃げてる?……僕が?……ふざけんなよ。」

とつぶやき、昂は廊下を走り出した。

その約30分前の沢芽市にて……

紘太と舞、そして「チーム」ビートルライダーズのメンバーはシャルモン1号店にて歓談していた。

「へえ〜つまり、元祖ビートルライダーズの人数が減っちゃったからまとめてチームにしちゃったんだ。」

「ああ、やっぱり何人かは将来とかもあってさ……レイドワイルドのデブなんか国家試験うけるんだと。」

と舞とザックが話す隣で、

「神様ってことは色々できるんですか!?未来予知とか、念動力とか!?

「すげえ!なにそれなんてス○ック!?

「いや、今は力とられてるし、まあ浮くくらいはできたけど。」

と元鎧武のメンバーと紘太が話してたりする。

すると店の奥から城乃内と凰蓮がケーキを持って出てくる

「さあ〃 水瓶座の坊や達の帰還を祝う会〃、始めるわよ!」

「どうだ!俺と凰蓮さんで作ったオレンジ&アップルケーキだ!!」

と真ん中の大きめのテーブルにケーキを置く。

「おお!うまそう!」

と紘太。

「よし、皆クラッカーの準備はいいか?いくぞ、3、2、1・・・」

とザックが音頭をとりクラッカーを鳴らそうとしたとき、

盛大な破壊音と共に衝撃波が店の窓を割り、そのままテーブルや椅子を吹き飛ばす!

「うわあ!?!」

とその勢いで床に叩き付けられる皆。

「何だこれ!?!・・・この感じはクラック!?!行くぞ、ザック、オツサン、

城乃内!」

「おう!!」

と返事をする三人。

「気をつけてね、紘太!」

と言う舞に目配せし、紘太は店を飛び出した。

店を出ると、あちこちが破壊されているのが分かる。

そしてそんな廃墟の中心部にレザージャケットを着た大柄な男が立っていた。

「あいつ・・・まさかオーバーロード!?!」

と紘太が言う。

すると

「・・・ん?おお!始まりの男じゃねえか!俺はTEEBAIってんだ、このかつこの時は凶牙って名乗ってるがな。」

と男・・・凶牙が言う。

「TEEBAI・・・この間の奴とは違うな。」

「油断しないことよ、強いのは同じなはずだから。」

とザックと凰蓮が言う。

「そんなことよりよ・・・戦おうぜ！龍崎十馬が来るまで暇だし、そろそろ無機物を壊すのにも飽きたんでねっ!!」

と云うなり龍を思わせる怪人態になり、拳を突き出し拳圧を放ってくる。

「くっ！行くぞ皆！」

と紘太が合図し

「変身!!」

『オレンジアームズ！花道！オンステージ！』

『クルミアームズ！ミスターナックルマン！』

『ドリアンアームズ！ミスターデンジャラス！』

『ドングリアームズ！ネバーギブアップ！』

とそれぞれアーマードライダーに変身する。

「いくぜ！」

とまず鎧武が大橙丸で斬撃をあげせ、そこにブラーボがおうちをかける。

「まだまだあー！」

と後ろに回り込んでいたグリドンとナックルでさらに攻撃を加える。

「・・・？なぜ、なにもしない？」

といぶかしむ紘太をよそに他の三人はそれぞれ必殺技をあげる。

『クルミオーレ！』

『ドリアンスカッシュ！』

『ドングリスカッシュ！』

「てやああ!!」

とテーバイに向かってエネルギーが放たれ、爆発する！

「やったか!？」

とザックが言う。

が

「ククク・・・いいねえ、久しぶりだぞこの感じ。」

と煙の中から無傷のテーバイが現れる。

「な！無傷だと!？」

「そんな！俺達の全力をぶつけたのに！」

と驚愕するザック達に

「ただ、お前等じゃつまんねえ……さっさと消えな！」
と衝撃波を放つ。

「っ！坊や、危ない!!」

「うわあ！」

とブラーボがグリドンを庇うも二人とも吹き飛ばされてしまう。

「オツサン！城乃内！くそっ！」

と毒づき、ナツクルがテーバイに向かっていく。

「ザック！よせ！」

「うおおお!!」

と鎧武が止めるもナツクルは聞く耳を持たない。

「うぜえんだよ……消えろや！」

とテーバイがナツクルにエネルギーを込めた拳を叩き込む。

「うわああ！」

とナツクルが吹き飛び、変身解除してしまう。

「くそっ！もつと力が……仲間を守る力があれば！」

と鎧武が叫んだ瞬間、その手にロックシードとゲネシスコアが現れる。

「っ！これは、これがあれば！」

とベルトにコアをセットし、ロックシードを解錠する。

『レモンエナジー！』

『ROCK ON！』

『ミックス！ジンバーレモン！ハハー！』

そして強化形態、ジンバーレモンアームズに変身した鎧武はソニックアローで遠距離から攻撃をする。

さらに、その隙に相手と距離をつめ斬撃を見舞う。

そんな鎧武を見ながら

「くそっ！紘太はあんなに頑張ってるのに……何で俺は立てないんだ
！」

とがれきの上に倒れ伏しながら悔しげにザックが呟く。

「こんなんじや、戒斗に会わせる顔がねえ・・・ちくしょう！」
と傷が痛むのにも構わず地面を殴りつける。

そんなザックをかつては高い建築物だったであろう廃墟の上から
見ている人物がいた。

「彼は確か・・・駆紋戒斗の・・・。」

白地に金の装飾が入った貫頭衣のような外套を着た、白髪の少年
だ。

廃墟の上に立っているからか、彼からは神々しい・・・まるで、世
界の終末に立ち会う神のようなオーラが発せられていた。

「彼にも、祝福を与えるべきかな？・・・でも少し不公平かも・・・
まあいいか。」

そう言つて彼はおもむろに姿を消した。

—————

そのころ、貴虎の車で沢芽市に着いた俺達は皆のドライバーの反応
がある場所へと向かっていた。

「ひどいありさまだな・・・。」

とがれきを見ながら呟く。

まるで大怪獣が現れて、きままに破壊し尽くしたようなありさま
だった。

「っ！いたぞ！あそこだ！」

と貴虎が向こうの開けたエリアを指して言う。

そこには倒れふすザックや風蓮達と三年前にも一度見た形態に変
身して龍を思わせる銅色のオーバーロードと戦う鎧武の姿があった。

「ザック！大丈夫か!？」

「風蓮！城乃内！しっかりしろ！」

と三人に駆け寄る俺達。

「・・・十馬、すまねえ・・・紘太を助けてやってくれ・・・。」

とザックが言う。

凰蓮達は気を失っているようだ。

すると鎧武と戦っていたオーバードが声をかけてくる。

「よお、龍崎十馬！待ちくたびれたぜえ！……お前はもう邪魔だなあ、コイツ等の相手でもしてな！」

と言うと同時、頭上にクラックが開き五体のリザードマンインベスが現れる。

さらに奴がオーラを発し、鎧武を吹き飛ばした後、インベスにオーラを分け与える。

するとリザードマンインベス達の身体が光り、強化形態へと姿を変えらる。

「コイツ等は俺の兵士、スパルトイインベスだ！やっちまいな！」

と奴が命令すると同時、五体のスパルトイインベスが鎧武に襲いかかる。

「くっ！数が多いな……。」

と苦戦する鎧武。

それを見た貴虎が

「十馬、私は葛葉に加勢して連中をかたしてくる。お前はの間、奴の足止めをしてくれ。」

と俺に言う。

「了解！いくぜ！」

「変身！」

『レモンエナジーアームズ！』

『メロンエナジーアームズ！』

とそれぞれデュークⅡと斬月・真になって敵に向かっていく。

「さあて、始めようぜ！」

と奴が俺に拳を放ってくる。

それを紙一重でかわし、返す刀で斬撃を見舞う。

「そんなもんかよ!?本気で来ないと死ぬぜ!」

とダメージを受けていない様子の奴が言う。

そして

「じゃあ、コイツを食らっても無事でいられるかな!？」

とエネルギーを拳に集め、パンチを俺の胴に見舞う!

「ぐああ!!」

と吹き飛ばされ、変身解除する俺。

「十馬!」

と貴虎が叫ぶ。

端から見れば絶体絶命の状況に違いない。

そんな状態の中で俺は笑う。

「やつは強いなあ・・・けど、こつからはそうはいかないぜ?・・・なあ、
そうだろ?」

といつのまにか隣に立っていた青年に俺は言った。

その場に到着した昴は考えていた。

何故、自分はここに来たのか。

別に父の言う通りにしようとした訳ではない。

戦うつもりも無い。

ただ・・・

「これ以上、逃げていると思われるのも嫌だから来ただけさ・・・戦う
のはご免だね。」

と目の前に、ボロボロになって倒れている十馬に言う。
すると

「・・・なら、踊れよ。」

と十馬が言う。

「は?・踊るってこんなときにな?・」
と返す。

「あんたがやりたいようにやればいい・・・自分の気持ちを表現し、自
分の全力を出し切る・・・いつもと同じさ。」

「・・・」

「そういや、どっかの音楽家が言ってたぜ。生き物は皆、音楽を奏でて
いるって。それを聞いて戦えばいい。」

と未だ迷っている様子の昴に語りかける。

そして

「さっさと決めろよ……意志の無い道具は嫌なんだろう？」

と背中を押す。

「ツクク……ハハハハ！ そうだな、頭に血が登り過ぎて忘れてたよ……僕は自分勝手なああの男みたいな奴が……自分のためになら何をしてもいいと思ってるような奴が大嫌いなんだよ！」

と吹っ切れた様子で昴が言う。

「十馬くん……いや、十馬！ 僕に力をくれ……あいつに一泡吹かせてやる。」

と瞳に確かな決意をみなぎらせ、十馬に手を差し出す。

「……おう、そのアタツシユの中にドライバーとロックシードが入ってる。……あんたの親父さんからの贈り物さ。」

とそばに転がっていたアタツシユを指差す。

開けると中には戦極ドライバーと見た事の無いロックシードが入っていた。

それを昴が装着するとイニシヤライズされ、フェイスプレートが浮かび上がる。

そして言う。

「これは父さんから与えられた力だ……でも、どう使うか決めるのは僕だ！ 僕はニヴルヘイムなんて知らない。でも、そのせいで誰かが傷つくのなら、この力を皆を守るために使う！」

「変身！」

『スターフルーツ！』

『ROCK ON！』

『スターフルーツアームズ！ 勝ち星・白星・大金星！』

次の瞬間、アームズを装着した昴は鎧を纏ったアーマードライダーに変化していた。

「さて、始めようか。僕のステージ。」

と昴の変身したライダーが奴に向かっていく。

「ほぞけーお前も壊してやるよー！」

と奴も向かっていく。

すると衝突する直前に昴がステップを踏み方向転換、すぐさまその勢いを利用し持っていたアームズウエポン、星ノ太刀で斬りつける。「クッ！やるな！ならコレはどうだ!？」

とダメージを少しは受けた様子の奴が拳を握り、地面に叩き付ける。

すると衝撃が周囲の者全てを襲う。

「「グギャアアア！」」

とスパルトイインベス達もダメージを受ける。

「っ！今だ、葛葉！行くぞー！」

「ああ！わかった！」

とそれぞれ必殺技を発動させる。

『メロンエナジースカッシュー！』

『オレンジオーレ！』

「ハアアア!!」

「せいはいっ!!」

とエネルギーを刃に集め、周囲に斬撃を放つ。

「「ギシャアアア!!」」

と断末魔の悲鳴をあげてスパルトイインベスが全て消滅する。

「さあ、こつちもラストダンスといこう。」

とベルトを操作し、必殺技を発動させる。

『スターフルーツオーレ！』

そして太刀を四回振るう。

すると斬撃が重なり、北斗七星を描きだす。

そしてそれが奴に向かっていく！

「クッハハハ!!最高だ、俺もいくぜー！」

と心底楽しそうに奴が笑い、渾身の一撃をくりだす！

エネルギーがぶつかり合い、大爆発をおこす。

「くっ!!」

と爆風のダメージを受けつつも昴は立っていた。

しかし、その時異変に皆が気づく。

奴……テーバイのいた場所にバリアが張られており、もう一つオーバードロードと思われる人影があったのだ。

「何者だ、貴様!!」

と貴虎が問う。

「私の名ですか……今はファフニールとだけ名乗っておきましょう。それでは今日はこれにておいとまさせて頂きますよ。」

と青年……ファフニールが言うと同時に、クラックが開き二人が中へと消える。

そしてその際、テーバイが

「龍崎十馬に昴だったか……また会おうぜ。」

と言い捨てて行った。

そして二人のオーバードロードが去った後、十馬やザック達を治療するため全員でヨルムンガルドの本部へ向かい動ける者は司令室に集まった。

「凄かったぜ、君の戦い。」

と紘太が昴に手を差し出す。

「いや、神様にそう言われると恐縮だなあ。」

と笑いながら手を握り返す。

そして葵が

「あのロックシードは強化版A+ランクロックシードの試作品だったんだけどどうまくいって何よりだよ。そういえば君の変身したライダーの名前だけど、決めてるのかい?」

と聞く。

「ああ、僕が変身するライダーは北斗……アーマードライダー北斗だ!」

と昴が答える。

「北斗か……天の龍、いい名じゃないか。」

と貴虎が言う。

「でしょ……で、きつきも言ったけど僕はニヴルヘイムがどうかそういうのは分かんない。けど人のために戦う、これが僕の信念だか

ら。」

と昴が言う。

「ああ、よろしくな。昴。」

と紘太が言う。

こうして、星崎昴はアーマードライダー北斗となった。

—————

そのころ・・・

ニヴルヘイムの遺跡では二つの人影が話していた。

ティーバイとファフニールである。

「ファフニール、今回は仕方ないが次勝手に送り返したらぶつ殺すぞ。」

とティーバイが言う。

「そうですね・・・しかし、ティーバイ。君は龍崎十馬ともう一度戦いたくはありませんか？」

とファフニールが聞く。

「ああ？・・・当たり前前だろうが！奴をぶつ殺したいぜ！」

「なら、今はシュバリヤに従いましょう・・・何、すぐにまた戦えますよ。」

とファフニールはほくそ笑んだ。

そのやりとりが行われる場所から少し離れた場所。

地面にはいくつか花が咲き、美しい景色を作っている。

そんな場所に“彼女”はいた。

花を見るでも無く、空を見るでも無い。

ただひたすら、膝をかかえ下を向いていた。

不意に“彼女”が口を開く。

「だれか・・・たすけてよ・・・十馬あ・・・」

だがその声も風にかき消されていく。

少女の運命もまた、大きく変転しようとしていた・・・

続く

第8話 グリドン、友に捧げる新アームズ！

前回までのあらすじ

ヨルムンガルドの創設者であり昴の父親でもある科学者、星崎慧と対面した十馬。

そして慧はヘル Heim 時の事の顛末や十馬の適性能力、さらに昴の戦いへの参加を要望している事などを話す。

だが、昴は父に真つ向から反対し出て行ってしまふ。

そして、そのすぐ後に沢芽市でクラックとオーバーロード、テーパーが出現。

その力に迎撃に向かったザック達は倒され、紘太もジンバーレモンの力を発現したが、それでも押される。

そして、到着した十馬と貴虎も加わるが圧倒的なテーパーの力と、その手数のに多さに苦戦する。

だがそこに、決意を新たにした昴が現れ、新たなアーマードライダーへと変身。

テーパーを退けることに成功したのだった。
—————

テーパーとの戦いのあと、治療を受けた十馬、ザック、凰蓮、城乃内も司令室に集まり、会議に参加していた。

また、付近の民間人を守るため戦闘には参加しなかった光実も同様に。
だ。

そんな司令室の中心で

「これからさらに厳しくなると思われる情勢において、昴が使ったようなA+の錠前は必要になる。開発を頼むぞ、葵。」

と貴虎が言う。

「フッフッフ・・・そう言うと思つていくつかもう試作品を作つてあるよ！ ジャジャーン!!」

とデスクの引き出しから二つの錠前を取り出す葵。

「まず、こっちの黄色いやつがL, S+O2フルーツトマトロックシー

ド。で、こつちの茶色いやつがL、S+01イガグリロックシードだよ。」

とそれぞれを指して説明する葵。

「ただフルーツトマトの方はエネルギー回路に問題があるのかうまく起動しないんだよね。あ、ちなみに他にもいくつか新しいの作ったり調整したりしてるからお楽しみにね。」

とのほほんとして言う葵に貴虎が

「調整?・・・まさか、アレか!」

と言う。

すると光実が

「アレ?・・・それってまさかドラ・・・」

「ちよつ!ストップストップ!秘密にして驚かそうとしてるんだから言つちやダメだよ!」

と何かを言おうとした所で葵に慌てて止められる。

「ドラ・・・?まさか、未来から来た猫型ロボット!?ど〇でもドアとかス〇ールライトとか出す奴!」

「それ、著作権かかるからあんまし言わないほうがいいよ。」

とリアクションする俺、十馬に昴が冷静なツツコミ・・・なんか会議がレッドカーペットみたいになってきたな・・・

「ま、まあお楽しみに。それより昴くん、君はこれからも僕らと戦ってくれるんだね?」

と葵が確認する。

それに

「ああ。父さんは気に食わないけど、僕の意地で傷つく人が出るのはご免だからね。」

と昴が言う。

「オツケー、それじゃ次にこのイガグリロックシードを使う人を決めようか・・・だれか希望者いる?」

と葵が言う一つ、手が拳がった。

城乃内だ。

「俺に、使わせてくれないか?頼む。」

と頭を下げ、懇願する。

「ん〜いいけど、これかなり身体に負担かかるよ〜それでもいい？」

「ああ、頼む。」

と一応、警告する葵に繰り返し頭を下げる。

「じゃ、これは君に託す。よろしくね。」

と葵が渡そうとしたその時、

「待ってちょうだい。」

と風蓮が言う。

「風蓮さん!?!どうしてですか!?!」

と予想していなかったのか、驚いた様子で城乃内が言う。

「・・・一応、理由を聞こうか。」

「坊やを戦士として育てたのは私よ。この子の実力は一番分かっている。・・・まだ、坊やには過ぎた力なのよ。」

と聞く葵に答える風蓮。

「そんな・・・でも！俺だって！」

と反論しようとする城乃内に

「落ち着きなさい。誰も、一切使うとは言っていないわよ。」

と優しく風蓮が諭す。

「あなたがそれに見合う実力になるまで、私が訓練してあげるって言ってるのよ。とはいえ、やるからにはビシバシしごくけど。」

「・・・わかりました！俺、風蓮さんに認めてもらえるよう頑張りますから！だからお願いします、俺を鍛え直してください！」

と風蓮に頭を下げる城乃内。

それを見て、

「分かった、それじゃ今は風蓮さんに預けるよ。じゃ、今日はここまでだね。皆、かいさくん！」

と葵が言うと同時に、席を立つ昴に俺は話しかけた。

「なあ、昴さん。もし良かったら、この後少し話したいんだけど。」

「いいけど、そのさん付けやめてよ。僕の話は昴でいいよ。」

と言う昴と共に、司令室を出る。

—————

それから十分後、ある河原で俺と昴は話していた。

「なあ、教えてくれないか？アンタと親父さんの間に何があったんだ？」

と俺が聞くと渋々といった様子で昴が話し始めた。

「僕には母さんがいた。昔から僕のことを何より心配してくれる優しい母さんが。でも父さんはそのころから仕事人間でロクに家にも帰ってこなかった。だから母さんは一人で僕を育ててくれたんだ……けどある日、母さんが倒れた。極度の疲労が蓄積してね。僕はすぐに病院に行った。……そしたら危篤だつて言われた。僕はすぐに父さんに連絡した。早く来てくれて……その後、母さんは死んだ。でも、父さんはそれから3時間も後に来たんだ……もう、とつくに冷たくなった母さんの前で僕は言ったんだ。

『お前のせいで母さんは死んだんだ……絶対に許さない！』って。それから、僕が父さんを嫌悪するようになったのは。」

と話し終えた昴が息をつく。

「そっか……そりゃ、恨んで当然だな。」

と俺が言う。

「だろ？あいつなんかいなくなれば良いんだ。」

「……けど、ある意味羨ましいかもな。」

と昴に俺が言う。

「へ？羨ましい？」

「ああ、そういう良くても悪くても家族の記憶があるのは羨ましいんだ。……俺、孤児で親の顔知らないから。」

と少し寂しげに言う俺。

「……そうだったんだ。何かごめん。」

「ああ、別に良いんだ……でも、俺から言わせてもらおうとどんな親でもいた方が絶対良い。ただ、人間ってのはバカな生き物だから、無くすまで絶対気づかないんだよな。」

と昴に言う。

「じゃあ、何？父さんと仲直りしろっての？」

「別にそうは言っていない。ただ、一度お互いに本音で話し合ったらどうだ？ そうすればスッキリはすると思うけど。」

と優しく、昴に語りかける。

「・・・そうだね。僕は単に逃げてるだけなのかもしれない。父さんからね。・・・ま、話しあってみるよ、許すつもりは無いけど。」

と昴がどこか晴れやかな表情で言う。

「ま、何とかなるか。マイペンライだね。」

「まいペンらい？ 何だそりや？」

「タイの言葉で、気楽に行こう」って意味さ。まあ、父さん相手に気楽にはなれないけどね・・・」

と話す俺達。

「それじゃ、もう行くよ。久々の日本で観光もしたいし。」

と昴が腰を上げる。

「おう、じゃあまたな。」

そう言っただけ俺達は別れた。

—————

「ま、まだまだ大変だろうけど仲直りしてほしいなあ。」

と呟きながら歩く俺。

すると

「十馬！」

と後ろから声をかけられる。

「よお、イリスじゃん。どした？」

「どうしたじゃないですよ！ さっきまで街で凄い破壊音が鳴ってたから心配で・・・」

と少し目を伏せて言う目の前の少女。

その純粋な気持ちに少し苦笑し、

「わりの、心配かけて。じゃあお詫びにシャルモンでケーキ奢ってやんよ。」

と言う。

「本当ですか!?! じゃあ、レモンタルトにショートケーキにモンブラン

に……」

「いや一個に決まってるだろ!？」

「と言い出すイリスに慌てて釘を刺す……すぐ調子乗るんだよなコイツ。」

そして、シャルモンにて

「ごちそーさまです!」

「一個って言ったけど一番高いモンブラン頼む事無いだろうが……」
と幸せそうに言うイリスとガツクリうなだれ財布を振る俺。

「じゃあそろそろ……」

「ちよつといいかしら、シトロンの坊や?」

と席を立ちかけた俺を店の奥から出てきた凰蓮さんが呼び止める。

「あれ? 凰蓮さん? 城乃内の特訓はどうしたのさ。」

「ぬかりないわ。今は一人用のメニューを言い渡してあるし。」

と話す俺達。

「つてあなた! あのデザスターなバイト娘じゃない!……まさか、
またバイトに!？」

「違います! 今日はお客ですお客様!」

「と言い合う二人……そういや皿を割りまくったんだっただかコイツ。」

「まあ、確かに災害級ではあるな……」

と苦笑する俺に凰蓮さんが

「……まあいいわ。それよりシトロンの坊や、あなたと少し話したい
のだけれど。」

と言ってくる。

「へ? いいけど……じゃあまたな、イリス。俺、少し話してから帰る
から。」

「はい。それじゃあまた明日。」

とイリスを帰らせ、凰蓮に向き合う。

「で、何? 話って。」

「ええ、その前に少し場所を変えましようか。」

と店の裏に回る。

「それで、何さ。」

と話を促す。

「一つ言いたいことがあってね……突然だけど、もし今インベスが襲ってきたらどうする？」

と凰蓮が聞いてくる。

「へ？……そりゃあ俺が片付けるけど。」

「そう、それが心配なのよ。」

と俺の答えに反応する凰蓮さん。

「あなたもウチの坊やも、自分の力を過信し過ぎてるのよ。だから無茶しかねない。そういうのはね、大人である私達の仕事なの。」

と凰蓮さんが続ける。

「私の意見自体は昔と変わらないわ……あなた達は所詮アマチュアよ。危ないことはプロである私達に任せなさい。メロンの君と同じように、私もあなた達を巻き込みたく無い。あなた達に傷ついて欲しく無いの。」

と言う凰蓮に

「あんた、俺達を心配してくれてるんだな……けど、ただ守られるのは嫌だ。俺達にだって出来る事がきつとあるはずだから。」

と言いい、続ける。

「確かに俺達はまだまだかもしれない……でも、だからこそ強くなるうとあがいてるんだ。大人になるためにな。」

と言う。

すると

「そうね……分かったわ。あなた達の気持ちは十分伝わった。だから、もう少しあなた達を信じることにするわ。」

と言いい、優しく微笑む凰蓮さん。

その笑顔に笑い返し、

「ああ、それじゃまたな。俺もやることあるし！」
と店を出て行く。

十馬のいなくなった店の裏で凰蓮は愛弟子の事を思っていた。

「あの子も、もつと信じてあげなきゃいけないのかしら・・・」
そう言いながら、いつまでも空を見上げていた。

—————

そんなシャルモンから数百メートル離れた場所で、
二人の男が裏路地で会っていた。

「本当にくれるんだろうな？」

と一方がせかすように言う。

「ええ、もちろんです。ほら、こちらに。」

ともう一方がアタツシケースを差し出す。

「へへ、ありがてえ・・・でも、随分気前が言いな？」

「まあ、こちらにもメリツトはありますしね。」

「ふん！まあいい・・・存分に使わせてもらおうぜ？」

と男の片方はおもむろに路地を後にした。

—————

そのころ、十馬はある場所にいた。

「ここかなつと・・・あー！いたいた、城乃内！」

と向こうで黙々とトレーニングを続ける青年、城乃内に声をかける。

「ああ、悪いな十馬。急に呼び出しちゃって。」

と城乃内がこちらへやってくる。

さきほど、シャルモンにいた時『話したい』とメールが届いたのだ。

そのあと凰蓮に話しかけられたときは、さすが師弟と思っていたが。

「で、話って何？」

「実は、お前に話しておきたいことがあったんだ。・・・ある男の話をな。」

といつになく神妙な面持ちで城乃内と言う。

「ある男・・・？それって？」

「いいから聞いてくれ。・・・そいつはかつて、ビートライダーズのあ
るチームのリーダーだった。オールバックに革ジャンなんか着
ちやつてさ、ワイルドそうに見せてたけど実はヲタだったりして・・・
変わった奴だったんだ。」

で、そいつと俺はコンビを組んでた・・・まあ、悪友つてやつ？そ
んな感じである日、二人揃って戦極ドライバーを手に入れたんだ。

・・・けど、あるゲームに参加してる途中、そいつのドライバーが
壊れちやつてさ。元の弱小チームに元通りさ・・・

そして、そいつは俺に助けを求めた・・・でも、俺は見捨てたんだ。
結局そいつは力を求め・・・そして死んだ。俺のせいだ。」

と話し終えた城乃内が息をつく。

「でも、あんたが直接手を下した訳じゃ・・・」

「確かにそうだ・・・でも、最後に背中を押したのはきつと俺だ。」

と言う十馬に城乃内が言い返す。

「そいつの名前って？」

と俺が聞くと

「初瀬・・・初瀬亮二って奴だ。俺は初瀬ちゃんって呼んでたけど・・・」
とどこか遠い目をして城乃内が言う。

「俺が戦ってるのは初瀬ちゃんへの罪滅ぼしと、もう後悔しないため
なんだ。」

だから危険なA+のロックシードにも志願した、そういうことだろ
う。

「そっか・・・何か、見直したよ。あんたも強い人間なんだな。」

と言う俺。

「いや、お前の方が強いだろ。そういう理由も無しに戦ってるんだか
らさ。」

と城乃内がフォローする。

「俺はそんなに褒められた人間じゃないさ・・・何をしでかすか分から
ないぜ？」

と少し皮肉を込め、俺は言う。

「ま、話せてよかったよ。じゃ、俺はまた特訓続けるから。」
と腰を上げる城乃内に

「ああ、こっちこそ話してくれてありがとう。・・・その、嬉しかったぜ。」

と笑顔で言う。

そのとき、

人々の悲鳴が響き渡ると同時、十馬が来た方向から破壊音が鳴り響いた！

「な、何だ一体?」

と城乃内が驚いて言う。

「さあ?でもクラックじゃなさそうだぜ?」

と言いながら、俺は携帯を見る。

「やっぱり反応は無しか・・・くそっ!何だっつんだよ!」

と叫ぶと同時、走り出す俺。

「あ!待ってくれよ!」

と城乃内がその後を追った。

—————

音を目印に走っていくと、そこはショッピングモールのような場所だった。

そしてそのど真ん中で、何かが暴れているようだ。

「一体何だ?・・・ただの人間にしちやあやり過ぎだろ!」

と言い、ホールの真ん中の吹き抜けのエリアに飛び出す。

そこで暴れていたのは・・・何と、足軽のような姿のアーマードラ

イダー、黒影トルーパーだった。

「な!?!何で黒影が!?!」

と続いて入ってきた城乃内と言う。

そんな城乃内を見て、黒影が言う。

「城乃内い?・テメエは良いよなあ、皆から正義のヒーロー扱いだ・・・

俺もそうなるはずだったのによお!!」

と影松を振り回し、辺りの物を破壊する。

「・・・うそ、だろ?」

と呆然とする城乃内。

あの姿に言葉、声はまるで変声機越しのようにくぐもっているが城乃内には目の前の者が重なって見えた。

・・・かつての友、初瀬に。

「おい、やめろ!・・・どうしてもやめないなら!」

とベルトとロックシードを取り出す俺。

ところが

「待ってくれ。」

と城乃内が俺に待ったをかける。

「何で止めるんだ!?早くあいつを止めないと!」

と焦る俺に

「頼む・・・アイツの相手は俺にさせてくれ。お願いだ。」

と城乃内が言う。

「・・・わかった。そのかわり、今度奢れよ?」

「ああ、店長自ら作ってやんよ。」

と言いつつ俺は後ろに引き、城乃内が前に出る。

「お前が誰かは知らない・・・多分、初瀬ちゃんじゃないんだろうけど・・・言わせてもらおう。」

と黒影を正面から見据え、叫ぶ。

「今度こそ、俺が助ける!もう後悔したくないから!」

「変身!!」

『ドングリ!』

『ROCK ON!』

『ドングリアームズ!ネバーギブアップ!』

そしてアームズを装着し、中世の兵士のようなアーマードライダー、グリドンに変身する。

「行くぞ!」

と走り、敵との距離を詰めるグリドン。

そんなグリドンに黒影が容赦なく攻撃を浴びせる。

「おらおらおらあ!」

恨みでもあるのか、執拗に攻撃をあびせる。

だが、それらに怯むことなくグリドンもまた、ドンカチで相手に殴打を加えていく。

「・・・おいおい、いくらなんでも攻撃浴び過ぎだろうが。」
と呟く俺。

先ほどから見ていれば分かるが、着実にダメージは与えられている。

だが、それでもグリドンは引き下がらない。

「これは俺の受けるべき罰だ・・・初瀬ちゃんの痛みはこれの比じゃない。かっただけだから！」

と、むしろ前に進み相手の懐に飛び込む。

「しまっ・・・」

「これで決める！」

と一瞬、無防備になった胴に全力でドンカチを叩き付ける！

そして、黒影が吹き飛ばされ変身を解除する。

「っ！お前、曾野村!？」

と黒影トルーパーに変身していた青年、曾野村に驚いた様子でこちらも変身解除した城乃内が言う。

それに

「ああ、そうだよ・・・俺だって、あのオッサンにベルトを取られなきや今頃は！」

と悔しそうに答える曾野村。

「全部、お前等が悪いんだ！俺だって輝けたはずなのに！」

とまくしたてる曾野村に

「ふざけるなっ！」

と城乃内が組み付き、殴る。

「お前はまだ生きてるだろうが！それなのに、何でそんな小さいことにこだわってるんだよ！」

そう言い、掴んでいた胸ぐらを放す。

そして

「・・・お前の今後は貴虎さんと相談して決める。それまでは大人しく

してる。」

と言いつち、貴虎に連絡を取ろうとする。

そのとき

曾野村が着けていたベルトが火花を吹き、全身を電流が駆け巡る！

「ぐっ？？ぐあああああ!!」

と苦しんで身悶えする曾野村に城乃内が駆け寄る。

「ぐふっ！」

と電流が収まり、曾野村が倒れたまま動かなくなる。

「おい！曾野村?!曾野村!!」

と城乃内が叫ぶ。

「……………」

そのすぐそばの路地で

「もしもし……はい、実験は概ね成功です。副作用も無し……はい、記憶は消去が完了したはずですが念のため“始末”します。」

と誰かと通信で会話する男の姿があった。

「さて、せめて楽に死なせてあげましょう。」

と男はおもむろにポケットに手を入れ、ロックシードを取り出し解錠した。

「……………」

「チッ！何らかの装置が仕込まれたのか!？」

とモールの真ん中で舌打ちする俺。

「一体誰がこんなことを……」

と怒りをあらわにする城乃内。

そのとき、頭上にクラックが開くと同時に、中からセイリユウインベスが現れ曾野村を襲おうとする！

「な！・テメエ何しやがる!!」

とインベスに組み付く俺。

だが、生身で勝てるはずも無く吹き飛ばされ、その拍子にベルトも吹き飛ばされてしまう。

「ぐはっ！しまった、ベルトが……」

と壁に身体を打ち付け、うめく。

「十馬！くそっ！やめろお！」

と再び変身した城乃内がセイリユウインベスにドンカチで一撃を浴びせる。

が

「ギシャアアア！」

と全くダメージを受けていない様子でセイリユウインベスが攻撃してくる。

「うわっ！堅すぎるだろこいつ！」

とやられたグリドンが言う。

「ギシャア・・・」

と曾野村に再び襲いかかろうとするセイリユウインベス。

そのとき

「お待ちなさい!!」

という声と共に凰蓮が現れる。

「お、凰蓮さん？」

と倒れたままのグリドンが言う。

そんな弟子の様子に顔をほころばせ、

「よくがんばったわね。・・・私もあなたを信じてみるわ。」

そう言つて、預かっていたイガグリロックシードを差し出す。

「いいんですか・・・？」

と言う城乃内に

「ええ、これが最終試験。うまく使いこなして見せなさい！」

と凰蓮が発破をかける。

「ありがとうございます・・・いくぞー！」

と言つてロックシードを解錠する。

『イガグリ！』

『ROCK ON！』

『イガグリアームズ！ミスターニードルマン!!』

「行くぞ!!」

とブラーボの武器に似た二振りの剣、イガノコを振るいセイリユウ

インベスに猛攻を加える。

「すげえ、力が溢れる!!」

と新しい力に驚きながら、さらに追撃する。

普段のドンカチとはリーチも重さも違う武器。

それを使いこなせているのは、間違いなく特訓で鍛えられた城乃内の戦闘センスを証明するものだった。

「とどめだ!」

と言い、ベルトのブレードを三回倒す。

『イガグリスパークィング!』

まずはエネルギーを込めたイガノコを二本とも相手に投げつける。

エネルギーを放つそれはセイリユウインベスの堅い表皮にも容易く突き刺さる。

「グギャア!!」

と苦しむインベス。

それに向かい、高く跳躍したグリドンはその勢いのまま、踵落としを決める。

「うおりゃああ!!」

そしてグリドン渾身の必殺技、イガグリハンマーを食らったインベスはそのまま爆散する。

「ふう・・・さすがA+、キツいなあ。」

そう言っつて変身を解く城乃内。

「よくやったわ。合格よ。おつかれさま。」

そう言っつて城乃内に労いの言葉をかける凰蓮。

「俺、まだまだかもしれないですけど、いつか凰蓮さんの“相棒”になれるよう頑張ります!弟子じゃなく!」

と言う城乃内に

「なら、もつと鍛えてあげるわ!覚悟なさい!」

と言い、笑う凰蓮。

そんな二人を見て

「師弟っつて、いいもんだな・・・」

と俺は笑みをこぼした。

それから表情を引き締め

「にしても、一体誰がこんなことを・・・？」

と一人、考えを巡らせていた。

—————

そんなショッピングモールから出て行く人影があった。

「始末には失敗しましたか・・・まあ、記憶は消しましたし大丈夫でしょう。」

そういつてその人影がおもむろに携帯を取り出す。

画面には“上司”からの不在着信が。

「まったく、博士も人使いが荒いですから・・・大変ですよ。」

そう言つて、彼はその場所を後にした。

ニヴルヘイムを取り巻く“何か”が動き始めていた・・・

続く

第9話 ナツクル、受け継ぐBARONの意志！

前回までのあらすじ

新たに仲間に加わった昴、そんな彼が使用した新たなランクのロックシードが葵によって披露される。

そんな中、新たに開発されたランクA+ロックシードの一つであるイガグリロックシードを所望する城乃内。

だが、そんな彼を凰蓮が止める。

そして十馬は昴の父親との確執、凰蓮の自分たちを心配する気持ち、そして城乃内が戦う理由を聞く。

そしてその後、シヨップピングモールにて暴れる黒影トルーパーを撃破し、その正体だった曾野村をインベスから守る城乃内に凰蓮が預かっていったロックシードを渡す。

そして、新たにイガグリアームズとなった城乃内・・・グリドンは見事、インベスを倒した。

だがそんな事件の背後で、何か大きなものが動き出そうとしていた・・・

—————

城乃内の戦いの翌日、司令室に集まった十馬たちは今回の事件について整理していた。

「今回の件には明らかに何者かの介入が認められる。」

そう貴虎が言う。

「まず、曾野村は記憶喪失状態だ。これは十馬達が目撃した“ベルトから出た電流”が原因だろう・・・葵。」

「はいはい！じゃ、説明するからスクリーンを見てちよ。」

と貴虎が促し、葵がスクリーンにベルトの画像を映し出す。

「まず、このベルトは僕が作ったものじゃない。このベルトは特殊だね。一見、量産型に見えるけれどプログラム自体にはイニシヤライズシステムが付いている。曾野村君が着けて発動しなかったのは・・・

まあ、彼の力不足かな？」

と肩をすくめてみせる葵。

「つてことは、このベルトを作ったのは・・・！」

「そ、ウチ以外の組織ってわけ。個人の仕業って線は薄そうだよ？」

と十馬が言い、葵が答える。

「また、十馬君達が見た電流の正体は、恐らく記憶消去のためのものだろう。その証拠に曾野村君の海馬の機能はほぼ、破壊されている。・・・全く、ひどい連中だよ。」

と憤りを隠さず葵が言う。

「我々以外の組織か・・・星崎博士は心当たりが無いそうだが。」

と貴虎が言う。

「ただ、ベルトの設計図はウチから出たものだろうね、ユグドラシルと戦極凌馬の研究データは全てコッチにあるし。」

「え？それってつまり・・・」

「ヨルムンガルドの中にスパイがいる・・・そういうことだろうな。」

と十馬が言わんとしたことを貴虎が代わりに続ける。

「ま、有り体に言うとなね・・・正直、誰も疑いたくないけど。」

「そうだな・・・私も疑いたくはない、だがそいつ等の正体や目的が何であれ曾野村にしたことは許されるものではない。」

と葵が言い貴虎が答える。

「・・・でも、お互い疑ったままじゃ良いチームとは言えないからね。今の話は頭の隅にでも置いといてよ。で、次に・・・」

と葵がデスクからロックシードを取り出す。

「この新作のA+の錠前、フルーツマトロックシードを誰が使うか決めようか。」

と葵がロックシードを掲げ、言った。

「そのロックシードもきつと凄いで！俺でもあんなに強くなれたんだから！」

「そうね、でも使いこなせたのは坊やの実力の証よ。さっすが私の弟子ね！」

と少し興奮した様子で言う城乃内の肩を叩き、声を弾ませる凰蓮。

そんな師弟を見て

「あの二人・・・まさかとは思うけどコッチじゃないよな？」

「・・・どうだろうな、城乃内はともかくオツサンはマジな方かも・・・」
と冷めたやりとりをする俺と紘太さん。

「話をそらさないの！で、誰にするの？」

と葵がせかす。

「ん？待て葵。確か前にエネルギー回路がどうか言ってなかったか？」

と貴虎が聞くと、

「・・・や、やってみなきゃ分からないよ？」

と目をそらしながら葵が言う。

「やはり完成してないじゃないか!？」

と珍しくリアクションする貴虎を尻目に葵がもう一度、皆に向けて聞く。

すると、手が拳がった。

今まで黙っていたザックだ。

「なら、俺が使わせてもらうぜ。」

「いいのかい?・・・先に言っておくけどリスクはあるよ。」

と言うザックに葵が聞く。
すると

「ああ、そんなくらいリスクを気にしててもしょうがねえ、やってみなきゃ分からないんだろ?」

とザックが答える。

「・・・分かった、これは君に託すよ。」

と観念した様子で葵がザックにロックシードを渡す。

「ああ、ありがとな。それじゃ、もう行くぜ?」

「最後に、一つ言っておく・・・焦りは禁物だよ?」

と踵を返すザックに葵が呼びかける。

それには答えぬまま、ザックは司令室を出て行った。

「焦り・・・?それってどういう事だ?」

とザックがいなくなった司令室で俺は葵に聞く。
すると

「多分、俺のせいだ・・・」

と代わりに城乃内が答える。

「え？何で？」

「ほら自分で言うのもあれだけど、俺って前まで弱い方だったじゃん？それが急にパワーアップしたもんだから・・・」

と少し気まずそうに城乃内が言う。

「そっかぁ・・・大丈夫なのか？」

「まあ、あいつも強い奴だ。きつと大丈夫だと思うぜ？」

と心配する俺に紘太さんが言う。

「とにかく、こちらでも第三勢力の事は調べておく。君たちは休める時に休んでおけ。」

と貴虎が解散を促し、皆が司令室から出ていく。

そして、その後の司令室にて貴虎と葵は話し合っていた。

「第三勢力からのスパイか・・・何か心当たりはあるか？」

と葵に貴虎が聞く。

「そうだね・・・あえて言うとならば“例のグループ”じゃない？」

と葵が含みを持たせて言う。

「・・・あそこか。確かに怪しくはあるな。」

と貴虎が腕組みしながら答える。

「ま、それなら今日にでも探りを入れてみるべきだね。例のお姉さんも日本にいるみたいだし。」

「そうだな、なら早速行ってくる。オーバーロードが出現したら連絡してくれ。」

「ほいほい・・・あ、お昼寝の時間だ。」

と布団に包まりだす葵。

「頼むからもう少し緊張感を持ってくれ・・・」

それを見て呆れるように言ってから、貴虎は司令室から退室した。

――

そのころ・・・

司令室を後にしたザックはある場所にいた。

「戒斗・・・俺はやっぱりまだまだなのかな？」

と目の前の墓標・・・『駆紋家』と刻まれた墓石の前でザックが呟く。あのメガヘクスの事件の後、なんだか戒斗に会える気がして時々ここに来るのだ。

「城乃内が強くなつて・・・嬉しいはずなのに、何か妬ましいと思つて自分もいてき・・・お前ならどう言うんだろうな？」

と言つてから想像してみる。

きっと『他の奴が強くなつたのなら、それを超えれば良いだけの話だ!』とか言うんだろう。

それほどまでに、強い心の持ち主だった。

「いつになったら、追いつけるんだろうな・・・」
とため息をつく。

すると

「そんな風に悩むの、お前らしくないぜ。」

と後ろからよく知った声が聞こえてきた。

「よお、ペコ。お前も戒斗に?」

「ああ、たまにはと思つてさ。」

と持つてきていた花束を墓にそなえるペコ。

そしてザックに向き直り、

「なあ、ザック。お前、悩んでたりするか?」

と唐突に聞いてきた。

「!」

と驚きを隠せないザックに「凶星か。」と笑うペコ。

そういえば、この男は人の感情に何かと敏感なところがあった。さすが、ナンバーツーと思いつつ

「ああ、実はな・・・」

とザックは話し始めた。

「・・・と、まあこんなところだ。」

と話し終えたザツクに「お前も大変だな。」と言ってから、ペコが言う。

「でもさ、お前は十分頑張ってるよ。あんまし焦りすぎると大事なもんを見失うかもだぜ？お前は今、自分に出来る事をやっていけばいいんじゃないかな？」

とペコが笑いながら続ける。

「それに戒斗さんがいなくなってから、お前が皆をまとめるために頑張ってるのは知ってるしな。・・・だから、コツチは任せとけ。」

お前は今やるべきことを、思う存分やってくれ。」

「はあ・・・やっぱ戒斗みたいにはいかないな。」

とその笑顔に笑い返した後、ザツクが少し自嘲ぎみに言う。

思えばあの男を心配した事などほとんど無かった。

それは多分、彼が自分たちに心配させないように振る舞っていたからではないだろうか。

ある意味、紘太と同じように優しすぎた彼だからこそ。

「まあ、でもそれでいいんじゃないか？戒斗さんは戒斗さん、お前はお前、それで十分だと思うけど。」

とペコが励まし、それに笑うザツク。

そのとき

ザツクの携帯から着信を知らせる電子音が鳴る。

「もしもし、十馬か・・・っ！クラックか!?分かった、すぐ行く！」

と言って通話を切る。

「わりいペコ、俺行くわ！」

と言うなり走り出すザツク。

「ちよ、俺も行くって！」

そんな彼の後をペコが追いかける。

そして誰もいなくなり、静まり返った墓地に光が生まれた。

その光は徐々に人の形を作っていく、収まった時にはそこに一つの人影があった。

「ふう、彼も大変なんだね……」

と呟くのは先ほど光から現れた人物……以前、十馬にバイクを渡しザツクのことを見ていた少年だった。

そして、先ほどまで二人が話し込んでいた墓の前まで移動し、墓石に手をあてる。

「……おや？ここにはいないのかな？……なら、きつとあそこかな？」

そう言つて外套の裾を翻す。

次の瞬間には彼の姿は墓地から消えていた。

—————

そのころ、沢芽市の中心部では……

「くそっ！一体どこにいやがる！」

と俺は走りながら毒づく。

端末にクラック出現の旨が送信されてきたため現場のビルに向かったが、既にクラックは閉じ、周囲にはインベスのものと思われる破壊痕があったため、こうして走りながらインベスを搜索しているというわけだ。

「せめて屋外ならバイクを使えるんだけどな……」

と言いながらも走る速度は変えない。

すると、右側の通路から人の叫び声が聞こえた。

「っ！そこか！」

と悲鳴の聞こえた通路に飛び込む。

すると通路に三人、人がいた。

いずれも顔を真っ青にし、目の焦点もあっていない。

「大丈夫ですか!?怪我は？」

と一番近くのサラリーマンらしき人に声をかける。

すると

「……やめろ、やめてくれ……こ、子供だけは……子供だけは……」
と何やらうわ言のように呟き続けていて、こちらが声をかけても全

く反応しない。

他の二人も同様だ。

「何だっつてんだ？これもインベスの仕業？」

と考えているとポケットの携帯が震える。

『十馬か？今どこにいる？』

とザツクの声が聞こえる。

「ザツクか！何か良くわかんねえけどインベスに襲われた人達がいるんだ！場所を転送するからそこに救護隊を頼む！」

そう言つて通話を切り、通路のさらに奥を睨みつける。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか・・・」

と呟き、通路の奥へと進んでいく。

そして通路の先にある階段を下つていき、一階の大ホールに到着する。

そしてその中心に何かの姿を捉えた。

「デメエか！もう逃がさねえぞ！」

とベルトとロックシードを構える。

すると、相手も反応しこちらに身体を向ける。

それは醜悪なインベスだった。

背中にはコウモリのような一對の羽があり、手足には鋭いかぎ爪、そして頭はタコのように丸く触手らしきウネウネが。

十馬は知らないが俗に『クトウルフ』と呼ばれる空想生物に酷似している。

それを見て、

「・・・きんもおおお!!何だコイツ、キモ過ぎるだろお!!ええい、さつさとくたばれ！変身！」

と叫び、ロックシードを解錠して変身する。

「いくぜー！」

とデュークⅡに変身した俺はソニックアローで奴に斬り掛かる。

すると形容しがたい叫びをあげ、奴が口にあたる部分から光弾を放ってくる。

それを避けずに、むしろ的確な剣さばきで撃ち落としていくデュークⅡ。

(これも特訓の成果かな?)

と思いつつ、奴に肉薄し斬撃を見舞う。

するとダメージを受けたらしく、奴が羽を広げ、飛んで逃げようとする。

「させつかー！」

とベルトからロックシードを外し、ソニックアローに装填する。

そして狙いを定め、飛行している奴に目がけ放つ。

すると、矢の通るルートにレモンの輪切りのような模様が幾つも並び、それをくぐるたび矢の威力が上がっていく。

そして強化された矢の一撃が奴の翼に命中し、バランスを失って落下する。

「くっ！外したかー！」

と言いながら落下地点に急ぐ。

落下したと思われる広場に到着すると、そこには片方の羽を失いよろけるクトウルフィンベスの姿があった。

「はあはあ、もう逃がさねえぞー！」

とソニックアローを構える。

すると、奴は頭部の触手を伸ばし、俺に攻撃を加える。

だが、攻撃にしては遅い。

(撃ち落とすまでもないか・・・)

そう判断した俺は迫り来る触手を紙一重でかわしつつ、奴との距離を詰めていく。

そして、奴の懐まで一気に潜り込む。

(もらった！)

そう思った時、

突然、奴が口の辺りから黒い煙のようなものを吐いた。

「うわっ！な、なんだこれ!?!」

と急に悪くなった視界に対応しきれず、その場で止まる。

そして煙が晴れる。

「くそっ！逃がすかつ！」

ととにかく前に向かって駆け、煙から抜け出し、光に思わず目を細める。

そしてー

「っー、これは……」

と目を開けると、そこは先ほどの広場ではなかった。

どこか住宅街のような場所にある公園に俺は立っていた。

辺りにインベスがいない事を確認し、変身を解く。

「ここは……まさか、そんな……」

そう言いながら公園を出て、道に二つの人影を見つける。

二人の子供だ。

片方は男の子でもう片方は女の子。

なにやら喋り、ときおり楽しそうに笑いながら手をつないで歩いている。

「これは『あるとき』の……なら、きっと次は！」

そう悟り、急いで二人の元へと走る。

すると、急に二人のいる辺りがまぶしく光りだす。

「くっー！」

それに思わず目を閉じてしまう。

まぶたを灼く光が消え、目を開ける。

すると今度は深い森の中に俺は立っていた。

「何だっつてんだよ……ここはまさか！」

と言うなり走り出す。

そして走っていくとなにやら遺跡のような場所にたどり着いた。

さらに奥に進んでいくと開けたスペースがあった。

そこには……

血にまみれた、少女が倒れていた。

「あ、ああ、そんな……っ！くそっ！」

恐れていた光景を前に俺は膝から崩れ落ち、拳を何度も地面に打ち付ける。

結局、救えなかった。

今まで何のために生きてきたのか。

それ等の怒りとも悲しみともとれる感情を抱えたまま、俺は慟哭した。

—————

広場では奇妙な光景が展開されていた。

何故か変身を解き、うずくまったまま動かない龍崎十馬。

そしてそれをただ眺めるクトウルフィンベス。

そんな光景をビルの屋上から眺めながら、ファフニールは隣に立つ仲間に声をかけた。

「どうです？私が自ら作り上げたインベスは？」

そんなファフニールに嫌悪の眼差しを向け、ダハーカは言う。

「ふん、お前らしい汚いやり方だな。人の恐怖を操るインベスなどだの卑怯者に過ぎん。」

そんなダハーカに苦笑し、ファフニールが言う。

「でも、今なら龍崎十馬を簡単に倒せますよ？」

「この程度でやられる奴など、こちらから願い下げだ。」

と言いつつ、クラックを開くと先に帰ってしまった。

「やれやれ……彼を利用するのはそろそろ止めますかねえ……」

そう呟き、手に持った槍の柄を足下に打ち付ける。

次の瞬間、残響と共に屋上から彼の姿は消え去っていた。

—————

その頃、ザックはようやく広場に到着した。
ちなみにペコには途中で倒れていた人の救護をまかせてある。

「つーここか!・・・と、十馬!?大丈夫か!」

と広場に着いたザックは真っ先に目の前でうずくまる十馬に駆け寄る。

しかし

「・・・そんな・・・俺は、俺は何のために・・・」

とうわ言のように十馬が言い続ける。

「おい!しっかりしろ!・・・途中の人達も同じようになってたな・・・つてことはあのインベスの仕業か!」

とこちらを眺め続けるインベスを睨みつける。

「よくも俺の仲間を!許さねえ!変身!」

と言い、ロックシードを解錠、アーマードライダーナツクルへと変身を遂げる。

「おらあー!」

と手につけたクルミボンバーでインベスに殴り掛かる。

すると相手は頭部の触手を伸ばし、攻撃してくる。

「ふん!遅いぜ!」

と迫る触手をかわし、あるいは撃ち落とす。

「よし、そこだ!」

とがら空きになった相手の胸めがけ、拳を打ち込もうと振りかぶる。

その時、インベスが口にあたる部分から黒い煙を吐き出す。

「うわっ!何だ!」

と慌てて煙を振り払う。

そして、煙が晴れると――

先ほどの広場とは違う、街のどこかにザックは立っていた。

「つーここはどこだ?・・・インベスはどこに!」

と辺りを見渡そうとしたとき、

「ザッ・・・ク・・・」

と後ろから、か細いペコの声が聞こえた。

「ペコ!? どうし・・・!」

と振り向いたザツクの目に凄惨な光景が映った。

崩壊し、がれきの山になった沢芽市。

そしてそのがれきの上に倒れふす、アーマードライダーの仲間達と一番手前にはペコの姿もある。

だが、その目は既に閉じられ、二度と開く事は無い。

しかし、それらよりも更に目を引いたのはそのがれきの頂点に立っている者の姿だった。

死んだはずの、駆紋戒斗だった。

「戒斗!・・・まさかコレ全部お前がやったのか!」

と変身を解き、戒斗に向かって叫ぶ。

「ああ、そうだ。強き者が弱い者を搾取する、それがこの世界だ!」

とザツクの問いに平然と答える戒斗。

それにザツクは驚愕する。

「違う・・・お前はこんな事をするような人間じゃない!目を覚ませ!」

と必死に訴えかけるも戒斗は聞く耳を持たない。

「貴様を俺は高く評価している・・・どうするザツク!俺と共に来るか、そいつ等のようになるか!」

と決断を迫る戒斗。

ザツクは自分の腕を掴む・・・震える腕を。

今、こうして対峙した時のプレッシャー、仲間達の亡がら、いずれもザツクの恐怖を極限まで高めるものに違いない。

けれども、そんな彼を真っ向から睨み、ザツクは言い放つ。

「昔の俺ならただお前に付いていった・・・でも今は違う!お前のいるその場所まで、自分で這いつくばってでもたどり着いてみせる!」

そう、宣言した。

その時、

『そうだ!それでこそ、俺が信頼する男だ!』

と辺りに声が響き渡る。

それと同時に、目の前を光が満たし、まぶたを灼く光に思わず目を閉じてしまう。

そして――

目を開けると、そこはもとの広場だった。

そして、目の前に一人の男の背中があった。

「あ……」

と間拔けた声が、意志と関係なく漏れる。

そして呼ぶ、男の名を。

「戒……斗?」

それに男が振り返る。

「よく戻ってきたな。やはり、お前は強い奴だ。」

そう答える。

ザツクの目指す男、どこまでも強くあろうとした優しき男が。

駆紋戒斗がそこにいた。

「戒斗……どうして?」

「なにやらうるさい奴に叩き起こされてな……だが、今は良い。それよりザツク。」

とザツクを真正面から見て言う。

「今ここで、お前の強さを証明してみせろ……俺もつきあってやる。」

「フツ……ハハハハ……そうだな、じゃあやろうぜ。俺達二人でな。」

と笑いながら片目をつむってみせる。

「あいつの仕掛けの種はもう分かってる……あとはこいつが使えるかだな……」

とインベスを睨みながら、新たな錠前、フルーツトマトロックシードを取り出す。

「それを貸してみろ。」

と戒斗が言う。

「え？あ、ああ・・・」

と言われたザックは大人しく、錠前を差し出す。錠前を受け取った戒斗は目を閉じ、集中する。

すると、フルーツトマトロックシードが輝き、黄色から熟したようなイタリアンレッドに色を変える。

「何をしたんだ？」

「この錠前は力のバランスが悪かったから・・・そこに俺の力を注いで安定させた。これで使えるはずだ。」

と説明し、ザックに錠前を放り投げる。

「おっと！・・・そうか、ありがとな。」

「礼はいらん・・・いくぞ！」

「変身!!」

『バナナ!』

『フルーツトマト!』

『ROCK ON!』

『バナナアームズ!ナイトオブスピアー!』

『フルーツトマトアームズ!ブレイジングハート!』

次の瞬間、アームズを装着したザック達はそれぞれのアーマードライダーに変身した。

「すごいなこれ！」

と堪らずザックが言う。

イタリアンレッドのアームズがナックルのベースカラーである黒、

そしてロングゴートのようなマントと相まってチームバロンを想起させる姿になっていた。

「浮かれている暇は無いぞ！」

と戒斗の変身したバロンがバナスピアーを構える。

すると、インベスが触手で攻撃してくる。

「ハッ!この程度の攻撃・・・」

「待て戒斗!それは俺が!」

とバナスピアーで薙ぎ払おうとする戒斗を下がらせ、逆に一步前に出る。

そして拳に意識を集中させる。

すると手につけた手甲型のアームズウエポン、ガントマトレットの真ん中にはめ込まれたブレイズシグナルが光り、拳に炎を纏わせる。

「はあああ!!」

そして炎を帯びた拳を地面に叩き付ける。

するとナツクルの前方に壁のように炎が立ち上がり、触手を全て焼き尽くす。

叫びを上げ、悶えるインベス。

それを尻目にバロンが問う。

「何故、わざわざ焼き払った?」

「ああ、あいつの能力、人に恐怖を見せる能力の発動にはあの触手が大事だからさ。」

幽霊とかの正体はススキとかの不自然な動きが暗示されるからっていうだろ。それと同じさ。複雑に触手を動かして暗示をかけてたんだ。

それにあの煙みたいなガスの効果を合わせてより、解けにくいようにしてたって訳さ。」

とナツクルが解説する。

その時、ようやく落ち着いたらしいインベスが口から光弾を放つてくる。

「だがこれからだ!油断はするな!」

とバロンが言い、バナスピーアーを振りかざしながらインベスに迫る。

光弾を弾き、時には避けながら距離を縮める。

「俺も負けてらんないな!」

とナツクルもトマトフルーツアームズならではの素早さで光弾をかわして迫る。

「ハアッ!」

と二人の声が唱和し槍の先端が、そして拳が炸裂しインベスが吹き飛ばされる。

「まだまだあ!」

と吹き飛んだインベスに追撃する。

時にはバロンが牽制しナツクルが本命の一撃を食らわせ、時にはナツクルが炎を飛ばしそこにバロンが追撃。

今までの2年のブランクを感じさせない見事な連携でインベスを追い詰める。

「さて、仕上げだ！」

「ああ、いくぞ！」

と二人は目配せをしてインベスに向かって走る。

そしてバロンが二回、ベルトのブレードを倒す。

『バナナオーレ！』

さらにエネルギーを纏ったバナスピアーを地面に突き刺す。

するとインベスの足下からバナナの形をしたエネルギー体が幾つも飛び出て、インベスの動きを封じる。

「行け！ザック！」

とバロンが叫ぶと同時に、ナツクルもベルトのブレードを三回倒す。

『フルーツトマトスパークィング！』

「ハアアア!!」

と高く飛び上がり、そのままフルーツトマトの形のエネルギーを纏いキック技『ブレイジングスマッシュ』を決める。

「ギョバアアアアア!!」

と断末魔の叫びを上げ、クトウルフィンベスが爆散した。

—————

変身を解いたザックは、同じく変身解除した戒斗と向き合っていた。

すると戒斗が踵を返し、歩き始める。

「もう、行っちゃまうのか!?!」

とその背中にザックが声をかける。

「ああ、俺はもう死んだ人間だ。いつまでも留まっているわけにはい

かない。」

そう答える戒斗。

そんな彼に、ザックは宣言する。

「俺はいつか、お前の所まで登ってみせる！……だからそれまで待っててくれ！俺がお前と並んで立てるように！」

そんなザックに振り返り

「ああ、楽しみに待っているぞ。」

と笑みを浮かべた。

初めて見る戒斗の笑顔。

それは優しく、そして不敵な彼らしい笑みだった。

そして再び去っていく戒斗。

その背中をザックはいつまでも見送っていた。

—————

そして、ザックと別れた戒斗は今の自分の依り代である御神木の元へやってきた。

「お前には礼を言っておく……」

と目の前の白の少年に言う。

「ふふ、どういたしまして……やっぱり、君は優しいね。」

と御神木の前に立っていた白の少年が微笑む。

「それじゃあ、僕はもう行くね。これからもやることがあるから。」

と白の少年が姿を消す。

そして、雲の切れ間から差し込んだ陽光が御神木を照らす。

その一瞬後には、誰もいない静かな森に戻っていた。

—————

その頃、貴虎は沢芽市にある屋敷の中である人物と対峙していた。

「つまり、第三勢力に関しては何も知らない。」
「ええ、そうよ。アテが外れて残念だったわね。」

と自嘲気味に貴虎と対峙する女性が言う。
琥珀色のロングヘアと少し日に焼けた肌が印象的な美女だ。

服装は和装をアレンジしたようなもので、腰の帯には何と刀が収まっている。

その凜とした声と相まって、女剣士のような凛々しきを感じさせる。

「ならいいんだ。それにそろそろ君の事も皆に紹介したいんだ、蜜華美鈴。」

と言う貴虎に鋭い視線を投げかけ、

「あら、今は仕事の話をしているのでしょうか？ならH・B（ハニー・ベリ）と呼んでくれないと。」

と女性・・・蜜華美鈴は言った。

「では、失礼する。話につき合わせて悪かったな。」

と言い、貴虎は屋敷を後にした。

—————

本部に帰る車の中で、貴虎は思案していた。

「蜜華グループでもないとなると一体誰なんだ・・・」
と呟く。

「まだまだ、調査が必要だな。」

そう結論付け、貴虎は帰路を急いだ。

続く

第10話 アメミトVSデュークII! 魂の交差!

前回までのあらすじ

第三勢力について考えを巡らせる一同。

そんな中、一人焦るザックにA+のロックシードが渡される。

そしてクラックと共に謎のインベスが出現し、十馬とザックに悪夢を見せる。

しかし、それを強い精神力で破ったザックは何故か現れたかつての友、駆紋戒斗と共に新たな力でインベスを撃破した。

—————

ザックの戦いから2週間後・・・

沢芽市の中心部にあるビジネス街に、人々の悲鳴が響き渡っていた。

その原因はすぐに知れた。

逃げ惑う人々の後ろからあちこちを破壊して回るインベスの群れだ。

そして怯える人々に向け、先頭のリーダーインベスが水弾を放つ。

「「うわあああ!」」

と逃げ惑う人々に容赦なく水弾が襲いかかり・・・

反対方向から飛んできた光の奔流にかき消された。

「よしっ!ギリギリセーフだな。」

と光の奔流が飛んできた方向から声がし、マントを翻した青と黄色の人影がインベス達の前に立ちはだかる。

「アーマードライダーデュークII参上つてか。皆さん早く逃げて!」

と言うと同時、十馬が変身したデュークIIはベルトを操作し刃にエネルギーを集中させる。

そして気合と共にエネルギーの刃を放ち、群れの前方の集団を空間ごと両断する。

「た、助かった。ありがとう！」と声をかけてくる人々に避難を促し、改めて目の前のインベス達を睨む。

「さて、そろそろ頼むぜ、貴虎。」

と通信で繋がった味方に合図する。

すると上から滝のように大量の光の矢がインベスの群れに降り注ぎ、群れの大半が消滅する。

「エネルギーを初めから使いすぎだ。少しは温存しろ。」

と上から声がし白のアーマードライダー、斬月・真がデュークⅡの隣に着地する。

「あんたが遅いからだろ。それに敵の頭数もかなり減らせたしさあ。」

「それは結果論だ。もし群れの中にオーバーロードがいたらどうする。」

と口論する二人のアーマードライダーの周りを残ったインベス達を取り囲む。

「まあいい・・・行くぞー！」

「はいはい・・・さて、いっちょやりますか！」

と二人の戦士は背中合わせにインベス達に向き合う。

そしてほぼ同時に、目の前の敵に二人は駆けた。

時には斬撃を浴びせ、時には矢を放ち敵を次々消滅させていく。

「そろそろ終わりにしようぜ！」

「ああ、そうだな。」

と二人は言葉を交わし、ベルトのレバーを一回押し込む。

『レモンエナジースカッシュュ！』

『メロンエナジースカッシュュ！』

するとエネルギーが刀身に集まり、輝く。

「せいやああー！」

「ハアッ！」

と気合と共に放たれた斬撃は残っていたインベスを全て爆散させた・・・

「よし、任務完了か・・・」

と斬月が変身を解き、呉島貴虎の姿に戻り、隣の仲間に声をかけようと視線を向けると・・・

「よし、それでは本部に・・・十馬?・・・おいどこだ!?十馬!」
いつの間にか、十馬の姿が消えていた。

—————

その頃、十馬はビジネス街を走っていた。

「くそっ!さすがにもう閉じてるか・・・」

と一度立ち止まり、その場で毒づく。

そう俺は今、クラックを探していたのだ。

「はぁ・・・やっぱ、焦ってんな俺・・・」

焦りの原因は分かっている。

この前のインベスに見せられた悪夢だ。

(あんなの幻だ・・・と、思いたいけどな・・・)

その悪夢は確実にあり得る一つの可能性であり、十馬にとって最悪の可能性だった。

(今は、できることをやるだけだ!後悔しないように!)

そう決意し、再び走り出そうとしたその時・・・

目の前に突如光が生まれ、声をあげる間も無く俺は光に包まれた・・・

—————

目を醒ますと、そこは光の溢れる不思議な空間だった。

少なくとも先ほど走っていたビジネス街の通りでは無い。

「初めましてだね。龍崎十馬くん?」

と戸惑う十馬の目の前に立っていた人物が声をかける。

神秘的な雰囲気少年だ。

髪は白髪で両目は赤く、白地に金の装飾のローブのようなものを着

ている。

だが、その目からは敵意が感じられず、むしろ親愛の情すら感じられる。

「あ、あんた誰だ？」

「僕は・・・そうだな、この世界に馴染む名前なら・・・そうだ、シャオロンとかでどうかな？」

と目の前の少年、シャオロンが人懐っこい笑みを浮かべる。

「どうかなって言われても・・・つかココどこだ？貴虎とかもいんのか？」

とシャオロンに聞く。

「まず、ここは僕が作った君と話すための空間だ。どの世界軸からも独立してるからクラックは開かないよ。あと、ここにいるのは君だけ。呉島貴虎は今頃探し回ってるかもね。ただ、秘密にしてくれると嬉しいな。」

と笑みを浮かべながら口に指をあて、イタズラっぽくシャオロンが答える。

(あちやー・・・帰ったら説教だなこりや)

と思い、慌ててかぶりを振る。

何というか、そんなことを考えられるほど目の前の少年からは敵意が感じられないのだ。

「・・・あーもしかしてあのバイクをくれたのって！」

「そう、僕からのプレゼント。気に入ってくれたなら良かった。人にプレゼントをするのは1000年ぶりくらいだったから。」

と思いついて聞く十馬にシャオロンが笑顔で答える。

「いやーセンス良かったぜ！1000年ぶりにしてはなかなか・・・ん？1000年？」

と言いかけて、首をひねる。

「ええええええ!!1000年ってどういうことだ!?明らかに外見年齢越えてんだろ!?!」

というか十馬も1000年生きた人間に会ったことはないのよくわからないがとにかくありえない。

「ああ、もう僕は年取らないからね。とは言っても僕の生きていた世界の時間と君たちの世界の時間感覚は違うから、正確には500年くらいかな?」

とシャオロンが笑顔を浮かべたまま平然と言っただけのける。

「って、それより話ってなんだ? 貴虎が探してるってんなら帰らないと。」

と少し急かすように言う。

「ああ、話といっても大したことじゃないんだ。単に君と話したかっただけだから・・・そうだよ、君にとっては迷惑だよ。」

と目を伏せ、少し寂しそうにシャオロンが言う。

「それじゃ、今日はここまで。また会おうね。」

とシャオロンが笑う。

それと同時に、先ほどと同じように光が満ち、思わず目を閉じてしまう。

そして――

目を開けると、そこは先ほどまで走っていたビジネス街の通りだった。

「お、おい!・・・ハア、なんか最近こういうの多いな。」

とため息をつく。

すると、後ろから「十馬!」と呼ぶ声が聞こえる。

「貴虎、わりい。ちよつと気になることがあつてさ。」

「急にいなくなるからどうしたのかと思つたぞ。まあ、見つかったくらいいいが。」

と謝罪する十馬に貴虎が安堵したように言う。

「さて、帰るぞ。これから作戦会議もあるからな。」

「ああ、行こうぜ。」

と二人は帰路についた。

――

そして、本部についた俺たちはここ2週間のクラックの増加傾向についての会議に参加していた。

「さて、ここ2週間でクラックの発生件数は増加している。

それだけでなく、今日貴虎たちが遭遇した群れが示しているのはクラックの安定化だ。」

と司令室の真ん中の椅子に座った葵が言う。

「クラックの安定化？何故そんなことが言える？」

「今回、君らの遭遇した群れはおよそ50体ほどのインベスからなるものだった。

それだけのインベスが通過できるほど、長い間クラックが開いていたということだよ。」

といぶかしむ貴虎に葵が説明する。

「安定化・・・」

と葵の言葉を反芻し、何やら考え込む十馬。

「?・・・まあいいや。つまりこれからの戦いはもっと大変になるってこと！以上！」

と十馬を少し不審に思いつつ、葵が会議を締めくくるように言う。

「よし、とにかく各自、警戒をおこたるな。群れに遭遇したら無理せず仲間に連絡するように。」

と貴虎が注意事項を伝え、皆が解散し始める。

「よし、俺も行くか・・・」

と十馬も出て行こうとする。

すると「待て、十馬。話がある。」と貴虎が止める。

「なんだよ?」

「さきほど、戦闘の後に姿が見えなくなったのは何故だ?」

と十馬に貴虎が聞く。

「いや、怪我してる人いなかなくて。」

「そうか・・・心配なのは分かるが単独行動はなるべく控えろ。」

とごまかす十馬に訝しみながらも貴虎が注意する。

「おう、じゃあな。」

「ああ、気をつけろ。」

と言葉を交わし、十馬は司令室を後にする。

「貴虎、そろそろ十馬くんの過去のことを調べたほうがいいかもしれない。」

と十馬の去った司令室で葵が貴虎に言う。

「何故、今なんだ？」

と不審に思った貴虎が葵に聞く。

「いや、何だか嫌な予感がするんだ・・・」

とモニターに目を向けたまま、葵が不安げに呟いた。

そのころ――

ニヴルヘイムの遺跡の一角に二つの影があった。

「おい、ファフニール。いつまで待たせる気だ？」

苛立った声をあげるのは大柄な体躯の男、テーバイだ。

「もう少し我慢してください。下手に動いて困るのはあなたですよ？」

とそんなテーバイをなだめるようにもう一人の人影・・・知的な印象の男性、ファフニールが言う。

「ああ、くそお！はやくぶっ壊したいんだよお！何もかも！それでしか俺は満足できないんだよお！」

と我慢の限界にきているのか、辺りの岩や崩れかけの壁を壊し始める。

「落ち着いてください。どうせ壊すなら手応えがあったほうがいいでしょう？」

とファフニールがなだめるように言いつつ結界を張り、遺跡へのダメージを最小限に抑える。

「では、こうしましょう。あと一週間以内に指示を出します。そうしたら彼と戦ってもいいですよ。」

と仕方なく提案する。

「一週間か・・・まあいい、いつまでもダラダラ先延ばしにされるよりマシだ。」

とそれを渋々と言った表情でテーブルが了承する。それを横目で確認し、ファフニールがほくそ笑む。

「・・・さて、それでは・・・」

と次なる計画のため、ファフニールはその場を後にした。

そのころ、沢芽市のある通りでは――

「ふんふんふふん♪」

と鼻歌を歌いながら歩くイリスの姿があった。

「え〜と、卵と牛乳とバターは買ったから後は・・・」

と抱えた紙袋の中身を確認していく。

「ジャムにメープルシロップ・・・よし、全部ありますね！」

とガッツポーズをしようとした拍子に紙袋を落としそうになり、慌てて抱え直す。

「十馬が元気になれるように頑張らないとですね！」

と再び歩き出そうとした時、

後ろから突然何者かに組みつかれ、額に指を当てられる。

すると急に意識が遠のき、イリスは路上に倒れた。

――

「はあ・・・」

とため息をつきながら十馬は先ほどのビジネス街を歩いていた。

クラックが安定化してるってんなら同じ場所に出現つてのものもあるよな、と思い、来たが収穫はゼロ。

「でも、諦めるわけにはいかないよな・・・」

そう、自分が諦めれば“彼女”の命は無いに等しいのだから。

「よし、もう手当たり次第探すか！次に端末に反応が来るまで適当に探そう！」

と決意し、バイクの停めてある場所に行こうとしたその時、
ポケットの電話が鳴った。

「ん？誰だ・・・ってイリスか。どうしたんだろ？」
と電話に出る。

「もしもし、イリスか？」
すると

『と、十馬あ・・・』

と今にも泣きそうなイリスの声が聞こえた。

「ど、どうした？何があつた!？」
と聞くと

『はい、そこまで。』

と若い男の声が返ってきた。

「な、何だお前・・・誰だ!？」

『フッフ・・・以前お会いしたフアフニールという者です。』

と男・・・フアフニールが名乗る。

「フアフニール・・・オーバーロードか！イリスをどうする気だ!？」

『まあまあ、落ち着いて。』

彼女を助けなければベルトとロックシードを持って三丁目の廃工
場に来てください。』

とスラスラとフアフニールが言つてのける。

「ふざけんな！どうせ二人とも殺す気だろ?」

『でも、そう言つて見捨てるあなたではないでしょう?』

とフアフニールがあざ笑うように言う。

「ちつ！わかった、わかったから行くまでイリスには何もするな!」

『いいでしょう。あなた一人で必ず来てくださいね?』

と言いつ残し、フアフニールが一方的に通話を切る。

「くそっ！ベルトを渡すわけには・・・でも、イリスを見捨てるわけに
も・・・

ああ、ちくしょう！とにかく行かなきゃ!」

と頭をかきむしり、急いで走りだす。

(ここから三丁目までならすぐだ。バイクを取りに行くまでもないな！)

と考え、十馬はひたすら走り続けた。

—————

そして、しばらく走るとなにやら開けた場所に着く。

「ハアハア……くっ！あと、もうちよいか……」

と一度、息を整え再び走りだそうとする。

するとその時、十馬の足元に突然謎の攻撃が着弾し、足を止めざるをえなくなる。

「うわっ!?!……な、何だってんだ今度は?」

と慌てて辺りを見渡すと、いつの間にか目の前に一人の男が立っていた。

「よお久しぶりだな、龍崎十馬。」

とその男……ダハーカが不敵に笑う。

「だ、ダハーカ!?くっ!なにしに来た!」

「何って?決まってるだろ、戦いにだよ!」

と言つて、ダハーカがベルトを取り出す。

「今はテメエに構ってる暇はねえ!どけ!」

と叫び、俺はダハーカに殴りかかる。

しかしダハーカはそれを余裕でかわすと、お返しとばかりに腹部にパンチを見舞う。

だが、それを読んでいた俺は左足を高く上げ、奴の攻撃を防ぐ。

そして、そのまま左足を踏み込み、奴の顔めがけ蹴りを放つ。

が、それも奴には躲され、カウンターで放たれた裏拳が俺の顔にヒットした。

そしてその勢いそのまま転がり、体制を何とか立て直す。

「くっ!」

唇が切れ血がにじむ口元を拭い、立ち上がる。

「なかなか、キレのある動きだな？心得でもあるのか？」

とダハーカが聞いてくる。

「別に・・・拳法どころか少林サッカーすら見たことねえよ。」

おそらく貴虎との特訓で培われた動体視力と、ダンスで鍛えた瞬発力のおかげだろう。

「少・・・？まあいい、なかなか良い動きだ。これはまだまだ楽しめそうだな。」

と楽しげに言いながらダハーカがベルトを取り出す。

「ちっ！お前、やっぱりファフニールの差し金か!？」

俺から力づくでベルトを奪って、イリスも殺す気なんだろう!？」

とダハーカに向かって叫ぶ。

すると

「何のことだ？イリスとは誰だ？」

とダハーカが訝しんだように言う。

「とぼけんな！お前もファフニールと一枚噛んでんだろ!？」

「だから、何のことだ？そしてイリスとは誰だ？」

とダハーカが首をかしげる。

「本当に何も知らないのか？・・・お前の仲間のファフニールってオーバードロードが俺の仲間をさらったんだ。前にお前が倉庫で襲おうとしてた銀髪の子だ。」

と、ダハーカを睨みながら説明してやる。

「あの時の娘か・・・ファフニールめ、卑怯な真似を・・・」

とダハーカが全身から怒りのオーラを出しながら表情を険しくする。

「なら、貴様に構っている場合ではないな。」

と言い、十馬が向かおうとしていた方向にダハーカが歩き出す。

「おい！どこに行く!？」

「ファフニールの今回の策はあまりに卑劣だ・・・だから、奴を止めに行く。」

とダハーカが言った言葉に俺は驚愕した。

(あいつ・・・悪い奴じゃないのか?)

と一瞬思い、慌てて首を振る。

(いやいや、あいつは一度イリスを襲おうとしてる・・・なら、何で助けよう?)

そして、閃いた。

「おい！待てよ。」

とダハーカに言う。

すると奴が振り返り、「何だ？」と聞いてくる。

「俺に・・・協力してくれないか？」

と奴に提案する。

「フツ、舐められたものだな。貴様の力など借りん。」

と案の定、断られる。

だが、それで引き下がるわけにはいかない。

「頼む！イリスは大切な俺の仲間なんだ！一人でも欠けるのが耐えられない、俺の大事なチームの仲間なんだ！」

と必死に頭を下げ、訴えかける。

(何故、この男はそこまで出来る?)

目の前でひたすら頭を下げ続ける十馬を見ながらダハーカは思っていた。

(何故、敵である俺にここまで頼むことができる？自分を落としてまで、仲間を助けようとする?)

渦巻く疑問の中、不意に記憶の中の誰かと十馬が重なった。

「・・・似ているな、・・・に。」

とダハーカが呟く。

そして、頭を下げ続ける十馬に言う。

「いいだろう、今回は利用してやる。」

「ほ、本当か!？」

と頭を上げた十馬に不敵に笑い、

「ただし、全て終わったら勝負してもらおう。それが条件だ。」
と言う。

「ありがとう・・・本当にありがとう。」

と十馬はダハーカにもう一度頭を下げ、そして表情を引き締める。「いい顔だ・・・行くぜ。」

とダハーカが言い、二人は廃工場目指して走り出した。

ーーーーー

そのころ廃工場には柱に植物で縛り付けられたイリスと大量の初級インベス、

そしてファフニールの代行であるベルゼブインベスの姿があった。

「っ・・・もう！離してください！」

と言うイリスに、ベルゼブインベスを中継としてファフニールが話しかける。

『少しは静かにできませんか？うるさくしても逃がしませんよ。』

「っ！いいですもん！十馬は来てくれますから！」

『アハハハハハハ!!そうですねえ、来てくれないと困るんですよ。』と強がるイリスにファフニールが笑いながら言う。

「それってどういうことですか？」

『言う必要はありませんよ。さて、そろそろかな・・・』

とファフニールがつぶやいた時、

廃工場に駆け込んでくる二つの人影が見えた。

「イリス！大丈夫か!？」

と縛られたイリスを見て、十馬が言う。

「十馬!」

とイリスがそれに答える。

『おや？ダハーカ、どうしてあなたもいるんです？手助けですか？』

「ふぎけるな！こんな卑劣な手段を用いるなど、誇りを忘れたか！」

とベルゼブインベスから聞こえるファフニールの声にダハーカが返す。

『誇り、ねえ。私の邪魔をするんですか?』

「ああ、少なくとも貴様の邪魔だけは、絶対するぞ。」

と敵意むき出しでダハーカが言う。

『そうですか・・・なら、手加減はしないでですよ!』

とフアフニールが言い、周りのインベスが二人を取り囲む。

「いけるか? 龍崎十馬。」

「ああ、さっさと蹴散らしてやろうぜ!」

と背中合わせに立ち、ロックシードを構え、叫ぶ。

「変身!!」

『レモンエナジー!』

『ヨモツヘグリ!』

『ROCK ON!!』

『レモンエナジーアームズ!』

『ヨモツヘグリアームズ! 冥界! 黄泉・黄泉・黄泉!』

そしてそれぞれデュークⅡ、アメミトとなった二人は同時にインベスの群れに駆け出した。

デュークⅡはソニックアローを振るい、多彩な剣技でインベス達を蹴散らす。

また、アメミトはブドウ龍砲で牽制し、その隙にキウイ逆鱗で一気に敵を倒していく。

そうして、全ての初級インベスを掃討した二人はベルゼブインベスに向かっていく。

「龍崎十馬! 奴を俺が引きつける間に娘を助け出せ!」

とアメミトが言い、アメミトバイトを振るいベルゼブインベスに猛攻を加える。

「ああ! すまない!」

と礼を言い、イリスの元に駆け寄って植物を切ってやる。

「十馬!・・・ありがとう・・・怖かったです・・・」

「わりい、遅くなった。お前は向こうで隠れてろ!」

と抱きついてくるイリスに隠れるよう言い、自分もベルゼブインベスに向かっていく。

「くっ！たかがインベスに俺が手こずるとは……気をつけろ！こいつはやるぞ。」

とアメミトが言ってくる。

「ああ！確かになっ！」

とソニックアローを振り抜き、ベルゼブインベスを工場の外へ掘場に吹き飛ばす。

「行くぞ！」

「おうよ！」

と工場を出た二人はお互い合図し、共にインベスに向かっていく。アメミトがブドウ龍砲で援護し、デュークⅡが切り込む。

さらにそこにアメミトがキウイ逆鱗を投げ、追い打ちをかける。

攻撃を受け、よろけるインベスを前に俺たちはベルトを操作する。

『レモンエナジースパーキング！』

『ヨモツヘグリスカッシュ！』

そしてデュークⅡが矢で張った結界に、アメミトがキウイ逆鱗で結界を重ねがけする。

そして、ジャンプし、二人同時に放つ合体キック『デッドエンド』をインベスに叩き込む。

二人の合体技をまともに食らったインベスは断末魔の叫びを上げ、爆散した。

「よし、やったな。」

とデュークⅡがアメミトに言う。

「フー！さあ、余興は終わりだ！」

と言い、アメミトバイトを構える。

「やっぱりやるのか……まあ、約束だしな。」

と少し残念そうに言いデュークⅡもまた、ソニックアローを構える。

「ただ、うだうだやるのもつまらねえ。一撃で決めようぜ。」
「いいだろう、それで倒れなかった方が勝ちだ。」
とデュークⅡが提案し、アメミトも承諾する。

そして、デュークⅡはロックシードをソニックアローに装填し、刃にエネルギーを纏わせる。

それに対し、アメミトはブレードを二回倒し、アメミトバイトにエネルギーを集中させる。

二人の持つ武器のエネルギーが臨界を迎え、輝いたその瞬間、全く同時に駆け出した二つの影はそのまま交差し、そしてほとぼしる閃光に包まれた。

光が収まり、採掘場が元の明るさに戻った時、そこには二つの人影があった。

一つは変身が解け、ボロボロになり、それでもしつかりと立つ龍崎十馬。

もう一つは武器を振り抜いた姿勢のまま、微動だにしないアメミト。

そして、膝を折ったのは・・・アメミトだった。

「クツハハハハハハ・・・最高だ、強くなったじゃねえか。」

と変身を解いたダハーカが笑いながら十馬に言う。

「よく言うぜ・・・あんたも十分強いじゃねえか。」

「いや、お前からは決意が感じられる・・・もはや狂気じみたものをな。」
とダハーカが苦笑する。

そんなダハーカに十馬は傷の痛みには耐えながら聞く。

「一つ、質問だ・・・ニヴルヘイムに、“人間”はいるか？」

それに意味深な笑みを浮かべ、ダハーカが答える。

「ああ、いるさ。“人間”なら。」

そしてダハーカが傷を抑えながら歩き出す。

「……もう、行くのか？」

「ああ、ファフニールに聞くことも沢山あるんでな。」

と聞く十馬にダハーカが振り返らず答える。

そして、最後にダハーカが言う。

「お前の強さ、確かに見させてもらった……だが、次は俺が勝つ。首を洗って待っている。」

そして、夕日を背に浴び、歩き去っていく。

その姿が見えなくなるまでその背を見つめ、十馬がふと、呟く。

「ああ、楽しみに待ってるよ。ダハーカ。」

そんな十馬にイリスが駆け寄ってくる。

今にも倒れそうなボロボロの身体をなんとか立たせ、イリスに歩み寄る。

そして、イリスは十馬を支えるように、十馬はイリスを守るように、お互いを抱きしめた。

そんな二人の足元から伸びる一つの影を、夕日が美しく照らしていた。

—————

そのころ、ニヴルヘイムに戻ったダハーカは森の崖沿いを一人、歩いていた。

「くっ……せめてシユバリヤにはファフニールの事を伝えないと……」

とボロボロの身体を引きずり、遺跡を目指す。

すると、頭上から声が降ってきた。

「おやおや？どうしたんですダハーカ。そんなにボロボロで。」

と声の主はダハーカの前に着地すると、優雅に一礼してみせる。

まるで、満身創痍の自分を馬鹿にするかのように。

「ファフニール……！テメエ、よくもあんな卑劣な事を！」

と目の前の男、フアフニールに噛み付く勢いでダハーカが叫ぶ。その劍幕に眉をひそめ、フアフニールが言う。

「いや〜お疲れ様でしたあ。あなたの役目は無事、果たされました。『壁』としての役割がね。」

「『壁』？テメエは何を企んでる!？」

「知る必要はありません。言ったでしょう？役目は終わりだど。」
そう言うなり、持った槍の先から光弾を放ってくる。

「グハア!？」

と満身創痍のダハーカは容易く吹き飛ばされ、ベルトとロックシードがフアフニールの足元に転がる。

「おっと、これも回収しなければ。あなたの命を吸いまくって熟したロックシードを。」

とフアフニールが足元のロックシードを拾い上げ、笑う。

「なにい?」

「だーかーらー、あなたの役目は二つ。『壁』とこのロックシードを育てる事です。」

とフアフニールが続ける。

「そもそも、先ほどたかがインベスごときで手こずったのを、おかしいと思わなかったんですか?」

「まさか・・・命を限界まで吸われていたから・・・なのか?」

「そのとーりー!いやあ、ありがとうございます。後はゆっくり、おやすみなさい。」

と言うと槍の先にエネルギーが集まり、大きな光弾を形作っていく。

「お前は一体・・・何が目的だ・・・」

とダハーカが問いかける。

するとそれに笑みを浮かべ、フアフニールが答える。

「私は、守りたいだけです。『居場所』をね。」

そして光弾が放たれ、吹き飛ばされたダハーカは崖の下へと落下していく。

「さようなら、我が家族の一員。ダハーカ。」
そう言つてファフニールはその場を後にした。

そして、崖の下では――

目を開けると、仰向けに倒れているのがわかった。
全身の痛みは既に麻痺へと変わっている。

視界には木々と、その間から見える星空があった。

「俺は・・・強い奴を見たかったのかな・・・」

あの一際輝く星のような、輝きを持つ者を。

「悪いな・・・再戦は、無理そうだ・・・十馬。」

そう言つて、星空に手を伸ばす。

「済まない・・・見届けてやれないようだ・・・ごめんな、シユバリヤ・・・」

彼の目から、雫がこぼれた。

そして手が力を失い、全身が淡い粒子となり、消えていく。

月明かりの中、ダハーカは安らかに眠りについた・・・

――

そんな場所からさらに離れた遺跡の奥。

花が咲き、月明かりが照らす空間で、“彼女”は泣いていた。

「もう・・・やだよ・・・会いたいよ・・・十馬・・・」

月は全てを、静かに照らしていた。

――

続く

第11話 出現！ 巨大クラック

ダハーカを撃破した一週間後――

十馬は一人、自宅の部屋で寝ていた。

布団を蹴り、すやすやと眠る姿は実年齢より1、2歳は幼く見える。「うぐん」と寝返りを打つと衣服がはだけ、その下・・・包帯に覆われた、痛々しい肌が露わになる。

ダハーカとの戦いで辛くも勝利をもぎ取った十馬だったが、その代償は大きかった。

特に最後の必殺技同士の衝突の際、変身解除してしまった十馬は全身をエネルギー波に殴打され、かなりのダメージを負った。

そして全身打撲の状態になった十馬は貴虎に休むようキツク言われ、こうして自宅で寝ているのである。

「んんん・・・」

と寝返りをもう一度打つと、足がベットの横の棚にガン！とぶつかる

そして棚が揺れ、上にあつた地球儀が腹の上に落下してくる。

「ぐふっ!？」

腹部に母なる星の衝撃を受け、十馬は起きた。

「いたた・・・なんだって朝から地球儀にダイレクトアタックされんだよ・・・レボリューションすんぞこのやろー」

などとわけわからんことを呟きながら地球儀を横に置き、腹をさすりながら起き上がる。

そして顔を洗い、寝癖を整えるためシャワーを浴び、適当に服を見繕ってテレビをつける。

「はあ・・・休んでろって言われてもなあ・・・まあ、まだ全身痛いんだけどさ・・・」

とニュースを見ながら呟く。

ニュースではこの間のビジネス街が立ち入り禁止になると報道している。

本来なら沢芽市全体が封鎖されてもおかしくないのだが余計な混乱を招くとの判断で警戒を呼びかけるにとどめているようだ。

「学校もいつそ閉鎖してくんねえかな・・・このままだと真面目に卒業できないんだけど」

そう呑気にボヤいていると、ピーンポーンとインターホンが鳴った。

「ん？郵便か？」

応対するために玄関までまだ痛みの残るお腹をさすり、ノタノタ歩いてドアを開ける。

すると目の前に綺麗な銀髪が見えたと思った次の瞬間、先ほど地球儀がアタックした箇所に少女がタツクルしてくる。

「とーうーまー！」

「グハアツ!?敵襲!？」

再びの衝撃に悶絶しつつも抱きついてくる少女、イリスを引き剥がす。

「むー、敵襲とはなんですか！お見舞いに来てあげたのに！」

「おう、ただ正直ここ何日かで一番重い一撃だった・・・」

と頬を膨らますイリスの前で腹を抱えてうずくまる俺。

「だ、大丈夫ですか十馬!?!ま、まだ助かる?！」

「そのフリはやめい!！」

と盛大にご近所迷惑しながらイリスを家に入れるのだった。

「とりあえず麦茶でも飲むか?お菓子はあいにくないけど」

「あ、別に気にしないでください・・・あの、それより話があつて・・・」

といつになく歯切れの悪い様子でイリスが俺に座るよう手で促してくる。

促されるまま正面に座るとこちらの目を見て、イリスが口を開く。

「・・・この間は本当にごめんなさい。私のせいで十馬に怪我をさせてしまつて・・・ずっと謝ろうと思つてたんですけど・・・」

そしてとてもすまなそうに頭を下げる。

そんなイリスに一瞬驚いたあと、彼女の頭に手を置き、答える。

「・・・いや、謝らなきゃいけないのは俺の方だ。俺がもう少しお前らのことを考えてやればよかったんだ・・・責任は俺にある」
「で、でもー」

と慌てて否定しようとするイリスを遮り、言葉が続ける。

「お前が悪いわけじゃない・・・それにさ、嬉しかったんだ。あんなことに巻き込まれても相変わらず接してくれるのが。だから・・・巻き込んでごめん。それと、ありがとう」

そしてイリスの手を握り、微笑んでみせる。

「・・・はい！十馬がそう言うならー」

とイリスも嬉しそうに笑い、手をブンブン振る。

その仕草にハハハと苦笑しているとイリスが「あー」と何かを思い出したように玄関の方へ走っていく

そして表に置いておいたのか、手提げ袋を持って戻って来る。

「ん？なんだそれ？」

「今日は十馬のお見舞いのつもりで来たので。というわけでジャーン！今からホットケーキを作りまーす！」

と中から卵や牛乳等ホットケーキの材料をイリスが取り出す。

「前に好きだつて言つてましたし、卵も安かったですから！・・・つてなんですかその嫌そうな顔」

可愛らしく小首を傾げるイリスに俺は湿った視線を注ぐ。

「いや、お前さ。自分の実力わかってる？唐揚げケーキとかフルーツシチューとか山ほど前科あるけど」

「し、失礼な！新たな味の探求です！ふりかけカレーは美味しかったでしょう!？」

「おう、レトルトだしな。ご飯は水多くておかゆ状態だったけど」

「むむむ！見ててください！絶対美味しいって言わせてみせますからー」

と頬を膨らませ、エプロン姿になったイリスが台所に立つ。

「えーと、まずはボウルと泡立て器を用意して・・・」

「おう、がんばれ。あと皿は割るな」

「そ、それはもちろん・・・キヤア！」

とボウルを取ろうとしていた時に振り向いたため、ボウルの下にあった皿が落下し、ガシャーンと盛大な音と共に木っ端微塵になる。

「ご、ごめんなさい！怪我してないですか？」

「俺は大丈夫だけどお前は？」

「だ、大丈夫です・・・本当にごめんなさい」

と申し訳なさそうに謝るイリス・・・まあもう慣れたもんだけどさ。

「はあ・・・よし！俺も手伝ってやる！」

それを見かねて腕まくりをし、台所(皿の破片はもう処理済みだ)に入る。

「え？で、でも十馬はまだ怪我人ですし・・・」

「いいから。それに二人で作る方が俺も暇しないし美味しくできるだろう？」

な？とイリスに提案する。

「・・・わかりました。十馬がそれでいいのでしたら。美味しくできるという点には全力で異議を申し立てたいですが」

「その自信はどっから湧いてくるんだよ・・・まあいいや。一緒に作ろうぜ」

かくして、俺とイリスはホットケーキ作りを始めたのだった。

—————

十馬がイリスの炭化ホットケーキに悶絶している頃、葵は自室でパソコンを操作していた。

「さて、次のロックシードは何にしようかな」

そう言いながら眺めるその画面には幾つもの新しいロックシードのアイデアが映し出されている。

「てかアレを調べるのが先か。よし、じゃあ・・・」

とキーボードを素早く叩き、作業に完全に没頭している。

「珍しく積極的に仕事をしてるじゃないか、葵」

そんな葵にいつの間にか部屋に入ってきていた貴虎が苦笑しながら言う。

「・・・貴虎、人の部屋に入るときはノックくらいしてよ。それが人間のルールだよ?」

「お前はいちいち大げさだ・・・ところで葵、例の新装備はどうなっている?」

貴虎が尋ねると、葵がデスクの下からアタツシケースを取り出し、開く。

その中には無双セイバーから刀身を無くしたような形をした銃が二丁入っていた。

「開発コードUNW-01:戦極凌馬風に名付けるなら『無頼シューター』といったところかな?」

おどけたように肩をすくめ、葵が貴虎にアタツシユを渡す。

「はい、レベル設定もちゃんとしてあるから博士たちの護身用にね」
「確かレベル1で民間人でも使える牽制程度の威力、レベル2で軍用、レベル3でアームズウエポンと同等だったか」

「うん、生身でもインベスと戦えるようになるから応用次第でかなりの兵器になるよ」

自慢げに葵が解説する。

「ここ最近、不自然な次元の揺らぎが観測されている・・・お前も、注意しろよ」

「気になるよねえ。ま、過去にも弱い揺らぎが観測されたりしてることもあるからシステムの不備かもしれないけど」

と、あまり歯牙にかけていない様子の葵とは対照的に貴虎の表情は険しいままだ。

「・・・それでは私はこれを星崎博士に届けに行くが、お前は どうする?」

「ん?僕はやることあるんだ。それが終わったらアレを調整して次のロックシードを作る。あと、寝る」

「・・・わかった、ほどほどにな」

と半目で葵を見てから、貴虎は研究室を後にした。

—————

貴虎が退室してからしばらくした頃、葵はディスプレイを眺めながら黙考していた。

「10年前に起きた行方不明事件、龍崎十馬の優れた戦闘能力と並々ならぬ覚悟、そして小規模ではあるが断続的に起こっていた次元の揺らぎ・・・これらが全て繋がっているとしたら・・・？」

独り言を呟きながら考えるその姿はいつになく真剣だ。

「・・・まあ、こういう詮索とかは好きじゃないから、詳しくは本人にだね」

と、十馬を呼び出すべく、携帯を取り出したその瞬間。

視界が、天井からのランプの光で真っ赤に染まった。

「な！これは!!」

葵が驚くのも無理はない。

この部屋も含め、ヨルムンガルドの地下施設中に取り付けられた非常用ランプは色でレベル分けがなされている。

緑のランプは不測事態による注意喚起、黄色のランプはクラック出現とそれに伴うインベスの被害警告。

そして赤のランプは、全戦力を持ってして当たらなければならない緊急事態である。

「・・・総力戦？でもオーバーロード出現時も区分はイエローだったし、一体何が・・・」

とそこまで言いかけて、頭の中にある可能性が浮かぶ。

「まさか、ここ一週間の不自然な揺らぎはこのためのもの!?クツ！なかなかしたたかじゃないか、オーバーロード君達！」

そして状況を確認するべく、葵は司令室へと急いだ。

—————

そのころ、貴虎は星崎がいるビルに向かうため、車で再開発地区を走っていた。

この地域はかつてヘルヘイムの侵攻時にひどく破壊された。

復興開始当初は再建する予定だったのだが住民たちが他の地域への移住をしたため再建は中止。

そのため、半壊した建物の並ぶゴーストタウンのような有様になっている。

崩落の危険があるため立ち入り禁止であるこの区域を通行できるのは復興局上層部の特権だ。

まあ普通に職権乱用であるが近道なのでいつも使っている。

「無頼シューターか・・・たしかにアイツがつけそうな名前だ」

と、運転しながら新兵器の名を反芻してみる。

そういえば、彼・・・戦極凌馬はネーミングセンスも常人とは違っていた気がする。

自身が製作したことを誇示するかのように最初のドライバーに『戦極』の名をつけたたり、ロックシードのアームズを呼び出す音声も妙に奇天烈だったりといった具合にだ。

だが、自分が使うことになったメロンロックシードの音声は『天下御免』と割とまともだったと思う。

今思えば、あれは凌馬なりのメッセージだったのだろうか。

共に何者も寄せ付けない天下のその先へ・・・神の領域へと行こう、というメッセージ。

しかし、貴虎はそれを拒んだ。

だが、それでよかったと貴虎は思っている。

おかげで自分の弱さ、未熟さ、至らなさに気付けたのだから。

「フッ、こんなことを思うようになるとは私も変わったものだから、そう言つて、十字路を曲がったその時。

目の端に、異常なものが映った。

「・・・？あれは、まさか！」

と急いで車を急停止し、ハザードランプをきっちり出して車を降りる。

そして、先ほど曲がった十字路の正面の通りに立ち、視線を目の前の半壊したビルに向ける。

そこには、ほぼ完全に開きかけた直径12メートル程はあろうかという巨大なクラックが出現していた。

「な・・・これは・・・」

と驚愕のあまり立ち尽くすことしかできない。

これまで確認されたクラックは自然発生のもので最大4メートルほど。

人為的に開いたままにしてあったユグドラシルの地下にあったクラックですら5メートルだ。

その倍以上はあろうかという前例を見ない巨大なクラック。

「しかもまだ完全に開いてはいない・・・だがなぜインベスがいない？
そもそも、なぜ観測システムは気づけなかったのだ・・・？」

とそこまで言っつて、葵と交わした会話を思い出す。

「まさか、ここ一週間の揺らぎはこれを開くためのものだったのか!？」
と言ったまさにそのタイミングでクラックが完全に開ききり、その余波が放たれる。

「クッ・・・とにかく、本部に戻るのが先決だな」

そしてポケットから小型の通信カメラを取り出し、クラックが見えるギリギリの位置に設置する。

そして車に戻ると、充電していた携帯がアラーム音と共に葵からのメッセージを受信したことを知らせる。

それを一瞥し、貴虎はアクセルを踏み込んだ。

—————

そして時を置かずして、全アーマードライダーにこの巨大クラックの情報が伝えられることとなる。

ある者はかつての仲間と談笑していた時に。

ある者は兄の負担を減らすため、現状戦力の分析中に。

ある者は師と特訓をしている時に。

ある者は仲間とのダンスの練習中に
ある者は間借りした社宅で荷物を整理している際に。
ある者は仕事のためにビル内を移動中に。
ある者は仲間の作った炭料理にチャレンジしている際に。

そして、誰もが思った。

今までにない、激戦になると。

—————

それから約30分後、ヨルムンガルドの司令室には、十馬、紘太、光実、貴虎、葵、城ノ内、鳳蓮、ザック、昴の主要メンバーが集まっていた。

「皆、それぞれ情報が入ったと思うが沢芽市東にある再開発地区に巨大なクラックが出現した」

貴虎が言うと同時にモニターに先ほど貴虎が目撃した巨大クラックが映し出される。

「ちなみにこれはリアルタイム映像。さて、この違和感に気付ける人」

のほほんとした様子で葵が皆に聞く。

だがその目は真剣そのもので事態が決して軽いものではないことを物語っている。

「違和感?・・・あ!インベスが登場してないことか!?!」

「ピンポーン!ザックくん正解!何故かクラックが開いているのにインベスが出てきてないんだよね」

とザックの方を向いて腕で大きな丸を作る。

「少しは緊張感を持って・・・さて、話を戻すが何故インベスが出現していないかについてだが、葵」

「ほいほい、じゃあこれを見て」

と促された葵が手元を操作すると先ほどのクラックの画像と波のようなグラフ、そしてサーモグラフィのような図が映し出される。

「まず、この図を見て欲しいんだけど。これはクラックをスキャンしてエネルギーの流れを視覚化したものなんだ。で、これを見るとクラック全体に謎のエネルギーが観測される」

とサーモグラフィのような図がアップで映り、細かいデータが表示される。

「で、それが何？」

「つまり、なんらかの結界のようなものが張られている可能性があるということだ」

と城乃内の問いかけに貴虎が答える。

「でも、何故オーバーロードは結界をわざわざ張ってインベスを出さないようにしているのかしら？」

「確かに、それじゃあくクラックを開いた意味が無いはずですよ」

と皆で考え込む。

「もしかして、奴らはインベスを一度に呼び出したいんじゃないかな？」

と絃太がふと、思いついたように言う。

「・・・そうか！一度に大量のインベスを呼び出して物量で攻めるつもりなのかも！」

「あれ？でもオーバーロードなら任意の場所にクラック開けるはずだろ？なら、インベスががいる場所を狙って大量にクラックを開ければ事足りるんじゃないか？」

「確かに・・・じゃあ何が目的で」

うーんと再び考え出す一同。

「・・・もしかしたら彼らはクラックを“自由”に開くことはできないのかもしれない」

と葵がふと、呟く。

「何？どういうことだ葵？」

「彼らの力には制限があって、連続してクラックを開いたり一度に沢山のクラックを開いたりできないんじゃないかってこと。これならここ一週間はこのクラックを徐々に開いていくための期間だったと予想できるし」

「なるほど……この観測システムは一定以上の揺らぎがなければク
ラックだと判断できない。そこを突かれる形となったわけか」

と葵が述べた仮説に貴虎が納得したように言う。

「葛葉、お前の意見を聞かせてくれ。実際のところ、そういう可能性は
あるのか?」

「ニヴルヘイムの植物は俺たちには制御できなかった。ヘルヘイムと
は勝手が違うってことになるからありえなくもないんじゃないか?」

と紘太が言い、皆もそれで一応納得したようだ。

「さて、それじゃあそろそろ対策の方に話を移そうか。と、その前に十
馬君」

と葵が今まで一言も発していなかった十馬に視線を向ける。

「……何だよ?」

「今回、君の役割は初めから決まっている。君は後衛だ。対オーバー
ロード用の戦力として君と昴君には力を温存しておいてもらう」

「……断る。高みの見物なんて俺は嫌だからな」

そう言って、逃げるように司令室を出て行くこうとする十馬。

そんな彼に向かって、葵は投げかける。

「君は、あのクラックからニヴルヘイムの樹海へと向かうつもりだね
?」

その言葉に一同が騒然となる。

「なーなんだってー!」

「どっかで聞いたようなボキャブラリーはやめなさい坊や! ていうか
シトロンの坊や、あなた正気!」

「何でそんな無茶をしようとするんだよ! 十馬!」

十馬は何も答えようとしない。

そんな彼に周囲を黙らせた貴虎が語りかける。

「……十馬」

とそこまで言いかけて言葉を止める。

それは今の十馬が、かつての弟と重なってしまったからだ。

全てを一人で抱え込み、一度は一線を越えた弟。

それはきつと、貴虎が『自分の中にある人間らしい弱さ』を見せずに、強い兄であろうとしたからではなかったか。

それが劣等感を生み、信頼を捨て、善と悪の境界線を見えなくさせてしまったのではないだろうか。

なら、もしも今あのとときの光実に自分が何か言えるとしたら。

何を言うべきか、意を決し貴虎は口を開く。

「私は、ずっとお前を巻き込んでしまったことに罪悪感を感じていたのかもしれない・・・だが、お前がもし望んで戦うというなら、私はお前の助けになる。それが私の責任であり、私の意思だ。だから十馬、訳を話してはくれないか？」

それでもなお、十馬は黙り込んだままだ。

それを見かねた葵が一言、呟く。

「・・・10年前に沢芽市で起こった行方不明事件」

「っ！」

とその言葉を聞いた瞬間、十馬の目に動揺が浮かぶ。

「やはり、関係していたんだね。さあ、どうする？ 僕のはあくまで仮説止まりだけどなかなか的を射ていると思う・・・できれば、こんな形で皆に知らせたくはない。君自身の口から言わないというなら、僕が代わりに話そう」

と提案する葵を睨んでから、十馬が観念したように息を吐く。

「わかった、話すよ・・・俺の戦いが、全てが始まった10年前のあの日の出来事を」

〈To be continue〉

第12話 明かされる過去

前回までのあらすじ

クラックの出現がピタリと止み、十馬は久方ぶりに平穏な生活を送っていた。

しかし、再開発地区に巨大なクラックが出現。

緊張の走る中、葵は一人先走ろうとする十馬にその理由を尋ね過去を明かしてはどうかと提案するのだった。

「わかった、話すよ・・・俺の戦いが、全てが始まった10年前のあの日の出来事を」

—————

物心がついた時、俺には親がいなかった。

何でも夫婦揃って出かけている時に交通事故で死んだらしい。

それで俺は孤児院で育った。

院長先生とお手伝いの先生が一人、子供が10人程いる小さな孤児院だった。

小さい頃の俺は人見知りで暗い性格だった。

別に親がいなくても悲しかったわけでも、そのせいで性格が歪んだわけでもない。

ただ、何となく本当の自分を誰かに見せるのが怖くて、誰とも仲良くできずにいた。

そのせいで他の奴にからかわれることも多く、友達なんてできつこなかった。

けどある日、新しい子が一人、孤児院に入ってきた。

女の子で名前は藤井真奈といった。

俺と同じように両親を同時に亡くし、親戚もいないとのことでのこに來たらしい。

仲良くしてみようなんて気は全くなかった。
だつてきつとすぐ他の奴と仲良くなつて、俺のことを聞いて、バカにするに決まつてる。

けど入ってきたその日、彼女が俺の目の前に座ってきた。
どうせバカにされるんだろうと思つていた俺は、目を合わせずうつむいたままだった。

そんな俺に彼女が聞いてきた。

「ねえねえ、昨日テレビでやつた恐怖の心霊特集見た？」

「・・・はっ。」

俺は驚いた。人違いでもしてるんじゃないかとも思った。

けれど彼女はじつと俺の方を見ている。

実際、その手の番組は好きで特集も皆がない時に見ていたので控えめに領いた。

すると「やつた！見てる人他にもいた！」と言つて彼女が隣に移動してきた。

それからずっと一人であの心霊写真は偽物だのあのスポットには本当に幽霊が出るだのと話していた。

最初は適当に相槌を打つただけだったが、話しているうちに何だか盛り上がつてしまい、気づけば本当に生まれて初めてなくらいに話すことに夢中になっていた。

彼女の方も、饒舌になる俺に戸惑うような仕草を見せつつも一緒になつて話して笑つてくれた。

一通り話しが終わつて、俺は彼女に聞いてみた。

「ねえ、なんで俺と話そうと思つたの？他にも見てる奴いそうじゃん」
そんな俺の問いに彼女は笑つてこう答えた。

「だつて、みんな君とだけ遊ぼうとしないんだもん。だつたら君と仲良くなればみんなも仲良くできるかなつて。・・・ごめん、嫌だった？」

「いやいや！そんなことないよ。俺、こんな風に人と話したの初めてだったから嬉しくてさ・・・」

と少し恥ずかしがりながら言うと彼女は嬉しそうに笑い、手を差し出してきた。

「じゃあ友達になる？えーと、名前は……」

「十馬……龍崎、十馬っていうんだ」

「そっか！私、藤井真奈っていうの！よろしくね！」

「……うん！」

こうして、俺と真奈は出会った。

それからはいつも一緒だった。

遊ぶのも一緒、ご飯を食べるのも一緒、本当にトイレと風呂以外はいつも一緒って言えるくらいだった。

小学校に上がって、真奈のおかげで性格も明るくなった俺はクラスのみんなども仲良くできて、何もかもが楽しかった。

それも、今思えば真奈がいつも隣にいてくれたからだと思う。

だけど小学校3年の夏、そんな優しい世界は唐突に終わりを告げた。

—————

その日は夏にしては風が涼しかったのを覚えている。

学校が終わってから、帰り道にある公園で遊んで帰ろうと俺が言うと真奈は嬉しそうに頷いて俺についてきた。

それからブランコに乗ったり、滑り台を使って追いかけてっこをしたり、当時ハマっていた特撮ヒーローごっこをしたりした。

気づけばもう夕焼けで空が赤く染まっていた。

「そろそろ帰るか？」

「そうだね。先生達心配性だから遅くなると悪いもんね」

そう言って仲良く手をつないで帰り道を歩いた。

すると、その時。

帰り道の途中にある空き地に、妙なものを見つけた。

「なんだこれ？チャック？」

「それ」はまるで壁にチャックが付いているかのように見えた。その向こう側には何故か不思議な雰囲気のある森が広がっている。

「これ、向こうに行けるのかな」

「や、やめよう？危ないよ」

「大丈夫だって。怖いなら待ってるか？」

「やだ！」

そうして、俺たちは森へと入っていった。

—————

森に入るとまず目に付いたのはそこらじゅうの木からぶら下がっている不思議な木の実だ。

赤と青がまだらになっていて、とても食べられるとは思えない。

「ね、ねえ十馬・・・帰ろうよ・・・」

と袖を引つ張り、本格的に怖がっている様子の真奈の手を取りさらに奥へと進んで行く。

すると遺跡のようなものが目の前に現れた。

「なんだこれ・・・」

そう言って、遺跡の柱に触れた。

その瞬間

遺跡の奥から植物のツルが大量に伸びてきて俺たちに襲いかかってきた！

「うわっ！なんだよこれ！真奈！大丈夫か!？」

「と、十馬ああああ!!」

と声のする方を見ると真奈が植物の波にのまれ、遺跡の奥へと連れ去られていくのが見えた。

「真奈・・・真奈ああああ!!」

と彼女の名前を叫び、植物を振りほどこうと暴れる。すると遺跡の奥から衝撃波のようなものが飛び、俺を吹き飛ばす。

鋭い痛みが体に走り、抵抗することもできずに俺は意識を失った。

—————

「そのあと、俺は空き地に倒れていたところを発見されて病院に搬送された。でも、真奈はどこを探しても見つからなかった・・・誘拐事件だろうって周りの大人は決めつけた!俺の言うことなんか誰も聞いちやくれなかった!・・・だから決めたんだ。俺は俺の手で、真奈をあの森から助け出すって!」

と全てを語り終えた十馬が一同を睨みつける。

「・・・なるほど、通りでニヴルヘイムやヘルヘイムの存在にも驚かなかった訳だ。何しろ自分で体験してるんだから」

と葵が得心がいったように呟く。

「ああ、ヘルヘイムの時はそのためにユグドラシルタワーまで行ったこともあったぜ。まあ結局捕まって、でもその時にあんたらアーマードライダー達に助けってもらったんだ」

「そうか・・・あの倉庫で言ってたのはそういうことだったんだな」と紘太が納得する。

「・・・だから、お前はもう一度ニヴルヘイムに向かうというのか」
貴虎が質問する。

「ああ、俺はそのためにドライバーとロックシードを拾って持っていた・・・そのためにヨルムンガルドに入る決意をした。止めるっていうなら、力づくでも行かせてもらおうぜ」

と瞳に決意をたぎらせ、十馬は宣言する。

「・・・だってさ、皆どうする?」

葵が意味深な視線を十馬に向けてから一同に質問する。

「どうするって……」

「それはもう……ね？」

「はい、決まってるじゃないですか。ね？ 兄さん」

「十馬、お前がどう思うかはわからない。だが私達の考えは一つだ」

「何だよ？ 危ないからやめろって？」

「フツ……いいや、私達はお前に協力する。藤井真奈を取り戻すために、戦おうじゃないか」

「……え？」

「全く、何を驚いてるんだよ。当たり前だろ？」

「そ、そりゃあ危ないとは思うけどよ？ でも、その真奈って子をほつとく訳にもいかないだろ」

「そうね、はじめから事情があるなら言えばいいのに。そんなに私たちが信用できないの？」

「ち、違うんだ！ そうじゃなくて……」

「わかってるよ。でも、もう少し頼ってくれてもいいんじゃない？ つてことさ」

「そうですよ。僕たち仲間なんですから」

「ま、それにニヴルヘイムのデータも収集できるいい機会だしね」

そして紘太が十馬に近づき、言葉をかける。

「十馬、今まで大変だったよな。一人で抱え込んでよ。でも、これから俺たちも一緒だ。絶対に真奈って子を助けてやろう」

仲間たちの優しさに触れ、十馬は自然と涙を流していた。

「……皆、今まで言えなくてごめん。頼む、協力してくれ」

そういつて頭を下げると紘太と昴が肩を叩いて励ましてくれる。

「さて、感動ムードに水を差すようで悪いけど作戦会議してもいいかな？」

としばらくして葵が手を鳴らし周りの様子を伺ってくる。

「あ、ああ悪い、続けてくれ」

と先ほどまで泣いていた十馬も落ち着いたようだ。

「じゃあ始めるよ。まず今回重要なのはクラックが閉じる前に十馬君をニブルヘイムに送り、そして藤井真奈を連れて戻って来させること。ただ、これの一番難しいところは・・・」

「オーバードロードの妨害に遭う可能性が非常に大きいところだな」

「そう、できれば複数人でニブルヘイムに行きたいけれどこちら側の被害も無視できないからね」

と腕組みをして葵が言う。

「じゃあどうするんだ？」

「だからオーバードロードをこっちに引きずり出す。インベスを効率良く殲滅してね」

そして作戦を葵が発表する。

各自説明を受けたアーマードライダー達は決戦のため、司令室を後にするのだった・・・

ーーーー

その30分後、再開発地区のクラックの前には五つの人影があった。

ザック、城乃内、風蓮、十馬、昴のメンバーである。

「よし、作戦通りに始めるか！」

と言ってザック、城乃内、風蓮がロックシードを構え十馬達は一歩後ろに下がる。

「変身!!」

『フルーツトマト!』

『イガグリ!』

『ドリアン!』

『『ROCK ON!!』』

『フルーツトマトアームズ!!ブレイジングハート!!』

『イガグリアームズ!!ミスターニードルマン!!』

『ドリアンアームズ!!ミスターデンジャラス!!』

「よし！まずは俺から！」

とグリドンがベルトのブレードを二回倒す。

『イガグリオーレ!!』

「おりやつ！」

そして地面にイガノコを思いっきり突き刺すとクラックと自分たちを囲むように大量のトゲ型のエネルギー体が出現する。

「よし、次は俺だな！」

と今度はナツクルが拳にエネルギーを集め、地面に叩きつける。

すると先ほどのトゲ全てを炎が包み、あつというまにインベスを閉じ込める檻が完成する。

「よし、これ以後は待つだけだな」

「さくって暴れるわよ！」

「な、なあこれ武器抜いたらエネルギー消えるんだよな？俺、素手？」
「何のために全身にトゲがあると思ってるのよ！ほら、来るわよ！」

そう風蓮が指差す先にはクラックから現れる大量のインベスの姿があった。

檻に戸惑いながらもこちらを敵と見なしたのか一斉に向かってくる。

「来たぞ！絃太！貴虎さん！頼むぜ！」

そう言つてナツクルが他の二人を自分の近くに來させ炎のバリアで包んだ。

—————

その頃、貴虎と絃太はクラックのある通りの左右のビルの屋上にそれぞれ立っていた。

「了解した。いくぞ葛葉！」

「ああ、貴虎！」

「変身！」

『オレンジ！』『レモンエナジー！』

『メロンエナジー！』

『ROCK ON！』

『ジンバーレモン！ハハー！！』

『メロンエナジーアームズ！！』

と、それぞれ鎧武ジンバーレモンアームズと斬月・真に変身し、ロツクシードをソニックアローに装填する。

「いくぜ！」

とソニックアローを上にも構え、大量の矢を放出する全体攻撃『ソニックレイン』を二人同時に放つ。

すると矢は放物線を描きながら通りに溢れるインベスたちに降り注ぐ！

断末魔の声を上げながら爆散していくインベス達。

これが葵の言う『効率よくインベスを倒す方法』だ。

それにしてもと通りを眺めて高虎が一言。

「なかなかにえげつない作戦だな・・・」

—————

次々と爆散していくインベスをスコープ越しに見ながら龍玄に変身した光実作戦通り待機していた。

今、龍玄がいるのはクラックのある通りの向かいにあるビルの屋上だ。

光実が葵に言い渡された役割とは簡単に言うとはサポート役だ。

背後からの不意打ちや飛んで檻から逃げようとするインベスを狙撃すること、さらには方が一他の場所でクラックが開いた場合のヘルプ要員として活動することになる。

そのために新たなA+ロツクシード、マスカットロツクシードを葵から託された。

「そろそろサポートに入った方が良さそうですね」

と武器のマスカットライフルを構えなおし、スコープを覗く。

龍玄マスカットアームズは狙撃専用のアームズだ。

そのために額には新たにバッタの触覚を思わせる二本のアンテナが追加されている。

さらに肩の鎧の隙間からは円筒形のセンサーが伸びており、周囲の大気の動きをキャッチし、自分に近づく敵がいなかかわかるようになってる。

するとインベスの群れの中から何匹かのインベスが羽を広げ、屋上の絼太と貴虎を狙って上昇し始める。

「っ…させない!」

と狙いを定めてトリガーを引き、次々とインベスを撃墜していく。

「よしっ!何匹だって狙い打ってやりますよ!」

とさらに数を増やしていくインベスの群れに向かって再びトリガーを引いた。

—————

次々とクラックから現れるインベスを撃破し続けておおよそ30分。

もはやクラックから現れるインベスは二、三体になっており、もう少しで全滅というところまで来ていた。

「よしっ!…あつ…とっ!10つ…匹い!」

と目の前のインベスをタコ殴りにしながら疲労が色濃く見えるナツクルが残りのインベスに向かっていく。

「無理すんなよザック!」

「そうよっ!私たちに任せなさい!」

とパティシエコンビがベルトのブレードをそれぞれ一回倒す。

『イガグリスカッシュユ!!』

『ドリアンスカッシュユ!!』

そして全身にエネルギーを纏わせグリドンが残りのインベス集団にタックルをかけ、そこにブラーボが追い打ちの斬撃を放つ。

そして残っていた10匹のインベスが爆散し、ようやく全てのインベスを倒し終わった。

「三人とも、大丈夫か？」

「ええ、でもまだクラックは開いているわ。油断はできないわね」と風蓮が言ったその時

「その姿勢・・・悪くないぜ！トゲトゲのおっさん！」

とクラックの方から声が響く。

「ちっ！やっぱり出てきたか・・・テーバイ！」

とクラックから現れたオーバーロード、テーバイを睨みつけ、十馬が叫ぶ。

「おやおや、私は無視なんですか？」

とテーバイの後ろからさらにもう一体のオーバーロードが現れる。

「お前は・・・ファフニールか!？」

「その通り。覚えていただいて嬉しく思いますよ」

と恭しくお辞儀をしてみせるファフニール。

だがその表情は嘲笑に彩られている。

「ちよつと・・・これはキツイぜ・・・」

「ザックは下がってる！ここは俺たちで！」

「ええ！食い止めるわ！シトロンとカラムボルの坊や！クラックの方に行きなさい！」

と満身創痍のはずの三人が果敢にテーバイたちに戦いを挑む。

しかし

「ああ？テメエらに用はねえよ！消えな！」

テーバイが衝撃波を放ち、三人が吹き飛ばされる。
が

「前とは違うんだよ・・・！この脳筋が！」

「十馬の邪魔はっ・・・させねえ！」

「その程度で・・・プロである私を倒せると思ってるの？・・・甘いわよ！このハゲ！」

再び立ち上がりフラフラになりながらもテーバイへと向かっていく三人。

「皆……すまねえ！行こう！昂！」

「ああ、今はそれが一番さ！」

と助けたくなる自分をどうにか押さえ、クラックに向かって全力疾走する。

だが、その前にもう一人のオーバーロード、ファフニールが立ちふさがる。

「そう簡単に行かせるとお思いで？」

そして手に持った槍の先端から光弾を放ってくる。

「うわっ!？」

「クッー！」

と怯む俺たちに次々と光弾が襲いかかる。

「このままじゃ……でも、十馬を行かせなきゃ！」

と昂がベルトを装着しロックシードを解錠、そして流れるような拳動で持つて北斗に変身する。

「ハアッ！」

と手に持った七星刃を振るい、ファフニールに向かっていく。

「な！昂！」

「僕のことはいいいからさっ！早く行って、連れて帰って来なよ！大事ななんだろう!？」

「でも！お前一人じゃ！」

とファフニールに押される北斗に自分も戦おうとする十馬。

「ここは私たちが引き受ける！お前は行け！十馬！」

とファフニールの背中に不意打ちにも近い形で斬撃を浴びせるのは屋上から降りてきた新月・真だ。

さらにテーバイと戦う三人には鎧武が加勢しているのが見える。

さらに龍玄が放ったと思われる援護射撃が加わり、どうにかせめぎ合うことができているようだ。

「皆……すまない……ありがとう！」

そう言つて、振り返らずにクラックへ向かって走る。

クラックは先ほどから徐々に閉じており、もはや半ば閉じかけた状

態だ。

「何!?!」

「チッ!行かせませんよ!」

と二人のオーバーロードが後を追おうとするも周りのアーマードライダーに組みつかれ身動きが取れない。

「うおおおおおおお!!」

全力で走り、どうにか閉じかけたクラックのわずかな隙間に滑り込む。

そしてクラックは閉じ、龍崎十馬は再びニヴルヘイムの樹海に足を踏み入れた。

—————

ニヴルヘイムの樹海にて

「・・・ハアハア・・・っ!ここは・・・」

と周りを見るとあたり一面の樹木に毒々しい果実。間違いない、10年前に迷い込んだあの森だ。

「・・・とにかく、あいつがいそうな場所は・・・あの遺跡か」と視線の先にある遺跡に足を向ける。

最初は遠くに見えた遺跡も歩いてみると以外と近くにあった。

ゆつくりと、気配を殺しながら遺跡の中へと入っていく。

しばらく行くと、広いスペースに出る。

「・・・キレイだ」

と思わずつぶやく。

そこは白い花が咲き乱れる花畑のような場所だった。

「ここにも、こんな穏やかな場所があるなんて・・・」

言いながらしばらく花畑を歩くと後ろに人の気配がした。

「誰だっ!」

そう言っってベルトを装着しロックシードを構え、臨戦態勢になる。

だが、目の前に現れたのは敵ではなかった。

「・・・あ・・・」

と思わず声が漏れ、力を失った手からロックシールドが滑り落ちる。

目の前に立っていたのは少女だった。

白いワンピースタイプの服を着て、髪は腰まで伸ばしている。

背はイリスより少し低いだろうか。

そして彼女は可愛らしいその顔を涙で濡らしていた。

気づけば、自分も涙が溢れていた。

そして、呼ぶ。

二度と呼べないのではないかと一度は思ったその名を。

昔から、誰よりも近くにいてくれた。彼女の名を。

「真奈・・・真奈、なのか？」

その問いかけに泣きながら頷き、彼女もまた、こちらの名を呼んでくる。

「うん・・・そうだよ・・・十馬」

二人は同時にその場から駆け出した。

そして、惹かれ合うように。

そこが、本来自分のいる場所だったかのように。

お互いを強く、強く抱きしめあった。

ト o b e c o n t i n u e

第13話 奪還！

十馬VSシユバリヤ！

前回までのあらすじ

ついに自身の過去を明かした十馬。

彼は10年前、ニヴルヘイムの樹海に足を踏み入れ幼馴染の藤井真奈を植物に連れ去られていた。

それを知り、その上で真奈奪還に協力すると宣言した紘太達に十馬は感謝の涙を流す。

そして繰り広げられる戦いの最中、クラックを抜けた十馬は10年ぶりにニヴルヘイムの樹海へと足を踏み入れる。

そこで十馬は成長した幼馴染、真奈と再会を果たすのだった。

—————

ずっと、寂しかった。

あの日、彼と離れ離れになってからずっと。

見知らぬ世界、見知らぬ異形の者達。

そんなものに囲まれて、もう何年経っただろうか。

普通の人間であれば、とうに狂ってしまってもおかしくないだろう。

それが、まだ8歳の少女ならなおさら。

けれど、彼女の心には支えとなるものが一つだけあった。

最後に見た、幼馴染の少年の瞳。

彼は、必死に自分を助けようとしていた。

『必ず、助ける。心配するな』

目は口ほどにものを言うとはよく言ったものだ。

最後に見た彼の瞳は、確かに自分にそう伝えようとしていた。だから、今まで生きてこれた。

・・・けれど

いつまで待っても彼はこなくて
いつまで経ってもこの理不尽な世界は変わらなくて
もう、半分諦めかけていたその時

奇跡が、起きた。

――

「十馬・・・十馬っ！」

抱きついて、十馬の腕の中で喜びの涙を流す真奈。

そんな真奈を強く、強く抱きしめ俺もまた泣いていた。

「真奈っ！・・・よかった・・・生きててくれて、本当に・・・よかつた」

俺は不安だったのだ。

あの時、気味の悪いインベスに見せられた幻覚。

血に濡れた真奈が、倒れ伏すあの光景。

それは俺が最も恐れ、そして心のどこかで想定していた最悪の結末だった。

でも、真奈は生きていた。

だから、今はそれだけで十分だった。

お互い徐々に落ちてきてきたところで一旦離れると、記憶にあるのとは違う成長した幼馴染の姿がはつきりと見て取れるようになる。

少し癖のある髪は背中まで伸び、少し大人びた雰囲気醸し出している。

大きくなったなと頭を撫でようとしたその時。

「十馬！」

「くっ！」

真奈が叫ぶと同時に、背後に気配を感じ振り向きざまにロックシールドを拾い上げ、真奈を後ろにかばう。

そこには、異形の龍人が立っていた。

光を反射する鎧のような黒い皮膚、頭部の角。

それはまさしく『龍人』と呼ぶにふさわしい姿をしていた。

「・・・マナ」

「っ！」

と龍人が名前を呼び、呼ばれた真奈はビクツと肩を震わせる。

「・・・お前は・・・そいつと行くのか？」

「わ・・・私・・・」

真奈に語りかけるそいつの口調には決して敵意はない。

ただ、どこか寂しそうな雰囲気を漂わせながら真奈に問いを投げかける。

「・・・と、十馬は来てくれたから・・・だから・・・」

後ろに隠れながらも真奈が言う「そうか・・・」と呟き、次に俺を見た。

いつでも変身できるようにベルトを装着し、ロックシードを構える。

そんな俺に龍人は語りかける。

「久しい・・・と言ってもお前はわからないか・・・龍崎十馬」

「何・・・？」

もちろん、俺は奴のことは知らない。

それよりも今はこの状況をどうするか、それだけを考えていた。

（どうする？・・・正直、コイツを相手に勝てる自信は無い・・・）

こうして、対峙しているだけで伝わるプレッシャー。

これまで約一ヶ月間、自分よりも強い強敵たちと戦ってきたからこそわかる。

（コイツは・・・ヤバイ・・・）

今までまともに戦った相手の中で最も強かったダハーカや貴虎をも凌ぐ相手だということは確実だ。

（まずは敵意があるのか確認しなきゃな・・・）

「で、アンタは何が目的なんだ？・・・真奈を引き止めるってんなら容赦しねえぞ」

と相手の目的について探りを入れてみる。

「…いや、マナの判断は尊重しよう。危害を加えるつもりもない…だが」

そう言って手に童話の死神が使うような大鎌を出現させる。

そして瞳に敵意をみなぎらせ、俺を睨みつける。

「お前は…ダハーカを殺した。家族を、俺からかけがえの無い仲間を奪った…それだけは許さん！」

大鎌を振りかぶり迫る龍人。

そんな奴の言葉に俺は衝撃を受けていた。

「な！ダハーカが死んだ！？うそだろ！？」

「とぼけるな！最後にあいつと戦ったのは貴様だろう！」

そして奴が大鎌を振り下ろす。

俺は咄嗟に真奈を抱き上げ、背を向けて逃げる。

奴の鎌の間合いからは完全に抜け出せていた。

なのに

次の瞬間、俺の背中が切り裂かれていた。

「がはっ…!!？」

意識が飛びそうな程激しい痛みが全身を駆け巡り、傷口から血が溢れ出す。

「十馬！」

腕の力が抜け、投げ出された真奈はすぐに駆け寄ってくる。

「…運がよかったな。まともに当たってればお前の体は真っ二つになっていただろう」

そう、冷たい声で龍人が言ってくる。

「ま、真奈…逃げろ…こいつは、俺が足止めする…」

意識をギリギリ保ちながら真奈を後ろに庇い、彼女に逃げるよう言う。

「そんなのやだよ！十馬が死んじゃうよ！」

と泣きじゃくりながら真奈がしがみつく。

そんな俺たちに龍人が近づいてくる。

「償ってもらおうぞ…仲間を殺した罪を…お前の命をもってして

な」

そして大鎌を上段に構え、今にも振り下ろそうとする。

絶体絶命、俺は何もできずにいた。

だが、後ろにいる真奈は諦めていなかった。

「十馬は来てくれた・・・だから、今度は私が・・・！」

そう言い、目を見開く。

するとその目が赤く輝くと同時、四方から植物の蔓が伸びて奴の動きを阻害する。

「くっ！マナ、お前！」

そう叫び、振り払おうとする龍人。

だが植物はどんどんその数を増していき、やがて奴の視界を遮るほどまでに増殖する。

「・・・目障りだ、散れ！」

龍人が命令すると植物は一気に勢いをなくし、バラバラにちぎれ飛んだ。

そして先ほどまでいた二人の姿はなくなっていた。

「・・・マナ、お前を傷つけたくはない・・・だが、龍崎十馬をかばうというなら・・・次は容赦しないぞ」

誰もいない空間でつぶやき、龍人・・・シユバリヤは瞳を閉じた。

—————

その頃、沢芽市再開発地区では未だに激しい戦闘が繰り広げられていた。

「うおりゃあー！」

気迫とともに打ち込まれるナツクルの炎を纏った拳。

それを受け、ダメージを受けながらも銅のオーバード、テーバイは嬉しそうに笑う。

「ハハハ！いいねえ！やっぱり戦いってのはこうでなきゃ・・・なっ！」

と強力な拳をさきほどパンチをした姿勢のまま無防備なナツクルに叩き込む。

「させるか！」

とグリドンがとっさに間に入り込むが衝撃を殺しきれずナツクル共々吹き飛ばされる。

「ザック！城乃内！くそっ！おっさん、二人を頼む！」

そう言っつて鎧武はジンバーチェリーアームズにアームズチェンジする。

そして高速移動しながらテーバイに連続して斬撃を食らわしている。

急接近して斬撃、それに反撃しようとする相手から離れ光の矢で攻撃し体制を崩し、その隙に再び急接近。

ジグザグに移動しているため残像が生まれ、テーバイも少し混乱しているようだ。

(よしっ！あの時の感覚がうまく再現できてるな！)

鎧武が再現しようとしていたのは約1年前、メガヘクスとの戦いで使ったドライブアームズでの動きだった。

メガヘクスですらとらえきれなかったこの動きなら、このオーバーロードにも通用する。

そう考えた上での攻撃だった。

「このまま決めてやる！」

そう言っつてベルトのブレードを二回倒し、無双セイバーを構え二刀流になる。

『ジンバーチェリーオーレ！』

「これで終わりだあ！」

電子音声と共に今まで以上の速さで相手を何度も切りつけ、最後に上段に構えエネルギーのこもった特大の斬撃をテーバイに叩きつける。

衝撃が空気を裂き、音の波となって辺り一帯に撒き散らされる。

立ち込める煙の中、鎧武は静かにさきほど攻撃を放った位置を凝視

していた。

すると煙の中から立ち上がる人影と笑い声が轟く。

「ハハハハハ！最っ高だぜえ！ここまで血がたぎるのは久しぶりだあ！」

身体の各部から赤黒い血を流しながらテーバイが高らかに笑う。

その声は、心の底から湧き上がる歓喜と狂気に彩られていた。

「あれでもダメかよ・・・くそっ！」

ジンバーレモンアームズにチェンジし、果敢に向かっていく鎧武。

だが、さきほどの攻撃で倒しきれなかったところを見る限り、まだまだ勝機は見えそうになかった。

—————

一方、もう一体のオーバーロード、ファフニールの相手にする斬月・真と北斗も未だに勝機を見出せずにいた。

「あらあら、どうしたんです？そんな攻撃では私は傷つきませんよ？」

とまだ余裕綽々のファフニールとは対照的に、二人のアーマードライダーはかなりの窮地に陥っていた。

「くっ！せめて装甲の弱いポイントがわかれば・・・」

「十馬がないこの状況じゃ無理でしょ・・・っ！来ますよ！」

二人が左右に跳躍すると同時、ファフニールの放った光弾が先ほどまで二人のいた場所を大きく抉る。

「強力な攻撃だが・・・当たらなければ意味はない！」

先ほどからしているように迫り来る光弾を回避しながらも矢を次々と放ち、命中させていく斬月。

だがその攻撃も、ファフニールの鉄壁の表皮の前では全く意味をなさない。

「やれやれ・・・学習しないんですか貴方達は？単調でさすがに飽きます」

と矢を真つ向から受け、尚且つ痒くもなさそうにフアフニールが嘆息する。

「そいつはどうかかな？・光実！」

と斬月が不敵に笑う。

次の瞬間、先ほど斬月が矢を当てた位置に遥か彼方から弾丸が三発、連続して命中する。

空を裂き、着弾と共に轟音を響かせる高威力の弾丸がフアフニールに少なからずダメージを与え、姿勢を崩させる。

そして後ろに待機していた北斗がベルトのブレードを三回倒す。

そして居合切りの要領で体をひねり、正確無比の斬撃『流星斬』を食らわせる。

三人のアーマードライダーによる連携攻撃、これにはさすがのフアフニールも無事ではいられない。

そう確信し、斬月がさらに追い討ちをかけるために吹き飛んだフアフニールを追う。

だがその瞬間、フアフニールが突然空中で姿勢を直し、さらには空中に浮遊してみせる。

どうやら結界を空中に張り、そこを足場にして立っているようだ。

「なるほど、いい戦術ですね。あなた方の中にもそれなりの策士がいるようだ・・・けど、残念。私の方が一枚上手でした」

そう言つて手にした槍で複雑な文様を描き出す。

すると先ほど光弾が当たり、えぐれた地面が一斉に光り出す。

それらは丁度、斬月と北斗を囲むように綺麗な円を描いていく。

「つーまずい！・星崎、退避だ！」

円から逃げ出そうと走るがもう遅い。

円からはエネルギーの幕が立ち上り、ドーム状の結界が二人を閉じ込める。

「さて・・・我々もそろそろお暇させていただきましたか・・・テー

「バイもストレス発散にはなったでしょうし」

「そう言つて、ファフニールが地面に降り立ち踵を返す。」

「待て！貴様を十馬の所には行かせん！」

と斬月が走る。

「そう言うと思つてましたよ・・・術式解放つと」

「そう言つてファフニールが指を鳴らす。」

すると結界内に電撃が満ち、二人を襲う。

「ぐああああ!?!」

「ぐつ！があああ!!」

電撃の猛攻を受け、二人が跪くも電撃の勢いは止まらない。

そんな二人を尻目に、ファフニールは先ほど弾丸の飛来した方向を見る。

「・・・なるほど、あそこか・・・」

そして手に光弾を出現させ、遠くのビルに向かって放つた。

—————

遠くのビルから狙撃による支援をしていた龍玄はファフニールが光弾を放つたの見てベルトのブレードを一回倒す。

そしてエネルギーを溜め、エネルギー収束砲『閃龍咆哮』を放つ。

放たれたエネルギーは相手の光弾に命中し、衝突により対消滅した。

相手に隙を与えてはならない。

続けて弾丸を放とうとしたその時。

ビルが突然轟音と共に大きく揺れた。

ついで何かが破壊される音が響き次の瞬間、足元の床が傾いた。

そして足場になっていた屋上や壁面、ビル全体に亀裂が走っていく。

突然のビルの崩落に龍玄は抵抗もできず飲み込まれた。

—————

遠くで崩落していくビルを見ながらファーフニールは笑みを浮かべる。

先ほど彼が放った光弾は特殊なものだ。

放った光弾は龍玄のビーム砲と衝突した。

そして次の瞬間、三つに分裂していたのだ。

そう、先の光弾は『衝撃を受けると分裂する』という特性を備えていたのだ。

そして油断した龍玄の足元で光弾はビルの基盤を滅茶苦茶に破壊し、龍玄をビルごと葬り去った。

横に視線を向けると電撃の立ち込める結界内に倒れ伏し、動かない二つの人影が確認できる。

それを確認して結界を解き、テーバイの元へと向かう。

テーバイは元・始まりの男、葛葉紘太が変身した鎧武と戦っていた。さすがが始まりの男というべきか。

鎧武はテーバイとの戦力差を技術でカバーし、何とか互角に持ち込めているようだ。

「さて、そろそろ引き上げますかね・・・」

そう呟いて光弾を三発、二人の足元に打ち込み距離を取らせる。

そして突然の乱入に少しキレ気味のテーバイを落ち着かせ、鎧武に向き合う。

「・・・それでは、大変お騒がせしました。今日のところはお暇させていただきます。またお会いしましょう・・・」

そう言ってクラックを開き、テーバイを引き連れてニヴルヘイムの樹海へと帰っていく。

次の標的である、侵入者にどんな術式で相手してやろうかを考えながら・・・

—————

フアフニールとテーバイがクラックへと姿を消すのを確認し、絃太は変身を解いてその場に崩れ落ちた。

「ハアツ．．．ハアツ．．．なんて奴らだ．．．」
息を荒げつつ周りの状況を確認する。

城乃内とザックは意識は保っているようなので無事な様だ。
凰蓮も現在は司令室の葵に報告をしているので大丈夫そうだ。
その横を見ると、貴虎と昴がボロボロになって倒れている。

「っ！貴虎！昴！大丈夫か!？」

と近寄り、肩を揺さぶると貴虎が跳ね起きる。

「はっ！．．．私は．．．負けたのか．．．」

「．．．ああ、悔しいけどな．．．」

と悔しげに呟く貴虎に絃太も頷く。

「星崎は．．．大丈夫か？」

隣の昴を揺さぶってみるとさっきの貴虎と同じ様に跳ね起きた。

「どうやら、感電して意識を失っていた様だな．．．」

「なるほど．．．道理で寝覚めが悪いワケだ」

と二人して静電気のせいで大きく跳ね上がった髪を抑えながら言う。
う。

「そうだ！ミッチは!?!ビルが崩れたのは音でわかったんだけど無事なのか!?!」

とビルに視線を向けると向こうから肩を押さえながら歩いてくるボロボロの少年の姿が。

「ミッチ！大丈夫か!?!」

「．．．命はなんとか．．．でも、肩と左目をやられました」

と流血した左目を閉じ、足を引きずりながらも光実が絃太達の元へとやってくる。

「目をやられたか．．．とにかく重傷者は一度本部に戻れ。動けるものは十馬の搜索に向かうぞ」

「わかりました。僕とザック達は一度戻る事にします」

「じゃあ僕と葛葉さん、呉島さんは搜索組だね」

お互いのやるべき事を確認し、アーマードライダー達はそれぞれ

散っていった。

—————

その頃、ニヴルヘイムでは……

「くっそ……血が……止まらねえ……」

「十馬……私のせいで……」

黒い龍人から逃げ、遺跡の壁の影に隠れる形で何とか逃げ切った十馬だったが重傷を負い動けずじまつた。

「くっ……はあっ……はあっ……」

どんどん冷たくなっていく自分の体に恐怖を覚える。

(とにかく出血のせいで体温が下がりすぎて……せめて血を止めないと)

しかし、それとは裏腹に意識が遠のいていく。

そんな十馬に真奈がそつと触れる。

「……ま、な……?」

「ごめんね十馬……ごめんね……でも、助けるから」

そう言って、目を閉じ集中する。

すると真奈の手を伝って温かいエネルギーが十馬の身体に染み込んでいく。

そしてエネルギーの流れが止まり、真奈が手を離す。

「っ?何を……ってアレ?」

何をしたのか問おうとした時、先程との身体の違いに気づく。

「傷が……治ってる?」

さつきまでドクドク血が溢れていた傷口は止血しており、触ると痛みは走るが先ほどより全然いい。

「お前……何したんだ?」

「……意外だね……そこは『何者なんだ』じゃないの?」

と背を向け真奈が言う。

「……お前は藤井真奈だ。それ以外の何者でもない。俺の大事な幼馴染」

染だ」

強く、確信を持って俺は答える。

振り返り、俺と見つめ合う形になる。

「・・・私ね。もう十馬と一緒に居られないんだ・・・」

悲しそうに、不安そうに真奈が言う。

「え？何でだよ？お前だってこんなところにいつまでもいたくないだろ？」

「・・・違うの。いたいとかいたくないとか、そうじゃないの・・・」

「・・・どういうことだよ」

不吉な予感を感じながら真奈に聞く。

「これだけは・・・見せたくなかったんだけど・・・」

そう言つて真奈が瞳を閉じる。

すると、足元から植物が伸び彼女を覆い尽くす。

唾然とする十馬の前で、体を覆っていた植物が徐々に離れていく。

そこには、人ならざる者が立っていた。

白い外皮に覆われた身体は鱗のようにも見える。

頭部には小さい二本の角もある。

まるで、先ほどの龍人と同じ種のものに見えた。

何も言わない十馬に何を感じたのか、龍の少女は自嘲するように薄く笑つて言葉を紡ぐ。

「・・・私ね、もう人間じゃないんだ。〃ココ〃で生きるにはこうなるしかないらしいの・・・だから、もう・・・」

そこまで言つて、言葉を止める。

人ならざる異形の顔。

そこにある二つの瞳から、少女は涙を流した。

「・・・私だつてっ・・・一緒にいたいよ・・・また、院長先生や院の皆、クラスの子達と笑つて生きたいよっ・・・でもっ・・・」

堰を切つたように溢れる涙。

その姿は、少なくとも少女が人の心を宿している証拠だった。

そして泣きじやくる龍の少女を、優しい幼馴染を。
十馬は優しく抱きしめた。

「っ！・・・」

驚き、離れようとする少女を俺は更に強く抱き寄せる。

そして、視線をしっかりと合わせ口を開く。

「・・・俺はお前がどんな姿になろうと拒絶したりなんかしない。見た目なんて関係ない。お前はお前の：優しくて、いつも笑って、ちよつと意地っ張りで、本当は寂しがりやな・・・俺の幼馴染の、藤井真奈のままだ」

そう言つて、笑いかける。

初めて会つた日、彼女が俺に向けてくれたような。

優しく明るい、向日葵のような笑みを。

「で、でもっ・・・私みたいなのがいたら皆きつと怖がるよ!?!・・・きつと、十馬にも迷惑がかかっちゃう・・・孤立しちゃうよ・・・」

「俺は誰かがお前を拒絶しても側にいる。世界がお前を拒絶するなら世界と戦う。一人になんかしらないしならない。お前がいるからな」

そう、強い瞳で彼女を見つめる。

「だから俺はお前とずっと一緒にいる。嫌だつて言われても離れてなんかやらないからな?」

その言葉に、龍人化を解き人の姿に戻った真奈は呟く。

「・・・もう、そんな事言われたら本気にしちゃうよ・・・」

「へ?なんか言つたか?」

「ううん。何でもない・・・十馬・・・」

「何だ?」

「もう、ずーっと一緒にいてくれる?」

「当たり前だろ」

「・・・じゃあ、証拠見せて?」

そして真奈が顔を近づける。

お互いの顔が触れ合うところまで近づいた瞬間。

背後の壁が爆発した。

「きゃっ!」

「真奈!」

爆風に煽られる真奈の手を握り、跳躍。

そのまま壁と距離を取り、背中で真奈を庇う。

粉塵の中から現れたのは先ほどの黒の龍人だ。

「見つけたぞ……龍崎十馬!」

「しつこいな……黒光り!」

そう叫ぶ龍人にこちらも叫び返す。

「真奈、お前クラック開けるか?」

「え?くらつくって、あの裂け目の事?」

「ああ、出来るか?」

「……やる。やった事ないけどやってみる!」

「……じゃあ、任せるぞ。時間は俺が稼ぐ!」

そう言っつてロックシードを構え、龍人と対峙する。

正直、十馬には勝機など見えていなかった。

だが、戦える。

たとえ、これが最後の戦いになつたとしても……

(全身全霊で、戦い抜く!そして、真奈と生き抜く!)

「変身!」

『レモンエナジー!』

『ROCK ON!』

『レモンエナジーアームズ!ファイトパワー!ファイトパワー!ファイファイファイファイファイファイファイファイ!』

そして黄金色の鎧をまとった蒼の騎士は名乗りをあげる。

「アーマードライダーデュークII!恨みはないが守るべきものの為!全霊を持って狩らせてもらおう!」

「・・・龍の王、シユバリヤ。亡き友の無念を晴らすため、貴様を潰す！」

雄叫びをあげ、二人の戦士がぶつかり合う。

デュークIIはソニックアローを放ち、相手の間合いの外から攻撃を仕掛ける。

ソニックアローの側面のスイッチを操作し、対象に当たると爆発するスタンモードから殺傷力を持つ矢の形状をしたエネルギー体として敵を貫くキルモードに移行し容赦ない攻撃を浴びせ続ける。

(葵に感謝かな・・・)

ここにはいない天才科学者に心の中で礼を述べながら絶え間なく矢を浴びせる。

このモード切り替え機能は作戦開始直前に葵が施してくれた措置だ。

10分足らずで作業を完了させた時はさすが天才と拍手をしてしまったほどだ。

(でも、そう簡単に倒せないよな?)

その思考に呼応するように不可視の斬撃が向こうから飛んでくる。デューク固有の強化されたセンサーで空気の流れを感知し紙一重で避け続け、距離を詰めていく。

大鎌を辛うじて避け、デュークIIが斬撃を放つ。

それを鎌の持ち手で受け止め、シユバリヤが胴体に拳を突き出す。

しかしそれを交わしてカウンターのパンチをデュークIIが繰り出す。

それを紙一重で交わし、今度はシユバリヤがハイキック。

一進一退、お互いの気迫に満ちた一撃が何度も繰り返され、空を切る。

(あまり長引くと怪我をしているこつちが不利だ・・・せめて戦闘不能に追い込まなきゃな!)

勝負を決する為、ロックシールドをソニックアローにセットし、強化された刃で斬りつける。

だが龍人・・・シユバリヤはそれを大鎌で受け止め、人を遥かに上

回る膂力で弾きかえす。

だが、その瞬間にもうデュークⅡは次の行動に移っている。ソニックアローからロックシードを外し、ベルトに再装填。レバーを二回引き、今度は足にエネルギーを集中させる。

それを読んでいたのか、弾きかえすと同時にシユバリヤは距離をとり跳躍。

そのままエネルギーを集中させた飛び蹴りを放つ。

二人の異形が繰り出すキックが激突し、一種の力場のようなものを作り出す。

「くっっ！」

「チィッ！」

力が均衡するもお互い一步も譲らない。

「俺は負けない・・・負けてなんていられないんだよ！」

そう叫び、デュークⅡがさらにレバーを数回押し込む。

ロックシードから溢れ出た膨大なエネルギーは制御を離れ、暴走する。

その力は相手だけでなく十馬の中にも流れ込み、灼けるような痛みが全身を襲う。

「ぐっっ！・・・があっ・・・！」

だが、歯を食いしばり、足にさらに力を込める。

「食らええー！」

そしてバランスが崩れ、あまりあるエネルギーは爆発を起こした。

煙が晴れ、中心部に人影が見えるようになる。

地に伏す影と、それを見下ろす影。

地に伏しているのは・・・ボロボロになった十馬だ。

「・・・くっ・・・そっ・・・」

「お前の負けだ。龍崎十馬」

そう言っつて、シユバリヤが十馬を踏みつける。

「がはっ・・・！」

「痛いか？怖いか？苦しいか？……あいつも、ダハークも同じ思いを
していたはずだ！」

足に力を込めると、あばらが折れる音がした。
だがそれでもなお、十馬の眼は諦めてはいなかった。

「諦めの悪い愚か者め……」

そう言つて、足元にあつたベルトとロツクシードを思いっきり蹴り
飛ばす。

それらは勢いをつけ、そして遙か谷底へと消えていった。
それでも、十馬は諦めない。

上体を起こし、真正面からシュバリヤを睨みつける。

「終わりだ……龍崎十馬！」

そう叫び、上段に大鎌を構え振り下ろそうとする。

そんなシュバリヤに十馬は思いっきり皮肉を込めて言う。

「ああ、終わりだ……お前の負けでな！」

そして手に持っていた光の矢を思いっきり、無防備なシュバリヤの
腹部に突き刺す。

「ぐうっ?! 貴様あ！」

「これで……駄目押しだ！」

そしてもう片方の手に隠し持っていた銃……葵に渡された新装備、
無頼シューターを矢にあてがい、何度もトリガーを引く。

銃弾によって加速した矢はシュバリヤの外皮を突き破り、深々と突
き刺さる。

そしてその衝撃でシュバリヤと十馬は共に後方に吹き飛ばされる。

「真奈！今だ！」

「っ……！開いてっ！」

そう叫び、真奈が前方に手をかざすとそこに一人一人が通れるほどの
クラックが出現する。

「帰ろう！二人で！」

「……うんっ！」

そして二人は共にクラックへと飛び込む。

信じる仲間が、家族が、待つ世界へと。

—————

ヨルムンガルドの司令室でクラックの反応を探していた葵はモニターに表示された次元の揺らぎを見逃さなかった。

「っ！見つけたっ！」

そして耳につけたインカムを一番近くにいる貴虎に繋ぐ。

「もしもし貴虎!?!クラックが発生した！座標はそっちに転送したから大至急向かって！」

と大声で指示を飛ばし、息を吐く。

そしてホツとした表情で天井を仰ぐ。

「やれやれ・・・心配させないでくれよ・・・」

その顔には、安堵の笑みが浮かんでいた。

—————

沢芽市郊外のとある空き地に十馬と真奈は倒れていた。

「・・・うう・・・ここは？」

と先に目を覚ました真奈が辺りを見渡す。

するとここが見覚えのある場所だという事がわかる。

「・・・ここって、あの日の・・・」

建物は取り壊され、広々とした空き地になっているがここは10年前に真奈と十馬がああ森に迷い込んだ場所だった。

「帰って・・・これなんだ」

懐かしさに思わず泣いてしまいそうになるが、隣に倒れている十馬に気づき、慌ててやり起こそうとする。

何度揺すっても起きないので呼吸を確かめるため、自分の膝の上に彼の頭を乗せて耳を近づける。

するとスヤスヤという寝息が聞こえてきた。

あまりの呑気さに苦笑してしまう。

そして彼の頭に手を置き、撫でながら呟く。

「ありがとうね．．．私のために今まで頑張ってくれて．．．これから
は、私も一緒に背負うから。君の大事なものも、全部」

その後、貴虎の到着と同時に目を覚ました十馬は真奈の事を説明し、すぐさま医務室に運ばれた。

その時の顔は、傷だらけの泥まみれで滑稽だったけれど。

誰よりも、輝いて、かつこよかった。

番外編 変わりゆく日常

〈1st day〉

『ジローの大冒険』

—————

(むむむ・・・)

とあるマンシヨンの一室で“彼”は一人、思案していた。

(どうしたらアキラを元気にできるかなあ)

と眉根にしわを寄せて考え続ける。

アキラとは彼の同居人にして恩人、葛葉晶のことだ。

最近、また少し元気をなくしている彼女に何かしてあげられることはないか。

それを考えているのだ。

普通に言葉をかけて励ませばいいと思うだろうがそうはいかない。

何故なら“彼”・・・ジローは柴犬なのだ。

(アキラはこの間コウタが帰ってきたときは少し元気になった！よし！アキラにコウタを会わせればいいんだ！)

そうと決まれば早速行動に尽きる。

ジローはマンシヨンのドア(オートロックタイプだが万が一を考えて今日は靴を挟んで半開きにしておいた)を開け、葛葉紘太を探すべく行動を開始した。

その頃、西の川沿いにあるステージではドラゴンロンドの面々がステージの準備をしていた。

「ふう・・・リーダー代理も大変だ」

と一息つくのはドラゴンロンドのブレーキことリーダー代理の淳吾だ。

「確かに、いつもは十馬くんがまとめてくれてるもんね」と隣にリンが座ってくる。

「まとめ役になってみると大変さがよくわかるよ」

「でも、淳吾くんは日頃から皆をまとめてるじゃない？」

「それでも十馬がいるのといないのでは違うよ」

周りで騒ぐメンバーを見ながらため息をつく。

すると、背中に何かがぶつかってきた。

「わわ！なんだ!?!・・犬?」

「犬・・だね。柴犬かな?」

ぶつかってきたのは柴犬の子犬だった。

なにやら焦っているかのようにまた駆け出そうとするのを持ち上げて止める。

「首輪ついてるな。こんなちっちゃいし迷子かも」

「大変！飼い主さん探さなきゃ!」

とあわあわする二人。

一方、思わぬ形で足止めをくらったジローはめちやくちや焦っていた。

(こいつら何で僕を引き留めるんだ?・・ま、まさか！僕を狙う悪の組織の手先だっていうのか!?)

人間でいうと大体小学五年生くらい精神年齢であるジローは少し、思春期特有の病気のケがあるのである。

(早く逃げなきゃ!)

と身をよじり、なんとか少年の腕から抜け出しダッシュでその場から逃走する。

「あ！逃げた!」

「た、大変！者共！追えー!」

「おー!」

「えっ!?!ステージはどうするんですかあ!?!」

ドラゴンロンドのリーダー代理と三馬鹿トリオと最年少優等生は柴犬を追う。

残された観客たちの頭にはハテナマークが飛び交っていた。

(ふう・・・危なかったあ・・・)

路地裏に隠れ、追っ手を巻いたジローは街の中心地へと伸びる大通りを歩いていった。

走って少し疲れたため、道の端にちよこんと座り休憩していると自分の前で立ち止まる人影が。

「こんなところで迷子・・・いや、迷犬か・・・どれどれ」

とジローを抱き上げるのは沢芽市復興局、現地監督兼復興プロジェクト主任の呉島貴虎だ。

(な、なんだろうこの人・・・目つき悪いなあ・・・)

なぜこうも熱い視線を向けられるのかわからず首を傾げる。

すると、貴虎も同じ方向に首を傾げる。

(・・・)

逆にもう一回傾けてみる。

すると貴虎もまた同じ方向に傾ける。

「(・・・)」

静か且つ、シユールな時間が流れる。

(・・・だ、だめだ！耐えられないこの空気！)

身をよじり、ジローは貴虎の手から逃げ出し一目散に走って行った。

「む・・・行ってしまったか・・・飼い主が見つからなければ飼おうと思っただが・・・」

ジローを見送り、少し残念そうにした後、貴虎は何事もなかったかのように再び歩き出した。

(さっきの人はなんだったんだろう・・・)

酸欠でフラフラしながら川辺にたどり着いたジローは喉を潤すべ

く、川に口を突っ込み始める。
するとまたもや近寄ってくる気配が。

(今日は厄日だ……)

そう思いながら気配に振り向く。
年季の入った黒のレザーコートを着た男だった。

メタルのアクセサリを首から下げ、片方の足には何故かプロテクターがつけられている。

見るからに、不審者だった。

(な、なんだこいつ……)

ジローは戦慄していた。

その格好、浮世離れした匂い、物憂げな表情。

全くもってパーフェクトに、かつこよかつたのである。

あまりの感動に動けないでいると男がしゃがんで自分の頭を撫でてくる。

「……お前も、一人か……？」

と男がジローの中で一回は言ってみたいセリフベストテンにランクインしているセリフを言う。

うひょーつと心の中で叫ぶジロー。

そんなジローの首輪に男が気づく。

「なんだ……お前には心配してくれる奴がいそうじゃないか……いいよなあお前は……どうせ俺なんか……」

と、何故だか思考をマイナスに急降下させている男。

だが、ジローが去ろうとした時、男はこちらを向いてこう言った。

「お前の家族……大事にしるよ……」

そう言って少しだけ口角を上げ、笑みを浮かべる男。

思わず敬礼したくなる衝動を抑え、ジローは家族、晶の元へ向かった。

ジローと別れ、川辺で石を弄ぶ男。

そんな彼にもう一人の人影が寄ってくる。

「兄貴！カップラーメン買ってきたから食べようぜ！」

「ああ、ありがとうな弟。お前は何味がいい？」

「俺は味噌がいいかな？」

「じゃあ俺は塩だ」

そうしてオーバーロードの兄弟、ゲオルとギウスは仲良くラーメンをすすった。

(かっこよかったなあ・・・さっきの人)

と思い返しながら旧ユグドラシルタワー前の広場にジローはいた。

(コウタはどこかな・・・?)

てくてこ歩いてみると、なぜか道のど真ん中に器に入った高級ドッグフードが置いてあった。

(・・・罨だ。絶対罨だこれ)

瞬時に見抜き、辺りを見渡す。

案の定、茂みや物陰から複数人の匂いがした。

(さっきのやつらか・・・こんな見え見えの罨に引かかると思ってるのか?)

鼻で笑い、素知らぬ顔で通り過ぎようとする。

が、ドッグフードにもっとも近づき、香ばしい匂いが鼻に入り込んだその時。

くうくうとお腹が音を立てて鳴った。

(・・・ちよつとだけならいいよね?)

そう、これはあくまで生きるためだ。

そもそもきようは走り回っていつもの倍はカロリーを消費しているし、腹が減ってはなんとやらである。

本能に抗える動物など人間も含めてこの世にいるだろうか。いや、いない (反語)

美味しそうな匂いにつられ、ついに一口パクリと食べてしまう。

(う、うまあーい!!)

そのままバクバクと食べ、あっという間に平らげてしまった。

(うまかったあ・・・ハッ!)

満腹になり、満足したところでまんまと罨にかかったことに気づくジロー。

周りを見渡すと先ほど広場で会った面々が網でジローを囲んでいくのがわかる。

(し、しまったあ! くっ! 高さに飛び越えられないし絶体絶命だあ!)

万事休す、そう思い諦めて座り込むジロー。

それを網で囲み徐々に距離を詰めるドラゴンロンドの面々。

すると、救いの声が響いた。

「お前ら、なにやってんだ?」

「「「リーダー!?!」」」

そこに現れたのはこの馬鹿どもの大将、龍崎十馬である。

ついでに後ろには葛葉紘太もいる。

「彼らは何やってるんだ?」

「わかんないけど、うちはこれで平常運転なんスよ。誠に残念なこと
に」

目の前で展開されるシニールな光景に戸惑う紘太としくしく涙を流す十馬。

「ってジローか? 姉ちゃんところから抜け出してきたのか?」

紘太が聞くとジローはそうだと言わんばかりにワンっ! と鳴いた。

「そっか・・・うちの合鍵は持つてるし、送っていいのかな」

「紘太さんのお姉さんの犬だったんだって・・・お前ら、何か言うことは?」

「ご、ごめんなさい・・・」

「追いかけて回してすみませんでした・・・」

「ま、誠にソーリー・・・」

「申し訳ありませんでしたわ・・・」

「止められなくてすいませんでした・・・」

と寒気がするほどの笑顔をかべる十馬にメンバーが震え上がる。まるで雨に打たれたチワワみたいだった。

「じゃ、俺はマンションに行くよ」

そう言つて、紘太が歩き出そうとする。

だが後ろから「待って」と声をかけられた。

「つて姉ちゃん!?なんでここに!?!」

「お昼休みだから一回家に戻ろうと思ったのよ。そしたら向こうが騒がしいしあんたもいるから」

と言う晶の口元には笑みが浮かんでいた。

まるで、久しぶりに実家に帰ってきた弟の世話が焼けるのが嬉しくてたまらないといった様子だ。

「そっか、じゃ俺も一緒に行くよ」

「ありがとう、助かるわ。あ、そうだ。ご飯まだなら食べていかない?」

「じゃあ、お言葉に甘えようかな?それじゃ、十馬に皆!ありがとうな!」

と言い、姉弟仲良く帰り道に行く。

その姿を見て、ドラゴンロンドの面々は笑みを浮かべるのだった。

帰り道、紘太に抱っこしてもらいながらジローは満足そうにしていた。
た。

(アキラも嬉しそうだし、大成功だな!)

そう思いながらニヤニヤしていると晶がジローに顔を寄せる。

「今日はありがとう。頑張つてえらいねジローは」

と言つて頭を撫でてきた。

(ふふん!当たり前前さ!僕はパーフェクトでスーパーな柴犬だもの!)

そう心の中で言つて、今はもう少しこの優しい手のひらの感触に甘えることにした。

—————

〈2nd day〉

『少年少女たちの談話会くboys sideく』

—————

「恋が・・・したいっ!」

ドンッとグラスをテーブルに叩きつけ叫んだのは自称策士、城乃内秀保だ。

「なんで・・・なんで十馬やザックには女の子が周りにいるんだ・・・これがこの世界のバランスとでも言うのかー!」

「おうおう、その調子だその調子。嫌なもんはよ、ゼーンぶ吐き出ししまった方が楽だぜ」

と空になったコップにこどもビールを注ぐのはドルーパーズ店長にして彼女いない歴〃年齢の悲しい男、坂東清治郎だ。

「まったくだよなあ!戒斗さんはわかるぜ!?だってかっこいいもん!でもぶつちやけザックと俺って同じくらいレベルだよなあ!?しかも自分の姉!なんなんだよこのジレンマはあ!」

と同じく叫ぶのはビートライダーズリーダー補佐のペコだ。

意外と炭酸の刺激が強いこどもビールをまるで水のように飲み干している。

他にも各チームの男子たちが一堂に集まり、ドルーパーズを貸し切ってこどもビールを煽っている。

そして天井には『チーム合同!男子会』と墨で書かれた垂れ幕がぶら下がっている。

これは元々ザックが交流を深めるための企画として用意したのだが当の本人が急用で来れず、飲み会のような有様になっている。

最初は仲良く喋っていたのだが話題が恋愛ネタになったことで日頃の鬱憤が爆発。現在に至る。

「なんでレイナちゃんはいつも冷たいのかなあ……最近、素で嫌われてる気がしてきた……」

「大丈夫ですよ！ツンデレって大概当事者から見ればそんなものらしいですからー！」

「いーじゃんツンデレ！うちの女子陣は全くそういう気配ないからね！？」

向こうでツンデレについて語り合っているのはドラゴンロンドのジョーと竜希、元鎧武のラットである。

「ほんとに？本当にツンデレでいいのあれは？デレがないんだけど」

「大丈夫です！レイナさんの性格的に本当に嫌いなら話しかけただけで蹴り飛ばしますからー！」

「そんなにデンジャーなのその子!？」

さめざめと泣くジョーの背中をさすり励ます竜希とその言葉に反応するラット。

その隣では……

「つまり！そのリンという子は君に好意を持っているのだよ！淳吾くんー！」

「はっ!?!いやいや俺とあいつそんなじゃないから！」

「そんなことはない！君たちもそう思うだろう！聖司くんは波人くんー！」

「ほえ？そんなの本人次第だろ？……さて、次は君の番だよ浪人」

「浪人ゆーな！波人だよ！な・み・と！今回こそ負けねーぞ！」

ドラゴンロンドのストッパー、淳吾にチームファイブバードのリーダー、大和士健（おおわし けん）が絡み、さらにその奥ではチームライズGのリーダー、鳳聖司（おおとり せいじ）とチームセブンオーシャンのリーダーであり現役浪人生、浪川波人（なみかわ なみと）がジエンガ対決している。

無視されたことなど気にせずキュピーンと音がなりそうな特撮ヒーロー的ポーズを取りながら健が続ける。

「周りにチャンスがあるのに何故手を伸ばさない！君も羽ばたけ！あ

の鳥のように!」

「暑苦しい・・・あんたは彼女いるの?」

「いないっ!」

「即答!」

そんな二人にハイハイと坂東さんが甲斐甲斐しくコップを満たす。「でもよ淳吾。もしお前にその気があるんならアタックしちまったほうがいいぞ。手を伸ばせば掴めるものを掴まなかったら一生後悔する。だから手を伸ばすべきなんだ」

とさりげなく名言を残し去っていく坂東。

「あの人、結局どういう人なのだ?」

「さあ?ただ有名人の秘書やってたとか秘密組織の幹部だったとか説は色々あるみたいだけど」

仲良く首をかしげて二人はグラスを煽った。

そして、おもむろに店内のテーブルの上に城乃内が高らかに叫ぶ。

「諸君!今まで諸君と話してよくわかった!俺たちには恋が、熱くその身を焦がせる恋が必要だ!そこで提案する!次はぜひ!男女混合で親睦会をしようではないか!ウイスキーボンボン!王様ゲーム!何でもありで!」

策士の宣言に淳吾と竜希以外の男子がうおおお!と雄叫びをあげる。

さりげなく坂東さんも参加していた。

そんな熱狂から少し離れ、淳吾と竜希はおとなしくこどもビールを飲んでいた。

「・・・そんでさ。竜希は好きな人とかいるの?」

「へえっ!?な、なんですかいきなり!」

「ははは、いや別に深い意味はないけどさ。我らが弟分ももうそんな歳なのかな〜と思って」

「むむ・・・なんか馬鹿にされた気が・・・でも好きな人はいませんよ。

チームの皆さんのことは大好きですけどね」

「そっか・・・なあ、俺ってリンのこと好きに見える？」

「ふえっ!? そうですね・・・仲よさそうだなくとは思いますが」

「・・・そっか・・・よしっ! まあでも気長に行くか!」

「なんかよくわかんないですけど頑張ってください! 応援します!」

「ありがとうな! 竜希!」

ガシツと熱い握手を二人は交わした。

その後、おかしなテンションのまま宴会は続き全員が疲れて眠ってしまった。

後日、散らかした罰として1日店の手伝いをさせられる羽目になったがそれはまた別のお話。

—————

〈3rd day〉

『少女少女たちの談話会くgirls side』

—————

全ては、女子会にありがちなこの一言から始まった。

『コイバナ、しよっ?』

「・・・というわけで私は十馬と知り合ったんです」

「へえ、それは惚れるわあ。だから好きになっちゃったんだ」

「かつこいいなあ。まさに漫画の中の話だよ」

「は、はい・・・」

と十馬との過去を話し、恥ずかしそうにうつむくイリスに元鎧武のリカとチャッキーがヒューヒューとはやし立てる。

ここはシャルモン本店の中だ。
今日は特別に凰蓮が貸切にしてくれたのだ。

天井には『チーム合同企画！ガールズ☆パーティー』と可愛らしい丸っこい文字で書かれた垂れ幕がぶら下がっている。

ちなみに書いたのは凰蓮だ。

「そっかそっかあ・・・私もそんな恋がしたいよ・・・」

「なにになに？コイバナ!？」

チャッキーの眩きに女子らしく反応するリン。

男子会とは違い、こちらは普通に進んでいた。

「コイバナ・・・たしか想いを寄せる殿方の事を話し合うことですね？」

「おっ！興味やっぱりある？レイナちゃんも乙女だねえ〜」

「はいはい！私たちも混ぜたいです！」

とレイナ、元インヴィットの女子陣、さらに舞も話に食いつく。

そして盛り上がってきたところで凰蓮がケーキを持ってきて口を開く。

「コイバナ、しよっ？」

これほど女性らしい可愛い笑みを浮かべる凰蓮を一同は初めて見た。

「なるほど、つまりイリスちゃんはシトロンの坊やのことが好きなのね？」

「は、はい・・・恥ずかしながら・・・」

イリスの正面の席に座り、凰蓮がイリスと話す。

「しかも！十馬くんに助けられて惚れたんですって凰蓮さん！」

「強い男に惹かれる気持ち・・・私にもよ〜くわかるわよ！私にもね・・・好きな方がいるの。強くて美しい完璧なお方よ」

「凰蓮さんも恋してるなんて・・・ステキ！」

漫画のような十馬とイリスの出会いにキャーキャーする女子5人十オネエ1人。

そんな一同の反応が恥ずかしいやら嬉しいやらでイリスは口をもごもごさせる。

「でも、まだ告白してないんだよね？」

「は、はい。十馬は最近忙しそうにしているので、かえって困らせてしまふと思つて……」

もちろん、彼のことは大好きだ。

だが、自分と付き合えば迷惑になつてしまふのではないだろうか。まともな料理一つ作れない自分に自信が持てないのである。

「まあ確かにあなたには台所に立つてほしくないわね……」

と表情から思考を読み取つたのか凰蓮が苦笑する。

「でもでも！絶対に告白したほうがいいよ！」

「うんうん！舞はどう思う？」

「私に振られても困るよ！でも、十馬くんはイリスちゃんの事を迷惑に思つてないと思うよ」

穏やかな笑みを浮かべて舞が言う。

「そ、そうですね！わかりました！十馬に告白します！……め、目処がたつたら……」

勢いよく言うかと思いきや、顔を赤くして最後は俯いてしまふイリス。

「もうっ！イリスちゃん可愛すぎだよっ純情すぎだよっ！」

「これは私達でイリスちゃんが変な男に釣られないように生涯を持つて見守つていかねば！」

「そうね。私も応援するわ。頑張つてねイリスちゃん」

イリスの宣言(?)に沸き立つ女子陣+オネエ。

沸き立つ一堂にイリスもある提案をする。

「だったら、レイナさんとリンちゃんも応援してあげてください！」

「は、はあっ!?!」

と突然名ざしにされた二人は椅子から身を乗り出した。

「え？二人も好きな人いるの？」

「誰？ねえ誰？」

「も、もしかして淳吾くんとか？あ、ジョーくんもいるよね？」

「ま、まさか！十馬くん!？」

「な、なんだってー!？」

と女子特有の質問攻めを受ける二人も仕返しとばかりに返す。

「で、でも！私見たことありますけど舞さんだって彼氏さんっぽい人いるじゃないですか!？」

「そ、そうですね！確か紘太さんでしたか・・・すごく仲よさそうでしたわ!？」

「えっ！ちよつと！たしかに紘太とは仲がいいっていうか絆があるけど！べ、別に好きとかそういうんじゃない・・・」

「ない、と言い切れるかしら?？」

「うぐ・・・」

「あれー？舞ー?？」

「う、うるさいわねっ！それを言うならチャッキーだって・・・」

とこのようにコイバナとは名ばかりのちよつかいの掛け合いになり、後半は女子会というより小学生の会話みたくなってしまうた。

だが、こうして再びみんなと笑いあえる。

それだけで舞は幸せだった。

そして、皆に話したことで少しでも気持ちになったイリスなのであった。

—————

〈4th day〉

『新しい日常』

—————

ニグル Heim から真奈と共に帰還した翌日、真奈は十馬と一緒に自分のことを葵に詳しく説明していた。

「ふむふむ・・・つまり気づいたときにはオーバーロードになっていた

と?」

「は、はい・・・お役に立てなくてごめんなさい・・・」

あまり記憶が定かでなく、オーバーロードにいつなったのかが思い出せない真奈がすまなそうに葵に謝る。

「いいって、仕方ないさ。8歳の時からずっとあんな場所にいたんだ。むしろ、思い出したくないことの方が多いだろう」

「すみません・・・」

「葵もいいって言ってるし、謝らなくてもいいんだぞ?」

何度も頭をさげる真奈に優しく十馬は声をかける。

ちなみに十馬の怪我は本人の驚異的な回復速度と真奈の能力のおかげでほとんど治っていた。

粉碎されたあばらを優先的に修復したが、そこで真奈に限界がきてしまい背中への傷は残ったままだ。

激しい運動をすると傷が開くため、しばらくダンスは禁止となっている。

「・・・よし、じゃあ聞き取りはこんなところでいいかな。今日からは外に出て生活してもいいことになったから」

「・・・!本当ですか?」

「よかったな真奈。じゃあ今日は俺が街を案内してやるよ。10年経って、この街もずいぶん様変わりしたしさ」

「・・・うん!じゃあ、よろしく・・・お願いします」

とわざわざ改まってお願いしてくる真奈。

そんな彼女がたまらなく可愛く思えて、十馬は彼女の頭をなでようと手を伸ばす。

「こほん・・・」

「・・・ハッ!い、今のは違うぞ!べ、別にそういうアレじゃなくてだな!」

葵のせきばらいで現実を引き戻された十馬は慌てて弁解するも葵は聞く耳持たない。

「ハイハイ、イチャイチャノロケごちそうさん。部屋出るときは電気消していいってね」

「・・・？何でだ？」

「寝るから」

「なるほど・・・いくぞ真奈」

葵らしい理由に湿った視線を注いでから、真奈の手を引いて十馬は部屋を後にした。

「さーて、どこから回るか・・・」

地上に出て、辺りを見渡していると服の裾にくいくいと控えめな引力を感じる。

「どうした？」

「・・・あ、あのね・・・じ、実は・・・」

ともじもじしながら真奈が何か言いたそうにもごもごする。

「言ってみろって。何か欲しいとか？」

「え、えーとね・・・あ、あれ・・・」

と指差す方向にはおしやれなブティックが。

「折角だし・・・お、おめかししたいなって思って・・・」

そんなことを上目遣いにほんのりと赤らんだ顔で言ってくる。

なんだこの可愛い生き物と思いながら、冷静になるために般若心経を唱えつつ十馬はブティックに足を向けた。

店に入ると店員がいらっしやいませーと声をかけてくる。

「で？どんな服がいいんだ？」

「え？ちよ、ちよつと待つてね・・・えーつと、えーつと・・・」

目をぐるぐるさせながら店を見渡す真奈。

その様子がおかしくて思わず苦笑してしまう。

「じゃあ店員さんと相談しながら探すか？」

「う、うん・・・」

そして近くにいた女性の店員を呼び女子高生に人気だという服が並ぶスペースにやってくる。

「では、どのような雰囲気にしたいですかー？」

と店員がさつきから十馬の後ろに隠れている真奈に聞く。

「あ……え、と……っ!……」

頑張つて話そうとするが直ぐ服の裾を引っ張り十馬に助けを求め
る。

オーバーロードになつてしまった為か、現在の真奈は対人恐怖症を
持つてしまつている。

十馬が紹介した貴虎や葵は幾分か平気なようだが、まだまだ十馬以
外の人とは話しづらいようだ。

「ほら、言つてみろつて。頑張れ頑張れ」

「……えつと……その……か、かわいいものをお願いひまふ!」

と緊張のあまり噛んでしまい、ますます顔を真っ赤にして後ろに隠
れる。

そんな彼女を微笑ましいものでもみるような穏やかな視線で見
てから、店員は幾つかの服を組み合わせて持つてきた。

「今の時期はこんな感じでどうでしょう?」

と言つて店員が渡してきたのはボーイッシュな上着とホットパン
ツ、地の厚いストッキングにショートブーツといったものだ。

「これですか?真奈はもうちょっと女の子らしい格好の方が似合うと
思いますか……」

「い・い・え!お客様の実に可愛らしい女の子らしい部分はこの服で外
見をボーイッシュにすることでさらに際立ちます!ギャップ萌えで
すギャップ萌え!」

息を荒くして詰め寄つてくる店員に若干引きながらも真奈にどう
だ?と提案してみる。

服を店員から受け取つた真奈はしばらく思索していたが、店員に何
かをささやかれ、顔を真っ赤にしてこちらを見た後直ぐに試着室へと
入つて行つた。

試着室に入ってから数分後……

わ、笑わないでねっ!と念押ししてから真奈が試着室のカーテンを
開ける。

「ど、どう・・・かな・・・」

不安げに真奈が聞いてくる。

そんな真奈に俺は正直に言った。

「・・・か、かわいいすぎるぞ・・・!」

あまり女の子が好んで着るような暖色ではなく寒色で纏められた服がボーイッシュな雰囲気醸し出している。

だが、顔を赤くしなれないストッキングの感触に足をすり合わせるその姿はとても儂く、庇護欲をそそられる。

「これが・・・ギャップ萌えか!」

「はいっ!そうです!」

「最高だ!ありがとう!店員さん!」

「はいっ!私もいいもの見られましたっ!」

ガシツと熱い握手を交わす二人。

そんな二人を前に真奈はどうしたらいいかわからず、オロオロするしかなかった。

その後、寒いので服に合う色のマフラーを買って二人は店を出た。

去り際、グツ!と親指を立ててくる店員さんに十馬もまたグツ!とサムズアップで返した。

真奈は小さく手を振っていた。

「さてと・・・次はどこに行くか・・・」

とマップを広げ、スポットがないか探す。

「この辺でいうと・・・あ、そうだ・・・」

地図にある名前を見つけ、真奈に見せる。

そこには『沢芽ハッピーランド』と書いてある。

「これって・・・?」

「そ、遊園地だ。行くか?」

「・・・うんっ!」

そうして二人は手を握ったまま、遊園地に向かった。

しばらく歩くと遊園地の入口が見えた。

「・・・遊園地、初めてだよ・・・十馬は何回くらい来てるの？」

真奈が何気なく聞く。

真奈は知っている。もう十馬には自分以外にも大事な仲間がたくさんできていることを。

だから、その人たちと一回くらいは遊園地に来ているだろうと思っただのだ。

だが、十馬の答えは真奈の想像とは違っていた。

「いや・・・俺も実は初めてなんだ、遊園地」

「え？てつきり何回か行ってるのかなりって思ってたけど・・・」

「そんなことないさ。だから・・・今日は初めて同士、楽しもうぜ？」

「・・・うんっ！」

門をくぐった後はあつという間だった。

コーヒーカップでははしゃいだ真奈が思いっきり回転させて二人揃って酔った。

ゴーカートでは恥ずかしそうにしながらも二人乗りで楽しんだ。

ジェットコースターでは十馬が情けない声を出して真奈を笑わせた。

意外にも真奈がシューティングゲームが得意だということがゲームコーナーで判明し、十馬の神がかったクレイニングゲームの腕前でぬいぐるみを取ってもらった。

お化け屋敷ではびびった真奈がお化け役をノックアウトし、二人で平謝りした。

メリーゴーランドは思ったより楽しくなくてただ恥ずかしいだけだった。

「わあ・・・」

もう日は暮れ、観覧車に乗りながら真奈が綺麗な夜景を見て感嘆の声を漏らす。

「そうだな・・・綺麗だ・・・」

とそれに賛同するように十馬が呟くと何故か真奈がポツと顔を赤くした。

本当に、気持ちが悪く表情に出る少女である。

その様子がおかしくて口元に笑みを浮かべると今度は頬を膨らませてむくつと不満そうに言った。

調子を崩されたといった様子でしばらく膨れていた真奈だったがふと、疑問を口にした。

「そういえば、どうして友達と遊園地に行こうとか思わなかったの？誘われそうなものだと思うけど・・・」

「実際、何度も誘われたよ。でも断ったんだ」

「なんで・・・?」

「・・・覚えてないか？約束したの」

「約束・・・あ・・・」

十馬に言われ、過去の記憶の中からその約束は蘇ってきた。

あれは10年前の、最後に人間として迎えた真奈の誕生日のことだった。

その日、本当は十馬や院の皆で遊園地で真奈の誕生会をするはずだった。

だがその日に限って風邪を引き仕方なく真奈は皆に楽しんでくるように言い、院長先生もそれで納得してくれた。

でも、十馬は行かなかった。

「・・・ごめんね十馬・・・いきたかったですよ？遊園地・・・」

「・・・別に、お前が行けないなら意味ないし」

「・・・え?」

「俺はさ・・・お前と行きかけたんだ・・・コーヒーカップとかジェツ

トコースターとか・・・一緒に笑って、楽しめたかったんだ」
「・・・」

「だから気にすんな。お前と一緒にいきたいっていうのは俺の駄々なんだからさ」

「・・・ねえ、十馬」

「何だ？」

「来年の誕生日は・・・一緒に遊園地行こうね？」

「・・・ああ、それまでは俺も誰とも行かない。二人で、初めての遊園地を楽しんでやろうぜ」

「うん・・・約束だよ？」

「ああ・・・約束だ」

だがこの約束が叶うことはなかった。

その次の週、真奈はニヴルヘイムに囚われ、十馬は戦いへの一歩を踏み出したのだから・・・

「・・・覚えてて、くれたの？」

「忘れるわけないだろ？それに、今日が何の日かわかってるか？」

「・・・え？」

「11月11日・・・お前の誕生日だ」

「・・・っ！そう、だったんだ・・・カレンダーとか見てなかったから・・・っ・・・」

言葉の途中で真奈は涙を流し始めた。

自分は人ならざるものになってしまったのに、まだ自分をこんなに想ってくれる人がいる。

こんなに、愛してくれる人がいる。

それがわかったからだ。

「で、コレが・・・ほい」

とそんな真奈に十馬が小袋を差し出す。

開けると中には、花の形をしたペアネックレスが入っていた。

「これって・・・！」

「誕生日プレゼント。ペアだからもう片方は俺がつけるけど」

ともう一つ小袋を取り出し、中身を出してみせる。

それは真奈に渡された花のネックレスと合わせられるようにデザインされた蝶を形どったネックレスだった。

そしてそれを首につけて、笑ってみせる。

それに真奈は首元のマフラーを外し、同じようにネックレスをつけることでこたえた。

向日葵のような笑顔が、そこにはあつた。

「ねえ、十馬・・・」

「何だ？」

「また・・・遊園地来ようね」

「ああ、今度はチームの皆も一緒に来るか？」

「うん、それもいいけど・・・」

「わかってるよ。また・・・」

「うん・・・また、二人で来ようね」

そんな二人を包み込むかのように、街の明かりは休むことなく輝いていた・・・

番外編

変わるもの、変わらないもの

〈5th day 〉part noon〉

『変わる日常』

—————

11月12日、司令室に呼び出すなり葵は十馬に告げた。

「とうわけで、真奈ちゃんも十馬くんの家で住むことになったから」

「いやいや待って待って！お前起承転結って知ってる!？」

思わず突っ込んでしまふ十馬に貴虎が実は・・・と補足説明。

なんでもヨルムンガルドの管理下にある旧ユグドラシル社宅に彼女を案内したところ、拒否されてしまったそうだ。

「で、理由を聞いたらお前と一緒にいいとのことだな。お前の家が狭いようなら新しい家を用意するが?」

「いや!だからなんで一緒に住むこと確定!?!いろいろまずいだろ!」

流石に年頃の男女が一つ屋根の下はまずいと思うんですと抗議すると隣にいた真奈が口を開く。

「・・・一緒にいてくれるって約束したでしょ・・・?」

「いや!だからってお前・・・俺男の子!お前女の子!アンダースタン!?!」

「・・・何か、いけないこともあるの?」

「い、いや・・・その、あの・・・う・・・」

10年間もニヴル Heim にいた真奈は感覚が少しズレているところがある。

確かに10年前は孤児院で一つ屋根の下だったし、布団も隣り合わせで寝ていた。

ただ、今はお互い精神はともかく身体は順当に成長している。

十馬だって男の子。女性らしい真奈の身体に興味は全くないと言えは嘘になる。

ただ、向こうは精神年齢ほぼ8歳なのでまったくそういうのを気にしていないのがネックだ。

返答に困り、貴虎と葵の方を見やる。

朴念仁な貴虎は「何か問題か？」というふうに首を傾げ、葵はめっちゃくちやニヤニヤしてこの状況を楽しんでいる。

そして前方を見るとだんだん不安げに瞳を潤ませる幼馴染が。

もう、覚悟を決めるしかなかった。

「だあー！わかった！ただし、経済的援助はしてもらって貴虎！タダでさえ我が家の家計は苦しいんだからな！」

「ああ、そこは大丈夫だ。月々仕送りをしよう」

十馬のやや自分勝手な交換条件をあつさり受け入れる貴虎。

そして真奈は「ほんと!？」と嬉しそうに目を輝かせる。

「はあ・・・まあ汚い家だけどな。お前がいいなら泊めてやるよ」

「・・・ありがとう。ごめんね、なんか」

「いいよ、もうこの際全部面倒見てやるさ」

まかせときんさいと胸をドンと叩く。

「・・・だが十馬。お前の家、そんなに広いのか？学生だとどうしても家賃の安い狭い部屋なのではないか？」

「ああ、家賃は安いけど七畳くらいはあるからな。トイレ、キッチン、

風呂も完備だぜ！」

「へえ、ちなみに家賃おいくら？」

「三万くらいだな。結構いいだろ？」

「三万円？それは安いね、いいじゃん」

「だが、やはりそれなりのバイトが必要なのではないか？」

「おう、お陰で基本寝不足。授業で寝たことないのは体育だけだ！」

「調理実習とかでも寝るんだ・・・」

やはり苦学生だったのかと同情する貴虎にジト目を向ける葵。

結局、月々30万貰って真奈を住まわせることになった十馬だった。

そして荷物を持って真奈は十馬のアパートにお邪魔することに

なった。

階段を上ろうとすると横から「龍崎くん」と声をかけられる。

「あ！木下さん、こんにちは」

「こんにちは。最近忙しそうにしてたから心配してたんだよ。はいこれおすそ分け」

と煎餅の缶を差し出し出てくるこのお爺さんはアパートの大家、木下傑さんだ。

ちなみに下の名前はすぐると読む。

普段からこうしておすそ分けをくれては龍崎家の食費に多大な貢献をしてくれているいい人である。

「おや？そちらのお嬢さんは？」

「・・・っ！・・・あ、の・・・その・・・」

と笑顔で真奈に話しかける木下さん。

その人畜無害な笑みに少し緊張がとけたのか、頑張って自己紹介しようとする。

「え、えつと・・・」龍崎「真奈っていいます・・・十馬は・・・双子のお兄ちゃんで・・・」

「ふあっ!?ちよつと真奈さん!?!」

急に変なことを言い始める真奈を止めようとするも止まらない。

「十馬は・・・小さい頃に離れ離れになって・・・でも、最近また一緒にいられるようになって・・・それで・・・」

それは真実だ。でも真奈さん、いつからあなたは私の双子の妹になったんでしよう？

するとそれに何故か木下さんが涙を流し始める。

「そうかいそうかい・・・感動的な再会じゃないか・・・龍崎くん、いや十馬くん。妹さんと、幸せにね・・・」

「確かに今のは感動ポイントだけど！違うんだって木下さん！てかなんで結婚したみたいになってんだ!?!」

「いいんだよ・・・何も言わなくていい・・・たとえば茨の道でも、おじさんは応援するからね・・・」

「話を聞けええええ！」

そして真奈に飴を渡してから木下さんは去っていった。

「・・・飴ちゃん、おいしい」

「そですか・・・」

なんかここ数時間ですごく叫んだ気がする。

疲れながらも部屋の鍵を開け、真奈を案内する。

お茶を出しながらテーブルを挟んで向かい側に座る。

「そっぴや、なんであんな嘘ついたんだよ?」

「・・・葵さんが、一緒に住むならこっちの方が色々都合いいよって」

「・・・あの腐れニートめ」

絶対嫌がらせだ。今度寝てる間に粗大ゴミに出してやろうかと危険な思考が頭に浮かぶ。

そして適度に部屋の説明をし、ふと時計を見ると10時だ。

「やつべー!ちよつと買い物してくる!」

「・・・え?まだ、お昼には早いんじゃない?」

「今日は10時半から近所のスーパーでタイムセールなんだ!乗り遅れるわけにはいかない!つーわけでちよつと待っててくれ!」

と言うなり玄関を飛び出していく。

「・・・十馬もいろいろ大変なんだ・・・」

と鍵を閉めて部屋に戻った真奈は少し周りを見渡してみる。

中くらいの大きさのテレビがあり、その横の棚にはプラモデルが置いてある。

10年前から十馬がハマっていた人気のロボットシリーズのものだった。

さらにその横のスペースにはやはり10年前からハマっていた特撮ヒーローシリーズのグッズがズラリ。

「やつぱこういうの好きなのは変わってないんだ・・・」

とさらにその横を見やる。

そこには真奈の背丈より少し低いくらいの本棚があり、色んな本が並んでいる。

タイトルからみるに推理小説や雑誌、図鑑などがグループごとに分

けられて並んでいる。

ただ、その中でどうしてもタイトルから内容が想像できないグループがあった。

青や黄色、ピンクに紫といったカラフルな背表紙の本の集団だ。一冊、手に取ってみる。

表紙にはカラーの漫画みたいな女の子のイラストが描かれていた。試しに一ページ開いてみる。

こちらカラーの女の子が何やら扇情的な格好をしていた。

「……み、見なかったことにしよう……お、男の子だもんね？」
内心、動揺しながら本を戻す。

ただ、今度は別の興味が湧いた。

十馬はこういう本を結構買っている。

ならば、この本の中に彼の好みの女性像があるのではないだろうか？

「……」

勝手に読んではいけないと思いつつも手は本棚へと伸びていった。

そして1時間後、真奈は部屋にあった大体のカラフル背表紙の本に目を通し終わっていた。

なんとというか、作品ごとに様々なヒロイン像があり困惑気味だ。

髪の色でさえ黒髪、銀髪、金髪、赤や青など千差万別である。

全体的な傾向でいえばロングヘアで胸が大きいキャラが多かった。

「……」

視線を下方に向け、自分の胸を見やる。

同年代の女性といえよホルムンガルド内では舞くらいだったので平均がどれほどかは分からないがそこまで大きい方ではないだろう。

少なくとも、本の中のキャラ達よりは小さい。

「こればかりはどうしようもないよお……」

少し、悲しい気持ちになる。

ちなみに真奈は貧乳というわけではない。

三次元の平均値びったりといったところだろう。

しかし悲しいかな。今、彼女が比較対象にしているのはフィクションの、現実にはそうそういないレベルの猛者が跳梁跋扈する二次元世界の住人たちなのだ。

「どうすればいいんだろう・・・」

一人、首をかしげヒントを得るため再び真奈は本の山に向かった。

その後、帰ってきた十馬にライトノベルを読みあさっていたのを目撃され、パニックになり好きな胸の大きさについて延々と問いかけることになる真奈だった。

—————

〈5th day〉part after noon〉

『変わらない過去』

—————

「さて・・・午後は何する?」

昼食に作ったオムライスを食べ終わり、満足げに顔を緩ませている真奈に十馬は問いかける。

「え、えーとね・・・十馬が一緒なら、なんでもいいよっ!」

と上目遣いをしながらそんなことを真奈が言ってくる。

「・・・じ、じゃあ!俺の仲間にお前を紹介してもいいか?」

少しドキドキしながら、前々からしようと思っていたことを提案する。

真奈は十馬と共にこちら側で生きることを決めてくれたものの、まだまだ人との関わりに消極的だ。

なら、同年代の友人を作ることですしでも人との関わりを増やせるようにできるのではないかと考えていたのだ。

「仲間って、同じダンスチームの人たち？」

「ああ、最近俺も顔出せてないし、お前も友達作れるかな〜って」

「・・・でも、私・・・」

「大丈夫、いい奴らだから差別なんてしないさ。お前がオーバーロードだってことも秘密だしな」

恐らく真奈は自分が人間ではないことを気にしているのだろう。だが、十馬は思う。

人であるかそうでないかは見た目ではなく、心で決まると。

誰かを思いやる優しい心を持つ真奈は、まぎれもなく人間だと。

「・・・でも」

「大丈夫だ。俺もそばにいる。約束だもんな」

安心させるように真奈の頭を優しく撫でてやる。

すると、少し勇気が出たのか顔を少し明るくする。

「・・・一緒にいてくれるなら、頑張る」

「よし、じゃあ行くか？」

「・・・うん！」

そうして、二人はドラゴンロンドの新本拠地のガレージに足を運んだ・・・

10分後、二人はガレージの扉の前にいた。

ちなみにこのガレージは元はチーム鎧武が使っていたものだ。

現在はビートライダーズが管理していたのだが、ドラゴンロンドが本拠地としていた倉庫が壊れてしまったため譲ってくれたのだ。

ドアを開け、うーっすと挨拶する。

すると中にいたメンバーがそれぞれに声をかけてくる。

「十馬！大丈夫!?!」

「あ！十馬さん！」

「おー！リーダーおひさー！」

「休みすぎですわ。不信任案出しますわよ」

「ま、レイナちゃんおちついて！ね？」

「大変だね、リーダーってのは・・・ってその子誰？」

と淳吾の問いかけに全員の注目が真奈に集まる。

「……っ！」

一方、急に注目された真奈はかなり萎縮してしまっていた。裾を引っ張り、背中に隠れるようにしてひっついていている。

「ほら真奈、自己紹介できるか？」

緊張をほぐすために肩に手をおいて優しく声をかける。

その感触に勇気が出たのか、カチコチになりながら真奈が前に出る。

「……と、十馬の幼馴染のっ！ふじっ、藤井真奈ですっ！……よ、よろしくお願いします！」

緊張で顔は真っ赤でカミカミではあるが、何とか自己紹介ができた。

そして言い終わるとすぐに十馬の後ろに隠れてしまう。

困惑する一同に、えーつとと十馬は追加説明をする。

真奈とは孤児院の頃からの幼馴染で離れ離れになっていたが先日再会できたという事を、うまく誤魔化しながら説明する。

最初は戸惑っていた面々だが、十馬の幼馴染ということに馴染めると思ったのか段々質問をするようになってきた。

「ねね！十馬くんとは何歳くらいから一緒なの？」

「……大体、5歳くらいから……です」

「へー、昔のリーダーってどんなだった？」

「え、えつと……会ったばかりの頃は、静かでした……」

「ねえねえ！この問題解ける？」

「自分の課題くらい自分でやりなさいな……」

戸惑いながらも、興味津々なメンバーたちの質問に答えていく真奈。

そんな光景に、つつい涙腺が潤んでしまう十馬だった。

そして、一同がある程度真奈と馴染めてきた所で十馬はある提案を

するため皆の意識を向けさせる。

何事かと一同がこちらを向くのを確認し、口を開く。

「実は、皆に発表がある！・・・真奈をチームの一員として迎えよう
と俺は思う！」

その発表に、メンバー達はあっけらかんとしている。

「と、十馬!?!聞いてないよー！」

当事者の真奈は突然の宣言に面食らっている。

それもそうだ。真奈はオーバードロードで皆は人間。

正直に言って、真奈は怖かった。

人間が、ではない。

親しい関係になった人に、自分の本当の姿が知られてしまったら。

何よりも、拒絶されることが怖いのだ。

今だって、まだ会ってから30分も経っていない。

そんな余所者を彼らは認めてくれないだろう。

だが、面々が次に言った言葉は真奈の想像と違っていた。

「本当ですか!?!よろしくお願ひしますね!真奈ちゃん!」

「なるほど、わざわざ連れてきたのはそれが目的だったんだ。そんな
じゃま、よろしくね」

「わーい!もつとお話ししようね!」

「よろしくね。ニューメンバーは色々働いてもらうよん」

「・・・パシリにしたら血祭りに上げますわよ。それはともかく、これ
からよろしくお願ひしますね。真奈さん」

「よろしくお願ひします!僕、最年少なんで敬語じゃなくていいです
よ!」

各々、祝福の言葉を並べ真奈に笑顔を振りまいてくれる。

そして一同の後ろで十馬が「な?大丈夫だって言っただろ?」と優しく
笑う。

また泣いてしまいそうになるのを堪え、真奈は笑顔を浮かべた。心の底から、嬉しそうな笑顔を。

「それじゃ、ちよつと俺はある人を呼んでくるから真奈は皆と留守番してってくれるか？」

皆と打ち解けようと頑張る真奈に十馬は告げる。

「・・・うん。待つてるね」

一瞬、不安そうな顔をしたが、すぐにそれを引つ込める。

そんな真奈に偉いなど一度だけ頭を撫でてやり、十馬はある場所に向かった。

十馬が行ってしまったって、少し寂しそうにする真奈にイリスが話しかける。

「やつぱり、十馬といると落ち着きますか？」

「ふえっ？・・・そう、ですね・・・落ち着き、ます」

「ふふっ、別に敬語じゃなくてもいいんですよ？私のこれは癖ですけど」

「・・・は、はい！・・・い、イリス・・・ちゃん」

と話す二人に他のメンツも参加し始める。

そして、話題はイリスと十馬の出会いに発展する。

「・・・って出会い方なんだよ！素敵じゃない？」

「そ、そうですね・・・でも、十馬らしいと思います」

「そうだよね。リーダーって、困ってる奴をほっとけないタイプだからさ。って、言うまでもないか」

淳吾がしみじみと、何かを思い出すように言う。

それを聞いて、真奈はあんな気がなくなった。

「・・・そういえば、皆さんはどうやって十馬と知り合っただんですか？」
その問いに、全員がキョトンとした表情を作る。

「そういえば、お互い話したことなかったかもね」

「この際、話しちゃうか？」

「いいねいいね〜！素敵だね〜！」

じゃ、まずは俺から！とジョーが話し始めた。

ジョー・・・城ヶ崎若葉は、貿易商として世界を転々とするの父の子として産まれた。

父は全てにおいて厳しく、ジョーはそんな父が嫌いだった。

ダンサーを目指したのも、父のようなお堅い職業につきたくないからだった。

そして、沢芽市にやってきた。

しかし、周りのチームから勧誘を受けることはなかった。

それもそのはず。まともなレッスンも受けたことのないジョーの踊りは完全に自己流のもので、周りに合わせられるものではなかった。

せつかく家を出てきたってのにこの有り様かよ、とジョーは悔しかった。

そして、毎日目立たない場所で、ひたすらに自分の踊りをし続けた。

そんなある日、いつものように踊っていると一人の少年が話しかけってきた。

「お前の踊り、面白いな」

バカにしてるのかとジョーは切れた。

だが、少年は笑ってこう言った。

「バカになんてしてないさ。むしろ好きだ、そういうの。自分を曲げない奴が好きなんでね」

そして自分の隣に立ち、音楽に合わせともに踊りだした。

ジョーは驚いていた。

少年はジョーの動きについてきた。

そればかりか、アドリブも交えさらに踊りを高い次元のものへとしていた。

音楽が終わり踊りきった後、少年は言った。

「俺は龍崎十馬。チームを新しく作ろうと思ってるんだ。どうだ？入ってみる気、ないか？」

ジョーは初めて、仲間と呼べる存在を知った・・・

「てなとこかな。ちなみに、親父とは仲直りしてるよん」

語り終えたジョーがニカツと笑う。

「やっぱり・・・出会いはダンスだったんですね」

「そそ、そういえばレイナちゃんは？ダンスは基本しないよね？」

「わ、私ですの？私は・・・」

と、今度はレイナが語り始めた。

園咲麗奈は名家、園咲家の分家の娘として産まれた。

家は本家ほどではないものの、かなりの財力があつた。

有り体に言えば、お嬢様だったのである。

そしてある日、当時16歳のレイナはこっそり街に繰り出した。

しかし、地理感がない上に方向音痴の彼女はすぐ迷子になってしまった。

そこに通りかかったのが十馬だった。

「よっ、大丈夫か？道案内なら俺がするぜ？」

そして、無事屋敷にたどり着けたレイナは十馬に、何か恩返しをさせてくれと申し出た。

すると、十馬は笑ってこう言った。

「じゃあ・・・俺の友達になってくれよ。俺、地味に友達少なくてさ」
そんな彼を交に思いながらも、レイナは友達になることを了承したのだった・・・

「・・・で、それ以来チームにも顔を出すようになって今に至る、というわけですわ」

「ほ、方向音痴なの・・・すごく親近感湧きます・・・」

「なんていうか、レイナちゃんらしいね」

「うっ、うるさいですわねっ！じゃあリンはどうなんです？」

「私？私はね・・・」

と、今度はリンが十馬との出会いを話し始めた・・・

寺田凜は元はビートライダーズのチームの一つ、蒼天の見習いメンバーであった。

しかし、3年前の事件のせいでチームは解散。

他のチームも同じような有様になった。

だが、ザック率いる新生ビートライダーズに加わる気にはなれなかった。

なんとというか、新しいものを求めていたのである。

そんな時、正式なチームとして登録していないため、ランキングには乗らないがスゴ腕だという男三人のチームがいると噂で聞いた。

リンは思った。

これこそ、自分の求めていた新しいものだ。

そして、そのチームのまとめ役だという少年・・・十馬にチームに加わりたいと話した。

リンはダンスの腕前はかなりのものだった。

だが、それが逆に女だてらにと言われ、蒼天では少し孤立していた。

だが、そんなリンに十馬は笑ってこう言った。

「全然大歓迎だよ！てか、そんなに上手いなら教えてくれないか？うち、頑固なやつしかいなくて中々上達しないのよね」

自分よりうまいということを簡単に認め、そして全くそれを気にする風もない。

十馬のそんなところに惹かれ、リンはチームに加入。チームのエースとなった……

「……って感じかな？大したもんじゃないでしょ？」

「でも、十馬さんらしいです！」

「うんうん。さてと、次は竜希かな？」

「あ、はい！僕はですね……」

と今度は竜希が話し始めた……

緑川竜希は昔から、ビートライダーズの大ファンだった。

ダンスを始めるきっかけになったのも、たまたま見たビートライダーズのステージだ。

当時の竜希には、自由な彼らがとてもかっこよく見えたのだ。

しかし、3年前の事件でビートライダーズは散り散りになり、その後統合した。

竜希も初めはそこに入ろうと思った。

しかし、そんな時あるチームのステージが目に入った。

それが後のドラゴンロードとなるダンスチームである。

個性的でダイナミックな、今まで見たこともないそのダンスに竜希は夢中になった。

そして、入学した芽吹高校の三年にチームのリーダー、龍崎十馬がいると知った竜希は直にチームに入れて欲しいとお願いしに行った。すると、最初は戸惑っていた十馬だったがすぐにこう言った。

「おう、そんじやまずはチーム名決めてくんね？俺ら、ランキング制度とか疎くてさ」

新人はてつきり片付けなどの雑用からするものだと思っていた竜希は驚いた。

同時に嬉しかった。直ぐに自分を信頼して大事な仕事を預けてくれた事が。

そして、竜希の発案でチーム名は『ドラゴンロンド』となり、正式にチームとして登録。

ランキングをすぐに駆け上がり、一躍有名となった・・・

「・・・というところです。十馬さんのことは本当に尊敬しています！」
「そーいや、竜希のおかげでランキングに登録できるようになったんだったねえ〜」

「さすがは弟分だね！」

「い、いや〜そんなあ〜」

謙遜する竜希をいじくりまわす一同。

そんな光景を真奈はいいなあと思いつながら見ていた。

「・・・あ、そういえば淳吾さんは、どうやって十馬と知り合ったんですか？」

と、一同から少し距離を置き壁に背を預け立っていた淳吾のそばまで行き、真奈が聞く。

「俺？俺はね・・・」

と淳吾は十馬と出会った日の事を真奈にだけ聞こえるよう話し始めた・・・

稲本淳吾は昔から兄と比べられるのが嫌いだった。

勉強は兄よりもできるがスポーツは兄の方がセンスがあった。

いつか、兄を見返したい。そう思い、兄がやっていたダンスの道に淳吾も進んだ。

淳吾は努力し、ダンスの盛んな沢芽市まで武者修行にやってきた。色んなダンスチームのステージに乱入し、力を見せつけるのが日課だった。

だが、どんなに力の差を見せつけても、淳吾の心は晴れなかった。

ある日、人気のない空き地でダンスの練習をする少年を見つけた。

きつと、周りの流行に乗っただけだろう。

自分より上手いダンスを見て仕舞えばすぐにやめるはずだ。

意地悪をするように、淳吾は少年の前に文字通り躍り出てやった。しかし、踊り終わった淳吾に少年はこう言った。

「お前すげえよ・・・けど、見ててつまんない。お前の踊りからは可能性とかが感じられない」

淳吾はシヨツクを受けた。

まさか初対面のこんな下手くそな奴に言われるとは思わなかったからだ。

淳吾は正直、ダンスに飽きてしまっていた。

どんなに踊っても、自分を超越る奴はいない。

そう思うと、何も情熱が湧いてこないのだ。

だから、こうして真つ向から否定されるのを逆に尊く思った。

(こいつ・・・面白いな)

そして、少年は次にこう言った。

「あんたのダンスは誰かと合わせればもっと面白くなる！で、俺はもっと上手くなりたい！だからお前のためだと思って俺にダンスを教えてください！」

そんな少年の申し出に、淳吾は頷いた。

そして、淳吾は十馬にダンスを教え、十馬は淳吾の隣で踊った。

淳吾に、誰かと協力して何かをすることの面白さを教えてくれたのが龍崎十馬だったのだ・・・

「ま、そんなところかな。リーダー・・・十馬は親友で、恩人だよ。今の俺があるのも十馬のおかげだしね」

語り終えた淳吾が懐かしむように言う。

真奈は今までの皆の話の話を聞いて思ったことがあった。

「ここにいる人は皆・・・はぐれ者だったんですね・・・」

「・・・そうだね、はぐれ者同士で寄り添ってできたのがこのチームさ。お互い、一人になる辛さを知ってるからこそ強い絆がある。もちろん

ん、君ともね」

「・・・でも、私は今日入ったばかりですから」

「でも、前は一人だったんでしょ？顔に書いてあるよ」

ハツとして淳吾の顔を真奈は見やる。

もしかしたら、自分が人ならざる身であるとばれてしまったのではないだろうか。

そんな不安をにじませる真奈に淳吾は続ける。

「ま、君に話したくない過去があるのは薄々わかる・・・でも、それを気にするほど俺らは野暮じゃない。だから、何も遠慮することはないんだよ？仲間なんだから」

そう言って、ウインクしてみせる淳吾。

その言葉に、真奈は少しだけ救われた気分になった。

その後、十馬が呼んできたアザミさんという女性とリンに真奈はダンスを教わった。

初めての経験だったが、二人は笑って優しく教えてくれた。

まだまだ、他人と関わるのは怖いし勇気もある。

でも、十馬とその仲間たちとなら。

少しだけ、強くなれる気がした。

〈6th day〉

『真奈、学校に行く』

十馬、イリス、竜希の在籍する芽吹高校にも、定期テストが存在する。

だがしかし、この所学校を休んでいた十馬は忘れていた。来たる11月14日(月)からは。期末テストがあったのだ。

11月15日12時30分。

テスト終了を知らせる予鈴が鳴り、一同がゾンビのような挙動でテスト用紙を前に送り、机に突っ伏す。

イリスも皆に習い、疲れ切った顔で机に覆いかぶさった。

今回、テスト期間にステージが運悪く重なってしまったため、あまり勉強できなかったのだ。

特にまずいのは日本史、物理、古典だろう。

特に古典はもはや別の国の言葉であると割り切った方がいいのではないだろうか。

近くて遠い日本を改めて感じる。

そして、チラリと欠席続きだった隣の十馬を見る。

完全に死体だった。

瞳孔が開いてるのではないかと思われるほど生気のない淀んだ瞳。

口も半開きで肌や髪にもツヤがない。

おそらく、ろくに勉強せずに臨んだことで精神がズタボロにされたのだろう。

ちなみに十馬がテストの存在を知ったのは一昨日13日。

テスト前日だった。

そして、担任が入ってきてホームルームを始めようとする。

この学校では1日目に6時限フルに使ってテストを行い、二日目に四時限使って残りを行うのだ。

なので必然的に二日目は四時限で終わるため、午後はゆっくりできるのだ。

すると、担任がHRの前に「龍崎」と隣の死体と化した十馬を呼ぶ。死体だった十馬がふあい、と起き上がって返事をする。担任は少し困ったような顔をして告げた。

「龍崎、お前にお客さんが来てるぞ」

「へ？客？」

「ああ・・・入ってくれて構わないよ」

と担任が廊下に立っていると思われる客に入るよう促す。

するとその客は「失礼します」と小さく言って教室に入ってきた。

その姿を見て、十馬とイリスは思わず椅子から立ち上がってしまった。

「真奈（ちゃん）!？」

「・・・き、来ちゃった・・・」

そう、客人とは十馬の幼馴染にしてイリスの友達、藤井真奈だった。

「・・・で、真奈。なんでお前来たの？」

「・・・えっと、これを・・・」

と真奈が手提げカバンから弁当箱を取り出す。

「今日、お弁当持っていていかなかったから・・・その、作ったんだ・・・」

「あー・・・なるほど」

どうやら十馬が昼食抜きになることを危惧して弁当をわざわざ作ってきたらしい。

「ありがとな真奈。でも俺今日は午前中で学校終わりなんだ。だから家で作って食おうと思ってたんだけど」

「ご、ごめんね・・・余計なことしちゃって・・・」

「いや、全然助かるよ。あ、でもお前の飯が無くなっちゃうな・・・」

「あ、それなら・・・」

再びカバンをゴソゴソし、もう一つ弁当箱を取り出す。

「一緒に食べようと思って・・・め、迷惑だった？」

そう、上目遣いで聞いてくる。

一瞬、ドキツとしながらじゃあ一緒に食うかと笑う。

が、クラス中から浴びせられる視線に笑顔がピシッと固まる。

「あ、あのな・・・これはだな・・・」

弁明しようとしたふたするもクラスメイトからの怨嗟の声は止まらない。

「このやろう・・・これ見よがしにイチャつきやがって・・・」

「学校休んでナンパとか・・・最低・・・」

「ちくしょう・・・ちくしょう・・・なんでお前なんか両手に花なんだよ・・・」

さらには担任までもが「ゲスが」と呟いているのだから居場所のない十馬は縮こまるしかなかった。

HR終了後、食堂で昼食をとった三人は時間を持て余していた。

「さて、折角学校に来たんだからこのまま帰るのはもったいないよなあ?」

「え?・・・うん、できれば色々、見て回りたい・・・かな」

「学校探検、いいですね!行きましょう!真奈ちゃん、十馬!」

イリスの号令で今日の午後は学校探検をすることになった。

まずはクラス。

「ここが私たちの教室です!」

「・・・高校は後ろに習字とか飾らないんだね」

「芸術科目は選択式だからな。ちなみに俺は音楽」

次に職員室。

「ここが職員室。先生のいるところだ。夏場は冷房、冬場は暖房がよく効く快適空間だぜ」

「小学校より広いね・・・」

「科目がいっぱいありますからね。あとは非常勤の先生とかもいますし」

さらに音楽室。

「・・・そういえば何で肖像画があるんだろうね」

「確かに、無いところは見たことないな」

「ベートーベンが絶対いますよね。曲名、運命♪」

「・・・じゃじゃじゃーん？」

「乗らなくていいからな？」

次、生物室。

「人体模型とか地味に使わないよな」

「標本とか、見てるだけで可哀想になってくるよね・・・」

「つ、次行きましよう次！」

美術室。

「そういえば、昔十馬が描いた似顔絵がすごく怖かった思い出が・・・」

「やめろ！トラウマを思い出させるんじゃない！」

「自分でトラウマになるってどんだけですか・・・」

図書室。

「俺は本は買う派だからあまり来ないなあ」

「私はよく来ますよ？落ち着いて勉強もできますし」

「・・・十馬は頭悪いの？」

「・・・言うな、頼むから・・・」

こんな感じで色んな教室を見て回った。

真奈はとても楽しそうにしていた。

いつか、また昔みたいに一緒に学校に通いたい。

そう思う十馬だった。

そして、イリスと別れての帰り道を二人は歩く。

すっかり外は夕焼け色に染まり、綺麗な夕日が道を照らす。

「今日も楽しかったよ・・・こんなに、生きるのって楽しかったんだね・・・」

髪を風に遊ばせながら、真奈がそんなことを言う。

10年も生き地獄を味わった彼女の言葉には、やはり何処か影がある。

それを消すことはできない。無理やり消そうとすれば、彼女にも自分にもいい結果は訪れないだろう。

だからこそ、十馬はこう言う。

「ああ、誰かと一緒に生きるのはもっと楽しいけどな」

心の傷も、暗い過去も、決して消せはしない。

だが、それを背負い共に歩むことはできる。

十馬はこれからも歩いていくだろう。

真奈と、かけがえのない家族と共に。

真奈の手を握り、再び歩き出す。

小さくか弱い手を、守るように優しく握って。

—————

〈another day〉

『戦士の名前』

—————

これは、今となっては知る者も一人しかいないある日の物語……

ある日の昼下がり、街には人が行き交い空は心地よく晴れている。

そんな日に、街を一望できる高台に一人の青年が立っていた。

鋭い視線は彼に近寄りがたい印象を与え、さらに尋常ならざる気配が青年からは漂っていた。

「……平和だな……この世界は。幸せが、笑顔が溢れている……」
どこかを思い出すように遠い目をしながら、彼……ダハーカは眩

く。

「・・・シユバリヤ。お前はこの世界をどうしたいんだ・・・俺は、どうするべきなんだ」

ダハーカがこの世界に攻撃を加える理由。

それはシユバリヤから頼まれたからだ。

「この世界を試せか・・・だが、それは本当にお前がしたいことなのか・・・」

答える相手もいなく、ダハーカの問いは続く。

「・・・いや、それも今更か」

そう結論付けて踵を返す。

彼がするのは戦いのみ。

それ以外は何も望まない。

かつて一度、希望を失った彼にはもはや、戦いへの渴望しか残されていなかった。

幸せなど、求めるべきではない。

すると、突然胸にドンと何かがぶつかる衝撃が伝わる。

「きゃっ！」

「ん、すまない。不注意だった。大丈夫か？」

素直に謝り、ぶつかってきた少女に手を伸ばす。

ダハーカは戦いしか求めない。

だがその前に彼は一人の戦士でもある。

最初にこの世界に侵攻した際は、相手の敵愾心を煽るためガラにもない芝居もしたが本来の彼は戦いの場以外では弱いものに手を差し伸べる真つ当な性格だ。

だから今も、純粹に少女を心配して手を伸ばした。

「あ、すいません。こっちも急いでて・・・すいませんでした」

と少女が手を取り、こちらに顔を向ける。

少女は何も感じなかったが、ダハーカは少女の顔を見て衝撃を受けた。

彼女は以前、ダハーカが龍崎十馬をおびき出すために襲うフリをし

た銀髪の少女だったのだ。

あの時は自分でも情けないことをしたと思っっている。今、謝るべきだろうか。だが、少女は自分の人間の姿を見ていない。どうするべきか、手を握ったまままで考えていたものだから少女はいぶかしんだ顔でこちらを見る。

「あの……どうかされましたか？」

「……っ！すまない。少し、ぼーっとしていた……」

「そうですか。では、急いでいるので失礼します！」

と少女が再び走り去っていこうとする。

「……待て。何をそんなに急いでいる」

それをダハーカは呼び止めた。

「え？えーつと……」

「その様子だと待ち合わせというわけでもあるまい。……察するに探し人。もしくは物といったところか？」

「す、すごい！正解です！……実は、猫を探していました」

「……猫だと？」

「は、はい！名前はミーちゃんです！三毛猫でお隣さんが飼ってたんですけどいなくなっちゃって……」

推理が外れたことに少し動揺しつつもダハーカはあることを思いついた。

「……なら、俺も協力してやる」

ダハーカとしては、怖がらせてしまったことへの詫びのつもり申し出だった。

さすがに本人だと言えばまた怖がらせてしまうし、この姿なら大丈夫だろうと考えた結果である。

一方、申し出をされた少女……イリスはめちやくちや感動していた。

（こんなにいい人がいるなんて……さすがは日本！）

いやどこからどう見ても怪しい人だろうという思考は彼女には無

理だったようだ。

イリスと共に、ミーちゃんがよくいたという公園にダハーカは向かった。

「ミーちゃん！出ておいで〜！」

「・・・猫に人の言葉は伝わらないと思うが」

「そんなことないですよ？ミーちゃんどこ〜？」

「・・・はあ」

なんだか付き合っている自分が馬鹿らしく思えてきた。

さっさと終わらせよう。そう決めてダハーカはイリスから見えない位置で手に六つの小さな光球を出現させる。

「千里眼」 拡散」

その文言を唱えると六つの光球は散り散りになり、街中を駆け巡る。

そして、その光球が捉えた景色が頭の中に映像として映し出される。

その中に、目当てのものを見つける。

「・・・見つけた。ここから3キロほどの埠頭か・・・」

そう呟き、イリスに「おい」と声をかける。

「は、はい!?!なんですか?」

先ほどまで茂みをごそごそ探していたせいかあちこちに葉っぱをつけながら返事をする。

「・・・目撃情報があった。ここから3キロほど離れた埠頭で先ほど見た奴がいるそうだ」

千里眼で得た情報に嘘を交えて彼女に知らせる。

「ほんとですか!?!」

「ああ、間違いないそうだ。いなくなる前に早く行くぞ」

そう言って彼女を肩に担ぐ。

「ふえっ!?!な、何をやってらっしやるんですか!?!」

「俺の方が足は早い。だからこつちの方が早い」

「その理論はなんか違いますよ!?!」

「うるさい。行くぞ」

と言うなり足を踏み切り思いっきり加速。

人間をはるかに超える速度で走るダハーカに抱えられながらイリスはスピードに目を回すしかできなかった。

埠頭に到着したあと、ダハーカは千里眼の情報の中で猫がいた倉庫に入っていく。

目が回り、フラフラしながらもイリスもそれについていく。

「ここにいるはずだが・・・」

「ま、まっつてくださいい〜！・・・つてーあの子ですよあの子！」

とイリスが倉庫の奥を指差す。

するとコンテナのそばに三毛猫が寝転んでるのが見える。

「よかつた〜。心配してたんですからね！」

駆け寄り、三毛猫にポンポンと説教をするイリス。

そんな彼女が記憶の中の誰かと重なった気がして、ダハーカは目を細めた。

だが、次の瞬間。彼の研ぎ澄まされた戦士としての本能が危機を察知した。

「・・・そういえば、猫が家出するのは身ごもった時だ。だとすれば子供がいるかもしれない」

「え!? 大変です！ 探さなきゃ！」

「ここは俺が探しておく。お前は別の場所を探しておけ」

ダハーカに言われ、慌ててイリスは倉庫を出て行く。

イリスが去り、ダハーカだけとなった倉庫。

そこでダハーカは一人口を開く。

「・・・あいつを見逃したということは、狙いは俺か・・・出てこい！ 隠れているのはわかってるぞ！」

すると、その声に呼応するように倉庫の物陰から6つの人影が出てくる。

黒い鎧に同じく黒の槍を持った異質な連中。

ダハーカは知らないがそれらは量産型アーマードライダー、黒影トルーパーと呼ばれる者だった。

黒影たちは槍の切っ先をこちらに向け、殺意を放ってくる。

だが、そんな殺意に晒されてもダハーカは動じない。

むしろ、呆れていた。

待ち伏せに、1対6という卑劣な陣営。

故に、ダハーカは判断する。

こいつらは、他愛もない雑兵だと。

「お前たちが何者か等に興味はない……だが、お前たちが俺と戦おうというなら全力で相手になろう。かかってくるがいい！」

その声と同時に、黒影たちは殺意を込めた槍を一斉にダハーカに突き出した。

だが、その切っ先はダハーカには届かない。

直前で跳躍し、倉庫の天井に逆さに着地したダハーカは、そのまま勢いをつけて急降下。

まるで兎を狩る荒鷲のように素早く、一人の黒影の頭に踵落としを決める。

そして昏倒した黒影から槍を奪い、ベルトを破壊する。

黒影に変身していたのは特殊部隊のような風貌の男だった。

(やはり下っ端か……つまらん。さっさと終わらせるか……)

敵の大体の実力を推し量ったダハーカは槍を振るい、残りの黒影を掃討するべく跳躍した。

そして5分も経たないうちにダハーカは全ての敵を倒してしまっていた。

槍を放り、倉庫から出て行く。

その目には、戦いへの渴望と、相對した敵の弱さへの失望が内包されていた。

倉庫を出てすぐのところにイリスはいた。

「あ、赤ちゃん・・・見つかりませんでした・・・」

息を切らしているのを見ると走り回って探していたのだろう。

なぜそこまで必死なのか分からなかったが、猫を撫でる彼女を見ていると少し心が安らいだ。

だからこそ。

「今更だ・・・」

そう呟いて、ダハーカは踵を返した。

「え？あ、あの・・・」

「猫は見つかっただろう？なら、俺の仕事は終わりだ」

そう言っつて、立ち去ろうとする。

「あの！せめて名前だけでも教えてくれませんか!？」

そんな彼女の申し出に、眉をひそめる。

「何故、俺の名を聞きたい？」

すると、その問いにイリスはこう答えた。

「だって、こんなにいい人のことをいつまでも覚えていたいじゃないですか!」

いつまでも覚えていたい。

その言葉にハツとなり、振り向くとそこには。

屈託のない、はじけるような笑顔を浮かべる少女の姿があった。

「・・・グウシエ」

「え？何ですかそれ？」

「・・・俺の名だ。お前が覚えていてくれるなら、それでいい・・・」
そう言い残し、戦士は黄昏色の空に背を向け去っていった。

こうして、この物語は幕を閉じる。

死の間際、彼が思い描いたのは家族か、好敵手か、それとも・・・
それは、誰にもわからない。

第14話

悩める竜希、龍の導き

ヨルムンガルドの総力を尽くした真奈奪還作戦から一週間。
クラックの出現は観測されず、十馬は徐々に元の平穏な生活を取り戻しつつあった。

—————

朝6時、自宅で寝ていた十馬は窓から差し込む朝日に照らされて目を覚ました。

意識が徐々にはつきりしてくるのに比例して、布団の中が妙に暖かいことに気づく。

ん？と布団の中を見てみると、白い人の手が十馬に絡みついていた。

「うひゃあ!？」

驚いて布団から這い出ると布団がモゾモゾと動き、中から少女が顔を出す。

「はわく・・・あ、十馬・・・おはよ・・・」

「オ、オハヨウゴザイマス」

思わずカタカナで喋ってしまう。

どうか何で十馬はこの少女・・・藤井真奈と同衾しているのだろうか。

「お前何で俺の布団にいるの?」

「寒かったのと、寝ぼけてたのと・・・あとは・・・わかんない」

「・・・やっぱりキッチンで寝るべきだったか」

現在、十馬はこの幼馴染の真奈と同棲している。

事情は色々あるのだが、とにかく無防備すぎるのがこの少女の難点だ。

「・・・むく、ねむい」

「寝てていいぞ? 飯は作るからさ」

そう言って再び夢の世界に船出した真奈に苦笑し、キッチンに立

っ。

昨日スイッチを入れたご飯が炊けているのを確認し、冷蔵庫から大根、ブロッコリー、アスパラ、卵、鮭の切り身、そして味噌を取り出す。

水を入れた小鍋に火をかけ、沸騰したらブロッコリーとアスパラを入れる。

そして茹で上がるまでの間に大根をいちよう切りにしてもう一つの鍋に投入、味噌汁を作る。

十馬はこう見えて料理は得意だ。

高校に入り、自炊を始めたためレパートリーは非常に多い。

ちなみに得意料理はチンジャオロースである。

「よしっ！こんなもんなつと」

卵を焼いている間にグリルに投入した鮭の様子を見て満足げに頷きながら、ちゃぶ台に食事を並べ始める。

今朝のメニューはご飯に大根の味噌汁。焼きじゃけにブロッコリー&アスパラ。目玉焼きである。

美味しそうな匂いに反応したのか真奈がもぞもぞ布団から出てきて席に着く。

眠気覚ましに出されたお茶を飲み、二人で手を合わせていただきますをする。

これが、ここ何日かの龍崎家の日常風景だった。

真奈は紘太たちとは違い、味覚を感じ取れるようだ。

おかげで十馬も腕を披露する相手が出来て嬉しかったり。

美味しいと笑顔で味噌汁をすすする真奈に、こぼさないよう注意をする十馬。

新婚さんみたいだった。ただし、立場は逆だが。

—————

食事を終え、制服に着替えた十馬は朝のショッピング番組に夢中になっっている真奈に声をかける。

「よし、そろそろ学校行ってくるわ。練習もあるから早く行かないと」

「うん！私も頑張るね」

「一緒に踊れないのは残念だけどな・・・」

二人が話しているのは芽吹高校で行われる音楽祭の事である。

十馬が通う芽吹高校には様々なイベントがある。

春は体力測定（イベントとしてカウントするのはどうかと思うが）に始まり、夏は体育祭に球技祭、秋の文化祭に演劇祭といった具合にである。

そして今回のイベントは音楽祭といい、生徒がバンドを組んだり合唱したりしてステージを回す物だ。

今年、十馬はクラスの男子たちとバンド『スタッグズ』を組み、ドラゴンランドと共同ステージをする予定だ。

「お前も皆と練習しとけよ？」

「・・・う、うん。頑張る」

実は今回の共同ステージが真奈の初ステージになるのだ。

基本を覚え、難しい動きにも挑戦している彼女のがんばりは十馬も知っている。

だから十馬も見ているだけというわけにもいかず、バンドで音楽を担当することにしたのだ。

ちなみに十馬の担当はボーカルである。

「じゃ、行ってくるわ。鍵、よろしくな！」

「うん！行つてらっしゃい」

見送りの言葉に笑顔で返し、十馬は通学路を歩き出した。

—————

その頃、ヨルムンガルドの地下施設内にある自室で貴虎は始末書の山を片付けていた。

前回の作戦時にスラム区とはいえ被害を出してしまったからであ

る。

特にビルの倒壊は痛かった。

業者の手抜き工事というわけにもいかないので老朽化ということ
で話をつけたが瓦礫の撤去作業に人件費がかさんでしまったのだっ
た。

「ふう．．．これで、最後か」

と最後の書類にサインと印鑑をして、視線をあげるとデスクに缶
コーヒーが置いてある。

そして壁に背を預け缶コーヒーを啜るのは貴虎の実の弟、呉島光実
だ。

「お疲れ兄さん。これで全部だよね？」

「ああ、すごく肩が凝ったな．．．」

書類の山を台車の上の段ボールに詰めながら苦笑する光実にこち
らも苦笑をこぼす貴虎。

現在、光実は貴虎の部下として復興局に所属している。

短大を出た後、直ぐに局に入り自分の手伝いをすると言ってくれた
弟に貴虎は誇りを持っていた。

日常での会話も増え、今では夕食を食べながら談笑するのも日課と
なりつつある。

「変わったな．．．お前は」

「え？何？兄さん」

「いや、なんでもない．．．さてと、ようやく休めるな」

「そうだね、久々にゆっくりしなよ。あとは僕がやっておくから」

「大丈夫か？意外と量はあるが．．．」

「戦えない分、こっちでサポートしなきゃだからね。目が治るまでは
事務係かな？」

そう言つて、左目を覆う眼帯に触れる。

失明は避けられたが完治まではまだかかるといふ弟の左目。

射撃を持ち味とする龍玄にとってかなりの痛手だった。

「すまん．．．だが、藤井真奈の力があれば．．．」

「ダメだよ。あの子は自分が人じゃないことをすごく気にしてる．．．

だから、あまり力は使わせたくないんだ」

「・・・そうだな。すまない、氣遣いが出来ていなかった」

「ううん。それより、久しぶりに息抜きしなよ？たまにはいいじゃない？」

「ああ、そうさせてもらおう」

そう言つて貴虎は部屋をあとにした。

—————

出口に向かう途中、司令室を通るとそこにはこたつを甲羅のようにして眠る亀・・・もとい葵の姿があった。

コンセントを抜き、みかんを剥いて二つを鼻に、残りを口に詰める。数秒後、「ぶはあっ!？」と呼吸困難に陥つた葵が葵が跳ね起きた。

「な、何をするんだい貴虎！ノーオキシジェンノーライフ！人間の基本だよ!？」

「いや、これくらいしないとお前は起きんだろうに」

「そのうち殺されるんじゃないかな・・・」

南無阿弥陀仏と手をあわせると葵のドロップキックが飛んできた。

それをひらりとかわし、出口へと向かう。

そんな貴虎にみかんを食べながら葵が声をかける。

「あ、そういうえば健康診断受けてね？君、ただでさえサボりがちなんだから」

「仕事が忙しいだけだ。サボりではない。それに、体調管理くらい自分で行ける」

「でも、受けないとダメだよ？自分じゃわからないこともあるんだからね?」

念を押してくる葵にわかつたわかつたと対応して貴虎は司令室をあとにする。

「・・・わかっているさ、自分の身体のことくらい・・・」

そう、閉まった扉の前で小声で呟いた。

――

その日の午後、大半の生徒が音楽祭の準備をしている時に竜希は一人屋上で考えていた。

「どうすれば十馬さんの負担を減らせるかな……」

呟いたあとにハアとため息を吐く。

竜希の心配事、それは十馬の負担のことだった。

十馬が訳あってアーマードライダーとして戦っているのは以前、呉島という人から教えてもらっていた。

だから、少しでも負担を減らすためにステージも淳吾の指示に従いきつちり行ってきた。

だが、先日十馬が怪我をしたと聞き、自分のやっていることは意味がないのではないかと思い始めていたのだ。

「十馬さんが戦わないようにすればいいんだけど、説得は無理かなあ……」

少なくとも、自分の知っている龍崎十馬はそういう人物だ。

誰かが傷つくくらいなら自分が傷つく。

そんなことを真顔で言う人間なのである。

「あのベルトがあれば僕も戦えるのかな……」

言ってから自分で苦笑する。

ベルトを手に入れたところで自分は自分。戦えるわけもない。

きつと、足がすくんで動けなくなるだろう。

素の竜希は基本的にビビリなのだ。

「現実的じゃない……でも……」

空を見上げてみても、胡散臭いくらいに青い空は何も教えてはくれなかった。

――

そして音楽室では、十馬が所属するバンド、スタツグスが猛練習を

していた。

手慣れたその手つきは熟練者だと主張している。

耳をすませば、廊下にも彼らの声が伝わってくる。

「おい！ベースそこで間違えんなよ！」

「ドラム！音薄いよ！なあにやってんのお！」

「時間がないと言ってるだろお！」

見た目に反して、余裕がないようだった。

「はあ・・・思ったよりもキツイな」

とボーカル担当、十馬が座りながら目の前で喧嘩しだすメンバーを見やる。

このバンドはクラス内で楽器ができる人間を集めて作られた即席チームだ。

しかも、この間二股疑惑をかけられた村八分状態の十馬に発言権などゼロなわけで。

「お前らもつとロックに行こうぜ！逃げた奴に戦う資格はないんだぞ！？」

「うるせえ！お前こそさつきから音が震えてんだよ！誰かに会いたいのか!？」

「期待が！期待が重すぎるんだって！理解を拒むな！憎しみに変わるぞ！」

もう3時間はぶっ通しで練習しているためか、若干変なテンションで言い争いしている。

そんなメンバーを見て十馬は一言。

「悲しいけどこれ。学園祭バンドの典型例なのよね・・・」

音楽性の違いによる解散。それが目前に迫っているように感じた。

—————

その頃、ドラゴンロンドのガレージでは真奈がダンスのレッスンを受けていた。

「いい？最初はちよつと難しいけど慣れれば簡単だからね？不安がることないのよ？」

「・・・は、はい！頑張り、ます！」

「じゃあいくよ？セーの、ワンツー、スリーフォーファイ、ワンツー、スリーフォー・・・」

と熱心に教えてくれているのはビートライダーズに所属するペコの実姉、アザミだ。

元は十馬が基本を教えてもらおうと呼んだのだが真奈のやる気に惚れ込み、いまでは付きっ切りで教えてくれているいい人である。

ちなみにザックにダンスを教えたのも彼女であり人に教えるのは手慣れているように感じた。

「あ、あの・・・この踏み込みみてどうすればいいですか？」

「ここはね、重心を浮かさないように・・・」

そう言いながらゆっくり何度も教えてくれるアザミ。

真奈もそれに頑張つて付いていく。

そののすぐ隣ではドラゴンロンドの面々が練習している。

皆、やる気満々だった。

だが、一人だけ足りない人物がいた。

この話を持ちかけた張本人、竜希が顔を出していなかったのだ。

—————

その頃竜希は呉島邸の前に立っていた。

インターホンを押すも、返答はない。

「やっぱり留守か・・・ま、しょうがないしょうがない。土台無理な話だったんだから・・・」

そう諦めて帰ろうとした時。

「あの、家に何か御用ですか？」

後ろから突然声をかけられ振り返る。

そこには医療用の眼帯を付けた元チーム鎧武メンバー、呉島光実が立っていた。

「なるほど、兄さんに用事があつたんですね」

立ち話もなんだったので中に招き入れ、紅茶を出しながら光実は言う。

「すいません・・・わざわざ入れてもらっちゃって」

「いいですよ、十馬くんのお友達なら僕の友達みたいなものですから」
そう笑う光実は、まるで自分と同年代かのように思えるほど屈託のない笑みを浮かべていた。

その笑顔に少し緊張をほぐされ、竜希は今日ここを訪ねた理由を光実に話すことにした。

「光実さんは・・・アーマードライダーなんですよね」

「そうですね・・・今は怪我してるんで前線からは引いてますけど」

と言いながら左目を指差す。

光実には、大体彼が言いたいことがわかっていた。

「・・・どうやったら、アーマードライダーになれますか？」

ほら来た、と思いながら光実は冷静に言う。

「アーマードライダーに形だけなるのなら、ベルトとロックシードがあれば十分です・・・でも、それだけではダメなんです」

「な、何が必要なんですか？」

「・・・それは・・・」

言いかけて、言葉を止める。

かつての自分もこうだったのではないだろうか。

憧れの人がいた。

力になりたかった。

だから、意味など考えず不用意に力に手を出してしまった。

あの時、こうなるとわかっていれば考えたであろう事を、目の前の少年に考えさせるために。

光実が言う。

「必要なのは・・・覚悟です」

「覚悟なら、できています。傷ついたっていい。僕は十馬さんのために・・・」

「それは覚悟ではないですよ。覚悟というのは、自分だけのことじゃないんです・・・力を得るといふことは、必然的に責任を持つということですよ。君は力をうまく使えないかもしれない。その結果、多くの人を犠牲にするかもしれない。その重圧に、耐えられますか？」

かつての自分に、今伝えたいことを話すような気持ちで光実は語る。

「二度、力を手にしてしまえば責任は消えませんが。それでも力を得る勇気が、覚悟が、君にありますか？」

その言葉に、竜希は頷けない。

覚悟はしているつもりだった。

意志も、固かった。

けれど、実際に戦っている光実の言葉にはそれらを吹き飛ばしてしまうほどの現実が、厳しさが含まれていた。

うつむく竜希の肩に手を置き光実が優しく言葉をかける。

「今日一日で考えられることではありません・・・ゆっくり、時間をかけて答えを出してください。後悔だけはしないように」

そう言って、光実は部屋を去っていった。

—————

その頃、ヨルムンガルドの地下施設では葬が作業を進めていた。

「・・・よし！これで後はドライバーを仕上げて終わりかな」

そう言って葬がデスクの上にロックシードを置く。

赤い透明なパーツの目立つロックシードだ。

識別番号のところには『E・L・S-07』と刻印されている。

「ドラゴンエナジーロックシード……この力は僕たちに何をもたらしのかな」

そう呟いてから葵はもう一つの作業に取り掛かる。

「さて、こっちの解析も進めなきゃ」

ディスプレイに映し出されているのは戦極ドライバーだ。

これは以前、曾野村が使用した未知のドライバーである。

「塗料や材質から出処が分かればいいのだけど……まったく、こんな時でも人間は一枚岩になりきれないんだね」

そう言いながら解析を進めていく。

まだまだ、このベルトの謎は解けそうになかった。

—————

呉島邸から帰る途中、竜希は肩を落としながら歩いていた。

「誰かを傷つけることへの覚悟か……十馬さんはそれでも戦うのかな……」

力を手に入れば誰かが傷つく。

その事実が、竜希にとって衝撃だった。

守ると言えば聞こえはいいかもしれない。

でもそれは、敵と呼べる誰かを傷つけると宣言しているようなものだ。

そんなことが、自分にできるだろうか。

「どうすればいいんだろう……」

眩き、道を照らす電灯をぼんやり見つめる。

「迷っているんだね？自分にできることが見つからなくていきなり後ろから声をかけられ、驚いて振り向く。」

そこには、白の少年が立っていた。

白の貫頭衣風のローブを着た、白髪の少年だ。

年齢は十馬と同じくらいだろうか。

けれど、その佇まいは何百年も生きる大樹のような、畏怖にも似た何かを感じさせる。

「戦いはしたくない、ということかな？」

「あ、あの・・・誰ですか？」

突然現れ、質問をしてくる少年を怪しみながら竜希は問う。

「僕かい？僕は・・・シャオロンって言うんだ。それより、君も質問に答えてほしいな」

「シャオロンさん・・・って、なんで僕が戦いたくないって思うんですか？」

聞き返す竜希にシャオロンは笑って答える。

「だって、君は怖がってるから・・・誰かにとつての悪者になる事を恐れてるからだね」

そう言われ、竜希は黙り込む。

まさにその通りだ。

自分は誰かとぶつかりたくない。

傷つけないからではない。

自分が傷つきたくないからである。

「僕は確かに、誰かとぶつかって傷つくのが怖い。でも、それでいいじゃないですか」

「そうだね、僕もそう思うよ・・・生物にとつて、傷つくのを避けるのは本能だ。でも、傷ついてもなお自分の信じる道を進む人間を君は知っているんじゃないかな？」

「・・・十馬さんのことですか？」

なぜそう思ったのかはわからない。

だが自分の中では彼が、そんな強い人間の代表だった。

彼の事は尊敬している。

憧れもしている。

けれど、どこかであんな風にはなれないと諦めている自分がいる。

「僕には、あの人のように強くはなれないですよ・・・僕は戦う覚悟なんてできてない」

「そうかな？彼は決して強くはないよ」

「なんでそんなことがわかるんですか!?あなたにあの人の何がわかるんです!？」

「わかるよ。だって、ずっと」見てきた”もの”

そういうシャオロンを見つめて、竜希は初めて彼が異常な存在だと気づいた。

白い肌、白い髪、全てが白い彼の要素の中で唯一。

その瞳だけが、綺麗な赤をしていた。

人間であれば、決して持ち得ない色の瞳。

それに気付き、警戒心をにじませながら竜希は数歩後ずさった。

そんな竜希の反応に、少し寂しそうな表情を浮かべ、すぐまた微笑に戻ってシャオロンは続ける。

「彼はね、ずっと戦っていたんだ。負けそうになる弱い自分と。でも、彼は勝てた。なぜかわかるかい？」

「・・・強かったから、じゃないんですか？」

「いいや、違う。彼は自分が弱いとわかっていたんだ。だから、弱い自分も飲み込んで進むことができた」

シャオロンの言葉に、竜希の心の奥で何かが響いた気がした。

「・・・認める、弱い自分を・・・」

「そう、自分の根幹の部分はどうかあったって変えられない。だから、それを踏まえた上で目指せばいいんだ」

「・・・どこを目指すんですか？」

彼は答えを与えてくれる。

そう思つて竜希は聞き返した。

だが、シャオロンの言つたことは竜希の予想と反していた。

「本当はもう、わかっているんだらう？ 殻にこもるのもいいけれど、そろそろ自分で踏み出してみなよ」

そう言つて優しく微笑み、シャオロンは光とともに姿を消した。

その後も、竜希はその場所を動けなかった。

だが、しばらくして顔を上げた。

その瞳に、揺るぎない意思を込めて・・・

第15話 誕生！ その名はバハムート！

前回までのあらすじ

戦いから離れ、安らいだ日々を送る十馬。

そんな中ドラゴンロンドのメンバー、竜希は十馬を助けるためにアーマードライダーへの変身を希望する。

だが、戦うことの覚悟を光実に問いただされ意気消沈してしまう。が、謎の少年シャオロンとの問答の果てに答えを見つけかけた。た。

—————

音楽祭前日、十馬はバンドメンバーと共にドラゴンロンドとの最終調整に励んでいた。

十馬を含めたスタッグズのメンバーは元より、ドラゴンロンドのメンバー達も仕上がり磨きがかかっていた。

また、真奈の上達ぶりにも目を見張るものがあった。

十馬の鼻肩目から見ても、ついこの間まで素人だったとは思えないいい動きをしている。

もちろんまだ改善点はあるだろうが仕上がりとしては上々だろう。

で、一方のスタッグズといえば・・・

「おいドラム！演奏中に頭振るな！別にそういう曲じゃねえ！」

「うっせえ！俺はKISSの大ファンなんだよ！」

「あんたこそギター縦にして弾くんじゃねえよ！TMネットワークか!?!」

盛大に喧嘩しているのだった。

「なんかもう、ダメな気がする・・・」

「ここまで足並みそろってないともう見えて清々しいねえ」

「大丈夫なんでしょう。明日本番なんですよね?」

ハア・・・とため息をつく十馬にそれを半目で見守る淳吾とイリス、こちらもいつも通りのドラゴンランドといった感じだ。

ただその中に一つだけ足りないものがあつた。

竜希の姿がなかったのだ。

—————

丁度それと同じころ、凰蓮と城乃内はシャルモンの近場にある公園でトレーニングをしていた。

「ほらほら何をへばってるのよ!まだまだいくわよ!」

「ひいひい!?勘弁してくださいよ凰蓮さくん!」

軍服を着、顔にはペインティングを施した凰蓮(迷彩ver)に引きずられるようにして城乃内が走っている。

何故か活き活きとした表情を浮かべる凰蓮に対し、城乃内はすっかりへとへとのようなのだ。

そんな二人を、木の陰から見ている者がいた。

「・・・気づいてるわよね坊や?」

「は、はい。向こうの木の陰です・・・」

戦士としての勘が、二人に監視者の存在を知らせていた。

そして、その木の方を振り返りその陰に隠れる存在を睨みつける。

「さっきから何をコソコソしているの!?出てきなさい!」

すると「わわっ!」という声とともに

にその何者かがバランスを崩してズテン！と転ぶ。

「ちよっ！転ぶなんて想定外よ!？」

「お、おい！大丈夫か!？」

さすがに転ぶとは思わなかったので慌てて駆け寄る。

するとその人物が見知った顔だということがわかる。

ううくと唸りながら目を回すあどけなさを残した少年・・・チームドラゴンロンドの弟分こと緑川竜希である。

「なんだ竜希かよ。どうした？俺か風蓮さんになんか用か？」

「脅かす気はなかったのよ。ごめんね」

「い、いえ！のぞき見してたのは僕の方ですから!」

慌てて立ち上がり、ペコペコ頭を下げる竜希に二人は苦笑する。

「それで？私達に何か用かしら？」

「あ、はい・・・あの、お二人はどうしてアーマードライダーになられたんですか？」

そう、竜希はそれを聞きに来たのだ。

呉島光実に突き付けられた、力を持つことへの責任。

自分の中ではもう答えは出ている。

だが、聞いておきたかったのだ。

同じように力を手にいれた彼らが何を思い、何のために戦っているのか。

するとまずは俺からと城乃内が話し始める。

「俺は単純にインベスゲームの延長というか、勢力争いというか、そんな感じでベルトに手を出したんだ。でも紘太もミツチも、ビートライダーズの中で持つてるのはみんなそんな感じだぜ?・・・でも、初瀬

ちやんつて奴と少しあつてさ……で、凰蓮さんのおかげで今に至るつてとこかな？」

「遠い昔を思い出すように少し目を細める彼に凰蓮も優しい視線を投げかける。

「そ、そんな感じなんですか？」

「ああ、皆最初はそんなもんだつた……でも、色んなことを乗り越えてこうなつたのさ。初めからこうだつたわけじゃないぜ？」

「初めからこうじゃない……」

一人呟く竜希には次は私ねと凰蓮が話し始める。

「私は……今となつては恥ずかしいけれど、この子たちを生意気だと思つたの。で、こらしめようと何度も戦つたわ。でも、彼らが成長していくにつれて私も変わつていったの。今では戦士として、人間として皆を信頼しているわ」

「凰蓮さんも変わりましたよね。俺ほどじゃないですけど！」

「威張つて言うことかしら？」

ハハハと笑いあう二人を見ながら、竜希は少し肩の荷が下りた気がしていた。

(いいな……こういうの……)

そして心には城乃内が言つた言葉が残つていた。

(初めから皆こうじゃなかつたんだ……乗り越えて、それで今のこの人たちがあるんだ)

二人に礼を言い、竜希は次なる人物の下へと向かつた……

—————

竜希が去つた公園で凰蓮は呟いていた。

「あの子……何か悩んでるのかしら」

「でも、答えは自分で出さなきゃですよ。じやなきや大人になれませんから」

随分立派なことを言うようになった弟子の襟首をつかみ、敵之輔式
戦闘訓練が再び始まった。

—————

次に竜希が向かったのは街に複数存在するステージの一つ、西の川
沿いのステージである。

そこに目当ての人物を見つけるとその名を呼ぶ。

「ザックさん！ちよつとお話しいですか？」

すると視線の先にいた黒と赤のツートンカラーの服を着た青年、
ザックがこちらを振り向き駆け寄る。

「竜希だったか？どうした？」

「あ、はい！……あの、ザックさんはどうしてアーマードライダーに
なったんですか？」

その質問に、少し驚いたようにしながらもザックが言う。

「そうだな……俺は皆と違って大分後にアーマードライダーになっ
ただけど、最初は憧れかな？」

「憧れ……ですか？」

聞き返す竜希におうと答え、話を続ける。

「昔からビートライダーズを知ってるならわかると思うけど、駆文戒
斗って奴がいたろ？チームBARONのリーダーだった」

「はい！知ってます！」

「俺もBARONの一員だったんだが、アイツは誰より強くて不器用
な奴で。で、そいつが俺に戦極ドライバーを託してくれたんだ。リー
ダーの座と一緒に。俺もアイツに近づきたい……その一心だった。
今も多少は形を変えてはいるけど、一番根っこにあるのはそれだな」
そんなザックに竜希は自分とのシンパシーを感じていた。

(ザックさんも・・・懂れてる人がいるんだ・・・)

「あ、あの！ありがとうございます！失礼します！」

そう言って、駆け出す竜希の背中をザックは優しく見守っていた。

「がんばれよ、竜希」

その呟きは風と共に空に消えていった・・・

—————

ヨルムンガルドの本部では、光実が書類の整理を手伝っていた。

「えーつと・・・被害報告書にロックシードの試験データと・・・」

段ボール一杯の書類を所定の位置に置き、司令室に入るとこたつでぬくぬくする葵の姿が。

「葵さん。入ってもいいですか？」

「だいじょーぶだー。問題ないよー」

そしてみかん食べる？とオレンジ色の物体を差し出してくる。

苦笑しつつみかんを受け取り皮をむいて食べ始める。

「あ、美味しいですねこのみかん」

「でしょ？愛媛産だからねー」

しばらく秘密組織の本部とは思えない和やかすぎる光景が繰り広げられる。

そしてみかんを食べ終わると光実はこたつから出て司令室を出ようとする。

そんな彼を「ちよい待ち！」と葵が引き止める。

「何ですか？」

「これ、十馬くんのドライバーが仕上がるまでの応急処置として作っ

「たんだ。持ってってよ」

「そう言つて、横に置いてあつた黒い二つのアタツシユケースを差し出してくる。」

片方を開けると中には新しい黄緑のロックシードとブランク状態のドライバーが入つていた。

「新しいA+の錠前、ドラゴンフルーツロックシードだよ。エナジー版を戦極ドライバーで扱えるようダウンサイジングしたんだ。これは“彼”に渡しておいてよ。もう片方は十馬くんからね」

最後の一言を、やたら意味深な視線と共に光実に向けてかける。

「……もしかして葵さん、全部？」

「さて？どうかなあ」

とぼけるように仰向けになり、瞳を閉じる。

「……ありがとうございます。行ってきますね」

礼を言い、司令室を後にする光実。

もちろん後ろから聞こえる寝息には気づいていたが知らぬふりをしたのは言うまでもない。

そして上に上がると同時、携帯にメールが届く。

送り主は『緑川竜希』

困つたような、だが少しうれしそうな笑みを浮かべ、光実は歩き出した……

—————

十分後、光実は久々にドルーパーズを訪れていた。

久しぶりだなと挨拶をしてくれる坂東さんに笑顔で返し、一番奥のソファに腰掛ける。

そう、かつて自分がドライバーを求め、接触した男の座っていた場

所に。

しばらくすると店に一人の少年が入ってくる。

幼い顔つきに紫のパーカー、自分を呼び出した相手の緑川竜希だ。

光実の姿を確認すると向かい側のソファに腰掛け、まっすぐにこちらを見つめてくる。

そんな彼の瞳を見つめ返し、光実は最後の問いかけをするべく口を開く。

「緑川竜希君・・・答えは出ましたか？」

その言葉に、竜希は答える。

「・・・いろいろ考えました。まだ覚悟とかそういうことはわかりません・・・でも誰かを傷つけることは自分も傷つくことだって思ったんです。それと、最初から皆今みたいだったわけじゃない。迷って悩んで、その上で道を見つけた人たち・・・自分の通るべき道を作り出せた人たちが『アーマードライダー』だと思います。だから、僕も戦います。自分の道を、見つけるために」

その答えに、光実は笑みを浮かべる。

それでいい

誰かのためじゃない、自分が何をしたいのか

それが分かっていたら間違えることはない

そして葵から預かったアタッシュをテーブルに置き、開けて中を見

せる。

「これは葵さんが作ったドライバーとロックシードです。自分の信じるもののために使ってください」

それを受け取り一礼して、竜希は店を出て行った。

—————

一方、ニヴルヘイムの樹海でも事態は動いていた。

「さて、もうそろそろクラックは開けます。今後はどうされますか
シュバリヤ？」

石の玉座に腰掛ける青年に長い裾の服を着た青年、ファフニールが
問いかける。

「・・・まずは龍崎十馬の様子が知りたい。何か方法はあるか？」

「それなら私と感覚を共有したインベスを送り込めばすぐです。で、
その後は？」

その問いに、おもむろに玉座から立ち上がり周りを見渡す。

今、この玉座のある間には4人のオーバーロードが集っていた。

シュバリヤとファフニールの他に二人の会話を不安そうな顔で見
守る女性、ワイバーン。

そして先ほどから一言も話さず、壁に背を預ける男だ。

精悍な容貌に引き締まった体躯、長い後ろ髪を纏めた武士のような
雰囲気のある男である。

その左目には刀傷のような線が縦に走り、瞳を固く閉じさせてい
た。

「……俺が自ら向こうへ出向く。そして向こうの戦士どもを叩き潰す……!」

そう宣言し、男の方にシュバリヤが視線を向ける。

「オロチ……お前は どうする?」

オロチと呼ばれた男はそれに自由な右目だけを開けて答える。

「お前にはわかつているだろう……俺はそんな戦いはしない」

それにシュバリヤは少し寂し気に目を伏せた後、そうかと答えワイバーンを見る。

「お前は どうする?無理に くる必要はないぞ……?」

「私は 貴方のそばに いると かつて 決めました。 愚門では?」

そして 裾を 翻し、シュバリヤは 横に 立て かけて あった 鎌に 手を かける。

まさしくその姿は、威厳に満ちた王のそれであった。

—————

そして迎えた音楽祭当日。

ドラゴンロンドのメンバーは皆、本番直前のプレッシャーにあてられていた。

「……うう」

「そんな唸んなくなたって大丈夫だって。お前ならできるさ」

ベンチで頭を抱えて唸り続ける真奈を励ましながら十馬は時計を見やる。

(竜希は少し遅れるってメール来たけどスタツグズはどうしたんだ？
もうそろそろ来てもいいんじゃないのか?)

するとポケットの携帯が震え、画面を見るとメンバーからのメールが入っていることが分かる。

『ごめん。昨日の刺身に当たったっぽい。今日いけないわ。ドラムより』

『すまん。なぜかインフルエンザに罹ったみたい。今日誰か代役立てて。ベースより』

『わり！昨日の夜から金縛りが解けない！助けて！ギターより』

「あいつらここにきてドタキャンかよおおお!!」

しかもギター金縛りって・・・助け求められても・・・

「どうしたの十馬?」

突然叫んだ十馬を心配したのか真奈が聞いてくる。

「・・・皆呼んできてくんない?」

「う、うん・・・皆さーん！十馬が呼んでまーす」

真奈が呼びかけると周りにいたメンバーが集まってくる。

恐らく、何かしらの号令だと思っているのだろう。

期待するような視線が痛い。

そして覚悟を決めた俺は事実を告げた。

「・・・何か、バンドの人ら来れなくなったらしいです・・・」

「「・・・は?」」

「だから、演奏ができないですはい・・・」

「……ええ!?!」

状況をようやく把握した面々が驚愕の叫びを上げる。

「嘘!?!ステージまであと5分しかないんだよ!?!」

「終わった……俺らの晴れ舞台終わった……」

「と、十馬あ……」

「ごめんな真奈。俺も泣きたい気分だよ……」

一瞬にして緊張とやる気に満ちていたチームがしぼんでいくのが分かる。

(……せっかく、真奈と同じ舞台に立てると思ったんだけど……) 申し訳ない気持ちでガクツとうなだれる。

仕方なく今回は舞台をやめようと実行委員に言いに行こうとしたその時。

諦めるな!という声と共に楽屋がわりのテントに誰かが入ってくる。

キュピーンと効果音をつけたくなるポーズで現れたのはチームファイブバードのリーダー、大和士健だ。

その後ろには何故か聖司に波人、昴もいる。

「聖司に波人に昴!何でここに?」

「いやあ暇つぶしにね。そしたら浪人と昴さんに偶然会ってさ」

「浪人じゃねえ!な・み・と!」

「僕もそんな感じ。で?話がいまいち見えないけど大和士くん」

そんな昴の問いに説明しよう!と健が大仰な仕草で答える。

「話は聞かせてもらった!バンドのメンバーが足りないのだろうか?な

「俺が協力しよう！」

「いやいや、役に立つのかお前が」

淳吾がそう言うのとフツと笑いながら健が部屋の壁に立てかけられたベースを手取る。

そして、手慣れた様子で弾き始める。

一同は驚きを隠せずにいた。

なにしろ元々のメンバーを上回るほど、健の演奏がうまかったからである。

「す、すげえー！これならいけるぞ！」

「いやいや、まだギターとドラムが・・・」

希望が見えたものの流石にいかにも健が器用でも3つの楽器を同時に演奏するのは無理だろう。

またもやため息をついていると隣に置かれたギターを昴と聖司が、ドラムを波人が演奏し始める。

今度こそ、腰を抜かすほど驚いた。

昴はまるで弦を自分の体の一部のように扱い、プロ顔負けの演奏をしている。

聖司はそれを支え、さらに高次元の音へと昇華させている。

波人は時にパワフルに、時に二人をリードするようにスティックを振るう。

正直言つて、どこかのプロバンドのライブを見せられている気分だった。

演奏が終わり、ベースを肩に担いで健が言う。

「これでも・・・役に立たない？」

「二! かつけえ!!」

「すごいな三人とも!」

「前にツアー先で世界的ギタリストと共演してね。教えてもらったの」

「俺は高校時代に趣味としてやってたかな!」

「そのせいで浪人したんじゃ・・・」

「さあ! 頑張ろうではないか!」

結果、バンドは十馬、健、聖司、波人、昴の5人組『ファイターズ』(健命名)が担当することになった。

—————

その頃、竜希は校舎の中を走っていた。

理由は簡単、ダンサーの命ともいえるダンスシューズを教室に置きっぱなしにしていたからだ。

まあそれ以前に寝坊してステージに遅れそうなのだがそれは言うまい。

教室のドアを開け、机の横にかかっていたシューズを手取る。

「危ない危ない・・・ってああ! もう時間ない!」

慌てて走り出そうとしたその時

不意に廊下に足音が響いた。

生徒や教師のものではないだろう。

今は皆、外のステージにいるはずだ。

ならこの足音は一体……

恐る恐る教室の扉のガラス窓から廊下をのぞいてみる。

そこには、二体の怪物がいた。

それぞれ体の片側に角のような突起がいくつもついた人型の怪物だ。

まるで意識が繋がっているかのようにまったく同じ歩幅、タイミングで一糸乱れぬ行進をしている。

(もしかして……インベス!?)

だが、彼らがこの学校を狙う理由など……

(まさか、十馬さんを?)

ふとよぎった可能性、それがますます現実味を帯びて竜希の脳裏に浮かぶ。

体の震えが止まらない。

怖い、恐ろしい、逃げ出したい

けれど、数日前にガレージで練習していた時の十馬の、真奈の、皆の笑顔を思い出す。

守りたい

その思いが、力に変わる。

「……………めんなさい。十馬さん」

携帯を操作し、十馬にステージに行けない旨のメールを送る。

そしてカバンの中から戦極ドライバーとロックシードを取り出す。

もう、震えるだけの雛でいるのは終わりだ

自分は、飛び立たなければならない

大切な『今』を、守るために！

ドアを開け、勢いよく廊下に飛び出てドライバーを装着する。

相手がいぶかしんでいる隙を狙い、ロックシードを構える。

(これが、緑川竜希の変身だ！)

「変身！」

『ドラゴンフルーツ！』

『ROCK ON！』

『ドラゴンフルーツアームズ！激流！自己流！昇り龍！』

頭上から落下してくる果実が展開し、竜希の体を覆っていく。

青のアンダースーツに熟していないかのような黄緑の鎧、龍のヒゲや角があらわれた頭部。

若々しい感情を秘めるその姿はまさしく昇り龍のそれだ。

竹のような節が特徴的な柄を持つ青龍刀型のアームズウエポン『昇龍刃』の切っ先を相手に向け、若き龍は言い放つ。

「これが僕、緑川竜希の戦いだ！かかってこい化け物！」

そして、戦士の戦いが始まった。

—————

その数分後、ステージではドラゴンロンドとファイターズのステージが幕を開けようとしていた。

「皆さん！今日は盛り上がっていきましょー!!」

そう十馬が宣言し、波人のリードで演奏が始まる。

スタンドマイクを握り、自慢の声を披露する。

観客も演奏する全員も、誰もが熱狂していた。

「すご……十馬ってあんなに歌うまかったんだ……」

「知らなかったんだ？カラオケ行くとしよっちゆう90点台出すよあいつ」

「楽しそうですね！……竜希君も来ればよかったです」

「仕方ないっしょ。その分俺らがエンジヨイしなくっちゃ！」

ステージの袖でファイターズの演奏を見ながら各々感想を述べている。

そして曲が終盤にさしかかり、出番が近づいていることを知らせ

る。

「よーし！真奈ちゃんの初ステージ、頑張ろう！」

「「おー!!」」

青春の熱狂はまだまだ続く。

—————

一方、校舎内から屋上に場所を移してゴクマゴクインベス達と竜希の戦いは続いていた。

「はあっ！」

気合と共に昇龍刃を振るって、インベスを牽制するも決定打は与えられていないようだ。

（やっぱり二体同時は苦しい・・・せめて一度に両方にダメージを与えられれば！）

そう思案しながら戦っていると不意に片方のインベスが逃げるようなくさを見せる。

「っ！逃がすか！」

反射的に昇龍刃を投擲し、相手を貫こうとする。

するとインベスが突然進行方向を変えたかと思うと、こちらに猛スピードで突進してくる。

（しまった！武器が！）

ダメージを和らげようと腕を交差し、防御の構えをとる。

すると次の瞬間、猛進していたインベスが突然ダメージを負ったように吹き飛ぶ。

「へ？」

すると何と先ほど投げる直前に引つかかっていたのか手に昇龍刃の柄のようなものを握っていることに気づく。

そして相手のいた場所にはたった今ぶつかったように昇龍刃の刀身が浮遊している。

どうやらこの武器は柄が節目ごとに分割し、鞭のようにもなるようだ。

「こんな感じなんだーならー！」

ある作戦を思いつき、まずは昇龍刃を元の青龍刀型に戻す。

そして二体のインベスが同時に突進してくるのを見切り、素早くかわして二体を衝突させる。

混乱している間に昇龍刃の柄を伸ばし、二体をグルグル巻きにして固定する。

「おりゃあ!!」

二体のインベスを引き連れて、竜希は一気に4階の屋上から地面に飛び降りた。

—————

一方、十馬達のステージは終盤に差し掛かっていた。

「それじゃ最後の曲だ！全力で楽しもうぜ！」

叫ぶと同時に曲が始まり、メンバーが踊りだす。

十馬の歌と共に真奈が、皆が一つの波を作り出す。

まさしくそれは音の波に乗る者・・・ビートライダーズ！

そして曲が終わり、真奈と十馬がハイタッチをしてステージは終わりを迎えるはずだった。

だが、そう簡単に幕引きは訪れなかった。

頭上からうひゃああああ!!という情けない声と共に謎の物体がステージの天井を突き破って落ちてきたからだ。

面食らうも状況を把握すべく、たちこめる土煙に目を凝らす。

すると一人の青いアーマードライダーと二体のインベスの姿を認識する。

「な！インベス!?!皆、周りにもいるかもしれない！観客と一緒に非難を！」

「でも十馬はどうするの!?!」

すると十馬君！と自分を呼ぶ声が聞こえる。

見ると光実が黒いアタッシュケースを持って駆け寄って来ている。

「光実！来てくれたのか！」

「ええまあ。それよりあのライダーは竜希君です！これを使って彼に加勢を！」

そしてアタッシュユを開け、中身を差し出してくる。

フェイスプレートが認証された戦極ドライバーにレモンエネルギーと見たことのないロックシールド。

そしてゲネシスドライバーのコアユニットだ。

「これ・・・もう認証済みじゃねえか！俺じゃ使えないだろ？」

「大丈夫。ゲネシスドライバーのイニシヤライズロックを破れたならこれもいけるはず！・・・と葵さんが」

「この土壇場でギャンブルかよおい!？」

こうなれば腹をくくるしかあるまい。

ええいと気合を入れ、バックルを腰に当てるとベルトが出現し、装着される。

「よし！行けた！」

「ゲネシスコアをフェイスプレートを外したところにつけて！それでエナジーが使えます！」

「了解！」

指示通りにフェイスプレート・・・青い公爵のような仮面の描かれたそれを外し、コアを取り付ける。

「変身！」

『レモン！』

『レモンエナジー！』

『ROCK ON！』

『ミックス！レモンアームズ！インクレディブルリョーマ！ジンバーレモン！ハハーツ！』

閃光と共に現れたのは青いライドウェアに琥珀の鎧と眩いマントを纏った騎士。

アーマードライダーデューク ジンバーレモンアームズ！

「これ、デュークⅡとは微妙に違うな・・・でもこれで戦えるぜ！」

気合を入れ、手に持ったサーベル型アームズウエポン『レモンレイピア』を振りかざし、インベスに向かう。

棍棒を振るってくる相手の攻撃をかわし、レイピアで高速の突きを無数に浴びせる。

一方の竜希も昇龍刃で敵の外皮を切り裂き、徐々にダメージを与えていく。

すると二体が肩を組んだかと思うと融合し、双頭のゴクマゴクインベスへと姿を変える。

「竜希！協力して奴を叩くぞ！」

「はい！十馬さん！」

並び立つ若き二人の戦士は同時に地面を蹴り、相手に向かっていく。

竜希が昇龍刃を鞭のごとくしならせ牽制し、その隙をついて何度もレイピアで刺突を繰り返す。

相手が棍棒を振るえばそれをデュークが絶妙な剣技で受け流し、それと同時に竜希が一刀を浴びせる。

共に、まるでリズムを奏でるかのように息の合ったコンビネーションでインベスを追い詰めていく二人。

そして竜希が昇龍刃で相手をがんじがらめにし、ブレードを一度倒す。

それを見たデュークもブレードを一回倒し、エネルギーを足に集中させる。

『ドラゴンフルーツスカッシュュ!』

『ジンバーレモンスカッシュュ!』

同時に飛びあがり、それぞれのモチーフとする果実の断面のようなエネルギー体を無数に潜り抜けて二人はインベスに合体技『雷閃双龍脚』を食らわせる。

キックを浴びたゴクマゴクインベスは叫びを上げて爆散した・・・

敵が消滅したことを確認し、竜希と十馬はお互いに変身を解く。

いつもと違う形態だったからだろうか。

十馬は自分の体にあまり疲労が蓄積されていないのを感じていた。

一方の竜希は変身解除と同時にその場に尻餅をついてしまう。

初めての変身だったからか、かなり疲れているようだ。

それに屋上から落下したダメージも少なくはないだろう。

舌を出してバテている竜希に十馬が歩み寄る。

そして、その額に思いつきりデコピンをくらわせる。

突然の不意打ちに「ぶへえっ!」と情けない声を出しながら後ろに倒れる竜希を、一方の十馬はやれやれといった表情で見下ろしている。

「な、なにするんですか!?!」

「バーカ、何勝手に首突っ込んでんだ。死にたいのか?」

そう言ってくるところを見るとかなり心配していたのだろう。

かなりお怒りの様子だった。

「言わなかったのは謝ります・・・でも、僕は後悔してません。僕だつて守りたいものがあるんです！」

彼の瞳を見つめながら、自分の意思をしっかりと逃げずに伝える。

それにふうと息を吐いて、グリグリと十馬が頭を撫でてくる。

「つたく・・・その代わり、もう無茶はするなよ？別に誰かに頼ったつていいんだからさ」

言いながら十馬も少し自分に驚いていた。

誰かに頼つてもいい・・・それはついこの間までの自分なら言わなかったであろう言葉だ。

皆が、自分と真奈のために全力を尽くしてくれた後だからこそ、絆の力を実感した後だからこそ言えた言葉だ。

「ま、俺もそれなりに頼らせてもらうけどな・・・ほれ、立てるか？」
そう言つて十馬が手を差し伸べてくる。

「・・・はい！」

その手を握り、竜希は立ち上がる。

憧れた、十馬と同じ景色を見るために。

「・・・そういや名前決めたのか？お前が変身するライダーの」

「え？・・・そうですね、それじゃあ龍と鯉の滝登りにちなんでバハムトなんてどうでしょう？」

「かっこよすぎねえ？」

「そのうち似合うように強くなります！」

「じゃ、がんばれよ。アーマードライダー！」

その言葉は、どんな祝福の言葉より真つすぐに竜希の心に沁みわ

たつていった。

――

ニヴルヘイムの樹海、その遺跡の奥にある空間にシユバリヤはい
た。

そこには大きな石板のようなものがあり、鎮魂の詩が刻まれてい
る。

彼はそこに、ファフニールから渡された機械・・・ダハーカが使用
していた戦極ドライバーを花と共に置く。

そして顔を上げ、亡き友に向けて宣言する。

「ゆっくり休め・・・お前の思いは俺が継ぐ。仇はとるさ」

祈りを終え、静かに石板の間を去っていく。

その背中は家族を思う人のそれにも、復讐を誓った修羅のそれにも
見えた。

t o b e c o n t i n u e

第16話 それぞれの絆

前回までのあらすじ

芽吹高校で行われる音楽祭でのステージに備え、準備をする十馬たち。

そんな中、竜希はアーマードライダーに必要なモノを探し、答えを見つけて出した。

そして学校に現れたゴクマゴクインベスを倒すため竜希はアーマードライダーバハムートに変身。

生徒たちにその姿をさらしながらも十馬が変身したデュークと共に撃破することができたのだが……

—————

インベスを撃破し、新たな脅威の存在がより危機感を伴って周知された翌日。

十馬たちアーマードライダーの面々はヨルムンガルドの司令室に集合していた。

先ほどからディスプレイには沢芽市復興局局長と幹部による記者会見の様子が映し出されている。

「見ての通り、沢芽市全体に非常事態宣言が発令された。これにより避難する人もかなり出てきている」

ディスプレイの映像を見ながら貴虎が皆に話す。

「ま、いつかはこうなると分かってたけどね。今回は学校で未成年者を多く巻き込んでしまったから流石にこうするしかないかな」

あまり見せない苦い顔をしながら葵も言い、十馬と竜希の方を向く。

「これで学校も封鎖だ。しんどいようならばらくは休んでもいいん

だよ?」

気を使ってくれているのだろう。

そんな言葉をかけてくれる葵に感謝しながら、しかし十馬はかぶりを振る。

「ありがとな。でも俺は大丈夫だ。むしろこれで二ヴル Heim に専念できるしな! 竜希はどうだ?」

「もちろんですよ!... そういうえば授業は提携組んでる予備校と協力して通信でやるみたいですよ?」

「ちつくしよおお!!」

てつきり授業がなくなると思っていた十馬の絶叫が張り詰めていた空気を幾分かやわらげた。

「... 十馬って頭悪いのか?」

「赤点常連だって聞いてますけど...」

「対策が必要か...」

絃太の質問に即答する光実と貴虎の様子で他の面々も大体察したようだ。

「さて、話を戻すよ? 今回インベスが現れたことでいつオーバーロードが出現してもおかしくない状況であることが明確になったわけ。しかもこっちは変に恨みを買っちゃってるんでしょ?」

そう言って葵が説明を促すように十馬の方を見る。

「ああ... 何故かは知らないがダハーカが死んで、それをシユバリヤは俺の仕業だと思ってるらしい」

話しながら十馬は改めてダハーカの事を思い出していた。

自分にとって初めての壁だったオーバーロード。

彼の存在がなければ、十馬は真奈を救い出すことはできなかつただろう。

ダハーカに敗れることで十馬は自身の弱さを見つめなおし、さらに前へ進むことができた。

そして、何よりイリスを助けるとき共闘してくれたのも彼だ。
そんなダハーカが死んだと聞いて、十馬の心には様々な感情が渦巻
いていた。

だが、今はそれを気にしている場合ではない。
何にせよ、十馬は戦わなければならないのだ。
幼馴染の少女を、守るために。

そんなことを思っている間に話は進んでいっているようだ。

「で、これからどうするかだけど……十馬くん！」

「……お、おう！」

「集中してよく?……君はこれからも僕たちと共に戦う、それで構わ
ないね?」

「ああ、シユバリヤはまだきつと諦めてない。真奈を守るためには戦
わなきゃならないからな」

「おっけ。じゃあ一応これを渡しとくね」

そう言つて葵が脇にあった銀のケースを差し出してくる。

「こいつは?」

「君が使っていた戦極凌馬のドライバーとロックシードは二ヴルハイ
ムに置いてきてしまったんだらう?それを受けて開発したんだ。開
けてみて」

言われ、開けると中にはゲネシスドライバーと赤い半透明なパーツ
の目立つロックシードが入っていた。

ロックシードには『E, L, S-07』と刻印がされている。

「それはドラゴンフルーツエナジーロックシード。メガヘクスが戦極
凌馬の研究をもとに作り出したものを人の身で扱えるよう調整した
んだ。そっちのドライバーも君の適正能力に耐えられるよう調整し
た特製さ!」

へへんと胸をそらし、得意げに言う葵に十馬はある疑問をぶつける。

「……ちゃんと実験とかしてるんだよな？失敗しないよな？」

それに葵は妙に穏やかな顔で悟ったように言う。

「……可能性つてのはね。いつでもリスクが付きまとうものなんだ……」

「やっぱりぶつつけ本番でやる気満々じゃねーか!!」

流星にもう許容できない。

思わず叫ぶと葵も珍しく反撃してくる。

「何言ってるんだい？なんやかんやで今までも成功してるじゃないか！」

「フルーツトマトは最初ダメだったじゃん!？」

「どうせやるなら面白い方がいいでしょ？」

「面白がってるのはお前だけじゃー!!」

話しても無駄と分かり、仕方なく十馬は頭を抱える。

「これから実際にテストを重ねていくことにしようと思っている。心配するな」

すかさず貴虎が見事にフオロー。さすがは主任である。

「頼むぜ？それまではこないだのジンバーで戦うからさ」

「任せろ。さて葵、仕事だ」

「だからやだったのにいい!!」

引きずられていく葵を無視して絃太が総括する。

「とにかく、これからは今まで以上に警戒しろってことだ。ビートルアイダーズや他のダンスチームにも協力を仰いで一人でも犠牲者を減らそう」

それに皆が頷き、会議は終了した。

—————

数時間後・・・

沢芽市を出てすぐのビジネス街にあるビル内の書斎で星崎慧は貴虎からの報告書に目を通していた。

「・・・我々以外にドライバーを製造できる組織か。ユグドラシル残党は既に押さえているし、他といえば・・・」
おもむろにデスクの中から書類を取り出し、それを広げる。

書類に書かれているのは3年前の日付とある事件の報告書である。
「狗道供界・・・この男が万一生きていれば可能性はあるが・・・」

狗道供界・・・それはかつてユグドラシルでヘルヘイムの研究に従事していた科学者であり、同時にロックシードの暴走事故で死んだはずの人間だ。

だが、彼はその後唐突に姿を現し、カルト集団『黒の菩提樹』を率いてユグドラシルにテロを仕掛ける。

これはその際、供界と戦闘した戦極凌馬が書いた報告書である。

「対象の殲滅を確認か・・・ならば問題はないはずだが・・・」

死してなお、暗い影を落とす供界の存在に慧は悪寒を感じていた。

すると突然部屋のドアがノックされる。

今日は来客の予定はなかったはずだったのでいぶかしみながら扉の外にいてであろう秘書に問う。

「どうした？客か？」

すると秘書・・・鷹村宗光が扉を開け、こちらを見て話す。

「博士……ご子息が、昴さんがお見えになつています」

—————

数分後、書斎で昴は父と机をはさんで向き合っていた。

昴がここを訪れた理由。それは以前十馬に言われた腹を割つての話をするためだ。

無論、まだ父の事は許していないし許せるとも思えない。

だが、これからさらに戦いが続く中で機会がなくなると思いどうしても聞いておきたかったのだ。

「……父さん。僕が来た理由はあんたと話すためだ」

話を切り出す昴に、慧は何も言わない。

ただ黙って、まっすぐ瞳を見つめ返しているだけだ。

「あんたは母さんを捨てた……少なくとも僕はそう思ってる。なんでだ？妻をほっておいてする仕事？どんな仕事さ？……あんたは母さんを見捨ててまでして何がしたかったんだ？」

それが、昴が知りたかったことだ。

別に自分を長年放っておいたことは気にしていない。

むしろダンスという自分の可能性を広げられたのだから。

だが、愛する人を犠牲にしてまでしななければならないこととは何だったのか。

それを知りたかったのだ。

だが慧は何も言わずに黙っている。

その態度に、怒りがこみあげてくる。

だが、ここで怒ってはいつもと変わらない。

自分は変わらなければいけないのだ。
父から逃げるしかない自分を変えなければならぬのだ。

「・・・覚えてるか？まだ俺が小学生だったころ、あんたと母さんと俺の三人で一回だけ温泉旅行に行ったよな。あんたはそこでもパソコンいじって全然相手してくれなかったけど。でも、夕飯の後は卓球したよな。母さんに言われて・・・結局俺が全勝したんだっけ。ホント、仕事以外はダメな父親だっけって思ったよ」

「・・・」

慧は黙ったままだ。

それに突っかからず、昴は自分の中での家族の思い出を語っていく。

本を買ってきてくれた時の事。

カメラの構造を興味本位で聞いて、二時間近く説明をされたこと。
いちやもんをつける父と、それをなだめる母と三人でSF映画を見たこと。

旅行に行ったのも一度だけ。

誕生日を毎年皆で祝ったことも、家族みんなで遊園地に行ったこともない。

けれども昴にとっては母と、父と過ごした時間は大切な思い出だった。

一通り語り終え、昴は慧に言う。

「俺はただ、あんたに言い訳してほしくないだけだ。母さんはあんたにとつて何だったのか。大切なら何故死に目に会ってやらなかったのか・・・それだけ聞ければ十分だ・・・」

逃げずに、じつと瞳を見つめ返す昴。

そんな彼に慧は息をついてから語り掛ける。

「よく聞いてくれ・・・私は母さんを、優子を愛していた。私は彼女を見捨てたのかもしれない。だが、それは彼女の望みだった・・・彼女は、自分の命よりも大切なものを選んだ。私に託したのだ。己のすべてをかけても守りたいものを・・・だから私はこうしている。戦い続けているんだ」

それは、一点の曇りもない慧の本音だった。嘘など見られない、純粹な言の葉だ。

だが、それを受け入れられるかどうかは違う。

「・・・何だよ。結局それじゃないか・・・あんたは自分の間違いを認めるのが怖いだけなんだよ！母さんはな！最期まで言ってたよ！『また皆で楽しく暮らしたい』ってさあ！母さんには俺だけじゃない、あんたも必要だったんだよ！」

そして机を乱暴にたたき、部屋を飛び出していく。

その瞳に、涙をにじませながら。

—————

「・・・ふう」

昴が去った書齋で慧はため息をついた。

「入ってもいいでしょうか？」

外で待機していたのか宗光が扉越しに聞いてくる。

「構わんよ」というと宗光が律義にお辞儀をしながら部屋に入ってくる。

「・・・博士、なぜ昴さんに真実を告げないのです?」

「君には話していたな・・・今のアイツには残酷すぎる・・・いや、違うな」

自嘲気味に笑う慧をいぶかしむように宗光が「どういうことですか?」と聞く。

「私はただ、アイツが全てを知ったうえで私を拒絶することが怖いんだ・・・」

そう言つて、深くため息をつく。

そんな慧の姿は弱弱しく、疲れ切っているように見えた。

「君も気を付けたまえ。一度失ったものは二度と戻らない。落とし物をしないよう、ゆっくり人生を歩め」

「・・・はい。参考程度にはさせていただきます」

「ハハハ・・・君らしいな」

失礼しますと言い残し、宗光は部屋を出て行った。

—————

ビルの廊下を歩きながら、宗光は慧に言われた言葉を自分の中で反芻してみる。

「落とし物ですか・・・でも、抱えてばかりじゃ押しつぶされてしまいますよ?」

誰となく呟き、宗光はその場を去っていった。

—————

その頃、十馬は自宅のちゃぶ台の前で正座待機していた。

足がしびれ始めた頃、台所の方からお盆を持った真奈が歩いてくる。

「できたく」

「どれどれ・・・おお！」

真奈がお盆を置き、乗せられていた皿に乗っているものを一瞥して十馬は感嘆の声を上げる。

タラコスパゲッティにシーザーサラダ、コーンポタージュと洋食のメニューが並んでいる。

「すごいなー初めてなのによくできたじゃんか！」

「えへへ・・・チームの皆がレシピ教えてくれて・・・」

「そっか・・・大分馴染んできたな。あ、あとイリスの言う事だけは聞くなよ。お前の料理を鑑識に回したくないから」

そう言いながらポタージュを一口すする。

スーパードで買ってきた粉末タイプのものに少しアレンジを加えたのか粉っぽさが消えている。

他の料理も食べてみるがなかなかの出来栄えだ。

「うまいうまい！サラダもシャキシャキだしスパゲッティも美味しくできてるぞ」

「あ、ありがと・・・今度は別の作ってみるね」

「ああ、そしたら俺も教えてやるよ。2年間自炊してきた俺の技を伝授してやるぜ」

そうして遅めのお昼を取った後、十馬は真奈にある提案をする。

「なあ真奈。これからちよつと一緒に出掛けないか？」

「え？いいけど・・・どこに？」

「秘密。でも、悪いところじゃないぜ？」

「・・・じゃあ、行く！」

そうして二人は出かける支度を始めた。

—————

一方、西のステージでは沢芽市にいるダンスチームのメンバーが一堂に会していた。

「皆！沢芽市は今、再び謎の植物の侵攻にさらされてる！」

そうステージの上でメガホンで演説するのはビートライダーズのナンバーツー、ペコだ。

今彼は集まったダンサー達にニヴル Heim に対抗するために協力を呼び掛けているのだ。

「市が管理してる芽吹高校での一件は皆も知ってるだろ？今こそ皆で力を合わせる時だと思っんだ！」

ペコは必死に訴えかける。

だが

「そんなこと言ったって・・・」

「俺らが力合わせたってどうにもならないし・・・」

「化け物と戦えってか？無茶言うなよな・・・」

そう言っって一人、また一人と若者たちが去っていく。

そして10分も経たないうちにあれほどいたダンサー達は一人も

いなくなってしまうた。

「そんな・・・」

「まあ考えれば当たり前だよな・・・俺だって怖いし・・・」

リーダーの代わりに頑張ろうと張り切っていたため気を落とすペコにラットが声をかける。

「とはいえ・・・流星に俺たちだけで沢芽市全部を見て回るのには厳しいな」

「そうだよなあ・・・なんせ人手が足りないし」

ハア・・・と二人してため息をついていると「ちよつと待った!」と声が響いた。

なんだなんだと声のする方を見ると、コスチュームに身を包んだ5人組がバックライトに照らされて立っている。

そして一人ずつ、口上を述べていく。

「チームファイブバードリーダー!大和士健!」

「ファイブバードサブリーダー!城交!」

「ファイブバードメンバー!白取純!」

「同じくメンバー!諏訪路仁平!」

「同じく!黄流隆!」

「5人そろってえ・・・」

「二!チーム!ファイブバード!」二!

名乗りと共に背後でカラフルな爆発が起きた。気がした。

「・・・恥ずかしくないのかあいつら」

「通報するか」

「容赦ねえな・・・」

啞然として碌な会話もできない二人に健がゆっくりと歩み寄る。

「話は聞かせてもらったよ。ペコ君!そしてビートライダーズ諸君!

我々も微力ながらお手伝いさせてもらおう！」

「大和士……ありがとう……本当にありがとう！」

目を潤ませながら何度も礼を言うペコにいいってことよと健が返す。

すると俺たちもいるぜ！と別の方から声が聞こえてくる。

そちらを見やるとチームライズGの聖司とチームセブンオーシヤンの波人が仲間を引き連れてこちらに歩いてきた。

「この街のピンチなんだろう？なら、俺らにも手伝わしてくれ」

「騒動が収まらないと受験もできないしな！」

そう次々に声をかけてくれる彼らを前にペコは大号泣していた。

「ぐづ……ありがとうなあ……！」

「うわっ！鼻水きたねえ！」

「泣きすぎだって……ほれ、ティツシュ」

聖司が渡したティツシュでチーン！と鼻をかんでからペコは表情を引き締める。

「……じゃあ皆。力を合わせて俺たちにできる方法でこの街を守ろう
！」

「おう！」

「ガツチャ！」

「サー・イエツサー！」

「やったるうぜ！」

それぞれが思い思いの雄たけびを上げて、若者たちは一つにまとまりつつあった。

――

午後になり、日も少し傾いてきた頃。

十馬は真奈を連れてある場所に来ていた。

二人乗りしていたフェンリルのシートから降り、真奈を降ろしてやる。

「さ、着いたぞ」

「ここって・・・」

辺りを見渡すと2階建てくらいの建物にそこそこの大きさの園庭が目に入る。

「そう。俺たちの“実家”だ」

ここはあさつゆ児童院。

十馬と真奈が育った孤児院である。

園庭の門は鍵が開けられており、中に入ることができるようになっていた。

門をくぐり、園庭を見渡すと在りし日の思い出がよみがえってくる。

たちこぎをして院長に叱られたこと。

皆で滑り台で遊んだこと。

砂のお城を作ったこと。

そのどれもに真奈の笑顔があつて、それを思い出すのがつらくて。

だから一人暮らしを始めてから十馬はろくに帰っていなかった。

帰るときは真奈と一緒に。

そう決めていたから。

「何か俺も来るの久々だから懐かしいよ……」

「……うん。そうだね」

感慨深く、園庭を歩いていると後ろから声をかけられる。

「……真奈ちゃん？」

振り返るとそこには60代くらいの女性が立っていた。

髪は白髪で後ろでまとめている。

そして眼鏡越しに見えるその目は今、涙で潤んでいた。

「真奈ちゃん……真奈ちゃんよね？」

「先生……先生！」

真奈が彼女の胸に飛び込み、泣き始める。

それに女性の方も涙を流しながら真奈の頭をゆっくりと撫でている。

この女性は高山有希。

あさつゆ児童院の院長で二人にとっては母親のような存在だ。

「真奈ちゃん……よかった……本当によかった……」

「先生……ごめんなさい……心配かけてごめんなさい……」

「いいのよ……帰ってきてくれただけで十分よ」

そんな二人を見ながら、思わず涙腺が緩んでしまう十馬だった。

二人が落ち着いたのを見計らって皆で院の中に入り、大部屋で待機する。

当時のまま、変わらない部屋で座りながら十馬は真奈に話しかける。

「先生がまだ避難してないって聞いてさ。多分真奈を待つてるんだろうなって思ったんだ。だから説得も含めて来たんだ」

「そっか・・・そうだね。危ない目にあってほしくないもんね・・・」

10年前、真奈が行方不明になってから院長はずっと彼女を探していた。

警察が諦めてもなお、写真付きのチラシを作り配り歩いていたらしい。

しばらく話していると院長がお盆にカップを載せてやってくる。

「はい。真奈ちゃんの好きだったホットミルクに十馬くんは緑茶ね」

「わあ・・・久しぶりだ」

「うんうん。この渋み、まさにおふくろの味ってやつかな」

飲み物を飲みながら院長に真奈がどうやって戻ってきたのかのいきさつをごまかしつつ伝える。

「そっか・・・記憶喪失だったのね。それを十馬くんが見つけて思い出したと」

「は、はい・・・」

「そそ、見つけるの苦労したんだ。会えたから別にいいけど」

貴虎達と相談して、真奈は記憶喪失で地方の病院にいたのを十馬が探し出したということにしてある。

さすがに二ヴルヘイムの事を細かに話すのは無理だからだ。

「それで先生。俺たちは先生にも避難してもらいたいんだ。今沢芽市が危ないのは知ってるだろ？」

「ええ、そうね。でもあなたたちはどうするの？」

予想通り聞いてくる院長に十馬は真剣な面持ちで自分の中の気持ちを伝える。

「俺にはやらなきゃならないことがあるんだ。絶対に譲れないことなんだ」

真つすぐに、自分の気持ちを院長に伝える。

しばらく十馬の目を見ていた院長だったがやがてふうと息をついて真奈に視線を向ける。

「真奈ちゃんは、十馬くんと一緒にいるの？」

「はい・・・十馬は一緒にいてくれるって言ったので、私も一緒にいようと思います」

そして二人を見て、柔和な笑みを浮かべた院長は言う。

「わかったわ。真奈ちゃんとうとうしてまた会えたし、私も避難することになります。さ、表までなら送っていくわ。もうすぐ日も暮れるしね」

そうして二人を表まで見届けた後、院長は夕焼けに染まった赤い空を見上げる。

「十馬くん。真奈ちゃんをよろしくね」

そう誰ともなく呟いた。

—————

そして二ヴルヘイムの遺跡ではシュバリヤが王座の前に立ち、これからの戦いに向けた演説をしていた。

「今回の戦いは以前のようなものではない。俺たちの家族、ダハーカの弔い合戦だ。奴らを全て倒しダハーカの無念を晴らしてやろう！それが俺たち残された者にできる唯一のはなむけだ！」

その言葉に、そこに集まったオーバーロードたちが表情を一様に引き締める。

軽装の戦闘衣を身にまとうワイバーン。

神官のような出で立ちのファフニール。

鎧に身を包み、狂った笑みを浮かべるテーバイ。

戦士のような衣装に身を包んだゲオルとギウス。

そして、いつもの黒いローブの下に皆と同じような紋様の入った戦闘衣をまとったシュバリヤだ。

「俺たちの力、とくと奴らに思い知らせてやろう・・・」

戦の火蓋はまさに切って落とされようとしていた。

続く

第17話 龍の力！ ドラゴンエナジーアームズ！

世界を侵食する森、ヘルヘイム。

この世界と我々人類の世界が繋がったのは何故だろうか。

世界各地の神話に存在する『知恵の実』。

それはエデンの果実とも、不死をもたらすアンブロシアとも呼ばれた。

つまり過去にもこの世界とヘルヘイムは繋がったことがあるのだろうか？

仮にヘルヘイムでなかったとしたらそれは何なのだろうか？

まさかまだ我々の知らない未知の森があるとでもいうのだろうか・・・

いや、憶測でものを言うのはよそう。

とにかく今は一刻も早く情報を集めなければならない。

今日は忙しく、何度も着信のある携帯すら見れていない。

そうだな・・・今週末には休みを取ろう。

久しぶりに家族と出かけるのも悪くない。

とにかく今は、目の前の作業に専念しなくては。

2009年7月7日 星崎慧の手記より

—————

私の意識は、虚無の中で漂っていた。

そもそも自分の名も、姿も、一人称ですら分からない。

こうして漂い続けるか、やがて融け消えるか。

そう思っていた。

だがある時、虚無の空間に裂け目が現れた。

そこから伝わってくる情報の中であるものが私の心をとらえた。

葛葉紘太。

その青年の姿を捉えた瞬間、私の意識は色を帯びていく。

ああそうだ。

あの憎き鎧武者に変身した小僧。

我が運命の巫女を手に入れようとするのを邪魔し、あまつさえ我を
葬り去った男。

憎い、恨めしい、叩きのめしたい。

その感情のまま、我は裂け目に飛び込んだ。

――

あさつゆ児童院で院長に再会した翌日。

十馬はヨルムンガルドの地下施設にある実験スペースにいた。

周囲は白い壁に覆われ、目の前の強化ガラスがはめ込まれた窓からは貴虎と葵の姿が見える。

『よし十馬くん。合図と同時に変身してみて?』

天井のスピーカーから聞こえる葵の声に首肯し、ロックシードを構える。

『3、2、1・・・ドン!』

そんな気の抜けた合図と同時に十馬はロックシードを開錠する。

「変身!」

『ドラゴンフルーツエナジー!』

そしてベルトに錠前をセットし、ロックを閉めてレバーを押し込む。

すると頭上に鋼の果実が出現し、ゆっくりと落ちてくる。

(よし!このまま順調にいけば・・・)

そう思った矢先。

今にも覆いかぶさろうとした果実から閃光が走り、そのまま盛大にスパーク。

さらにロックシードからも火花が散りはじけ飛ぶ。

結局十馬はというと、衝撃で弾き飛ばされ思いっきり床に頭を打ち付けた。

「いってえ!」

『十馬くん!?!大丈夫?』

数秒後、扉から葵と貴虎が慌てて駆けこんでくる。

「十馬！大丈夫か？」

「あたた・・・一応大丈夫だ。でっけえたんこぶできたけど」

「また失敗か・・・ロックシードの調整はもう十分だと思っただけだな」

今日は朝からずっとこうしてロックシードの調整を行っている。

葵がぶっつけ本番で何とかしようとしたドラゴンフルーツエナジーロックシードは案の定、なぜか変身できないというトラブルを抱えていた。

その原因を突き止めるためにこうして何度もトライ&エラーを繰り返しているのだが・・・

「あーもー！もう15回目の調整なのに何でうまくいかないのー!？」

「もしかするとベルトの方に問題があるかもしれない。葵、次はそっちの路線で調べてみよう」

「わかったよ・・・じゃあ調整に時間かかるからそっちはそっちでどうぞ」

「頼むぞ。よし十馬、組手をやるぞ」

「おう！」

そう言つて部屋の隅に立てかけてあった銃の上部から刀が生えたような武器、無双セイバーを貴虎が構える。

それを受け、十馬も同じくセイバーを構え対峙する。

ロックシードやベルトの調整は武器と違って時間がかかるそうなので空いた時間をこうしてトレーニングに使っている。

「このセイバーは刃も潰してあるし弾もゴム弾を装填しているから遠慮なくかかってこい」

「ていうかこれ、てつきりアームズウエポンみたいに变身しないと出てこないのかと思ってたぜ」

「これはクラックを研究して手に入れた転送技術が使われているからな。ベルトの帯やソニックアローが出現するのも同じ原理だ。とはいえ、さすがにこのサイズの無機物が限界らしいが」

貴虎の丁寧な解説になるほどくと納得する。

そのうち「説明しよう!」とか言つてどこからともなく出てくるんじゃないかな・・・

「ルールは簡単だ。先に戦闘不能になった方が負け。目潰しは無し。関節技も危険だから禁止だ」

「それ、普通にフルボッコにされるってこと?」

「そうだ。嫌なら勝て」

そう半目で聞く十馬に刀の切っ先を向けてから、貴虎が居合切りのような腰を落とした姿勢で止まる。

一方の十馬は普通に正面に両手で刀を持ち、剣道の模範的な構えをとる。

そして、一拍置いて二人の剣は激突した。

貴虎は居合切りの要領で下方からの切り上げ。

十馬は上段からの一刀だ。

激突の後も二人の剣は何度も交差し、その度に剣戟の音が鳴り響く。

「なかなかやるようになったじゃないか」

「片手しか使つてねえくせによく言うぜ!」

十馬の両手で体重を乗せた斬撃を貴虎は片手で軽くないなしてしま

う。
これが戦士としての力量の差かと改めて思い知らされる。

だが、これでへこたれるような十馬ではない。

「そらっ！」

「フッ！」

裂帛の気合と共に何度も貴虎に向かっていく。

そんな十馬を貴虎は冷静に分析していた。

以前特訓に付き合った時とはまるで別人だ。

一撃ごとの重さもさることながら、以前のような単調な攻撃パターンでなくこちらがリズムを崩すことを狙ってきている。

十馬は片手しかと言っていたが盾を主要装備としていた貴虎にとって片手での戦闘は最も馴染んだ戦い方であり、同時に最も得意な戦い方だった。

それをもつてして互角。

いや、一撃に力を込めている分だけ十馬の方が勝っている。

(盾がないというのは言い訳にならないな・・・未恐ろしい奴だ)

だが貴虎も戦士としての矜持というものがある。

そう簡単には負けられない。

呉島貴虎という男は意外に負けず嫌いなのだ。

「次で終わらせてやる！」

「かかってこい！」

十馬は横にセイバーを構え、猛進。

一方の貴虎はそんな十馬に向け二発、ゴム弾を打つ。

それは十馬の肩口をかすめ、そのまま後ろに飛んで行った。

「射撃は苦手か？」

「まあ人並みだ」

そして十馬の横薙ぎの一刀を貴虎が受け止め、鏢競り合いの形になる。

「どうだ！」

「やるようになったな・・・剣の腕だけだが」

「それどういう・・・ぶえっ!?!」

突然後頭部を衝撃が襲い、視界がぶれる。

よろめいた隙に貴虎が襟首をつかみ、見事な一本背負いを決める。

「ぐえっ!?!」

「勝負あったな」

そう言つて貴虎が手を差し出し、十馬は頭を押さえながらその手を取る。

「何やったんだよ? さつき後ろから何か飛んできたぞ」

「それは・・・これだな」

そう言つて足元のゴム弾を拾い、十馬に見せる。

「これって・・・あー! もしかして!」

「そうだ。先ほど打った二発の弾が跳弾して当たったんだ」

「こともなげに貴虎は言うが実際はとんでもない技術だ。

「何が人並みだよ・・・このスナイパー兄弟め」

「ま、そう簡単に私は越えられないという事だ。今後精進するんだな」

「へーい」

説教臭くなってきたので適当にあしらい、葵のところへと十馬は赴く。

「葵。どんな感じよ」

すると作業のためか眼鏡をかけた葵が振り向き力なく笑う。

「・・・多分、大丈夫かな・・・」

「うわっ、完全に目が死んでる」

「そんなに変だったのか・・・」

混沌とした瞳を向けてくる葵に同情の意を表してからデスクに置いてあるドライバーを手取る。

「さて、じゃあ早速・・・」

そう言いかけた瞬間。

天井から耳障りなサイレンと共に赤い光が降り注いだ。

「な!?!またレッドサインだど?」

「もしかして……」

感づいた様子の葵に頷き、十馬は天井のランプを睨みつける。

「シュバリヤ……」

—————

その1時間前……

沢芽市中心のショッピングモールの中をイリスはうろうろ徘徊していた。

「はあ……やっぱりどこもお休みですか……」
ため息をつき、近くのベンチに座る。

現在、沢芽市は街中で避難が促され、住民の3分の1が既に避難を終えている。

避難していない人はこの街に昔から暮らす人々、ダンサー達など皆沢芽市に特に愛着を持っている人々だ。

そんな状況なのでチェーン店の多い大型のショッピングモールも閉まっている店がほとんどである。

そしてイリスは何もただ散歩するためにこのモールに来たのでは

ない。

あるものを買いに来たのである。

「・・・最近真奈ちゃんべったりですからね・・・ここで一発挽回しない！」

イリスが狙う一発逆転の目。

それはズバリ、『誕生日プレゼント』である。

きたる三日後、11月23日はイリスの恩人にして想い人、龍崎十馬の誕生日なのである。

だが最近の十馬は幼馴染の藤井真奈といつも一緒に危機感をイリスは感じてきた。

そこでこの誕生日という一大イベント(?)に目を付けたのである。

だが、十馬が欲しいものがいまいち分からず、いろいろなお店を回ってみようと思ってきたのだがこの有様だ。

「うーん・・・ここ以外で大きいお店は少し遠いですし・・・どうしましよう」

思わず頭を抱えて唸っていると頭上から声がかけられる。

「イリスちゃん？」

視線を上げるとそこには不思議そうに首をかしげる真奈の姿があった。

ばったり会った二人はそのままベンチに座り、お互いの事情を話していた。

「真奈ちゃんもお誕生日のプレゼントを？」

「は、はい・・・変かな・・・」

「そんなことないですよ！素敵だと思います」

どうやら自分と同じくプレゼントを選びに来て、同じ状態になった
そうだ。

イリスは真奈の事を手ごわいライバルくらいには思っているがそ
れ以上に大切な友達と思っている。

蹴落としてやろうみたいなのを決して考えないのがイリスとい
う少女のいいところだ。

「ただ、私もまだ良いの見つけられてないですよ。真奈ちゃん
の方で何か情報有りますか？十馬が欲しい欲しい言ってるもの」

「えーと・・・あ、最近寒くなってきて辛いなーってぼやいてた気がし
ますー！」

「なるほど・・・じゃあ防寒方向で考えればいいですね！good j
obです！」

大まかな方向が定まったところでイリスはあるアイデアを思いつ
いていた。

（サマンサおばあちゃんから教わった編み物の腕を披露するときです
ね！）

「真奈ちゃんは何をプレゼントしますか？」

「私は・・・コートとか？この間も服を買ってもらったから・・・」

「いいですね！一緒につけられますし！」

「一緒に？・・・何を送るつもりなんですか？」

「フフ・・・秘密です」

そうして二人はコート探しの旅に出るのであった・・・

—————

レッドサイン点灯の5分前・・・

二ヴルヘイムの樹海ではオーバーロード達が一堂に集い、クラックの開放を待っていた。

「おいおい！まだ開かねえのか!?早くしろよファフニール！」

そう怒鳴るのは粗暴な雰囲気の大男、テーバイである。

「うるさいですよテーバイ。多少のタイムラグは生じますから少々お待ちを」

言い返すのは知性を感じさせる瘦身のオーバーロード、ファフニールだ。

「・・・地獄つてもんをみせてやる。ついてこい、弟」

「さすがだよ兄貴！かっこいいよ！俺どこまでもついていくよ！」

他にも暗い瞳を前方に向けるゲオルに心酔するようにはしゃぐギウスなど様々だ。

そして集団の最前列にいた黒のローブの青年、シュバリヤは手にした大鎌を掲げて宣言する。

「皆！今こそダハーカの無念を拭い去る時だ！今までのような手加減は必要ない！全力をもって戦うぞ！」

その宣言と同時にクラックが開き、余波にローブをなびかせながらシュバリヤは、オーバーロード達は進軍を開始した。

—————

レッドサイン発令後、十馬は貴虎と共にクラック発生ポイントである柱の並んだ駐車場のような所にやってきた。

「さて……どこから出てくるか……」

「貴虎、他のみんなは？」

「全員に招集をかけた。あと数分もすれば全員がそろろうだろうな」

「そっか……なら安心だ」

背中を合わせ、辺りを警戒しながら言葉を交わす二人。

すると目の前の暗がりから光球が放たれ、とっさに躲した二人が今までいたところをえぐりとる。

暗がりを睨みつけ、十馬は抑えきれない激情と共にその名を呼ぶ。

「来たな……シユバリヤ！」

すると暗がりから幾人もの人影が姿を現し、その先頭の黒いオーバードロードがこちらに鎌を突き付け吠える。

「さあ……今度こそ決着だ。龍崎十馬！」

身構えているとシユバリヤの隣にテーバイとファフニールが並びこちらに光球を何発も撃ってくる。

「十馬！」

「おう！いくぜ！」

「変身!!」

『レモン!』『レモンエナジー!』

『メロンエナジー!』

『ROCK ON!』

『ミックス!レモンアームズ!インクレディブルリョーマ!ジンバーレモン!ハハーツ!』

『メロンエナジーアームズ!』

即座にロックシードを開錠し、ベルトにセットして二人はそれぞれ琥珀の聖騎士、アーマードライダーデューク ジンバーレモンアームズと優雅なりし白夜叉、アーマードライダー斬月・真 メロンエナジーアームズに変身。

ファフニールの放った光弾を空中で両断し、内部の術式ごと葬り去った。

「シユバリヤには絶対に一人で挑むな！今は時間稼ぎだ！」

「わーかってるよー！」

貴虎に言われた通り、シユバリヤの強さは相対した自分が一番よく知っている。

あれほどの強さを振るってなお底が見えない相手と一騎打ちははるかに危険だ。

「ハアッ！」

斬月の研ぎ澄ました一撃がシユバリヤに迫る。

その後ろからはデュークの光矢も追撃。

だがその攻撃はシユバリヤに届く目前でテーバイに弾き飛ばされる。

攻撃を防がれた二人は瞬時に体勢を立て直し、ソニックアローによる遠距離攻撃に移る。

しかしそれもテーバイに薙ぎ払われ、ファフニールに至っては硬い外皮に傷一つついていない。

「相変わらず堅い防御だこと・・・」

「それにしても、今回はこの三人だけなのか？」

そう貴虎が呟くと同時、左右から新たなオーバーロードが現れ二人

に襲い掛かる。

「いくぞ……弟!」

「兄貴となら誰でもぶっ飛ばしてやれるよ!」

そう言い、息の合った連携攻撃を繰り出す二人に徐々に劣勢になっていく。

「くっ!……こいつら!」

「連携だけじゃない……一撃一撃が重い」

片方は拳で、もう片方は脚打で十馬達を追い詰めていく。

それを遠巻きに見ながらファフニールは愉悦の笑みを浮かべる。

「まったく……普段やる気にならない奴ほど、本気になると怖いものですねえ」

すると横にいるテーバイが「もう我慢できねえ!」と参戦すべく走り出す。

相変わらずの直情さに苦笑しつつ、ファフニールはもう少しだけ傍観していることにした。

「よお!ぶっ殺しに来たぜえ!」

二体のオーバードの攻撃をkarouうじて防いでいたデュークに突如、テーバイが拳を放ってくる。

完全な不意打ちに対応できず、腹部に強力な一撃をもらったデュークはそのまま吹き飛び向かいの壁に激突。

「かはっ……」

変身が強制解除され、崩れ落ちるように倒れた。

「十馬!くっ……どけえ!」

怒りをあらわにし、斬月はロックシードをソニックアローにセツト。
そのまま周囲にエネルギーのこもった斬撃『円月斬』を放って怯ませる。

その隙に十馬の下へと駆け寄り、体をゆする。

「十馬！おい十馬！」

するとゆつくりとはあるが十馬が目を開け、起き上がろうとする。

「耳元で言わなくたって聞こえてるっての……」

そう気丈に笑って見せるが全身に裂傷や内出血の痣が浮かび上がっていた。

「こんなところで……寝てられっかよ……」

そのつぶやきを最後に十馬は意識を失った。

「十馬!? くっ！急いで離脱を……」

十馬を担ぎ、急いでその場を離れようとする斬月。

だが、無慈悲にもオーバーロード達は近づいてくる。

一刀貰ったのにムカついたのかターバイに至っては殺る気まんまんのようだ。

そして三体のオーバーロードが駆けだそうとしたその時

空の彼方から飛来した三つの砲弾がそれぞれに直撃。

戦艦の主砲が着弾したかのような轟音と共に三体を吹き飛ばした。

「ぐあっ！」

苦悶の声を上げて悶えるオーバーロード達。

斬月は砲弾の飛来した方向を向き、新たな参戦者の名を呼んだ。

「光実・・・！」

—————

一方、空に浮かぶ大きな浮遊体・・・スイカアームズジャイロモードの内部で光実の変身した龍玄は次なる標的に狙いを定める。

「やはりここは大将を落とすのがセオリーだね・・・」

そう呟き、手に装着されたスイカビツグガンを構える。

すると目の前にスイカの断面を模したレンズディスプレイが出現し、ターゲットロックを行う。

アーマードライダー龍玄　スイカアームズ。

スイカアームズは大型インベス専用装備であるため、セットされたドライバーのデータを解析し、そのアーマードライダーにとって最適な武装を出現させる機能がある。

二刀流で戦う鎧武にはスイカ双刃刀。

槍の得意なバロンにはスイカランス。

拳一つで戦うナツクルにはスイカグローブといった具合だ。

そして今回、射撃を持ち味とする龍玄に与えられたのは大口径の機関砲『スイカビツグガン』だ。

マスカットアームズでは複数を相手にする際、火力不足がいがめな

いがこのアームズならその気になればビルを丸ごと吹き飛ばせる。

ただし、今回はまだ左目が癒えていないため光実にとつてもかなりリスクのある出撃となった。

狙撃手にとつて、周囲が見渡せないというのはかなりの痛手だ。

以前、マスカットアームズを使っていた際は左側に周囲の空気の動きやカメラの映像などが表示されていた。

そしてこのスイカアームズも狙撃用のアームズである以上、同じ機能が搭載されているはずだった。

だが、今の光実には見る事ができない。

慎重にディスプレイで狙いを定めていると耳元から声が聞こえる。

「ミッチー！左から来たぞ！避ける！」

とつさにウイングから弾幕用のマイクロミサイルを発射し、急いで回避行動をとる。

すると先ほど滞空していた位置に光弾が迫り、ミサイルに激突して爆発する。

「ありがとう。助かったよペコ」

「お、おう！頼ってくれてうれしいぜ！」

通信機からの照れるような声に思わず笑みを浮かべ、再び狙いを定める。

今の自分には背中を守ってくれる仲間がいる。

その事を改めて実感し、光実は引き金を引いた。

—————

何度も浴びせられる砲撃にうんざりしたシュバリヤはそばに控えていたワイバーンに命令する。

「ワイバーン。あのデカイのをつぶしてきてくれるか？」

「はい。了解しました」

するとワイバーンの背中から一対の翼が顕現する。

鱗に覆われた翼はまさに悪魔のそれだ。

そして風と共に龍玄の方へと飛び立つ。

しかし

「邪魔はさせませんよ！」

その声と共にワイヤーのようなものが彼女の足に巻き付いたかと思ふと地面に思い切り引つ張られる。

地面に叩きつけられ、よろめきながらも起き上がるとそこには青い戦士の姿が。

未熟なりし昇り龍、アーマードライダーバハムート。

青龍刀型の武器、昇龍刃を振るいワイバーンに肉薄してくる。

ワイバーンも負けじと片刃の双剣を出現させて攻撃を受け止め、鏢競り合いの状態となる。

「皆さんの邪魔はさせません！」

「つーどきなさい！ケガするわよ？」

お互いが慕う者のために戦う戦士たちの、闘争が幕を開けた。

—————

一方、テーパーたちの方にも乱入者が現れていた。

「おらあつー！」

「さあ！踊りましょうー！」

「いっくぞおー！」

アーマードライダーナツクル、ブラーボ、グリドンの三人がテーバイに連続攻撃をくらわせ、テーバイを斬月と十馬から引き離す。

「貴虎さん！十馬を頼むぜ！」

そう言つてナツクルはテーバイに向かっていく。

「またお前らか・・・まあいい。少しは齒ごたえあるようになってんだろうなっ！」

テーバイが裂帛の気合とともに繰り出す拳。

それをかわし、今度はこちらの番だとナツクルが鋭いパンチをお見舞いする。

さらに急に距離をとったかと思うと今度はブラーボとグリドンのパティシエコンビが斬撃を連続してくらわせる。

やれるか？

三人の胸中にそんな希望が浮かぶ。

「ははは・・・お前ら気に入つたぜ！」

だがテーバイの余裕の叫びにその希望は打ち砕かれた。

テーバイは大振りに振りかぶつた拳を地面にたたきつけ、衝撃波を発生させ姿勢を崩させる。

その隙に強力な拳を打ち込み、三人を吹き飛ばす。

衝撃に耐えきれず変身解除してしまふザツクたち。

そんな彼らをテーバイは挑発する。

「おいおいどうしたそんなもんかよー！」

だがダメージの大きいザツクたちはなかなか起き上がれない。

「まったく・・・この程度で這いつくばるか！お前らが何を背負ってるって？この程度で吹き飛ばされるほど軽いもんにしがみついているとはなあ！」

その言葉は、ザツクの頭に血を上らせるのに十分だった。

「軽くなんか・・・ねえ！」

「ああ？」

「戒斗の命も・・・アイツの願いも・・・軽くなんかねえ！」

そう叫び、よろめきつつもロックシードを構える。

そして再び爆炎の拳闘士、アーマードライダーナツクル フルーツ トマトアームズになり突っ込んでいく。

「立ち上がったのは褒めてやるぜ・・・けどなあ！大口と実力が見合っ
てねえんだよ！」

そう言い放ち、テーバイが放った拳を真正面から受け止めるナツクル。

「うおおおお!!」

ガントマトレットから炎が噴き出し、相手とナツクル自身をも焦がしていく。

「俺は繋ぐ・・・戒斗が願った世界を！もつと違うやり方で成し遂げて見せる！それまでは死ねないんだよ！」

その決意と、覚悟と共に放たれた拳がテーバイに突き刺さった。

「ぐおっ!？」

吹き飛ばされるテーバイ。

同時にナツクルも膝をつく。

「はあっ……はあっ……こんなもんかよ俺は！」
悔し気に地面をたたくその手を止める者がいた。

「城乃内……？」

「悪いなザック。けど、お前のせいだからな？俺にも戦わせろ」
そう言つて、一歩前に進み出る城乃内。

そして起き上がったテーバイに向けて不敵に言い放つ。

「よお筋肉野郎。お前言ったよな。俺たちのしがみついているもんは軽
いって……でもな、確かに虫けらみたいなものかもしれない。俺た
ちの命なんか、この世界からみりや塵みみたいに軽いもんだ。……で
もな、その塵にも意地つてもんがあるんだよ！」

その声と共に、持っていたイガグリロックシードが変化した。

表面のパーツが左右に開き、中から質感のあるパーツが現れる。
まるで、栗の皮がむけたようだった。

「なるほど……一皮むけたつてことかね？」

少しうれしそうに微笑み、新たな姿となったロックシードを開錠す
る。

「変身！」

『マロン！』

『ROCK ON！』

『マロンアームズ！根性！ヒートアップ！』

上空にイガグリののような鉄塊が出現したかと思うとその外側が
パージし、大量の針が周囲に降り注ぐ。

そして新たな姿となった鎧が城乃内を包み込み、彼を戦士へと変貌させる。

彼こそは何度くじけても立ち上がる不屈の重闘士、アーマードライダーグリドン マロンアームズ！

手に持った大型武器、マロンハンマーを構えアーマードライダーと対峙するグリドン。

まさに漢の背中ともいうべき頼もしいその姿にザックは一瞬、見とれてしまった。

「さあいくぞー！」

「かかってこいよクソガキがあー！」

ハンマーと拳のぶつかる衝撃音が辺りに響き渡った。

—————

その頃、斬月は二体のオーバーロードに苦戦していた。

シユバリヤは何とか光実が足止めしてくれているものの、息の合った二体の・・・恐らく兄弟であろうオーバーロードに追い詰められていく。

(だが、ここで退くわけにはいかない！十馬を守らねば！)

だが、現実はその甘くはない。

一方が「縛れ」と呟いた途端、周囲から植物が伸び、斬月の手足に絡みつく。

「くっ！この程度で・・・がつ！」
だが、流石に消耗が激しく、普段なら破れる植物も今はビクともしない。

その間に二体のオーバーロードは十馬を抱え上げ、話し始める。

「なあ兄貴。こいつどうすんの？」

「シユバリヤが戦いたがつてるからな。奴のところまで連れていくぞ」

そう言って斬月の横を素通りして行く。

「くっ・・・させるかあ!!」

そう叫び、手をレバーの横まで強引に持っていき何度も引き絞る。

するとロックシードのエネルギーが暴走し、スパークを起こして植物に引火。

変身の強制解除を代償に貴虎はツタから抜け出した。

「ぐっ・・・!」

強力な負荷がかかり貴虎の体は悲鳴を上げる。

心臓、肺にも強い負担がかかり、吐血する。

だが、止まるわけにはいかない。

「俺の仲間に・・・手を出すなあっ!!」

『メロンエナジーアームズ!』

満身創痍となりながらも斬月・真に再び変身し、十馬を担ぐオーバーロードに一刀を浴びせる。

「ぐああ！」

「アージャー！」

吹き飛ばされたオーバーロード・・・ギウスに慌ててもう片方・・・
ゲオルが駆け寄る。

「大丈夫か？」

「ごめん兄貴・・・足引つ張っちゃって」

「俺とお前は家族だ・・・お互いさまだろうが」

そう言っつてギウスを助け起こす。

一方、斬月は十馬に声をかけ続けていた。

「十馬！しっかりしろ！目を覚ませ！」

すると苦し気なうめき声と共に、だがしっかりと十馬が目を開け、
立ち上がる。

「わりい・・・心配かけた・・・」

「大丈夫ならそれでいい・・・いくぞ・・・」

そういう貴虎の声にも覇気がない気がした。

だが、それを気に留めている暇などない。

「変身！」

『ジンバーレモン！ハハーツ！』

ロックシードを再び装填し、デュークジンバーレモンアームズへと
変身。

二人のオーバーロードに向かって突っ込んでいったその時。

「ようやくお目覚めか・・・龍崎十馬！」

突如、放たれた謎の鎖に巻きつかれ、そのまま円形の吹き抜けになった場所に引きずられる。

そしてその場所には因縁の黒いオーバーロード、シユバリヤが佇んでいた。

「さあ・・・今度こそおまえを倒させてもらおうぞ」

「へっ・・・そう簡単にできるもんならな・・・」

不敵に笑って見せるも今の十馬にそこまでの余裕はない。

テーバイにもらった一撃は骨を粉碎しており、呼吸をするたび激痛が走った。

さらに装備もエナジーロックシードの力を十全には使えないジンバー。

だが、だからと言ってあきらめる十馬ではない。

「今のお前は俺には勝てん。そんな身体と、貧弱な装備ではな」

「・・・ああそうだな・・・だが、これならどうだ？」

そう言って変身解除し、取り出したのはゲネシスドライバー。

葵が十馬に合わせた特製品だった。

さらに半透明の赤いロックシードを掲げる。

(失敗続きだったけど・・・今ならできる！いくぞ！)

「変身！」

『ドラゴンフルーツエナジー！』

『ROCK ON!』

紅鉄の果実が頭上から落下してくる。

そして十馬はレバーを押し込んだ。

『ソーダア!』

鋼の果実が展開し、十馬の身を包む。

だが、やはり現実是非情だった。

展開し、十馬の体にかぶさろうとしたその瞬間に再びロックシールドがスパーク。

そのエネルギーは周りの外壁にもおよび、ヒビが入る。

そして果実が吹き飛び、その衝撃で十馬も後ろの壁に激突。

崩れた壁に飲み込まれた。

—————

一方、砲弾を打つ龍玄も徐々に劣勢に立たされていた。

「早く十馬くんを助けなくちゃ……」

そう呟いた瞬間。

「ミツチ! 避ける! 全方向から来たぞ!」

そんなペコの声が聞こえた次の瞬間、四方八方から飛来した光弾によりスイカアームズは大破。
龍玄も地面へと落下する。

「くっ！」

『ブドウアームズ！龍・砲！ハッハッハッ！』

かろうじてブドウにチェンジし、地面に着地すると目の前に槍を持ったオーバードの姿が。

「ファフニールか!?!」

「覚えておいてくれて何よりですよ！」

その声と共に放たれた槍激に吹き飛ばされる龍玄。

「左目が見えていないのでしょうか？よくもまあそんな状態でのこのこと出てくれましたねえっ！」

「ぐああ!!」

連続して放たれる槍に苦悶の声を上げる。

「愚かな奴は好みじゃないんです。消えてください」

そう言って、奴が最後の一撃をくらわせるべく槍を振り上げる。

だが

「そうはいかないね！」

突如、目の前に光を放つ人影が現れたかと思うと槍の一撃を手に持った剣でファフニールごと薙ぎ払った。

「くっ!...あなたは...」

「ああ。遅れて参上のヒーローって奴さ」

そう笑みを浮かべるのは眩き超新星、アーマードライダー北斗！

「ごめんごめん。遅くなっちゃった」

そう言って北斗が龍玄を起き上がらせる。

「昴さん！」

「光実くんは貴虎さんとかいつてくれるかな？二対一で苦勞してるっほいし、こいつを今の状態で相手にするのは自殺行為だよ。サポート射撃に徹しなつて」

ほら行つた行つたと手をひらひらさせる北斗に頷き、龍玄は兄の下へと向かった。

そんなやり取りを見ながら、ファフニールは舌打ちをする。

「くつだらないですねえ……あなたが相手だろうと私は倒せませんよ」
それに北斗も不敵に言い返す。

「悪いけど、僕今日めっちゃ機嫌悪いからさ。サンドバックになつてよ」

そして一瞬置いた後、二人はお互いの急所めがけて一撃を放つた。

—————

そこは、光にあふれる空間だった。

光の海に浮いている。

そう表現するのが一番正しいだろうか。

そしてあの時と同じように、光が収束し人の形を作る。

現れた白の少年が俺に問いかける。

「君は・・・何故、まだ戦おうとするのかな？」

それに俺は返す。

「真奈を守るためだ」

「でも、彼女を守ってもらおうのならヨルムンガルドだけでもよくはないかい？ いざというときの装備も、ジンバーで十分だろう？」

「・・・俺が、守らなきゃダメなんだ」

「何故？」

赤い瞳で見つめてくる少年、シャオロンに向かって俺は自分の思いを告げる。

「真奈を連れ戻したのは俺だ。あのままニヴル Heim にいたらきつと真奈は不幸だった・・・でも、思ったんだ。あいつにもあいつなりに、向こうで幸せになる方法があったんじゃないかって・・・。でも、その可能性を潰したのは俺だ。だから、あいつをここに連れてきた責任をとるために、俺が真奈を守る」

そして最後にこう付け加える。

「それがきつと・・・大人になるってことじゃないのか？」

その言葉にシャオロンはうつむき、しばし目を閉じた後ため息をつく。

「はあ・・・やはり、君も選ぶのか。戦いの道を・・・」

「ああ。どんな結末になっても後悔はしない。自分で決めたことだからな」

そんな俺にあきれたような顔をして、シャオロンが何かを放つてく
る。

「これは・・・」

「ドラゴンフルーツエナジーロックシード・・・その力は危険だ。だから今まで僕が変身できないようにブロックをかけてきた。でも、君が望むなら僕ももう一度信じてみよう・・・君の可能性を」

そして優しく微笑み、言葉を紡いだ。

「どうか君が・・・かつての少年のような血塗られた道を歩まん事を・・・」

その言葉と共に十馬は急速に意識が遠のくのを感じた。

—————

シュバリヤはがっかりしていた。

さつき瓦礫に埋まり、出てくるそぶりもない龍崎十馬。

この程度の相手にダハーカがやられたのかと疑問に思うほど、今の彼は弱かった。

「この程度か・・・つまらん」

そう言い残し、その場を去ろうとしたその時。

瓦礫が突如として爆ぜた。

そしてその中から一人の少年が立ち上がる。

全身傷だらけの満身創痍ながら、その目には強い意志が宿っている。

「ありがとう・・・この力、使わせてもらおう・・・！」

そう叫び、手を掲げる。

そして叫ぶ。

闘争の始まりを告げるその文言を。

己の殻を破るための、その言葉を。

「変身!!」

『ドラゴンフルーツエナジー!』

『ROCK ON!』

『ドラゴンエナジーアームズ!!』

頭上から降ってきた果実が体を覆っていく。

全身に熱い力が流れる感覚。

そのエネルギーを気合と共に解き放つ!

「ハアッ!」

エネルギーは波動となり、辺り一面を炎で包み込む。

そして炎が青へと色を変え、その中からソレは姿を現した。

吉兆を呼ぶ鳳凰。

四聖獣の一角、朱雀。

灰の中から蘇る不死鳥、フェニックス。

そして、龍を常食する龍殺しの聖獣、迦楼羅。

古代より語り継がれるそれらを想起させる姿をソレはしていた。

シュバリヤは思わず、ソレに問うていた。

「貴様・・・何者だ!？」

ソレが言う。

仇の声で、静かに告げる。

「俺はもう・・・借り物の殻を纏う雛じゃない!」

さあその翼に、その炎に、見惚れ惹かれ、希望せよ。

彼の者こそは、漆黒の闇夜を切り裂く夜明けの光。

龍を喰らいし竜鳥。

「アーマードライダー・・・カルラだ!」

—————

その頃、ファフニールは北斗と高速の斬撃を繰り広げていた。

「この動きについてくるとは……やりますね！」
「はっ！この程度造作もないね！」

ファフニールは今、付与術式で自らの“時間”を早めることでこの動きを可能にしている。

そして北斗はスターフルーツアームズの技の一つ『光年歩』を使うことによりこの速さについていつている。

だが、さすがに生身の人間がこの速さで動くのには限界がある。

昂も余裕そうではあるが手足の筋肉が数本、断裂していた。

「そろそろ決めさせてもらいましょうか……」

そうファフニールが呟いた次の瞬間。

突如、向こうから灼熱の波動が押し寄せ慌てて防御の姿勢をとる。

「何だ一体!?!」

「この波動……まさか……おもしろい！」

そう言うや否や、ファフニールは熱波が来た方向へと走り去ってしまった。

一人取り残された北斗は追いかけてしようとしたものの、走る激痛にも光年歩に耐えられないことを悟る。

「なら……貴虎さんの方に行くかなっ！」

そう言つて、彼は次なる戦いに赴いた。

—————

シユバリヤに向かって名乗りを上げ、十馬は改めて自分の姿を見る。

デュークのものとは違う、煌びやかなアンダーウェアに深紅の鎧。自分だけの力。その実感が胸を熱くさせる。

「こけおどしだー！」

その数秒の隙にシユバリヤが鎌を振るい、カルラを切り裂こうとしてくる。

「それは・・・どうかな？」

そういうと同時、カルラは片手に持っていた武器・・・錫杖型アームズウエポン『ガルーダクロージャー』でその刃を受け止めた。

「何？」

「そらよつとー！」

さらにもう片方の手に持っていたソニックアローでシユバリヤの腹に横薙ぎに切りつける。

「ぐはっー！」

苦悶の声を上げ、距離をとるシユバリヤに対し、カルラはガルーダクロージャーを変形させる。

上部の羽を反り返すように畳んだ鳥の形状をしたオブジェを柄に沿ってずらす。

するとたたまれた羽が鏢のようになり、レイピアモードへと移行し

た。

また、シユバリヤもおもむろに鎌に手をかけたかと思うと鎌の刃の部分が左腕に融合し、二の腕から刃が突き出たような格好になる。

そして鎌の柄の部分は先頭が鋭くとがった魔槍へと変貌する。

訪れる静寂。

全く同時に踏み込んだ二人は剣戟の音を響かせながら交差する。

ガルーダクロージャーとソニックアローで連続攻撃を放つカルラにそれを槍と刃でいなすシユバリヤ。

まさに一進一退、互いの命を削りあう戦いが繰り広げられる。

「お前は何故・・・何故そう何度も立ち上がれる!？」

「俺はあきらめない! 例え一度燃え尽きようと、また舞い上がって見せる! この姿がその証明だ!」

交わされる言葉、魂の叫び。

その全てが彼らの力となる。

「ダハーカは・・・グウシエはお前のせいで死んだ! お前さえいなければ!」

「俺はあいつがなぜ死んだのかわからない・・・でも! あいつの命の重みを背負って生きる! 生き続ける!」

「ほごくなああ!!」

全ては一瞬だった。

激情に駆られるまま、シユバリヤの黒の魔槍がカルラの心臓に向

かつて突き出される。

だがカルラはそれを避けなかった。

敢えてその切っ先の狙いだけは外し、それでもアンダーウェアを突き破って脇腹をえぐられた。

そして、その隙にエネルギーを貯めた二刀でシュバリヤを横薙ぎに切り裂く。

「ぐっ!?がああああ!!」

「がはっ!!」

自ら痛みには耐えながらもカルラはシュバリヤの傷口に手を伸ばし、内部にあつた目当てのものを引き抜いた。

「ぎさまああああ!!」

「これは・・・返してもらおうぞー!」

距離を取り、脇腹から流れる血をそのままに十馬は不敵に笑って見せる。

その手には、血にまみれたカチドキロックシールドが握られていた。

カチドキロックシールドを取られ、力が減退しているのかシュバリヤが膝をつく。

このまま押し切れるか？

そう思い、ソニックアローで光矢を放つ。

だがシュバリヤに矢が届く直前、結界のようなものがシュバリヤを包み込み矢が阻まれる。

「やれやれ・・・これだからあなたは」

そう呟きながら現れたのはファフニールだ。

「次はお前が相手か？」

「いえいえ、流星にリーダーがこれではね・・・というわけでお暇させていただきますよ」

そう言つて、手から赤い光弾を上放つ。

光弾は上空で弾け、光を辺りにまき散らした。

警戒しているときもおかしいという風にファフニールが笑う。

「大丈夫ですよ。閃光弾みたいなものです・・・警戒すべきはこちらでしよう？」

そう言つた瞬間、目の前にクラックが開き中からインベスらしき怪物が現れる。

「な・・・こいつは！」

「どうですか？私が研究に研究を重ねて作り上げたインベスの極限個体の一つ、アキレスインベスです！置き土産の一つとしてご用意させていただきました。では、どうぞごゆっくり」

そして恭しく礼をすると影の中に融け消えていくように姿を消してしまった。

「野郎！っとうわっ！」

追いかけてようとするとアキレスインベスが文字通り横槍を入れ、慌てて飛び下がる。

「ウウウウ・・・」

そんな怨嗟にも似た声でこちらを睨み、槍による突きを何度も放つてくる。

だが、カルラはその全てを躲していた。

「その程度じゃ・・・今の俺に傷はつけられないな」

そして幾度目か突き出された槍を握り、相手を引き寄せレイピアで一閃。

苦しそうなうめき声をあげる相手に今度はソニックアローで連続射撃をくらわせる。

さらに距離を詰め、今度は錫杖型のロッドモードに戻したガルーダクロージャーに炎を纏わせ殴打する。

「そろそろ決めるか」

そう言い、まずはベルトのレバーを一回押し込みエネルギーを足に集中させる。

そしてその足でインベスを蹴り飛ばし、距離を置いたところでロツクシードをソニックアローにセット。

さらにガルーダクロージャーの鳥のオブジェを展開し、羽を広げた鳥のような形にしてからソニックアローにあてる。

さながらそれは巨大な矢を構えているようだった。

ソニックアローと一体化したクロージャーの柄を持ち、引き絞るように後ろに引く。

するとアローの射出口にドラゴンフルーツの断面のような文様が現れ、そこにエネルギーが収束していく。

そしてエネルギーが臨界を迎え、ロツクシードが紅く瞬いたその瞬間。

カルラは貯めていたエネルギーを一気に解き放った。

もはやそれは矢の形をしていなかった。

表現するならば光の柱。

直径1メートルほどの光の奔流がアキレスインベスを飲み込み、消滅させ、その先の壁などの障害物も全て円形の穴をあけてしまった。

敵が一欠けらも残さず消滅したのを確認すると、変身解除した十馬はその場に座り込んだ。

「もう限界・・・流石に寝てても怒られないよな・・・」

そう言って仰向けになり、十馬は静かに目を閉じた。

—————

そのおよそ数分前・・・

斬月は龍玄と共にオーバーロード、ゲオルとギウスの二人組と戦っていた。

「光実！タイミングを合わせろ！」

「わかったよ！兄さん！」

そう言つて斬月はロックシードをソニックアローに装填、龍玄はブレードを一回倒してエネルギーを貯める。

そして兄弟息の合ったコンビネーション技『ドラゴニックボレー』でギウスを狙い撃つ。

「くそっ！」

「兄貴!？」

だが、それを受けたのはゲオルだった。

弟を身を挺して庇い、背中に直撃したエネルギーが皮膚をえぐり、赤い肉が見えていた。

「ぐはっ……」

「兄貴！しっかりしろよ！」

口から血を吐き、それでも弟を守ろうと退こうとしないゲオルにギウスが呼びかける。

「兄さん！チャンスだよね……」

「……ああ。わかつてる」

そう言い、ソニックアローを構え矢を放つ。

それが届く寸前。

突如として飛来した刃がその矢を防いだ。

警戒していると上から彼は降ってきた。

先ほど矢を防ぎ、地面に突き刺さった刀を抜いて彼が斬月たちと対峙する。

長い後ろ髪を一纏めにした鋭い雰囲気の名だ。

その左目には縦に傷が走り、瞳を固く閉ざしていた。

「ゲオル、ギウス。ここは撤退するぞ」

「オロチ……」

「お、オロチ！助けてくれ！兄貴が！」

「わかつている……この場は見逃してもらえないだろうか。異界の戦士」

そう言つて首を垂れるオロチと呼ばれるオーバーロード。

「どうするの兄さん？」

「……このチャンスに逃す手はない」

そう言つて斬月はソニックアローを構える。

「私達はお前達を倒すために戦っている。この機会を逃すわけにはいかない」

その答えに、オロチは分かった……と呟く。

「つまり、戦力が削ればいいのだろうか？……ならば」

そう言うなり刀を自らの左腕に当てる。

そして

「これなら……いいか？」

何のためらいもなく、その腕を切り落とした。

「なっ!？」

「ぐっ……っはぁ……」

鮮血と共に地に落ちた左腕は人間のそれと遜色ないものに見えた。

「これで……戦力は削れただろうか?……もう……いいか?」

何も言わない斬月を肯定と受け取ったのか、オロチはゲオルを担いだギウスと共に自ら開いたクラックへと消えていった。

「……はっ……はっ……っておい!何やってんのさ貴虎さん!」
遠巻きに一部始終を見ていたのか、向こうから駆けてきた北斗が貴虎に詰め寄る。

「兄さん……流石に甘かったんじゃない?」

龍玄も先ほどの兄の行動に違和感を覚えたようだ。

だが、斬月は佇んだまま何も言おうとしない。

「おい貴虎さん!」

と北斗が背中を叩く。

その勢いに押されるまま、斬月が崩れ落ちる。

変身も解除され、硬く目を閉じた貴虎が冷たい地面に横たわる。

「た、貴虎さん……?」

「兄さん?……兄さん!」

何度呼びかけようと、貴虎が目を開けることはなかった……

t
o
b
e
c
o
u
t
i
n
u
e
.
.
.

第18話 巨龍を討て！ ライダー全員出動！

その男は、誰よりも高潔だった。

弱きを守り、悪を倒す。

そんな概念を彼は生まれつき持ち合わせていた。

そんな人物が行きつくのは本来であれば正義の執行者。警察やら検察、弁護士であつただろう。

だが、彼の生い立ちがそれを許さなかった。

家の宿命に捕らわれ、理由なき世界の悪意にさらされた彼は傷つき、悩んだ。

だが、彼は出来る範囲で自らの信念を貫こうとした。

弱きを助けるは強者の務め。

高貴なるものの定め、ノブリス・オブリージュ。

どんなに傷ついても、それを支えに彼は何度も立ち上がった。

友に裏切られ、家族に妬まれ、それでも彼は戦い続けた。

自分の限界など、とうに超えていたにもかかわらず・・・

—————

微睡みの中、光実は目を覚ます。

無理な姿勢で寝ていたためか、顔を上げると首が少し傷んだ。

そして視線を、目の前のガラスに向ける。

ガラスの奥、白い部屋の中でいくつもの管や電極に繋がれた兄がそこにはいた。

—————

龍の王シユバリヤを筆頭としたオーバーロード達の侵攻から丸一日が経過していた。

シユバリヤは重傷を負いながらも十馬が変身した新たな戦士カルラが撃退に成功。

彼の撤退と同時に出現していた複数のオーバーロード達も姿を消した。

加えてオーバーロードの内の一体の行動により生体サンプルも入手に成功した。

だが、それと同時に大きな痛手も負った。

呉島貴虎の昏睡という痛手を。

—————

最初に感じたのは両手を包むほのかな温かさだった。

心地よさに思わず二度寝しそうになる思考を何とか制し、意識を覚醒させていく。

ゆっくりと目を開け、身を起こすと目の前には二人の少女がいた。銀髪と黒髪の少女はそれぞれ十馬の手を握り、自分にかかっている布団に半身を埋めて眠っている。

まるで絵画のように様になっており、いつまでも見ていたい思う。

すると十馬が起きたのに気付いたのか黒髪の少女、真奈が目を開けた。

「……っ！十馬！よかった……」

「真奈……俺、どうして？」

心底ホツとしたように表情を崩す真奈に、事情を把握できていない十馬は聞く。

「シユバリヤと戦って怪我したの。十馬、丸一日眠ってたから心配で……」

「そっか……多分、ずっといてくれたんだよな。心配かけて悪かった。それとありがとうな。イリスも」

そう言つて、こつんと寝続けるイリスの額を小突いてやる。

するとふえ？とイリスも目を覚まし、自分と十馬を見比べた後、一拍置いて顔を真っ赤にしながら悲鳴と共に去っていった。

「ど、どうしたんだあいつ？」

「十馬、乙女は大変なんだよ？ちゃんとそういうところ、わかるようにならないとダメだよ？」

「は、はい・・・ごめんなさい」

何か理不尽を感じながらも十馬は頭を下げるのだった。

数分後、寝癖を直したのか髪を部分的に湿らせたイリスが帰ってきた。

「うう。すみません。だらしない寝癖&寝顔を見られた恥ずかしさのあまり逃げ出してしまいました・・・」

「いや、なんとか俺も悪かった。すまん」

本当はレアなイリスが見れて少しラッキーと思っていたのだがそれは言うまい。

「で、状況が知りたいんだけど・・・痛っ・・・」

「あんまり無理しないでください！骨に痺が入ってるんですから！」
胸に走る痛み思わず声が出てしまう。

そんな十馬をベッドに寝かせ、真奈が説明しようとした時。

病室のドアが開き、そこから包帯やガーゼを張った少年が入ってくる。

「十馬！起きてたんだね。・・・で、いきなり両手に花かいこの色男
そう軽口をたたきながらも安心したようにボロボロの昴が笑う。

「昴！お前は大丈夫か？」

「まあね。アキレス腱が片方断裂したけどすぐ直ったし」

「すぐ直るようなものじゃないですけど・・・」
「気合かな？」

そう言いながら部屋に入って、一言呟く。

「よかった・・・君まで目覚めなかったらどうしようかと思った・・・」

その一言を、十馬は聞き逃さなかった。

「俺まで・・・？それどういうことだよ？」

思わず身を乗り出して、また走る痛み顔に顔を歪める。

慌てて真奈とイリスが体を支え、心配そうに表情を暗くする。

そんな十馬を見ながら、昴は口を開く。

「貴虎さんが・・・倒れた」

—————

30分後、十馬は貴虎がいるというICUを訪れていた。

ガラス越しに見える、白で埋め尽くされた部屋に彼はいた。

腕の点滴をはじめとし、電極や酸素マスクなど様々な機械に繋がれた貴虎は静かに眠っている。

それを一瞥してから十馬は廊下のベンチに座りうなだれる光実の声をかける。

「・・・悪い。貴虎がああなったのは俺のせいだ」

「十馬くんのせいじゃありません・・・兄さんに頼ってばかりで体調を気にしてあげられなかった僕のせいです」

「でも、俺がもっとしっかりしてれば・・・」

そう続けようとする俺に立ち上がって光実が叫ぶ。

「自分のせいにしたって兄さんが目を覚ますわけじゃない！悲劇の主人公ぶるなよ！」

自分で言ってからハツとなり、すぐにまたうなだれる。

「すみません・・・取り乱しました・・・」

そんな光実は何を言えばいいか分からずにその場で押し黙ってしまふ。

すると通路の向こうから昴がやってきて光実に言う。

「光実くん・・・それなら僕も同罪だよ。もつと早くサポートに行けばよかった」

「やめてください・・・そんな言葉をもらっても何も変わりません」
変わらさうなだれる光実に昴は近づく。

そしてその襟首をつかみ、無理矢理彼を立たせた。

「いつまでそうしてしよげてんだよ呉島光実・・・！君が今言ったとおりだ！こんなところでぼやぼやしてたって何も変わらない。なのに何故何もしようとしない!? 貴虎さんの事を思うなら君は何をするべきだ？ 貴虎さんなら何て言う!？」

そう険しい顔で光実を発破する。

発破をかけられた光実は感情が高ぶるのを感じた。

お前に何が分かる。

他人ごとだと思つて。

そんな怒りが湧き上がってくる。

その光実の目を見て、昴は鼻を鳴らす。

「いいじゃないか・・・そっちの方がさつきよりか全然マシだね」

「うるさいんですよ・・・！言われなくなつてやってやりますよ！兄さんが戦えないならその分僕がやればいい！それだけのことでしょ！」

そして感情のまま、光実はICUを後にした。

残された十馬は昴に少し非難するように問う。

「なあ昴。あれで本当によかったのか？」

「ああ。ああいう時こそ、強めに当たった方がかえって立ち直れるものさ」

そう言つて、昴も光実の去つていった方へ歩いていく。

「さあ司令室に行こうか。まだまだやることはありそうだしね」

—————

ICUを後にした光実は白で塗りたくられた廊下を一人、歩いていった。

頭の中には先ほど昴に言われた言葉がフラッシュバックし、拳をきつく握りしめる。

怒りがこみ上げる。

昴に対してではない。

思わず声を荒げてしまった情けない自分自身に怒っているのだ。

「こんなんじゃないや昔と変わらない・・・いつになったら僕は」

結局成長したつもりでも子供のままの自分がふがいなくて、悔しくて。

感情のまま廊下の壁を殴りつけ、再び歩き出す。

すると前方に一人の少女が立っていた。

真奈だ。

「どうかしました?」

そう問うと、真奈は何かを決意したような目で自分に近づいてくる。

そして目の前で止まると光実の目を見据えてこう言った。

「光実さん・・・貴虎さんは私が治します」

その言葉に、光実は愕然とした。

「だめだよ藤井さん。兄さんはそんなことは望まない」

「でも!私にできることはそれくらいしか・・・」

「大丈夫。兄さんはそんな簡単にくたばるほど柔じゃない。それに・・・」

「それに?」

続きを促す真奈の瞳を真つすぐ見つめ返して光実は言う。

「戦うのは僕たちの役目です。君がやるべきなのは十馬くんを支えてあげることです。だから、僕たちは大丈夫。君は君のやるべきことをやってください」

その言葉に、少し間を置きながらも真奈は頷いた。

—————

昴と十馬が司令室に着くと、そこには同じく身体の各所に包帯やガーゼを付けたザック、城乃内、鳳蓮、竜希、そして光実の姿があった。

部屋に入るなり竜希が安堵したように顔を緩めて話しかけてくる。

「十馬さん！もう大丈夫なんですか？」

「ああ、なんとかな。お前も無事そうで何よりだよ。ザックたちもな」「何、こっちは城乃内が頑張ってくれたからな。おかげで助かったぜ」「何言ってるんだよ。お互いさまだろ？」

「それでも頑張ったのは本当なんだから胸を張りなさい！さすがは私の弟子ね！」

いつものように賑やかなりはじめる一同を見ながら十馬は少しホッとする。

個性あふれるアーマードライダー達を纏める司令塔だった貴虎の不在による皆の精神的不安が気がかりだったのだ。

だがさすがは歴戦のアーマードライダー達といったところか。

いくつもの修羅場を潜り抜けてきた彼らの強さを十馬は改めて思い知る。

「やっぱりすごいな、皆・・・俺も見習わなきゃ」

そう呟く隣で、竜希が思いつめたかのようにうつむいているのに十

馬は気付くことができなかった。

話も一段落したところで十馬は肝心な人物の不在に気付いた。

「あれ？葵はどうしたんだ？」

そう言われて皆もはたとそれに気づく。

貴虎が不在の現在、ヨルムンガルドの司令塔はナンバーツリーの立
ち位置にいる（と思う）葵が担うはずだ。

だが葵はまだ姿を見せてはいない。

するとディスプレイの前のコンソールが光ったかと思うとそこか
らヘビロボットと呼ぶべき姿をしたマスコットキャラクターが立体
映像として現れる。

なんだこれと一同がいぶかしんでいるとそのマスコットがコミカ
ルな動きと共に喋り出す。

『やあ！こんにちわ！ボクは正式名称NAI007、愛称は『ナーガク
ん』だよ！』

ポカーンとする一同を意に介さずナーガくんが続ける。

『ボクは開発者の水池葵に皆さんのナビゲートを任されてるんだ！と
いうわけでこれからの事について葵さんの代わりに説明するよ！』
そう言ってつぶらな瞳でウインクなんぞして見せる。

その言葉に、一拍置いてから「はあ!？」と全員が叫んだ。

「どういうことだ？葵は？」

『葵さんは睡眠中だよ！あと5時間は起きないと思うよ！』

「あの腐れニートとうとうAIに仕事代行させ始めた！」

思わず突っ込んでしまった十馬にも朗らかに返答するナーガくんが少しかわいそうに見えてきた。

「で？何を説明するのさナーガくん」

『うん！今から話すね！まずはこれを見て！』

冷静に聞く昴にナーガくんが言うのとディスプレイに映像が映し出される。

その景色に竜希以外のメンバーは見覚えがあった。

「ここって・・・この間の再開発地区よね？」

「そのはずだけど・・・あれはなんだ？」

ザックが言う通り、その景色は見覚えがありつつも記憶とは異なっていた。

以前戦った大通りに巨大な球状の物体があったからだ。

物体の表面は赤黒い色をしており、血管のようなものが走り、時折脈打っていた。

「これは・・・」

そう呟いてから、十馬は最後の去り際にファフニールが言った言葉を思い出す。

「こいつも置き土産ってことかよ・・・！」

—————

一方、本部に作られた研究室では葵が布団にくるまって眠っていた。

この緊急時だといふのにかなり熟睡している様子である。

左手には電極が張り付けられており、そのコードは何故か黒電話に繋がっていた。

するとその電極で葵と繋がった電話がけたたましく鳴り、同時に葵があぎやあ!?!と跳ね起きる。

電流が走っているようで、数秒の間ビリビリしていたがその後すぐに電極と右腕に付けられていた点滴を外して電話に出た。

「……もしもおーし」

完全寝起き、且つ不機嫌そうな声音だった。

すると相手側が嘆息して話し始める。

「相変わらずね貴方は……事態は聞いているけれどよくもまあおんきに寝ていられるわね?」

「こーゆー人間なもんでねー……で、緊急用の回線で何を連絡したいんですか会長様?」

その一言に、電話の相手が不敵に笑う。

「今、そちらに向かっているわ。それまでに依頼していたものを用意して。あと、仕事の時はH・Bと呼びなさい」

その言葉に、めんどくせーと呟いてから葵は電話を切った。

—————

数分後、アーマードライダーの面々は謎の物体を調査すべくそれぞれ

れマシンに乗り込み、走っていた。

「あの物体・・・本当にオーバーロードが残したものなのかい？」

「ああ、最後にファフニールは置き土産って言ってたんだ。きつとアレがそうだと思う」

そう言いながら愛車、フェンリルを走らせる十馬にその後ろに座っていた竜希がふと素朴な疑問を口にする。

「そういえば十馬さんってバイクの免許持ってたんですか？」

その言葉に、十馬の表情がピシツと固まった。

「・・・ちよつと？」

「い、いや！小型二輪は取ってあるし！」

「それどう見ても大型だよね・・・終わったら免許センター通いだね」

そんな気の抜けた会話をする十馬達に、前方を指さしながらザツクが言った。

「見えてきたぞ。再開発地区だ」

そびえたつ廃ビルの群れはまるで伏魔殿のような妖しく恐ろしい雰囲気醸していた。

—————

再開発地区の大通りにソレはそびえていた。

妙にツヤのある表面といいその上を脈打つ血管といいホラゲに出てきそうな外観をしている。

「知ってるぞコレ。ナ○シカに出てきた巨○兵の卵だ」

「似てるけどさ……ま、オーバードロードの遺物だしね。ロクなもんじやないさ」

目の前の物体を眺めながら十馬と昴が初見を言い合っているその横では光実が近くの調査員から物体の詳細報告を聞いていた。

「物体はおよそビル三階分の大きさと外側は軟質。ですがその分弾力があって一部を切り取るのは不可能でした。表面の血管状のモノも何なのか不明で……」

「そうですか……ありがとうございます。引き続き調査をお願いします」

調査員に頭を下げ、十馬達のところに光実がやってくる。

「十馬くん、昴さん、どう思います?」

「だから巨○兵の卵だって! 孵化させるとまずいぞ! ビーム出すぞビーム!」

「ま、でも卵つてのは合ってるかもね。心臓の鼓動みたいに等間隔で脈打ってるし」

確かに、表面の血管状の組織は一定のリズムで脈動している。

案外十馬の勘というかふざけているようにみえる意見が一番現実的だ。

「卵だとしたら何が生まれるんだろ?」

「だから巨○兵がだな!」

「普通に考えるとインベスでしょうね。ただ、この大きさのインベスは今まで見たこともないですけど」

そして光実は調査班の班長を呼び、退去を進言した。

「これが卵であった場合、中から出てくるインベスは今までに確認された最大個体を優に超える大きさです。僕たちが戦いに集中するためにも、皆さんには退避していただきたいんです」

「わかりました。総員直ちに退去させます」

思いのほか素直に光実の言うことに従い、調査班が次々と撤収していく。

その様子を眺めながら光実は目の前の物体を改めて見上げた。

そして、ある事に気が付いた。

「脈動のリズムが速くなってる？」

先ほどは一秒に一度くらいのペースだったのが今はその倍の速さだ。

「まさか……」

そう呟く間にもリズムはどんどん加速していく。

「皆さん！離れてください！」

そう光実が叫んだ瞬間。

物体……卵が破裂し、中から蒸気が立ち上る。

辺り一面を覆う蒸気が晴れると同時に、卵があった方向から巨大な何かの叫び声がとどろいた。

そこには巨大な一頭の龍がいた。

鉛色の鱗に身を包み、柱のような四本の足で大地を踏みしめる。そして巨大な翼を広げたその姿はまさしく伝説上の生物『龍』その

ものであった。

「くっ！何だこいつデカイぞ!？」

「そりや、あれだけ卵が大きけりやね・・・来るよ!」

昂が言うと同時に巨大インベス・・・ニーズヘツグインベスが尾で地面を薙ぎ払ってくる。

それを躲し、距離を取って十馬達はそれぞれベルトとロックシードを取り出した。

「皆さん！いきますよー!」

その光実の号令と共に戦士たちはその言葉を叫んだ。

「二変身!!」

各々ロックシードを開錠して素早くベルトに装填し変身する。

そして、十馬が変身した紅のアーマードライダーの姿に皆驚いたようだ。

「十馬くん!?!その姿は・・・?」

「ああ、新しい俺の力だ。行くぜ!」

ソニックアローとガルーダクロージャーレイピアモードを構え、紅蓮の騎士が叫ぶ。

「一片の欠片も残さず・・・焼き尽くしてやるよー!」

ライダーたちの、闘争が始まった。

—————

一方、ヨルムンガルドの地下施設では葵が一心不乱に作業をしていた。

その手元のキーボードは先ほどから凄まじい速度で叩かれ、隣のアームも休まず作業をしている。

アームは台に置かれた三つのロックシード・・・L, S+03と刻印された赤紫の錠前と既存のロックシードとは一線を画すデザインをした白いロックシードの調整をしている。

十分ほど経つと作業が終わったのか機械から手を放し、デスクの引き出しからブランクの戦極ドライバーを取り出す。

「そろそろかな・・・」

そう呟くと同時、部屋のドアが開かれ黒服の男性と和装をアレンジした装束の女性が入ってくる。

「や、久しぶりだね会長さん」

「仕事で来ているのだからH・Bと呼びなさい。例のモノは？」

「できてるよー。はいこれがラズベリーロックシードでこっちがドライバー。でも、ホントに前線に出るの？責任持てないよ？」

「そう簡単に死ぬほどヤワではないわ。それじゃ、早速向かうとしましょうか」

そう言つて立ち去る女性に葵は「忘れてた！」と声を上げ、慌てて引き留める。

「何かしら？」

「これ、十馬くんつて子がいるから彼に渡して」

そう言いながら女性に葵は二つの大型のロックシードを差し出す。

「これは・・・ロックビークル？なぜこれが必要なの？」

「ああ、つまりこういうこと」

葵が言うと同時に部屋のスクリーンにニースヘッグインベスとそ

れに立ち向かうアーマードライダー達の映像が映し出される。

「これは・・・！」

「今までの最大個体を軽く超えるインベスの登場。それは秘密兵器なんだよ」

「何故龍崎十馬なのかしら？彼はまだ子供でしょう？」

「彼しか使えない設定なの！ほら早く行った行った！」

そうせかすと女性はヘアとため息をついてから部屋を後にする。

「蜜華グループ会長であるこの私が・・・まさか便利な宅急便扱いされるとはね」

「いいじゃん。ミツバチャマト、グループ傘下にしてるし」

「・・・今回だけよ？次やったら予算半分にするから」

こめかみをピクピクさせる女性・・・ヨルムンガルドの大手スポンサーの一つ、蜜華グループ会長の蜜華美鈴は足早に司令室を立ち去った。

—————

美鈴が去った後、司令室に一人きりになった葵はふと、横のディスプレイを眺める。

そこには先ほど美鈴に持っていかせた二種類の白いロックビークルの設計図が映し出されていた。

「全く・・・出所不明のベルトといい不可思議なことばかり起きるねえ最近は」

そう呟いてディスプレイを指で弾く。

昨夜、突然送られてきたこの設計図には既存のロックビークル、チューリップホッパーの改良版と思われる図面ともう一つ未知の

ロックビークルの凶面の二種類があった。

さらにメツセージの末尾には『リュウザキトウマニワタセ』とカタカナで記されており、怪しさ満点だった。

だが、貴虎というストッパーが不在の今、葵の好奇心を止められるものは誰もいなかった。

メツセージの送り主を調べようとはしなかった。

そもそも秘密組織のヨルムンガルドの機材には全て、世界最高峰のセキュリティが掛けられているのでそれをかいくぐる人物が証拠を残すとは思えない。

何より時間の無駄だ。

葵の頭にあつたのはこの凶面のロックビークルを完成させ、その性能を見る。

ただそれだけだった。

そして僅か半日も経たずに葵は凶面のロックビークルを完成させてしまった。

純粹なる探求の徒となった葵は常人の数倍の集中力と作業能力を持つ。

だが、その反動としていつも以上に長い睡眠を体が求めてしまう。要するに副作用付きのブースト、トラ○ザムみたいなものである。それで今日のブリーフィングにも参加できず、せめて緊急時くらいはと電極を貼って眠っていたのだ。

「さて、どんなモノなのかなあのロックビークル」

そう呟くその瞳は無邪気な好奇心と狂気を内包していた。

――

戦闘開始からおよそ30分。

再開発地区は激戦の真つただ中であつた。

現れたニーズヘッグインベスの外皮は硬く、さらにはその巨体のせいで接近戦に持ち込むことが難しい。

さらに時折放つてくるブレスも強力であり、避けるのも一苦勞である。

だが、それだけの要素なら百戦錬磨のアーマードライダー達がここまで追いつめられることはなかっただろう。

にもかかわらずここまで追いつめられている理由。

それは思わぬ伏兵の存在だった。

「ちつくしよー！なんなんだこいつら！」

周りに群がる怪物たちを倒しながら城乃内が変身したグリドンが叫ぶ。

他にもブラーボ、ナツクル、北斗が同様に周囲にたむろするインベス達を相手にしている。

大量の敵・・・パラサイトインベスは皆、滑りとした質感の黒い皮膚に牙が並んだ円形の口を持っていた。

あの巨大インベスが出現したすぐあと、その鱗の間から這い出てきたこの寄生タイプのインベス達は一体一体の強さこそ大したことはないがとにかく数が多い。

何より、見た目が気持ち悪い。

「一気に焼き払う！皆構えろ！」

そう言つてナツクルはクルミロックシードをベルトから外し、フ

ルートマトロックシードを開錠。

素早く装填しブレードを倒してアームズチェンジを果たす。

「行くぜー！合わせろ十馬ー！」

拳に炎を纏わせ、向こうで巨大インベスと戦うカルラに叫ぶ。

ニーズヘッグインベスの背中にいたカルラがそれに反応し跳躍、ナツクルの隣に着地する。

そして同時にブレードとレバーを操作し、拳と剣にエネルギーが集中していく。

エネルギーが臨界を迎え、輝きを放った瞬間。

ナツクルとカルラは背中合わせの状態から振り返り、拳と剣をクロスカウンターのようにぶつけ合わせた。

赤と青、二つの炎が反発し、融け合い、波動として周囲に放射される。

炎の旋風が吹き荒れ、収まるころには周囲のパラサイトインベスは皆消滅していた。

「つたく・・・ファイヤーコンビ威力高すぎっしょ」

「あぶねー・・・昂サンキュー」

「ありがとねエトワールの坊や。助かったわ」

そう近くの建物の陰からパティシエコンビと北斗が顔を出す。

ナツクルの警告からカルラが着地するまでの間に北斗は光年歩を限定的に発動し、ブラーボ&グリドンを建物の陰に避難させていたのである。

あれほどの一撃を食らっては、さすがのアーモードライダーもひとたまりもなかったことだろう。

「っ！まだまだ数いるじゃねえか！」

「デカブツも倒せてないってのに！」

そう毒づきながら目の前のインベスの群れに敢然と立ち向かっていくアーモードライダー達。

だが圧倒的数の差に押されていく。

しかし、この状況下にあっても運命は彼らを見捨てなかった。

「やれやれ……どうせ苦戦しているとは思ったけれどここまでとはね」

その声のした方を向くとそこには一人の女性が立っていた。

和装をアレンジしたかのような特徴的な格好にモデルのようなスタイル。

そして透けるような琥珀色のウェーブがかかった髪が特徴的だった。

「誰だあんた……？」

そう聞くカルラを見ながら、女性は懐から見覚えのある機械、戦極ドライバーを取り出した。

「私は蜜華美鈴……そして、今日からはアーモードライダーよ」

そう言ってベルトを装着し、ロックシールドを掲げ闘争を宣言する。

「変身」

『ラズベリー!』

『ROCK ON!』

『ラズベリーアームズ!クイーン・オブ・ブレード!』

頭上から落下してきた赤紫の鎧が彼女の体を包み込み、光を放つ。

そして光が収まるとそこには見たこともないアーマードライダーが立っていた。

動きやすそうな軽装の鎧にしたサーベル。

まさしく女剣士といった風貌だ。

「これがアーマードライダー・・・そうね。アーマードライダーフランでどうかしら」

そう呟き、女剣士・・・フランが目の中のインベスの群れに突撃していく。

剣舞のような動きで敵の攻撃を受け流し、さらにその流れのまま攻撃を仕掛ける。

まるで一つの旋律のように、途切れることなく攻撃をしていく。

そして周囲のインベスをサーベルからの電流で麻痺させたところでベルトのブレードを二回倒す。

「まだるっこしいのは嫌いな・・・終わらせるわ!」

『ラズベリーオーレ!』

周囲に円形に斬撃を放つ『緋赤ノ閃』を受け、周囲のインベスが爆散しその余波を受けてさらに後ろのインベス達も消滅した。

圧勝、まさにその言葉がふさわしい戦いぶりだ。

「すげえ・・・」

「なんて動きだ・・・あの人、タダモノじゃないよ」

「美しい・・・けど何かこういけすかないわ！メロンの君の方が断然素敵よー」

「それって同族嫌悪？」

「言うな城乃内・・・にしても本当にすごいな」

それぞれ勝手に突然現れたアーマードライダー、フランへの感想を言っているのと唐突に彼女がこちらにやってくる。

「龍崎十馬・・・あなたがそうね？」

「え？ああ、そうだけど・・・」

「年上への敬語が成ってないわね・・・まあいいわ。葵からの贈り物よ」
そう言って、フランがカルラに2つの錠前を渡す。

「これは・・・？」

「ロックビークルよ。あなたはそれであるの巨大インベスを倒しなさい。露払いは請け負うわ」

そう言い残し、フランがパラサイトインベスの群れに突撃していく
「よし！俺はあのデカイのを倒す！皆はサポートを頼む！」

そしてカルラたちは再び戦いを始める。

一方、インベスを倒しながら前線の龍玄達の所にフランは到着していた。

龍玄はマスカットアームズとなり、同じ部分を連続して攻撃しているもののダメージらしいものは与えられていない。

「あなたは・・・もしかして蜜華さん？」

「光実君かしら？目を負傷しているというのによく狙撃用アームズ使

えるわね」

「ブドウは機動力が優れているので竜希くんに渡しました。スイカは先日使用したのでまだ・・・」

そう言っただけで視線を向けるとブドウアームズとなったバハムートがニーズヘッグの足元に入り込み、腹を銃撃している。

それを一瞥してフランは援軍の情報を伝える。

「今、龍崎十馬が新兵器を持って向かっているわ。それまで耐えるわよ！」

そうして話しているとカルラが白の大型バイクに乗ってインベスの群れを蹴散らしてやってきた。

その後ろには北斗の姿もある。

そして先ほど受け取った錠前を掲げる。

「光実！これどう使うんだ!？」

「普通に開錠してください！それで大丈夫です！」

言われた通り、錠前を開錠しようとするやと突然バイクのハンドル部分が変形し、ロックシードを装填するためのスロットが出現した。

「おーここにセットしろってか？でも一個しかないな・・・じゃあこっちを開けて」

大型の方の錠前を開けるとそれは巨大化し、太い足を持つ不思議な機械に変形した。

チューリップホッパーの進化版ともいえるロックビークル、ホワイトリップホッパーである。

「こっちを装填してと・・・」

もう片方を装填すると呼応するかのようにはバイクとホッパーから音声が鳴る。

『ROCK ON!』

『ボタンディフェイザー!』

『STAND BY!』

『ホワイトトリップホッパー!』

そしてホッパーが二つに分割し、それぞれバイクの前後に足として装着される。

同時に頭上にクラックが開き、そこから大量に現れる金属製の花びらがバイクを覆いつくしていく。

最後に、バイクの前部が変形し、牙をむく獣の顔となった。

姿を現したのは純白の獣だった。

巨大な体を四本の足で支え、全身は大量の花びらがまるで毛皮のように覆っている。

狼を思わせるその姿はその名の通り、北欧神話の大氷狼フェンリル！

唾然としている一同を一度見やった後、フェンリルがその凄まじい脚力で持って跳躍し巨大インベスに飛びかかった。

牙を突き立て、爪でえぐり、巨大インベスにダメージを与え続ける。

ただ荒々しい、完全に野性的な戦い方だ。

「・・・なあ、何よあれ？」

「十馬くんこそ。あのバイク君のでしょ？なんで変形してるんですか？」

唾然としながら間抜けな会話をしていると後ろからグーで後頭部

を殴られた。

「少しは緊張感を持ちなさい！ 私たちも行くわよ！」

何でお前が仕切ってただよと思いつつソニックアローを構えなおし、ニーズヘッグの下に向かおうとした時。

頭上から火炎弾が降り注ぎ、辺り一帯を焦がした。

何とか炎を操作しバリアを作って防いだがその威力は強大だ。

空を見上げるとそこには巨大なインベスがいた。

ニーズヘッグほどではないにしろ背中の翼が大きく、翼長だけでも10メートル以上ある。

また人に似た手足を持っているが顔は鳥のものだ。

その姿はまさにニーズヘッグと対をなす北欧神話の巨人、フレースヴェルグだ。

フレースヴェルグインベスは旋回しながら炎弾を次々に放つてくる。

それをバリアで受け流しながらカルラは他の二名に戦術を問う。

「どうするあれ!? 飛べる奴とかいないのかよ?」

「ダンデライナーなら可能かもしれないのですが・・・今は持ちあわせが」

するとバリアの中に入ってきた鎧武が先日十馬がシユバリヤから奪った大型の錠前、カチドキロックシードを取り出して策を伝える。「カチドキの必殺技ならあいつを打ち落とせる。ただじつとさせられれば・・・」

やはり飛ぶことが必要だとわかるとカルラが俺がやると言う。

「十馬!? 本当にできんのか?」

「さっきのバリアで炎の操作ができるってわかったからな。手から噴射とかできんだろ」

「不確定ですけど・・・今はやるだけやってみましょう!」

炎のバリアで炎弾が防がれ続けるのにしびれを切らしたフレースヴェルグインベスは急降下し直接攻撃をしようとした。

だが急降下中、下から突然すごい勢いで赤い人影が飛ばされてきた。

先ほどまでバリアを張っていたライダー、カルラである。

カルラはその速度と「ぎやああああ!!」という悲鳴でフレースヴェルグインベスの注意を引くことに成功した。

吹っ飛ぶカルラを追ってフレースヴェルグが上昇し始める。

(さて・・・これで姿勢制御できれば御の字なんだが)

そう念じながらイメージするのは飛行する自分。

自らの力で風に乗り、空を自在に飛び回る自分の姿を想像する。

「よし・・・見えた!」

そう言うと同時に、ベルトのロックシールドが輝いたかと思うと背中のマントが大きく広がり翼となる。

さらに翼の突起部分からは炎が噴射され、姿勢も安定した。

「おおーやっぱ飛べるじゃん!これなら!」

そう言って180度方向転換し、フレースヴェルグインベスに迫る。

そしてすれ違いざまにソニックアローとガルーダクロージャーで敵を切り付け、姿勢を崩す。

苦悶の声を上げるフレースヴェルグインベスにエネルギーのもった武器を突き刺し、背中のジェットを噴射して地面に向かって高速で落下し始める。

「頼むぜ！ 紘太さん！」

そう通信すると遥か下の地上でオレンジ色の光が瞬いた。

地上ではカルラからの通信を受け、鎧武がアームズチェンジをするべくロックシードを開錠した。

『カチドキー！』

『ROCK ON！』

『カチドキアームズ！ いざ出陣！ エイエイオー！』

上空から降ってきた大型のアームズを身に纏い、二本の旗を翻すその姿はまさに先陣切る猛将。

アーマードライダー鎧武 カチドキアームズ！

「いくぞー！ ミッチー！」

「はいー！」

合図を龍玄に送り、自らは手に持った大型両手銃、火縄橙DJ銃にカチドキロックシードを装填し狙いを定める。

一方の龍玄はベルトのブレードを二回倒し、エネルギーを集中させていく。

そしてエネルギーが十分に溜まったところでトリガーを同時に引いた。

『カチドキチャージ!』

『マスカットオーレ!』

巨大な砲身から放たれた『灼天凱火砲』と収束ビーム砲『雷龍豪咆』が狙いたがわずフレーズヴェルグインベスを撃ち抜き、爆発四散させた。

だが、まだ終わらない。

鎧武の目には上空から落下しながらニーズヘッグインベスに向かって急降下するカルラの姿がはつきりと捉えられていた。

爆発寸前でインベスから離れたカルラは次のターゲット、ニーズヘッグインベスに狙いを定めていた。

「こんだけの速度があればアイツの鱗も貫ける……ただ一撃で倒せるのか?」

そう不安を捨てきれずにいると北斗からの通信が飛んでくる。

「大丈夫! 僕に任せて。君は僕の剣を後押ししてくれればいい」

「剣? ……よくわからんがわかった! 頼むぜ!」

そう返事をし、ベルトのレバーを二回押し込んだ。

『ドラゴンエナジースパークキング!』

すると周囲に炎が吹き荒れ、さらに進行方向にいくつもドラゴンフルーツの断面のような模様が生まれる。

「行くぜー！」

さらにスピードを上げ、降下すると突如、地面から巨大な剣が出現した。

刃渡りおよそビル3階分。

人間の使用を想定していない規格外の武器だ。

「無茶するなあいつ・・・人のこと言えないけどね！」

地上では北斗が巨大化させた七星刃をかろうじて支えていた。

「重つ・・・こんな機能よくつけるねえ！」

この巨大化はアームズウエポン、七星刃の効果によるものだ。

七星刃には七つの特殊効果がある。

現在発動しているのは巨門星の力『メラクギガント』であり数分だけ、武器を任意の大きさに変えられるというものだ。

これを使い、北斗はこの超大剣を出現させたのである。

「さてー決めるよ十馬ー！」

通信から「おうー！」という元気な返事を聞き、北斗はベルトのブレードを三回倒す。

『スターフルーツスパークィングー！』

刀身にエネルギーを込め、全身のばねを使って跳躍。

ニーズヘッグインベスの脳天に全力で叩きつけた。

だが、鱗を砕きはしたものの、とどめを刺すには威力が足りない。

すると上空から迫るカルラに呼応するかのようになり、ヘッグの尾にかじりついていたフェンリルがジャンプ。

体を丸め、高速で回転しながらインベスの背中に体当たりをした。

たまらず苦悶の声を上げるニースヘッグインベスは怒りの咆哮を天に向かって放った。

その瞳に映ったのは、空の彼方より飛来する赤の流星。

そして剣の重さで強制的に下を向かされた次の瞬間。

カルラが放ったキック『ドラゴンダイブ』により後押しされた七星刃が頭頂部から尾に至るまで、インベスの体を真つ二つに切り裂いた。

叫びと共に爆散するインベス。

それをバックに北斗、着地したカルラ、そして勝利の雄たけびを上げるフェンリルが並び立つ。

二人は自ずから近寄り、そして右手を互いに打ち合わせた。

—————

インベスが爆散するまでの様子を自室でリアルタイムで見っていた葵は興奮しきった様子だった。

「あっははははは!!すごいよ皆!特に昴くん!あそこまでロックシー

ドの力を引き出すなんて計算外！ありえない！でもそこが最高お！」
一人でエキサイトする葵を机上にホログラムとして投影された
ナーガくんが無表情で見守っていた。

—————

インベスを倒しきった数分後。

全員が変身を解き、勝利を喜び合う中、美鈴は十馬に歩み寄っていた。
た。

十馬は疲れ切った様子で大の字に倒れており、口元には微笑が浮か
んでいる。

そんな十馬のわき腹を、美鈴はヒールで思いつきり踏みつけた。

「ぐふっ!？」

「全く・・・無茶をしすぎね。どうせ怪我也完治してなかったんでし
ょうに」

「だからって・・・ヒールはないだろヒールは・・・」

もんどりうって倒れる十馬に、嘆息してから美鈴は続ける。

「・・・でも、貴方の残した結果は評価するわ。いつか死にそんな戦
い方だけねど」

「ま、勝ったからいいじゃん？」

「そういうわけにもいかないわ。今日、はつきりと確信した・・・」

そして一拍置き、冷たい目で美鈴は言い放った。

「貴方にはもう戦わせるわけにはいかない。今すぐベルトとロック
シードを渡しなさい」

その頃、とある場所の駐車場を一人の男が歩いていた。

「やれやれ・・・オーバーロードもとんでもないものを出してきますね。それにしても龍崎十馬はともかく昴さんは予想外でしたねえ・・・博士の思惑通りかな？」

そう呟きながら歩いていると目の前に突然、三体のパラサイトインベスが現れる。

牙をむき、すでに臨戦態勢だ。

だが男は慌てない。

それどころか口元には笑みさえ浮かべていた。

「取りこぼしですか・・・まあいいでしょう。テストもできるしサービス残業といきましょうか」

そう言って取り出した装置・・・戦極ドライバーを腰に巻き、懐からロックシードを取り出す。

「変身」

『ヒマワリ！』

光が駐車場にあふれ、全てを覆い隠した・・・

数分後

男はハンカチで几帳面に手を拭きながら歩みを進めていた。

インベスの姿はない。

代わりに何かが発火したような焦げ跡と炎の残滓が三つ残されていた。

男は携帯を取り出し、数回のコールの後出た相手に結果を報告する。

「もしもし・・・テストは成功です。量産体制に入りましょう。・・・ええ、例のモノもよろしくお願いしますよ」

男の行く手には、闇が大口を開けた怪物のごとく広がっていた・・・

続く

第19話 美鈴の想いとサプライズ

前回までのあらすじ

再開発地区に突如現れた巨大インベス。

それを迎え撃つアーマードライダー達。

それぞれが死力を尽くす中、戦場に新たな戦士フランが舞い降りる。

そしてフランに変身していた蜜華美鈴は戦いを終えた十馬に迫る。

「貴方をこれ以上戦わせるわけにはいかない。今すぐベルトとロックシールドを渡しなさい」

—————

「がっ!?!」

周囲を木に囲まれた森の一角で相手の攻撃を受け十馬は地面に伏せる。

それをふんと鼻で笑うのは十馬の相手、訓練用の動きやすい衣服をまとった蜜華美鈴だ。

彼女は先日、十馬からベルトとロックシールドを奪いこれ以上関わらないようにと言ってきた。

平時であればこのチームのリーダーである貴虎がそれを許すわけはない。

だが貴虎は昏睡状態であり、出資者という強い立場にいる美鈴に逆らえるものは現在この場にはいなかった。

しかしそれでも十馬は食い下がった。

それを受け、余計な真似をしないようにということで模擬戦に勝利したら返すという条件を提示したのである。

しかし、こうして戦闘してみても十馬は理解し始めていた。

彼女は自分にベルトを返す気など毛頭ない。

むしろ徹底的に痛めつけ、恐怖をその身に刻ませようとしている。

「くっそ・・・貴虎とは結構いい勝負できてただけだな」

「あら、怪我人と互角に戦えて喜ぶなんて程度が知れるわね」

「どういう意味だ？」

「教えてあげる。呉島貴虎はね、戦極ドライバーの開発当初から進んで稼働実験に志願していたの。そしてヘルヘイム時の苛烈な戦闘で彼の体はもうボロボロだった・・・でもそれを隠して彼は戦ってきた。今回の昏倒はそのツケってわけ」

そう言つて美鈴は手にした樹脂製サーベルをこちらに向ける。

「まだやるのかしら？」

「当たり前だろ！」

そう叫び、十馬は手にしたレイピアと刀を振るい美鈴に迫つていく。

だがその攻撃の全ては受け流され、拳句の果てに説教を始められる始末だ。

「貴方は戦い方が成っていない。そもそも武器の特性すら把握できていないの。こんな風にねっ！」

言うと同時に、手のサーベルでレイピアを弾き飛ばし開いている左手でキャッチ。

攻守が一転する。

サーベルで流れるように切り付けてくる美鈴に十馬はかろうじてそれを跳ね返す。

攻撃をしながらも美鈴の説教は止まらない。

「貴方はいつもレイピアを斬撃武器として使うわよね？でもそれはエネルギーが表面を伝っているからよ。生身の戦闘じゃ役に立たないわ。レイピアとは本来こういうものよ！」

言うが早いかレイピアを突き出し、斬撃の隙間を縫って正確に打突してくる。

「ぐっっ！うわっ！」

「レイピアは刺突武器。斬るのではなく貫くことに特化した武器よ。必要なのは正確に相手を貫く技術！」

何度も連続で、蜂の針のようにレイピアを打ち付けられいつしか十馬は地に伏せていた。

「くっそ……」

拳で地面をたたたくが起き上がることができない。

そんな十馬を見下ろし、喉元にサーベルをあてて最後に美鈴は言い放った。

「与えられた力ばかりに頼るような貴方を私は認めない。何度やつても同じよ。諦めなさい」

—————

森林のフィールドを再現していたシミュレーションルームから出てすぐの長椅子に座り十馬はうなだれていた。

「何で勝てない……」

そう呟いていると昴が近づいてきて缶コーヒーを手渡す。

「僕も言われたよ。貴方が戦う必要はないってね。ま、君に対しては結構当たりが強いみたいだけど」

「あいつは何がしたいんだ？……ヨルムンガルドのスポンサーってことは目的は一緒じゃないか」

「さあね……竜希くんも無理矢理ベルトを取られたらしいよ」

「竜希もか……」

「まあそれで大体彼女がしたいことは予想がついたよ」

「なんだ？」

そう聞くと少し気まずそうにしながらも昴は自分の考えを話した。

「彼女はこの戦い……ニヴルヘイムとの戦いから僕たちを遠ざけたいんだよ」

「なんでそんな必要がある？」

「よく考えてごらんよ。光実くんやザックくん達はヘルヘイムを経験

してる。僕らとは覚悟も経験も段違いだ」

「でも俺はあいつらと同じくらい強い。強くなったんだ・・・なのに何で?。」

「強さが全部じゃないってことかな・・・僕は彼女の気持ちは少しだけ理解できるかな」

「理解?。」

「うん。たまにダンスをしている君や君の友達を見ると時々思うんだ。君たちにとって戦いは非日常でダンスが日常だった。それが逆になってしまってるんじゃないかってね。彼女は君たちを暖かくて安全な日常に戻してあげたいんじゃないかな」

優しく語る昂に、しかし十馬は賛同できない。

譲れないものは十馬にだってあるのだ。

「でも、俺は真奈を守らなくちゃならない。誰にも譲れない。あいつを連れ戻した責任が俺にはあるんだ」

「うん。分かっている。でもね、今の君は本当に守るために戦っているかい?。」

「え?。」

「今、真奈ちゃんがどんな気持ちか分かっているかい?君が守りたいのは藤井真奈の存在かい?。」

そう言われ、十馬はようやく気が付いた。

「そっか・・・俺・・・」

十馬は強くなることが真奈を守ることに繋がると考えてきた。

だが、ただ強くなるだけでは真奈の命は守れても心は守れない。

思えばここ数日、真奈の顔を見ていない。

「ずっと一緒だって約束したのにな・・・何やってんだよ俺は・・・」
「気づいたなら早いこと行ってあげなよ。きつと心配してるよ?。」

「そうだな・・・ありがとう。おかげで大事なこと思い出せた。じゃあ行ってくる!。」

そう言い残して走り去っていく十馬の後ろ姿を昂は見えなくなるまで見守っていた。

—————
本部を飛び出した十馬は真奈を探してあちこちを走り回った。

ドルーパーズにチームガレージ、ステージまで行ったが真奈は見当たらなかった。

とうかがガレージには誰もいなかったし、坂東さんが妙によそよそしかったのは気になるけれど……

「あいつに携帯持たせるの忘れてたからな……」

携帯を取り出し、念のため名前がないか調べるも当然ながらない。

「そうだ、イリスなら何か知ってるかも！」

そう思い、電話をかけることにした。

『もしもし?』

「イリスか!十馬だけど……」

『十馬!?今まで何してたんですか?すつごく心配してたんですから!』

「ごめん!毎回毎回ホントにごめん!」

『全くです!これは罰としてシャルモンでケーキをおごってもらいましょうか……』

「その前に!真奈知らないか!」

『真奈ちゃんなら買い物しに行くって……あ!とうかが十馬!今日あなた……』

「買い物?モールか!ありがとう!ケーキはまたな!」

『ちよつと十馬!』

そんな声を聞きながら十馬は通話を切って再び走り出した。

—————

一方、本部の廊下を美鈴は歩いていった。

すると後ろから声をかけられ足を止める。

声で話しかけてきた人物を察し、あきれ顔で振り返るとそこには案の定、昴の姿があった。

「何かしら？ 私は今から出かけるのだけれど」

「いや、どうしても気になってき。あんたが僕からベルトを取り上げなかった理由が」

「取り上げてほしかったのかしら？ もしかして貴方M？」

「違うよ……ただ、父さんの口添えとかあったらどうしようかと思つてね」

そう言つて睨みつける目には抑えきれない激情がこもっている。

「違うわ。私が貴方からベルトを取り上げなかったのは……同じだからよ」

「何が同じなのさ？」

「貴方も私も貴虎も、皆己の血に苦しめられた者だから」

そう言う彼女の表情はどこか普段と違っているように見えた。

「私の旧姓は……呉島よ」

「なんだつて!?!……つてことは？」

「ええ、貴虎と光実君は親戚ね。私は呉島の分家筋の生まれで、昔から英才教育……という名の虐待を受けてきたわ」

「……」

「ささいなことですぐに”しつけ”をされた。そんな私を呪縛から救ってくれたのが蜜華咲哉……私の元夫だったわ」

「え？ 結婚してたの？」

「ええ。私は16の時彼の家に嫁入りして家から解放されたの。彼は病弱だったけれど人を助けたいという気持ちは人一倍だった。私の事をどこから聞きつけたのかしらね。16の誕生日に突然家に押し掛けてきて……半分駆け落ちみたいなものだったわ」

「えーつと……元つてことは今はもう？」

「ええ。5年前に肺がんで死んだわ。だから今はこうして私が彼の遺したグループを纏めているわけ」

全部聞き終わり、昴は目の前の女性への印象を改めた。

「あんた……本当はすごく無理してるんじゃないか？」

「正直言うとキツイわよ。貴虎ともそれなりに長い付き合いだから心配だし・・・でも、私は屈しないわ。理不尽にはもうなれっこだもの」
そう言って最後に不敵に笑う彼女に、昴は笑い返すことができなかった。

—————

ショッピングモールに着いた十馬は真奈を探して走り回っていた。

避難勧告のせいで客が一人もないモールの中をひたすら探し続ける。

「あと探してないのは・・・屋上か」

エスカレーターを駆け上がり屋上のドアを開ける。

屋上はちよつとした遊園地風になっており、普段は大勢の家族連れでにぎわっている。

だが今は客どころか係員すらおらず、がらんとした寂しい空間になり果てている。

そんな場所に彼女はいた。

「真奈！」

そう呼びかけると一瞬、驚いた顔をしてから彼女は笑みを浮かべる。

ヒマワリのような輝く笑みを。

—————

真奈を見つけ、近くのベンチに座りながら十馬は思いのたけを真奈に打ち明けていた。

「俺さ・・・また真奈を失うのが怖くて、力が欲しくて、そればかり考えてた。でも、お前の気持ちを全然考えてなかった・・・本当にごめん。今度こそ約束する。ずっとそばにいる」

そう宣言すると少し照れ臭そうにしながら真奈は「うん！」と頷いた。

「十馬の気持ち・・・すっごく嬉しいよ。ありがとう」

そうして笑いあっているとき真奈が突然何かを思い出したように「あ！」と声を上げた。

「どうした？」

「どうしたじゃないよ！ハイこれ！」

いぶかしむ十馬に足元の袋から包みを取り出し「はい！」と手渡す。

「ん？なんだこれ？」

「いいから開けて！」

言われるがまま開けると中にはベージュの布の塊が入っていた。

広げてみるとロングコートだという事がわかる。

「これなんだ？お前が着るにしては大きすぎないか？」

「違うよ！十馬にあげるの！」

「え？何で？」

「・・・もしかして忘れてる？今日は11月23日だよ？十馬の誕生日！」

そう言っておめでと〜！と拍手してくる真奈に目を丸くしながら呟く。

「そっか・・・今日だったか・・・」

「最近寒くなってきたなーって言ってたからいいかなって。どう？」

「嬉しいよ。ありがとな真奈」

そう礼を言ってから着てみると真奈が「かっこいいよ！」と再び拍手。

そんな真奈を見ながら十馬は心の中で率直な感想を述べていた。

(ちよつとセンスがおっさん臭いけどな・・・)

そんな二人を物陰から見つめている人物がいた。

「どれどれ？青春してる？」

「なんでついてきたの・・・ストーカーのケがあるんじゃないの？」

「どっこいどっこいでしょ？」

野次馬二名こと美鈴と昴はお互いを批判しつつ、楽しげに笑う十馬達を見守った。

—————

しばらくのんびりしていると真奈が唐突に立ち上がって提案する。

「それじゃあ十馬！ドルーパーズに行きませんか？」

「ん？何で？」

「何となく！あ、もしかしてシャルモン派？」

「いや、別にそういうわけじゃないけど・・・急に何で？」

「いいからいいから！行こー！」

そう言つて腕に抱きついてくるもんだからもう断れない。

「じゃ行くか」

「おー！」

一方物陰で様子をうかがっていた昴はもう全てを察していた。

「サプライズってことか・・・何であれで気づかないかな？」

「誕生日パーティーね。チームでやるのかしら？」

「多分他のチームも祝つてくれるんでしょ。さて、僕らも行きますか」

「ちよつと！何で私まで？」

「ついで」

「それだけ!？」

「ほら、つべこべ言わずに行くよ。それともアレ？リムジンとかじゃ

ないとダメですかお嬢様？」

「・・・無性に腹が立つわね。まあいいわどうせだから行ってあげる」

二人もサプライズパーティーに飛び入り参加するためにドルーパーズに向かうのだった。

—————

ドルーパーズまで向かう途中、ガレージを通りかかると真奈があると言う。

「どうした？」

「ガレージに忘れ物した！十馬鍵ある？」

「ああ、一応預かってるけど」

「ちよつと取ってくるね！」

鍵を取り出すとそれをマツハでひったくり、真奈がガレージに入っていく。

「せわしないやつだなあ・・・」

苦笑しながら仕方なく外で待っていることにした。

—————

そんな十馬を監視していたのは何も美鈴達だけではなかった。

ガレージのあるレンガの建物の屋上にその監視者達はいた。

「今がチャンスかと」

「お、ホントだ」

「それじゃあちやつちやつとやつちやおうよう」

「まあまあ待ちな。今日の依頼はあくまで様子見だからね。錠前持つてるっ。」

「はい」

「もちろんさー！」

「よし、じゃあいけますか・・・」

そう言うってから彼らは手にしたロックシードを開錠した。

「————」

「お待ちせー！」

「おう、じゃあ行くか」

ガレージから真奈が持ってきた荷物を持ってやり、先を急ごうとすると背後で聞き覚えのある音がした。

振り向き、真奈をかばうように一歩前へ出る。

そこにいたのは三体のインベスだった。

シカ、ライオン、カミキリとそれぞれが上位個体であることを十馬は知っていた。

だが今は変身できない。

「真奈、俺が足止めしてる隙に逃げろ」

「え？でも今は・・・」

「大丈夫だ。約束はもう破らない。足止めだけだ、無茶はしない」

「わかった・・・気を付けてね！」

了承し、真奈が逃げるのを確認してから十馬は改めて目の前のインベス達と対峙する。

「キシヤアア!!」

叫び声をあげて突進してくるシカインベスを受け流し、ライオンイ

ンベスの拳を回避。

残るカミキリインベスの攻撃に身構えると急に足を引つ張られその場に転倒する。

見るとカミキリインベスの長いヒゲが足に巻き付いている。

「くそっ！離せ！」

そう言っても相手はインベス。言葉が通じるわけもなく残りの二体が迫ってくる。

万事休すと思われたその時。

突然放たれた4つの光弾がそれぞれシカインベスとライオンインベスを転倒させ、カミキリインベスのヒゲも切断した。

距離を取り、後方を見るとそこには銃を構える美鈴と昴の姿があった。

「昴！蜜華さん！」

「心配でつけてきたらやっぱこうなるか。君はトラブルメーカーだね」

「変身できないんだから下がってなさい。いくわよ星崎昴！」

「あいよ！」

そう言つてドライバーを付けた二人はロックシールドを構え、開錠する。

「変身！」

『スターフルーツ！』

『ラズベリー！』

『ROCK ON！』

『スターフルーツアームズ！勝ち星！白星！大金星！』

『ラズベリーアームズ！クイーンオブブレード！』

閃光と共に並び立つは天に輝く明星、アーマードライダー北斗と優美たる女剣士、アーマードライダーフラン！

「さて・・・ラストダンスと行こうか！」

「下郎が！身の程を知りなさい！」

それぞれ叫びながら三体のインベスに向かっていく。

上級インベスは一体一体が手ごわい。

同じアーマードライダーでも、黒影トルーパー達なら数人がかりでやっ倒せるほどだ。

だがA+の錠前を持つ二人には脅威ではない。

空を飛べるライオンインベスにまず狙いを定め、その羽を切り裂く。

苦しみ悶えるインベスに北斗が攻撃し、フランは他の二体の相手をする。

フランは斬撃でシカインベスの角を破壊し無力化してからカミキリインベスに狙いを定める。

インベス達は格上に徐々に追い詰められていく。

—————

そんな状況を監視者たちが好むはずもない。

「あららく結構やられてるねえ」

「どうする？」

「アレを使ってみるのはどうだろうか？」

「あーいいね！じゃあやってみましょか」

そう言つて監視者たちは腰にベルトを巻き、バックルにロックシー

ドをセットした。

「さて・・・今度こそお手並み拝見といこうか」

—————

動きが弱っていくインベス達に勝利を確信した北斗はとどめを刺すべくベルトのブレードを二回倒す。

エネルギーが足に集まっていく中、どこか不自然さを覚え相手を観察する。

そう、エネルギーを貯めている隙があるにもかかわらず攻撃してこないのだ。

棒立ちになり、まるで魂が抜け落ちたかのように微動だにしない。

フランの方も同様だ。

「一体何なんだ？」

「油断しないで！こういう時こそ集中よ・・・」

そう警戒しているとインベス達が同時に体を震わせた。

そして目を光らせ、再びこちらに向かってくる。

「ほら言ったでしょう!?!さっさと片付けるわよ！」

「はいはい」

軽く答え、ライオンインベスに斬撃を仕掛ける。

すると、先ほどまでは通った刃をインベスは手で受け止めた。

「な!?!」

「グルルウ・・・」

そのまま凄まじい膂力でもって武器を放り投げ、連続して拳を打ち込んでくる。

フランと相対する二体のインベスも途端に動きがよくなり、連携攻撃を叩きこんでいる。

「なんだこいつら！急に強くなったぞ！」

「まずいわね・・・数が多い分あつちが有利よ！」

突如強くなるインベスに思わぬ苦戦を強いられる二人のライダー。それを見ながら十馬は歯がゆい思いをしていた。

「俺だつて・・・アーマードライダーの端くれだ！」

疾走し跳躍、体重を乗せた飛び蹴りをシカインベスに叩き込む。

「キシヤア！」

「こいー！」

身軽な動きでインベスを翻弄しようと跳躍を繰り返し、隙ができるのを待つ。

だがその速度は異形の怪物であるインベスには遅すぎた。

途端に動きを読まれ、カウンターを食らって吹き飛んでしまう。

「ぐはっ！」

「十馬！」

「龍崎十馬!?!バカじゃないの?！」

フランからの罵倒に臆することなく十馬は答える。

「バカで結構！俺は真奈を守る。でもそれは力だけじゃない。俺の全部をもってあいつを守る！俺だけが傷つけばいい！だから俺は戦い続ける！」

そう叫び、再びシカインベスに向かっていく。

何度吹き飛ばされても諦めずに立ち向かうその姿は滑稽なほど必死だった。

「十馬！これを使え！」

そう声のする方向を見ると真奈と隣に立つザックの姿が目映る。

そしてザックが投げたドライバーとクルミロックシードをキャッチし、力を身にまとう。

「変身！」

『クルミ！』

『ROCK ON!』

『クルミアームズ! ミスターナックルマン!』

鋼の果実を身にまとい変身するその姿はアーマードライダー黒影トルーパークルミアームズ!

「即席だけど変身できればこっちのもんだ!」

そう叫んで両手に付けた巨大なグローブを振り回し、シカインベスに猛進していく。

グローブの重量とアーマードライダーの臂力が加わった拳は強力な武器となる。

殴るというよりは叩きつけるようにシカインベスに拳打を浴びせる十馬の姿に二人も感化されたようだ。

「Cクラスの錠前があそこまで頑張ってるんだから! やらないわけにはいかんでしょ!」

そう言っただけでライオンインベスの攻撃を受け、刹那の隙について拳を打ち込む。

「一対一になったのだから、私が勝つのは当然でしょう!」

フランも途切れることなく斬撃を浴びせ、反撃の隙を与えない。

「二とどめ!」

三人は同時にベルトのブレードを倒し、それぞれのキック技を放った。

『クルミスパーキング!』

『スターフルーツスカッシュ!』

『ラズベリースカッシュ!』

トルーパーの『ヘヴィースタンプ』がシカインベスを。

北斗の『流星脚』がライオンインベスを。

フランの『ベリーヒールスラッシュ』がカミキリインベスをそれぞれ屠り、爆散させた。

—————

「ザック、ありがとな・・・ていうか何でここに？」

「真奈に助けてって言われてな。それより大丈夫か？」

「ああ、クルミって防御力高いんだな。見直したぜ」

ベルトとロックシードを返しながらそんな会話をする十馬に美鈴が歩み寄る。

「龍崎十馬」

「ああ、美鈴さんか・・・ごめんな。変身しちゃった」

「いいわ。むしろ、貴方が本当に救いようもないくらいバカだつてことがよく分かったし」

「いくらバカでもそこまで言われるとへこむぞ」

不満げに言うのと、今度はそっぽを向いて表情を見せないまま話を続ける。

「ゲネシスドライバーとロックシードは返却するわ。持っていた方があなたは安全かもしれないしね」

「マジで!? ありがとう!」

「ただし! まだ私は貴方を認めてないわ! これは貴方の安全のためよ!」

ふんと鼻を鳴らしてからその場を去ろうと歩き出す美鈴の背に十馬は呼びかけた。

「心配してくれてありがとう! でも、俺は俺なりに頑張るからさ! これからも頼むぜ!」

その声が届いたと、十馬は確信していた。

「じゃ、ドルーパーズ行くか。皆待ってるぜ?」

「へ？何で待ってるんだよ？」

「ザ、ザック君！秘密秘密！」

「あーやべっ！」

思わず口走ってしまったザックとそれをごまかそうとする真奈の態度でようやく十馬も合点がいった。

「もしかしてサプライズ的な？」

「ほらバレちゃったあー！」

「す、すいません」

「ま、いいさ。その代わり、名一杯楽しませてもらうかな！」

「うん！」

「まあ本人がいいならそれもいいか」

そうして十馬は18歳の、最高の誕生日を迎えたのだった。

—————

「いやー強いなライダー！」

「不慣れなインベスの体つてこともあったけどねー」

「言い訳にはならない」

「まあさ、このベルトの性能も証明できたし二人もストレス発散になったでしょ？」

「まーまーだね」

「同じく」

「しばらくは動けないからね。次を楽しみにしましょうよ」

そうして監視者達は去っていく。

遠くない未来に、暗い暗雲が立ち込めていた・・・